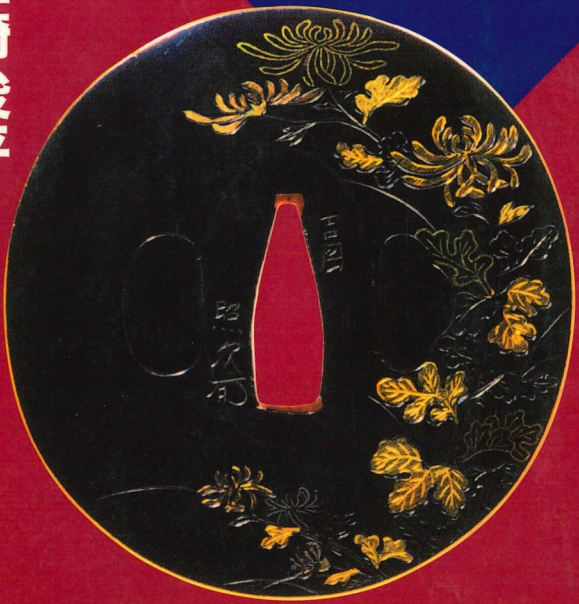
# 日本剣豪列伝

江崎 俊平
志茂田 誠諦



GAKKEN M BUNKO

著者紹介

江崎 俊平（えざき しゅんぺい）

1936年、福岡県生まれ。日本大学中退。作家、城郭・歴史研究家。著書に映画化された『闇法師変化』をはじめ多数の時代小説のほか、『日本城郭絵図集成』『城・その伝説と秘話』『日本武将列伝』などがある。2000年没。

●

志茂田 誠諦（しもだ じょうたい）

1952年、熊本県生まれ。
中央大学法学部卒。作家、浄土真宗僧侶。（財）日本城郭協会理事。
歴史、仏教分野を中心に執筆活動。
共著書に『蓮如のすべて』などがある。

# 日本剣豪列伝

江崎俊平
志茂田誠諦

GAKKEN M BUNKO

日本剣豪列伝

江崎俊平
志茂田誠諦

学研M文庫

R―え
4―1
¥700

9784059010944

1920121007001

ISBN4-05-901094-4

C0121 ¥700E

1B1189

定価：本体700円
※税が別に加算されます。

六十数度の試合で無敗を誇った宮本武蔵。己の心を無にすることで恐怖を払いのける「剣禅一致」の境地を築いた柳生宗矩（むねのり）。強気一本に見せた剣法の裏に、策略家の顔を持っていた塚原卜伝（ぼくでん）。自らの「いのち」をかけて技を磨き、自己を探求し続けた剣豪たちの生涯を、膨大な史料をもとに解き明かす一冊！
巻末に全99人の略歴を記した『武芸者小伝』を収録。

GAKKEN M BUNKO

**江崎俊平・志茂田誠諦の本**

- 日本名匠列伝

**好評発売中**

- 大坂の陣 名将列伝
  永岡 慶之助
- 黒衣の参謀列伝
  武田 鏡村
- 十八史略の人物列伝
  守屋 洋
- 中国大帝伝
  立間 祥介
- 西洋英傑伝（書き下ろし）
  是本 信義
- 真説 新選組
  山村 竜也
- 史伝 土方歳三（書き下ろし）
  木村 幸比古

カバー写真協力：銀座長州屋
カバー・ブックデザイン：中谷匡児

# 日本剣豪列伝

江崎 俊平
志茂田 誠諦

学研M文庫

日本剣豪列伝

江崎 俊平
志茂田 誠諦

学研M文庫

# 日本剣豪列伝

江崎俊平
志茂田誠諦

学研M文庫

目次

# 日本剣豪列伝

塚原卜伝〈卜伝流〉戦国第一の達人……9
その生い立ち　回国修行　その晩年
上泉信綱〈新陰流〉古今第一の名人……23
新陰流誕生　上洛　その人格と兵法
斎藤伝鬼坊〈天道流〉祟り伝説を遺した剣豪……37
天道流誕生　故郷へ錦をかざる　死の真相
伊藤一刀斎〈一刀流〉伝説のなかの達人……49
わからない素姓　一刀流　その晩年
宝蔵院胤栄〈宝蔵院流〉僧形の槍名人……61
鎌槍創始　宝蔵院道場　その後の宝蔵院
小野忠明〈一刀流〉数多い分流を生んだ一刀流……73
神子上典膳時代　幕臣となる　人物と系譜
柳生宗矩〈柳生流〉剣禅一如の大名剣士……85
柳生売り出す　大名への道　宗矩と沢庵　柳生一族と門弟
富田重政〈中条流（富田流）〉達人ぞろいの富田一門……99
富田家の達人たち　名人余録　中条流の本意
佐々木小次郎〈巌流〉伝説に生きる達人……111
巌流島の決闘　異説拾片　小次郎の素姓
宮本武蔵〈二天一流〉剣豪の代名詞……125
吉川「武蔵」の幻影　不詳の半生　武蔵の諦観
荒木又右衛門〈新陰流〉武士の面子をかけた敵討ち……143
敵討ちの発端　伊賀の敵討ち　その後の又右衛門

平山行蔵〈実用流〉頑固一徹、奇人剣客……157
その生い立ち　兵原草廬　晩年の行蔵
男谷信友〈直心影流〉幕末第一の名人……171
その生い立ち　底知れない強さ　講武所
千葉周作〈北辰一刀流〉幕末に花開いた玄武館……183
北辰一刀流誕生　武者修行　玄武館
物外不遷〈不遷流〉二百五十人力の怪力和尚……195
拳骨和尚　道場を開く　その晩年
斎藤弥九郎〈神道無念流〉新時代へ目を向けた剣客……207
江戸の三道場　東奔西走　練兵館の人々
近藤勇〈天然理心流〉幕末に咲いたあだ花……221
板橋の露　その出生　池田屋事件　勇の人物
伊庭八郎〈心形刀流〉幕臣の意地を通した剣客……235
回天の時代　拳兵　その死
山岡鉄舟〈無刀流〉最後の剣客……247
鬼鉄誕生　浪と風　その後の鉄舟
武芸者小伝……261
関係年表……321
あとがき……328
解説……331

# 塚原卜伝◎卜伝流◎

戦国第一の達人

## その生い立ち

強きとてをのが力にまかせつつ柳の枝に雪折れはなし　『卜伝百首』

塚原卜伝は、延徳二年（一四八九）二月、鹿島神社の祝部卜部覚賢の二男として、常陸国鹿島（茨城県鹿嶋市）に生まれた。はじめは朝孝と称したが、同所塚原の塚原新左衛門安重の養子となり、新右衛門高幹と名乗った。卜部氏、塚原氏ともに常陸大掾鹿島氏の四家老であった。卜伝とはのちに神宮寺で入道したのち旧姓の卜部に因んで名乗った法名である。

鹿島神社の祭神は建御雷之男神（武甕槌大神）である。この神は、『梁塵秘抄』に「関より東の軍神、鹿島、香取、諏訪の宮」とあるように、古来より東国鎮護のための武神とされてきた。日本神話では出雲の大国主神のもとへ行き国護りを求めた天孫降臨の立役者であったし、神武東征伝説のなかでも活躍をした神である。こうした来歴から東北開拓と鎮護の神として崇敬を集めていた。特に源頼朝が征夷大将軍に任ぜられたあとは、武士の守護神とされてきたのである。

神話には建御雷之男神と剣との深いつながりが随所に描かれているが、ここには同神から授けられたという日本最古の直刀「韴霊剣」（国宝）が伝えられている。このような来歴もあって鹿島神社では神官たちによって「鹿島の太刀（鹿島七流）」が伝えられてきた。「上古流」「中古流」などがそうだが、その系譜に卜部氏の一族が登場している。

卜伝の生家には鹿島七流のひとつ「神妙剣」が伝えられ、実父覚賢は「中古流」の使い手であったという。卜伝も幼少のころから父に手ほどきを受け、その才能が認められて塚原氏へ養子に迎えられたものであった。

卜伝が塚原家に養子に行ったとき、養父新左衛門の父で、剣名の高かった土佐守安幹がまだ健在であった。安幹は飯篠長威斎から「天真正伝新当流」を学んでいて、その奥義「一の太刀」を卜伝に伝えたという。「一の太刀」については、長威斎が鹿島神宮に一千日参籠して授かったという話も伝えられているが、これは後世の神託仮作であろう。

『鹿島志』には、大永二年（一五二二）、卜伝が鹿島神宮に一千日参籠して「心を新たにして敵に当たる」という神意を受け「新当流」と名乗ったというが、卜伝が生前自らの剣法を「何流」として名乗った形跡はない（「卜伝流」も後世の呼称である）。

江戸初期に編まれた『甲陽軍鑑結要本』（甲州流軍学書）によれば、卜伝に「一の太刀」を伝えたのは、松本備前守尚勝（前名は政信）だという。尚勝も鹿島氏の四家老であり、鹿島の太刀の使い手であった。尚勝は卜伝と二十歳ほどの年齢差であり、同じ家柄でもあったことから、直接学んだとしても不自然ではないが、卜伝はどちらから学んだというよ

り、むしろ鹿島にいた複数の師について研鑽を積んだと考えてもよいのではないだろうか。卜伝が十五、六歳になるころには、近隣に相手になる者がないほど上達していたという。そうなればもはや回国修行しかない。

『卜伝百首奥書』には「十七歳ニシテ洛陽清水寺ニ於テ真刀仕合ヲシテ利ヲ得シヨリ、五畿七道ニ遊ビ、真剣ノ仕合、十九ケ度、軍ノ場ヲ踏ムコト三十七ケ度、一度モ不覚ヲ取ラズ、疵一ケ所モ被ラズ、矢疵ヲ被ルコト六ケ所ノ外、一度モ敵ノ兵具ニアタルコトナシ、凡仕合軍ノ場トモ立逢フ所ノ敵ヲ討取ルコト一分ノ手ニカケテ二百十二人ト云ヘリ、五百年来無雙ノ英雄ナリトイフ」とある。『関東古戦録』では、卜伝が戦場へ出たのは九度、名をあげたのは七度で、敵の首をとったのは二十一度となっている。

卜伝は十七歳で京の清水寺で真剣試合をしたというから、永正二年（一五〇五）のこととなるが、このときの相手は伝えられていない。

卜伝の真剣試合として伝えられているものに梶尾長門との試合がある。卜伝が川越（一説では下総）にいたとき、その名前を聞いて長門から試合を申し込んできたのである。長門は長刀の達人として知られ、刃渡り一尺四、五寸の長刀で、飛んでいる燕を斬って落とし、あるいは雉、鴨などを自由に斬り落とすという技の持ち主だった。立ち合うとき左手、右手、首と声をかけ、そのとおりに斬る手際のあざやかさに人々はおそれをなしていた。だから卜伝の門人たちは心配して、長門に勝つ方法があるのだろうかと尋ねた。



卜伝は、「鵙という鳥を知っているか。鵙は自分よりも大きな鳩を追い回す。しかしエッサイ（小鷹）という鳩の半分もない鳥に出会うと、あわてて木の葉のかげに隠れてしまう。相手によって物には強弱ができる。刃渡りわずか一尺四、五寸の長刀で両腕を二度斬ったというのは、よくよく相手が不鍛練であったからだ。三尺の刀でさえ思うように人は斬れるものではない。二尺にみたない長刀は、柄の短い槍と同様だ。突き抜かれたところで、相手を討たないで死ぬことはないから安心して見物しているがよい」と自信に満ちた笑みをうかべた。

勝負はいとも簡単に終わった。長門が一尺五寸ばかりの長刀をかいこんで床机を離れ、卜伝が二尺の太刀をとって立ち合った瞬間に、長門の長刀は蛭巻をはずして二つに斬って落とされ、次の瞬間踏み込んだ卜伝の太刀の下で、長門は血煙をたてて倒れたのだった。

## 回国修行

当時の武者修行は、真剣の試合を避けられないので、いのちの危険が伴った。それだけに勝ち続ければ一躍有名になれる。

卜伝が当時第一の剣士であったことは将軍足利義輝に剣術を指南していることからもわかる。上泉信綱が上洛する少し前のことで、卜伝は義輝に印可を与えている。

『甲陽軍艦』には「つか原ぼくでんは、兵法修行仕るに大鷹三もとするさせ、のりかへ三疋ひかせ、上下八十人計召つれありき、兵法修行いたし、諸侍大小共に貴むやうに仕なす。ぼくでんなど、兵法の名人にて御座候」とあるが、おそらく卜伝が晩年に人数をそろえて上洛した話を、いつも武者修行にそうして歩いているとしたものだろう。こんなに大勢ひきつれていては修行などにはならない。

卜伝の回国修行の話に「無手勝流」の話がある。あるとき大坂へ上る船中（一説では近江矢走の渡）で、ある武芸者と口論になった。相手がしきりに自分の武芸を自慢するので、卜伝は「わしも若いときから修行しているが、人に勝とうと思わず、ただ人に負けまいという工夫ばかりをやってきた」と言った。相手が何流かと尋ねたので卜伝は、「人に負けない無手勝流だ」と答えたことから、武芸者は激怒し、ぜひ試合をして決着をつけようと言い出した。

卜伝は平気な顔で「よろしい。ただ、ここは船中であるから人の迷惑になる。向うに島があるから、あそこで心ゆくまで勝負をつけよう」と言って船を島へ向けさせた。船が島へ近づくと、武芸者は待ちかねたように太刀を抜き、身をひるがえして島へ跳んだ。すると卜伝は船頭の水棹を手に船べりに立ち、船を沖の方へ押し出した。そして島で待っている武芸者に向って「無手勝流とはこれだ。ゆっくりとそこで頭を冷すがよい」と言ったという。

塚原卜伝画像（吉川浩一郎蔵）

この話は「土佐に卜伝という者あり」「土佐の卜伝」などとして伝えているものもあり、塚原卜伝とは別人であるという説もある。しかし卜伝が土佐守を称し、また土佐卜伝と称していたこともあるから、それが誤って土佐の住人卜伝となったということも考えられるが、この話が事実であるという裏付けもない。

卜伝の回国修行は、二十歳前後、四十歳前後、六十歳前後と三度行われている。三度目の天文の終わりごろに上洛したときは、将軍義輝や、伊勢の国司北畠具教、細川幽斎などに教授したと伝えられている。このとき卜伝はすでに六十歳であり、その名前は天下に聞こえていて、修行の旅というより遊山のようなもので、前出の『甲陽軍鑑』にある大がかりな旅だったようだ。また、このころ三好長慶に仕えていたため、連れていたのは門人ばかりではなかった。

実録本などには卜伝の回国修行中、卜伝が柳生但馬守宗矩に試合を挑んだ話が伝えられている。卜伝は但馬守が天下一との評判があるので面白くなく、その太刀筋を見ようとして但馬守を訪ね試合を申し入れた。但馬守は一間へ招き入れたままずいぶん待たせた。卜伝がしびれをきらしたころ、但馬守は卜伝の背後の襖をあけるや、いきなり木刀で打ちかかった。卜伝がとび退って刀の柄で受けとめ「尋常の勝負をなされよ」と言うと、但馬守は木刀を捨て「貴殿の剣術は上手であるが、心ができていない。これ以上の立ち合いは無用」と言い放った。卜伝がむっとして「心ができていないとは、どういうことか承りたい」と迫ると「貴殿は勝とうとしてここへ来られた。自分は一万石の大名で天下の師範である。もし貴殿が勝ったとしても、家来どもが生きて帰すことがあろうか。このような無益な試合を挑むことそのものが心が下手だと申すのだ」と言われ、卜伝は返す言葉もなく帰っていったというのである。

この話は明らかに但馬守を引き立てるために作られたもので、卜伝と但馬守が会うはずはない。卜伝が死んだ年に但馬守は生まれているし、卜伝が死んだ元亀二年（一五七一）には、のちに但馬守を登用した徳川家康はまだ東海の一武将にすぎなかった。



## その晩年

最後の回国を終えて常陸へ戻った卜伝は、そこで晩年をおくるのだが、彼には実子がなかったので、三人の養子をとっていたという。そのなかの一人に家督を譲る話が伝えられている。後世の創作だろうが紹介しておこう。

死期が近づいたのを悟って卜伝は、三人の養子の心掛けを試そうと考えた。鴨居の上に木枕を置いて、襖をあけると木枕が落ちてくるように仕掛けておき、まず彦四郎幹秀を呼んだ。彦四郎は入口まで来ると「見越の術」で頭上の木枕を見破り、木枕を取りのぞいてから部屋へ入った。二番目の小才治は、部屋へ入ろうとした瞬間木枕が落ちてきたので、

ハッと飛び退り、刀の柄に手をかけて、落ちてきたのが木枕であると確かめてから部屋へ入ってきた。三番目の者（名は未詳）は落ちてきた木枕を刀で二つに斬ってから部屋へ入ってきた。これを見て卜伝は彦四郎に家督を譲ることにしたという。

彦四郎に家督は譲られたものの、卜伝の奥義「一の太刀」は伝えられなかった。卜伝もそのことは気にしていたとみえて、末期に彦四郎を呼び「一の太刀を北畠具教どのに伝えているから、その方は伊勢に行って伝授を受けよ」と遺言した。彦四郎は卜伝の後継としての自負から、「一の太刀」を人に習うとは面白くないと考え、具教を訪ねたとき「貴方に伝授されている一の太刀が、私に伝えられたものと同じものかどうかを見たいと存じます」と言った。具教は「さもあろう」と応じ、一の太刀の型を見せた。彦四郎はそれを見て奥義を会得したという。

卜伝が晩年どのような生活をしていたのか詳しい記録はないが、講談などで有名な宮本武蔵との鍋蓋試合の話がある。修行中の宮本武蔵が卜伝を訪ねてきて試合を挑み、鍋蓋であしらわれるというものだが、卜伝在世中に武蔵はまだ生まれてはいない。

卜伝は鹿島で元亀二年（一五七一）三月十一日没した。年八十三。法名宝剣高珍居士。須賀村（鹿嶋市）の梅香寺に葬られたと『鹿島史』にあるが、同寺は焼失し墓は残ったものの位牌は長吉寺にある。

前述したように、卜伝は自分の剣術に「卜伝流」とか「新当流」とか名づけてはいなかった。いずれも後年になって呼ばれたものである。江戸時代にも「卜伝流」や「新当流」の名は残っていていくつかの型が伝えられているが、それも他流の影響を受け、後年になって定められたもので、卜伝時代の刀法はもっと簡単なものだったようである。

卜伝の剣術の極意は「一の太刀」であった。当時は甲冑をつけた戦場の剣法であり。防具をつけて竹刀で打ち合いをするものではないため、何十通りもの刀法は必要なく、むしろ不断の練磨と、戦場において動じない胆力を鍛練するものであった。

『甲陽軍鑑結要本』には「右の太刀に一つの位、一つの太刀、一つ太刀、斯の如くに太刀一つを三段に見分候。第一は天の時、第二は地の利、天地を合る太刀也。第三至極は一つ太刀、是は人の和と工夫の所也」と記されている。

また同書に卜伝の試合ぶりが書いてある。あるとき卜伝は兵法上手の者に試合を挑まれた。卜伝は「承知致した」と言っておいて、相手の兵法を調べたところ、構えは左太刀で、右か左か、必ず片手で勝負をつけるということがわかった。そこで卜伝は「左太刀の片手勝負は有利であろうが、誉めたものではないからやめるように」と言ってやると「左太刀の片手勝負がいやならば、試合う前に卜伝の負けにせよ」と返答してきた。卜伝が同じことを十度言ってやると、十度同じ返事が返ってきた。そうして試合をしたところ、勝負はあっけなくついた。相手は一太刀で額を割られて即死したのである。

この話などは、卜伝がただ強かったというだけでなく、試合前に下調べと相当の心理作

戦をやり、試合前にすでに勝ちを手にしていたことを物語っている。相手は卜伝が左太刀の片手勝負を恐れていると信じ、左太刀の片手勝負にきたところを敗れたのである。

『甲陽軍鑑』は江戸初期に編まれた軍学書（編者は山鹿素行の師、小幡景憲とされている）で、武田信玄、勝頼父子の事績から武士の心組みを解こうとしたもので、史料性は薄い。卜伝の逸話は、兵法がただ強いというだけではなく、試合の前に相手の技をよく調べ、かつ綿密な作戦をたてて勝機を確信したのち戦うべきであるという心組みを記したものである。

卜伝の門弟には「一の太刀」を譲られた伊勢の北畠具教、および将軍足利義輝のほかに、徳川家康の剣術指南となった松岡兵庫助がいる。兵庫助は鹿島神宮の大祝で「一の太刀」を家康へ伝えたという。

そのほかにも名高い門弟が多数いる。佐野天徳寺了伯および弟祐願寺は下野唐沢山城主佐野昌綱の子である。真壁暗夜軒氏幹は常陸真壁の城主、また海野能登守輝幸は武田氏の家臣である。細川幽斎も卜伝の上洛中に学んだと伝え、のち天道流を開いた斎藤伝鬼坊も卜伝の門から出たという。また一羽流を開いた師岡一羽も卜伝の門人であった。（『鹿島志』『本朝武芸小伝』『松窓漫録』『常陸国誌』『勢州軍記』ほか）



卜伝流
新当流　略系

- 足利義輝
- 北畠具教
- 結城正勝
- 佐野天徳寺了伯
- 塚原彦四郎幹秀
- 塚原卜伝高幹
  - 一羽流
    - 師岡一羽（別掲）
  - 松岡兵庫助則方（別掲）
  - 霞流
    - 真壁安芸守氏幹（暗夜軒）
  - 天道流
    - 斎藤伝鬼坊（別掲）
  - 本間派新当流
    - 本間勘解由左衛門―本間外記重政…木幡忠兵衛清忠

# 上泉信綱◎新陰流◎

古今第一の名人

## 新陰流誕生

古今、兵法あるいは武芸者と呼ばれた人は多いが、上泉信綱ほど偉大な足跡を残した武人はいない。「剣聖」の名にふさわしい達人といえよう。

信綱ははじめ秀綱といい、上野国上泉（前橋市上泉町）の城主上泉憲綱（のち秀継）の子として生まれた。生年は明らかではないが、永正五、六年（一五〇八、九）ごろの生まれであろう。

秀綱の父憲綱は勇将として知られた人物だったから、秀綱は幼いときから父について武芸に励んでいたようである。それから鎌倉へ出て念流を学び、下総国香取で飯篠長威斎がはじめた天真正伝新当流を学んだ。一説には長威斎から学んだともいうが、これは時代があわず、長威斎の弟子松本備前守尚勝から学んだというのなら時代的に符合するが、確証があるわけではない。ついで常陸国鹿島へ出て愛洲移香斎について陰流を学んだ。

享禄二年（一五二九）、秀綱は伊勢守と称した。上泉氏を大胡（群馬県勢多郡大胡町）の城主としている書もあるが、これは大胡重行が天文十年（一五四一）ごろ北条氏の招きに応じて江戸牛込城へ移ったため、一時上泉氏が大胡城を守っていたことがあったことによる誤解である。



上泉氏は代々上杉氏に属していたが、本家の大胡氏が北条氏に降ったのちにも上杉氏から離れなかった。しかし天文二十四年（一五五五）、北条氏康が上野国（上州）に出馬し、属将猪股能登守に赤城南麓の諸城を攻めさせたとき、上泉城にいた秀綱は戦わずして降った。

その年の五月、上杉謙信は上州へ軍を進めた。秀綱は使者を送ってその先導となり、北条氏の屯兵を逐った。謙信は箕輪（群馬県）の城主長野業正をこの地の目代にしたため、秀綱は長野氏の属将となり、長野家十六槍の一人として武名を高めた。

一方で上州進出をねらっていた甲斐の武田信玄は、長野業正の在世中はどうしてもこの地へ兵を進めることができなかった。永禄四年（一五六一）六月、業正が没し、その子業盛があとを継いだ。業盛はまだ幼かったので、永禄六年（一五六三）正月、信玄は大軍を率いて、安中、松井田などの城を落とし、箕輪城へ迫った。城兵はよく戦ったが、二月二十二日、業盛は自刃し、さしもの堅城も落城した。

この合戦で、秀綱は疋田豊五郎、神後伊豆守らと搦手を守って奮戦したが、業盛自刃と知って落ち、桐生城主桐生直綱のもとに身を寄せた。そこで家中の者に剣術を教えていたが、直綱が没すると箕輪へ戻り、箕輪城代内藤昌豊について武田氏の家臣となった。

しかし秀綱は、武将として名を挙げることより、新陰流を諸国に広めたいという願いの方が大きくなり、剣術修行のためとして信玄に暇を願いでた。信玄は秀綱を手ばなすのを

惜しんで許そうとしなかったが、他家に仕官するのではなく、兵法修行のためだからとしぶしぶ承知したという。ただ、万一他家に仕官するときには必ず信玄の許しを得ることという条件がついた。

秀綱が信綱と改名したのは、このとき信玄から一字を与えられたためという説があるが、おそらくは信の字に付会されたものだろう。なぜなら、永禄八年（一五六五）に柳生宗厳に与えた印可状には「上泉伊勢守藤原秀綱」と署名し、その翌年に与えた影目録には「上泉伊勢守藤原信綱」と署名しているから、改名はこの時期と考えられるからである。

秀綱がいつから「新陰流」と称したのかは明らかではない。一説には、信州飯綱の権現へ参籠して神示を得たというが、これは伝説である。師の愛洲移香が没したのは天文七年（一五三八）であるが、それ以前に「新陰流」を称したとは考えられないから、移香没後、陰流にさらに工夫を加え、それからしばらくのちに「新陰流」の流名を称したのではないだろうか。

## 上洛

あるとき秀綱は、門弟疋田豊五郎、神後伊豆守（一説には鈴木意伯）、および嫡子の秀胤らを連れて上州を発つと、東海道を上った。尾張から伊勢路をとって妙興寺のあたりまで来ると、人だかりがしていたので、尋ねてみると、

「乱心者が里の子供を奪って妙興寺の納屋に閉じこもったが、抜身をもっているので近づけず困っております」と言う。

秀綱は、それを聞くや頭を剃りはじめた。人々があっけにとられて見ていると、剃り終わった秀綱は、寺から法衣を借りて僧形になり、握り飯を二つもって、くだんの納屋へ近づいていった。

「近づくな、近づくと子を殺すぞ」となかから声がした。秀綱は、

「わしは僧侶だ。聞けば童は昨日から何も食べていないというではないか。これを食べさせてやってくれ」

と握り飯を子供に投げ与えた。曲者は左手で子供の衿をつかみ右手に脇差を構えていた。秀綱は言葉を続けた。

「そなたも腹がへっているだろう。これを食べるがよい」

と残りの握り飯をさし出すと、曲者は僧形の秀綱に気を許して脇差を置き右手をのばした。その刹那、秀綱は飛びかかって曲者を取り押さえたという。

これは『本朝武芸小伝』などに出ている有名な話で、真偽のほどは不明だが秀綱の人格をもっともよくあらわしているものである。武術はただ敵に勝てばよいというのではない。秀綱は乱心者を取り押えるについても、これだけの配慮をしたということだろう。

一行は伊勢の国司北畠具教を訪ねた。具教は塚原卜伝から「一の太刀」を受けた人物である。ここで大和の柳生石舟斎宗厳や興福寺塔頭の宝蔵院の覚禅坊胤栄を訪ねるよう勧められた。

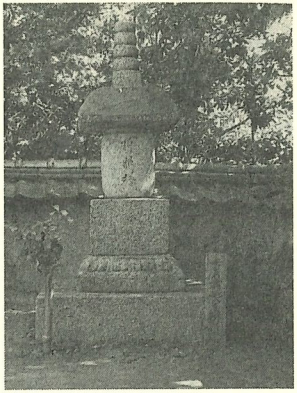
秀綱の一行が宝蔵院へ着いたときには、すでに北畠家から使者が送られており、柳生宗厳も連絡を受けて宝蔵院へやってきた。ここで宗厳は秀綱と立ち合って簡単に敗れるのだが『武功雑記』などにはこの話を面白く書いてある。

柳生宗厳が、秀綱に試合を申し入れたところ、まず疋田豊五郎と立ち合うよう言われた。立ち合ってみると、「その構えは悪い」と簡単に打たれた。宗厳が再び望むと「それも悪い」と三度まで軽く打ち込まれた。それから秀綱と立ち合ったが、秀綱は宗厳が構えると「その構えではいただきますぞ」と声をかけて打ち込んだ。宗厳は段違いの強さにびっくりして入門したという。

宗厳は秀綱を柳生の里に招き、教えを請うたが、しばらくして秀綱は上洛し将軍義輝の上覧に供した。このとき秀綱の打太刀を務めたのが丸目蔵人佐である。

丸目は肥後人吉の人で、当時北面の武士だったが、秀綱の剣名を慕って入門し、このとき門弟のなかから選ばれて打太刀を務めた。義輝から「上泉兵法古今比類なし天下一」「丸目打太刀の重宝」という感状を与えられている。この感状には年号がなく、三月十日とあるだけで、これを永禄七年（一五六四）とする説もあるが、前後の話から永禄八年





上泉信綱の供養塔
（芳徳寺　写真＝崇城文庫）

上泉信綱（『武芸百首』より
東京都立中央図書館加賀文庫蔵）

（一五六五）ではないだろうか。

永禄九年（一五六六）信綱（このころ改名）は柳生へ戻り、宗厳に影目録を与えた。しかし、その後しばらくの足どりは明らかではないが、近畿付近を遊歴していたものだろう。そして永禄十二年（一五六九）ころには再び京にいたようである。在京中は山科言継とかなり親しくしていたらしく『言継卿記』には信綱の記事が三十数ヵ所見えている。

元亀元年（一五七〇）六月、従四位下に叙せられているが、武蔵守を称したのはそのころだろう。そして翌年の七月には剣法を天覧に供した。剣法の天覧は信綱が初めてであり、いかにその名声が高かったのかがわかる。

このあと、信綱は関東へ下るべく言継へ別辞を述べた。そのとき言継は結城氏宛に紹介状を書いたという。信綱が下総の結城氏を訪れたことは考えられる（記録にはない）が、その後の足どりはわからない。

『関八州古戦録』などには天正五年（一五七七）柳生の里で没したとされているが、柳生家に信綱の死に関する記録はないようである。

また『後鑑』の注に「天正元年卒す」とあるが、傍証するものはなく根拠は不明である。山田次郎吉はその著『日本剣道史』で「其後再び大和へ立帰り柳生方へ寄寓して門人を仕立たらしい」と述べているが、これも傍証するものはない。

信綱ほどの人物が、その没年も知れないというのは不思議だが、天正五年（一五七七）まで生きていたとすれば、信綱は七十一、二歳と考えられるが確証はない。



## その人格と兵法

信綱は身の丈六尺、膂力優れていたという。信綱は武芸者というより武将としての風格を備え、またもの静かで何事にも油断するということがなかったという。

彼が諸国修行の旅へ出たのは中年すぎてからのことだが、上洛して短期間のうちに数百の門人が集まり、さらにその門下から多くの逸材が出ていることは、ただ信綱が強かったというだけではなく、心技ともに名人の境地に達していたことを物語っていよう。

信綱の剣術で忘れてならないのは「皺文皮竹刀」の考案である。それまでの稽古は木刀で行われていた。これで実際に打ち合うと怪我をすることから、稽古は型だけを学ぶものだったのだが、信綱は打ち合っても怪我をしないように袋竹刀を考えた。薄い良質の皮に薬品を交ぜた漆を塗って強化し、その皮で作った袋のなかに割った竹を入れたものだった（漆を塗った皮の模様がちょうど「ひき蛙」の肌に似ているところから「ひきはだ」と呼ばれた）。柄の長さは七寸（約二一㎝）、刀身二尺五寸（約七五㎝）、全長三尺二寸（約九六㎝）ほどのものであった。

新陰流の系流では竹刀で打ち合う稽古が中心だったが、これを「小手先の技だけの子供

だまし」として竹刀を用いない流儀もあった。しかし、真剣と同じではないとしても、竹刀で打ち合うことにより実戦での動きを体感でき、それによって瞬間の判断力を養うことができることは間違いない。だからこそ新陰流の系譜から優れた門弟を輩出できたのである。

さらに言えば、信綱の剣法は、ただ刺撃を専らとしたものではなく、剣術を通じて人格修行を目指そうとするものだった。この理念は柳生に受け継がれ、のち但馬守宗矩によって剣禅一如の境地まで高められる。

信綱は剣を学ぶ心を次のように説いている。

兵法は人のたすけに遣にあらず。進退爰に究りて一生一度の用に立る為ならば、さのみ世間に能見られたき事にあらず、たとひ、仕なしはやはらかに、上手と人には見らるるとも、毛頭も心の奥に正しからざる所あらば、心のとはば如何答へん。仕なしは見苦しくて、初心の様に見ゆるとも、火炎の内に飛入、磐石の下に敷かれても、滅せぬ心こそ心と頼むあるじなれ。

また信綱の「稽古訓」というのが伝えられている。



不断に忘れまじきは、竹刀にても刃方、むねの方を吟味をして、真剣にこの勝負と思ふべし。初心の心付無之以前は、工夫せんと思ひても実のなき故に、案ずる事なきものなり。身を離れたる工夫は、初心の内は用に立ぬものなり。たとひ理は合点しても所作ととのはぬ故、勝口正しからず、先づ所作と心との和合するやうにつかふ心もちよし云々。

初めは我心にて迷ふものなり
吾と我心の月を曇して余所の光を求めぬるかな
人の心を知る分別第一なり
善も友悪きも友の鏡なる見るに心の月をみがけば
やむる捨る分るも一つにも心次第なり
有の実と梨という字は変れども喰に二つの味はなし
心の止まり居つく所ある内は進む志はなし
よしあしと思ふ心を打捨てて何事もなき身となりて見よ
遊身にならず仕懸ること第一也
解もせず言も得ざりし所をも知りぬ物ぞと知るぞ知るなれ
いつも敵をば見下したる心持よし
引あげて嶺に空をばむすべかし谷へは月の遅く出るに

兵法は上嵩なるがよし心の縮まるを嫌ふ
雲の身に思ふ心も空なれば空といふこそもとで空なれ
上手なれば其心のかはりめをあまして打或は外し種々の働き出来るなり
折得ても心許すな山桜誘ふ嵐に散もこそすれ
敵の動きの未だ無之以前に、先に進む志（こころざし）少にてもあれば、場より内へは聊爾（りょうじ）に入（はいり）こまれぬものなり
とまりにも進む志あれば、おのづからうつるなり
おのづから映ればうつる映るとは月も思はず水も思はず
蛇は頭一寸出て其長（た）けを知る
里はまだ降りざりけりと旅人のいふに山路の雪はながるる
心をよく染ねば形は染らぬものなり
染ばやな心の色を墨染に衣の色はとにもかくにも

これが信綱の真作かどうかは不明だが、信綱の剣法に一貫している理念はうかがうことができる。

永禄九年（一五六六）五月、信綱が柳生宗厳に伝えた影目録のなかには「上古ノ流アリ、中古念流、新当流、亦（また）マタ陰流有り、其外（そのほか）ハ計（はか）ルニタヘズ。予諸流ノ奥源ヲ究（きわ）メ、陰流ニ



オイテ別ニ奇妙ヲ抽出シ、新陰流ト称ス。（中略）万人ニ傑タルニ非（あら）ザレバ、争（いかで）カ予家法ヲ伝ヘンヤ」と記されている。

信綱から印可を受けたと伝えられる者は七人いる。柳生宗厳、疋田豊五郎、神後伊豆守、丸目蔵人佐、松田織部助、那珂（なか）弥左衛門、奥山休賀斎である。新陰流は、柳生宗厳から宗矩に伝えられて完成されたが、江戸の柳生家はこの剣法を「柳生流」と称した。また、丸目蔵人佐や疋田豊五郎によって、信綱の剣法は西国へ広められた。

新陰流から興った流派は多く、主なものだけでもタイ捨（しゃ）流、疋田陰流、神影流、松田新陰流、真影流、庄田心流、奥山流、狭川新陰流、相馬新陰流、克己流、無住心剣流、空鈍流、久保流、鏡見流、石川流、荒木流、円流、小栗流、鹿島家流、真新陰流、真心影流、心貫流、太平真鏡流、直心正統流、天心流、無停滞心流（無滞心流）、柳生心眼流などがある。（『正伝新陰流・神陰流兵法家伝書』『言継卿記』『関八州古戦録』『日本剣道史』ほか）

新陰流略系

陰流
愛洲移香（斎）
- 平沢小七郎宗通
  - 平沢小七郎常通
- 新陰流
  上泉武蔵守信綱
  - 神後伊豆守宗治（別掲）
    - 正田豊五郎景兼（別掲）
    - 柳生流
      柳生石舟斎宗厳
      - 柳生但馬守宗矩（別掲）
      - 柳生新次郎厳勝（別掲）
      - 小栗流
        小栗仁右衛門正信（別掲）
        - 村山作右衛門宗次
    - 宝蔵院流
      宝蔵院胤栄（別掲）
    - 神影流
      奥山休賀斎公重
      - 真新陰流
        小笠原源信斎長治……（直心影流・別掲）
    - タイ捨流
      丸目蔵人佐長恵（別掲）
    - 西一頓高乗
      - 山北三蔵頼忠
    - 松田新陰流
      松田織部助清栄（別掲）
    - 那珂弥左衛門

# 斎藤伝鬼坊◎天道流◎

## 祟り伝説を遺した剣客

## 天道流誕生

伝鬼坊は天文十九年（一五五〇）常陸国真壁郡井手村（茨城県真壁郡協和町）に生まれた。父は北条氏康に仕え小番衆だったというだけで名前も伝えられていない。一説には伝鬼坊を相模国（神奈川県）の生まれともいうが、父が北条氏に仕えていたということから出た話だろう。幼名金平。主馬之助と称し長じて勝秀（一説には忠秀）を名乗った。伝鬼坊は幼いときから武術を好み、塚原卜伝に新当流を学んだ。卜伝は元亀二年（一五七一）に没しているが、このとき伝鬼坊は二十二歳、卜伝の最晩年の弟子ということになる。

流伝によれば、伝鬼坊の上達は目ざましく、またたくうちに先輩をしのぐようになったが、師の卜伝が死んでからは他に師事することもなく、自分で修行を重ねていた。しかし、修行にいきづまったので、鎌倉八幡宮に参籠して祈願した。満願の日に瑞夢を得て、天より一軸をさずけられ、開いたところで夢は覚めた。それによって妙旨を会得し、天道流（天流ともいう）と名づけたという。この開眼の日を天正九年（一五八一）十一月二十一日、伝鬼坊三十一歳のときとしている。それから諸国を回歴して修行し、天道流の名を高めたというが、これは後年になって開祖を神聖化するために作られたものだろう。

『天道流百問身得之巻』によれば、天道流と名づけた理由はまったく異なっている。流派



を開いて旅へ出たのではなく、回国修行の途中で一派を開いたとされている。

年代はいつか記されていないが、ある年の仲冬のこと、伝鬼坊は木刀二本をもって諸国を回っていたが、道中で日が暮れてしまった。幸い道の傍に辻堂があったので、そのなかに入り、木刀を枕にしてうつらうつらしていると、人の気配がしたので目を覚ました。見ると、同じような兵法修行者らしい男が入ってきた。じろりと伝鬼坊を見て、

「おぬしは何者だ」と問うた。

「わしは塚原卜伝先生に教えを受け、回国修行を続けている者だが、そういうおぬしは何者だ」と伝鬼坊も問い返した。

「わしも兵法修行者だ」

「して、何流を学ばれた？」

「自得の兵法でござるよ」と言って、その修行者は笑った。伝鬼坊が、

「それはちょうどよい。一手お相手願えまいか」と言うと、

「たやすいことだ。木刀の持ちあわせがないが、おぬしのを一本貸してもらいたい」

男は伝鬼坊から木刀を受け取ると、堂の外へ出た。

伝鬼坊は、卜伝が将来を期待していた俊英であり、卜伝没後十年ほどの修行中、いまだ敗北したことはなかった。目の前にいる修行者を見て、それほどの達人とは思えなかった。二人は辻堂の前で試合をしたが、伝鬼坊がどんなに打ち込んでも軽くかわされてしまい、

そのうち木刀を叩き落とされてしまった。伝鬼坊はこれほどみじめな敗北をしたことはなかった。急に相手が大きく見えてきた。伝鬼坊は手をつき、

「ここで、貴方のような達人に会ったことは神仏の引き合せでございましょう。私もいままで諸国を回りましたが、貴方ほどの達人に会ったことはございません。この上は、何とぞ弟子にして下さるようお願い致します」と言った。

修行者はうなずいて「それでは立たれるがよい。夜明けまで稽古を続けよう」と言った。

稽古は夜明けまで続けられた。東の空がしらじらと明けてくるころ、修行者は出発すると言う。伝鬼坊は「せめて、あと一、二日でもご逗留になってご教授を」と頼んだが、

「この上は自分で修行することだ。これ以上教えることはない」と言う。伝鬼坊は別れるのは名残り惜しいし、二度と合うことはない気がしたので、

「そうまで言われるならば是非もございませんが、せめてご流儀の名をお教え下さい」と言った。修行者は、

「流儀の名は別にない。あれを見よ」と言って、東の白む空を指さして、飛ぶような早さで立ち去っていった。

伝鬼坊は仕方なく、もとの辻堂へ戻って、いままでの稽古をふりかえってみた。修行者は伝鬼坊の望みに応じて稽古をしてくれたが、その間、信の道に叶うようにと教えてくれた。こうすれば誠の道に叶う、こうやっては叶わないということを何度もくり返し口に出したのだった。修行者が東の白んだ空を指さしたことなども考えてみた。ふと伝鬼坊は急に眼前が明るくなったような気がした。

誠ということは天の道である。ことに東の方は日の昇る天の道である。修行者が東の空を指さしたのは、「わが兵法は天の道」、すなわち天道流であると示したのではないかと思った。それから伝鬼坊は、新当流という流名を捨て、自分の兵法に天道流と名づけたというのである。話そのものは伝説だろうが、伝鬼坊が名もない兵法修行者に敗れ、慢心の鼻を折られて精進し、それを機会に一派を開いたということかもしれない。

## 故郷へ錦をかざる

伝鬼坊はさらに諸国を回って自信がつくと、京へ上った。師の塚原卜伝や、新陰流の上泉信綱も京へ出て天下第一の兵法者という評判をとったが、伝鬼坊もそれを踏襲したものである。

ほどなくして、伝鬼坊は紫宸殿の広庭において、一刀三礼の太刀を天覧に入れ、左衛門尉に叙せられている。伝鬼坊が京でどんな手づるで天覧にこぎつけたのかは明らかではないが、卜伝の弟子とはいえ、一介の兵法者がその栄誉を得たのは、師の名声の七光りか、それとも回国修行で相当の評判をとっていたのかもしれない。こののち入道して故郷の村

名をとって井手判官伝鬼坊と称したようである。

剣技を天覧にいれたということは、たちまち畿内に広がり、遠国にも伝鬼坊の名と天道流の名は流布した。伝鬼坊は再び諸国をめぐったが、今度は判官となり、天下御免の兵法者として大手をふっての旅だった。

故郷へ戻ると、伝鬼坊の雷名を聞いて門下に集まってくる者が相ついだ。そして真壁に本拠を置き、関東一円を天道流流布に回ったが、その身なりは、羽毛をつかった衣服を着て、ちょうど山中から出てきた天狗のような恰好であったという。

下妻の城主多賀谷修理大夫重経をはじめ、益子筑後守、笠間孫三郎、結城妥女正などの領主および豪族の子弟らが続々と入門してきた。

ところが、伝鬼坊の評判を面白くないと思っている者がいた。真壁の城主真壁安芸守氏幹とその弟子たちである。氏幹は真壁氏十八代の城主で、塚原卜伝に学び、霞流と称していた。剃髪して道無と号し、また暗夜軒、暗礫軒とも号していた。また「夜叉真壁」と呼ばれ近隣になりひびいた強者で、戦場では一丈余の赤樫の丸太を周囲八寸、六角に削り、鉄の筋金を入れ鉄鋲を植えた棒を振り回し、人といわず馬といわず、当たるをさいわいに薙ぎたおしたという。伝鬼坊が戻ってくるまでは、真壁一帯で第一の兵法者として門弟も多かった。

氏幹の重臣に桜井大隅守という者がいた。その子の霞之助が氏幹の愛弟子で、もっとも

斎藤伝鬼坊（『武芸百首』より
東京都立中央図書館加賀文庫蔵）

将来を期待された弟子だった。霞之助は伝鬼坊一門の評判や言行が面白くなかった。真壁には氏幹がいるのに、天道流こそ天下の兵法であるといわんばかりの態度や、真壁の兵法修行者が、先を争って伝鬼坊に入門することにも我慢ができなかった。

「天道流などといっても、大したものではあるまい。試合をしてみればすぐわかることだ。わたしなら、一打ちで勝ってみせようぞ」

と、広言した。このことを伝え聞いた伝鬼坊は怒り、霞之助へ真剣試合を申し込んだのである。

相手は少しくらい腕が立つといっても、無名の若者である。一方の伝鬼坊の方は剣技を天覧にいれた天下衆知の達人である。本来なら、霞之助の誹謗などは無視すべきであり、それができなくても、弟子と試合させるくらいが妥当なところだったろう。

霞之助は望むところとばかり真剣試合に応じた。師匠の氏幹に告げれば止められると思い黙って試合に臨んだが、勝負はあっけなく終わった。伝鬼坊の一撃で霞之助は即死したのである。

## 死の真相

息子霞之助が伝鬼坊に殺された、それも伝鬼坊から真剣試合を申し込んだと聞いた桜井



大隅守は、倅の仇を討とうと決心した。主人の氏幹へ訴えると、氏幹は、

「不届きな伝鬼坊の振舞いだ。霞之助はわしが取り立てた門人の一人、このまま捨てておいてはこのわしの名折れになる。伝鬼坊は領内の郷士の倅であるから、いわば郎党にも等しい身分である。領主をないがしろにする行為は許しておけぬ。必ず討ちとれ」と命じた。

氏幹は伝鬼坊を排斥するような狭量の人間ではなかったのだが、この試合が自分の与り知らぬものだったため、怒ったのである。

大隅守は、伝鬼坊へ試合を申し入れた。場所は真壁の不動堂である。伝鬼坊は承諾したが、無論、氏幹の怒りにまでは配慮していなかった。

その日未明、伝鬼坊は鎖かたびらに十文字の鎌槍をさげ、左右に二人の弟子を連れて不動堂まで来たが、まだ大隅守の姿はなかった。「まだのようでございますな」と弟子は、伝鬼坊の勝利を疑っていない口ぶりであった。

「怖気づいたのかも知れぬな」伝鬼坊は微笑をうかべながら不動堂の傍の松の根方に腰をおろした。

ややあって、見張っていた弟子が「来ましたぞ」、続けて「相手は多勢」と叫んだ。立ち上がった伝鬼坊は、近づいてくる大隅守の一行を見て顎然となったのである。

大隅守は見分役だけを連れてきたのではなかった。馬廻りの士を十人ばかり、それに足軽が三十人以上もいる。しかも全員が弓矢をたずさえていた。いうまでもなく、伝鬼坊を

是が非でも討ちとる計略だった。伝鬼坊は、大隅守と二人で試合をするものと思っていたが、もちろん大隅守にはそんなつもりはなかった。伝鬼坊は二人の弟子に、

「おぬしたちは、この場から立ちのけ。うろうろしていると巻きぞえをくうぞ」

と命じたが、弟子たちは伝鬼坊だけを残すことをためらった。それを叱りつけ、ようやく弟子を去らせてから、伝鬼坊は不動堂の縁側へ上った。縁側では槍を充分に使えないが、後矢を防ぐにはこうするしかない。

不動堂をとりまく多勢の者が弓に矢をつがえたところで、大隅守が伝鬼坊に対峙した。横に斎藤万然という馬廻りの士が矢をつがえて進み出た。

「伝鬼坊。おぬしは日ごろ矢切りの術があると高言しているが、わしの矢を受けてみよ」

と叫ぶや、弦音高く矢を放った。伝鬼坊は、十文字槍をふるって飛んできた矢を見事に打ち落とした。続いて飛んできた矢も落とし、三本目も造作なく打ち落とした。しかし、伝鬼坊の秘技もそれまでだった。三本目のあと、今度は一勢に矢が放たれたのである。数十本の矢が伝鬼坊目がけて集中した。そのなかの何本かを打ち落としたものの、一度におそいかかってくる数十本の矢を払うことはいかなる名人といえどもできるものではない。あっというまに数本の矢が伝鬼坊に突きささった。みる間に、満身矢だらけになって伝鬼坊は夜明けの路上へ崩れた。天正十五年（一五八九）、伝鬼坊は三十八歳であった。

その後、ここには伝鬼坊の怨念が残り種々の怪異をみせるというので、その霊をなぐさ



めるために一寺が建立された。その寺も享保ごろまでは残っていたが、いまはわずかにその址をとどめているにすぎない。伝鬼坊が大隅守を待って腰をおろしていた松は「恨みの松」と呼ばれ、いまも残っているが、現存している松は当時のものではない。

また伝鬼坊を殺させた真壁氏幹は、それから二年後の天正十七年（一五八九）三月三十日、伝鬼坊のあとを追うように死んだ。伝鬼坊の怨念によるものと噂されたが、氏幹は七十歳に近くなっていたため、死んでも不自然な年齢ではない。

この話はおそらく伝説であろう。この地は真壁暗夜軒（氏幹）の地元であるため、伝鬼坊に不利な伝承となっていると考えられる。剣技を天覧に供したほどの伝鬼坊がそれほど軽率な兵法者であったとは考えにくいし、伝鬼坊の道統がここでとだえることなく継承されたことからも、この話が創作であることがうかがえる。

ただ、その最期が不慮のものであったことは事実だろう。祟り伝説は謀略をめぐらした側のうしろめたさが生み出す迷妄であることが多い。右の話が伝説だとしても、伝鬼坊は死に臨んで弟子たちのいのちを惜しんだ。ここに伝鬼坊の真実がかいま見える気がする。

（『天道流百間身得之巻』『常陸国誌』『関八州古戦録』『本朝武芸小伝』『武術流祖録』ほか）

天道流略系

斎藤伝鬼坊勝秀
- 斎藤法玄
  - 人見熊之助
    - 斎藤右兵衛
      - 加古利兵衛正真
        - 村上権左衛門
        - 細野六左衛門吉次
  - 斎藤牛之助
    - 日夏喜左衛門重能
      - 日夏弥之助能忠
- 日夏弥之助繁高（『武芸小伝』著者）
- 下河原新内恭長
  - 奥平甚五兵衛広武
  - 下河原新内一恭
    - 下河原新内一致
- 下河原弁蔵一行
  - 下河原唯六一弘
- 多賀谷修理大夫重経
- 小松一卜斎
  - 月岡一露斎正光

# 伊藤一刀斎◎一刀流◎

## 伝説のなかの達人

## わからない素姓

『本朝武芸小伝』によれば、一刀流の始祖でその代名詞ともいうべき伊藤一刀斎景久は伊豆の人となっている。『武術系譜略』『武術流祖録』『日本武術名家伝』など、いずれも伊豆の人としている。伊豆の伊東の人という説もあるが、これは伊藤を伊東と書き、地名をあてはめたものだろう。一刀流正系指南免許の『伝書』には「元祖井藤一刀斎景久師は、豆州大島の産、伊藤入道景近の末葉、平氏なり」とある。生年ははっきりしない。一刀流十四代鈴木礼太郎は、一刀斎を享禄年間（一五三〇ごろ）に生まれたというが、根拠は明らかにされていない。

本山荻舟の『一刀流物語』では、一刀斎は筑紫（福岡県）の生まれで、東上して小田原に居住したとするが、これも裏付けはない。講談では、越前敦賀の生まれとし、父を伊藤弥左衛門友定としているが、これは創作であろう。

また山田次朗吉の『日本剣道史』では、西京出身としているが、これも根拠はない。『一刀流歴代略』にある「景久師、回国他流戦三十三度也」の回国を四国と読んで、一刀斎は四国の生まれであるとする説もあるが、これは明らかに誤解で、この場合、回国でなければ意味が通じない。



下川潮の『剣道の発達』によれば、一刀斎を伊豆の生まれとし、その生年を永禄三年（一五六〇）としている。また『剣道教範』（柳多元次郎）では承応二年（一六五三）九十歳で没したとあるから、これによって逆算すれば永禄七年（一五六四）の生まれということになる。二人とも武道研究家としては知られている人であるから、何らかの根拠があったものだろうが、出典は明らかにされていない。

『寛政重修諸家譜』によれば、一刀斎の道統を継いだ神子上典膳（のちの小野忠明）が徳川家に仕えたのは文禄二年（一五九三）とされているが、このときの一刀斎の年齢は、下川説では三十四歳、柳多説では三十歳となる。一刀斎は神子上典膳に印可を与えてから消息を絶っているので、これによれば三十歳前後で隠遁したことになり不自然である。しかも、小野忠明が寛永五年（一六二八）に没したとき六十九歳であったというから、一刀斎と忠明はほとんど同じ年齢になってしまう。

一番妥当なところは『一刀流物語』の本山説である。一刀斎が忠明へ印可を与えたのは天正十六年（一五八八）で、このとき一刀斎は五十歳ぐらいであったとしている。逆算すれば天文初期の生まれとなり、時代的には説得力があるが、これもまた確証はない。

## 一刀流

一刀斎が、はじめ弥五郎と称し、鐘捲自斎通宗から剣術を学んだということは諸書が一致しているが、どこで自斎から学んだのかは明らかではない。この鐘捲自斎も富田流を学んだという以外は不明で、北陸の人と思われるが、異説には遠江国秋葉の生まれ、また伊豆の人としているものもある。これは一刀斎を伊豆の人としているところから付会されたものだろう。また、一刀斎は江戸で自斎から学んだとするものもある。

一刀斎がまだ自斎の門にいたころの話として次のようなものがある。

ある日、剣法の妙機を悟ったと告げると、自斎は「その方は門下となってまだ日も浅いのに、何で妙機を悟ることがあろうか」と叱りつけた。すると一刀斎は平然として「妙というのは一心の妙で、師より伝えられるものではございません。また修行の年月によるものでもございません。疑われるのであれば、私と試合をしていただければわかりましょう」と言った。自斎は木刀を取り一刀斎の慢心をいましめるつもりで打ち据えようとしたが、かえって自斎の方が打たれてしまった。

自斎は首をひねって「わしは諸国をめぐり、多くの武芸者と試合をしてきたが、いまだに敗れたことはない。しかし、いまその方と立ち合って勝つ自信はない。その方は、どのようにしてこの妙技を得たのか」と尋ねた。



一刀斎は、「人は眠っている間でも、足がかゆいのに頭をかくことはございません。足がかゆければ足をかき、頭がかゆければ頭をかきます。すなわち、人間には機能があって、害を防ぎ得るようにできております。いま、先生が私を打とうとされた瞬間は、先生の気合が抜けた瞬間で、いいかえれば先生の心は虚でございます。私がこれを防ごうとするのは人間の本能で、かつその心は実でございます。我が実をもって先生の虚を打つ、これが勝ちを得た理由です」と言った。自斎は感心し秘伝をすべて一刀斎に授けたという。

右をふくめ、一刀斎の事績について伝えられているものはいずれも伝説だが、「夢想剣」を開眼する次の話はあまりにも有名である（ただし『一刀流皆伝目録』『一刀斎先生剣法書』〈古藤田俊定〉には「無想剣」は登場しない）。

一刀斎は鶴ヶ岡八幡宮に七日七夜参籠したが、満願の夜になっても託宣がなかった。一刀斎は自分の修行が足りなかったのだと思い、神前を去ろうとしたとき、何者とも知れないものがうしろに迫っていた。一刀斎はそれを感ずるや否や、無意識のうちにその曲者を斬っていた。このとき「夢想剣」を開眼したという。

幕末に千葉周作が著した『剣法秘訣』には、一刀斎が次のように述べたと記されている。「自分（一刀斎）はむかし八幡宮に参籠したとき、人を殺したことがあったが、あとになってそのことを考えてみると、これが夢想剣であったようだ。うしろに曲者の気配を感じ

たとき、無意識のうちに相手を抜きうちにしていた」

つまり満願の日に悟ったのではなく、のちになって思いあたったとされている。

一刀斎の弟子に善鬼三介がいる。『日本剣道史』（山田次朗吉）に、一刀斎がまだ武者修行を続けているときの話として、善鬼が登場する。淀の川舟に乗ったとき、その船頭が一刀斎の木刀を見て「貴方は剣術修行とみえるが、自分はどんな剣術の達人にも負けるとは思えない」と言ったことから、二人は陸へ上がり、船頭は櫂で、一刀斎は木刀で立ち合った。結果はあっけなく一刀斎の勝ちとなり、船頭は弟子となった。この船頭がのちの善鬼三介であるという。この話は文化十一年（一八一四）に編まれた『耳袋』（根岸鎮衛）が根拠となっており、史実とは思えない。

『雑話筆記』では、善鬼は船頭ではなく山伏となっているが、善鬼については、のち佐倉の千葉氏に仕えていたという説もあるが、はっきりしたことはわからない。

また一刀斎の高弟に、神子上典膳（のちの小野忠明）と北条家の家臣古藤田勘解由左衛門俊直がいる。『一刀斎先生剣法書』を書いた古藤田俊定は俊直の孫である。

天正十二年（一五八四）、一刀斎が相模国戸倉沢（神奈川県足柄郡）に来たとき、俊直は試合を挑んだが、敗れた。それを遺恨に思った俊直は、仲間を集め四十八人で一刀斎を襲ったが、まったく歯が立たず、門人になったという。俊定の代に大垣城の戸田氏に仕え、唯心一刀流を伝えた。

伊藤一刀斎画像
（河田忠行蔵　写真＝崇城文庫）

伊藤一刀斎の墓（東京都品川区　天妙国寺）

## その晩年

一刀斎が、隠退を決意したのは、『剣法秘訣』（千葉周作）などによれば、次のような理由によってだという。

一刀斎が鎌倉で妾（『一刀流物語』ではお国という名になっている）と住んでいたころの話である。妾は年のころ三十ばかり、一刀斎は五十歳ぐらいであった。

ある夏の夜のことである。一刀斎を恨んでいる武芸者が仲間を集め、一刀斎を襲う計画をたて、その妾を一味に引き入れていた。一刀斎はそんなことは知るよしもなく、妾とともに休んでいた。一刀斎が寝入ったのを見て、女はそっと蚊帳から抜け出し一刀斎の枕刀を隠して、外で待っている仲間へ合図した。一味は部屋へ入ると蚊帳の吊手を切った。

一刀斎は、斬りつけてくる刃の下をくぐり、やっとのことで蚊帳から抜け出すと、曲者の刀を奪って斬った。刀を手にすれば、もはや一刀斎の敵ではなかった。曲者たちが逃げ出したあとを調べてみると、死体は八体あり、妾は曲者と一緒に逃げ去っていた。このとき一刀斎は「仏捨刀」の一手を編みだしたという。しかし、一刀斎は不覚を恥じ、一刀流を弟子に譲り隠棲を決意したという。検死役人に一書を残し、夜明け前に家を出て山越しに武州金沢（横浜市金沢区）から、下総へ渡る船へ乗った。



この話を、千葉周作は鎌倉とし、本山荻舟は鎌倉雪ノ下としているが『撃剣叢談』では京の出来事としている。

話を続けよう。下総についた一刀斎は、佐倉の千葉介邦胤に仕えていた善鬼三介に会い（このときが天正十六年となっているが、邦胤は天正十三年五月七日没しているから、重胤の時代である）、神子上典膳と試合して、勝った方に一刀流を相伝することを告げた。また安房岡本の里見氏へ仕えている神子上典膳にも同じ旨を伝えた。この対決が有名な小金ヶ原の決闘である。

この二人の試合には異説がある。一刀斎は、家康から召し抱えようと言われたのを辞し、神子上典膳を推挙したので、善鬼が怒った。そこで一刀斎は、典膳と試合して勝った方へ皆伝の上、仕官を斡旋しようということになった。

『一刀斎口伝』は、このときの二人の試合を次のように述べている。

善鬼はその剣技は典膳に長じているけれども、心が悪いので、一刀斎は典膳に秘伝を譲りたいと考えていた。しかし二人の立ち合いは、どちらとも予断を許さない。そのうち善鬼は隙をうかがい、秘伝書を奪って逃げ出したので、一刀斎は典膳とともに追った。善鬼は追いつめられ、逃げることができず、たまたま大きな瓶があったのでその下に隠れた。典膳がその瓶を除こうとすると、遅れてかけつけた一刀斎が、「その瓶を除けば足を払われるぞ。瓶とともに斬れ」と叫んだ。典膳はそこで瓶もろとも善鬼を斬った。典膳はこの

とき気合の妙機を会得したという。この刀は「瓶割刀」と名づけられ、小野家の重宝として伝えられた。善鬼は瓶とともに斬られたが、目を開き、秘伝の書を口にくわえて離さなかった。一刀斎はその執念を哀れと思い「典膳にその方のあとを継がせ、小野を名乗らせよう」と言うと、善鬼は目を閉じ、静かに秘伝の書を口から離したという。

「瓶割刀」は、この話から名づけられたことになっているが、『本朝武芸小伝』では、善鬼を討ったのち、一刀斎が「瓶割刀」を典膳に与えたことになっている。またほかにも次のような「瓶割刀」の由来が伝えられている。

ある夜、一刀斎の宿舎に盗賊が忍びこんだので、一刀斎が太刀をさげて追った。賊は瓶の陰に隠れ、右より追えば左へ逃げ、左より追えば右へ逃げるので、一刀斎は気を込めて瓶とともに打ち込むと、大瓶は二つにわれ、賊も両断された。それからこの刀を「瓶割刀」と名づけたという。そののち一刀斎の三十三度の試合には、必ずこの刀を用いたという。一説には、この刀は三島明神の神主から与えられたもので、賊が大瓶のなかに隠れたのを、瓶もろともに両断したとも伝えられる。

『一刀流口伝』では、典膳が小野善鬼の家名を継いで小野を称したことになっているが、善鬼が小野を称していたことは明らかではないし、典膳が小野を称したのは母方の家名であって善鬼とは関係ない。

『一刀流物語』では、二人の決闘を天正十六年（一五八八）の秋としている。場所も一般



には総州（上総国）小金ヶ原となっているが、相州（相模国）小金ヶ原（神奈川県）としているものもあり、『雑話筆記』では、場所を濃州（美濃国）桔梗ヶ原（岐阜県）としている。『本朝武芸小伝』には、小金ヶ原に「善鬼塚」「善鬼松」というのがあると伝えている。

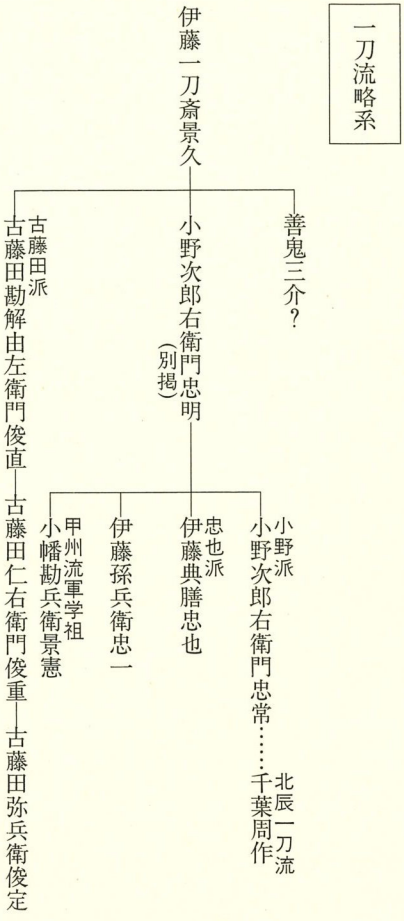
この後の一刀斎の消息は不明である。千葉周作も『剣法秘訣』のなかで「其の太刀にて危き処（鎌倉での事件）を切り抜け、門人小野次郎右衛門忠明（典膳）に会して、其の切り抜けたる太刀の形を伝へ、我身の其時の越度を恥ぢ、隠遁して行衛知れずと云ふ。是れ当流の仏捨刀なり」と述べている。

一刀流の流名は、『一刀流兵法箇条目録釈義』によれば「抑も当流刀術を一刀流と名付けたる所以のものは、元祖伊藤一刀斎なるを以ての故に一刀流と云ふにあらず。一刀流と名付けたるはその気味あり。万物大極の一より始まり、一刀より万化して一刀に治まり、又一刀に起るの理あり」と述べている。これは他の一刀流諸派も同様の意味を伝えている。

一刀流も典膳が継いで改良が加えられた。一刀流小野派の組太刀として伝えられるもののなかで、一刀斎より伝えられたのは、仏捨刀、刃引、相小太刀、表の組は越身までで、伝書は本目録、皆伝の二つであった。小野忠明（典膳）によって、小太刀の組太刀五本を加え、その子忠常のとき組太刀の切落、二本目、寄身、開の四本を加え、さらにその子忠於が合刃、張の二本を加え、組太刀を完備したものである。

一刀斎の刀法は、小野忠明と古藤田俊直が継いだ。二人とも優れた人材であったため一刀流は栄えた。特に、小野忠明は将軍秀忠（ひでただ）の剣術指南として活躍し、その系譜から幾つもの流派が生まれ（「小野忠明」参照）、新陰流とともにもっとも盛んな流派となった。（『剣法秘訣』『武道極意』『一刀流物語』『本朝武芸小伝』『撃剣叢談』ほか）

一刀流略系




# 宝蔵院胤栄◎宝蔵院流◎

## 僧形の槍名人

## 鎌槍創始

宝蔵院流は、覚禅坊胤栄によって始められた槍術で、その主流として幕末まで栄えた流派である。幕末に幕府が講武所を設けたとき、槍術の教授十二名のうち十一名が宝蔵院流であったほどである。

胤栄は中御門氏の出で、父は但馬胤永といった。大永元年（一五二一）の生まれである。奈良の宝蔵院の住持となり覚禅坊法印と称した。宝蔵院は興福寺の塔頭の一つで、寺領は三十三石余であった。

胤栄は僧侶でありながら武芸を好み、さまざまな武芸者について学んだ。槍の達人成田大膳大夫盛忠（一説に政来）が奈良を訪れたとき槍法を学び、のち工夫を加えて鎌槍の用法を考え出したという。これが宝蔵院流（鎌宝蔵院流ともいう）だが、成田大膳大夫についてはまったくわかっていない。

『本朝武芸小伝』（日夏繁高）によれば、阿部正邦の家臣で槍の達人として知られた山上秀澄が、胤栄は高観流の直槍を修験者に習ったといい、繁高自身は、大膳大夫が高観流の達人であったのだろうといっているが、高観流槍術についても直槍というだけで、他のことは明らかではない。また胤栄が鎌槍の用法を考え出したのは、上泉信綱と会ってからという説もあるが、信綱が奈良を訪れたときには、すでに胤栄の鎌槍は世に知られていた。

実録本によれば胤栄は悪者扱いになっている。胤栄は高慢な僧で塔頭に「天上天下唯我独尊」という金の扁額をかかげていたので、柳生十兵衛が道場に乗り込み、胤栄をさんざん打ち込んで扁額を猿沢池に投げこんだ。のちまた訪れ再び試合していると、気合をかけてくる少年がいた。伊賀国荒木村の丑之助という少年で、見所があるとして十兵衛が預り剣術を教えた。この少年がのちの荒木又右衛門であるという。しかしこの話は時代も違っているし、根も葉もない作り話である。興福寺は法相宗の名刹で、塔頭を預る胤栄は学徳も高く、また柳生家とは交流も深く、宗厳とともに兵法修行に励んだ仲であった。

胤栄が鎌槍を考え出すについては次のような伝説がある。胤栄が直槍の工夫にいきづまり、猿沢池でふと水面を見ていると、三日月の影が映っていた。それを見て直槍に三日月を交叉した十文字鎌槍を思いついたという。

胤栄は十文字槍を「鎌槍」と呼んでいた。これをのちに弟子の高田又兵衛吉次が「十文字槍」と改称したという。しかし槍術が変わったのではなく、わかりやすくしたのである。宝蔵院流では鎌槍は剣の長さ五寸（約一五㎝）、横手の長さ四寸（約一二㎝）を定寸とするようになったが、胤栄は剣九寸（約二七㎝）、横手七寸（約二一㎝）を用いていたという。『本朝軍器考』（新井白石）では、鎌槍は胤栄が柳生宗厳と相談して発明したとある。

宝蔵院流の特長は短槍であった。柄の長さは、身長の一倍半を標準とし、身長によって

柄の長さを定めるべきとしている。また鞘は「突割り鞘」といって、鞘をはずして用いるのではなく、そのまま突けば鞘は割れるように作られていた。

鎌槍については『北条五代記』に「鎌鑓はむかしより用る云々」とあるのを引用して、鎌槍は古くからあり、胤栄が作ったものではないという人もあるが、これは「当世（慶長年間）はかぎ鑓とて……物ずきも時代によりて替ると見えたり」と言ったのに対して、老士が「むかしより用いていた」と言ったものである。老士の言う「むかし」は慶長以前をさしているもので、胤栄が鎌槍の用法を体系づける以前を意味するものではない。また『武徳編年集成』に永禄十一年（一五六八）榊原康政が「笹切」という鎌槍を用いていたことが出ているが、これも同様である。胤栄が上泉信綱と会ったのは永禄六年（一五六三）だが、それ以前に胤栄は鎌槍の用法を発明していたと考えられるから、榊原康政が鎌槍の利点を知って使用したことは不思議ではない。片鎌槍が古くからあったのは否定しないが、それを十字形の鎌槍としてその用法を考案したのは胤栄であろう。

## 宝蔵院道場

永禄六年（一五六三）、上泉信綱（当時秀綱）は、新陰流流布のため上洛の途についた。伊勢の国司北畠具教を訪ねたが、具教は「当所には貴方に対し得る武芸者はいない。大和



柳生谷の柳生但馬守宗厳は、五畿内一の兵法家と呼ばれているし、南都宝蔵院の覚禅坊胤栄は、鎌槍で名の高い人物。まず宝蔵院を訪ね、それから但馬守に会われるのがよろしかろう」と言って、胤栄に使者を走らせた。知らせを受けた胤栄は、すぐに柳生宗厳に伝えた。宗厳は「柳生谷は草深いから、宝蔵院で上泉どのを迎えよう」と、ただちに宝蔵院を訪れ、信綱一行を迎えた。ここで宗厳は信綱と試合して、その妙技に感じ入門する（「上泉信綱」参照）のだが、このとき胤栄も入門し、のち永禄八年（一五六五）八月、上泉信綱より新陰流の印可を受けている。

あるとき、穴沢という長刀の達人が、胤栄と試合をしたいと思ったが、ただ申し込んだのでは試合をしてもらえないと考え、奈良へ来て宝蔵院の下男となっていた。胤栄は穴沢を見て、尋常の人物ではないと思い、呼んで尋ねると、穴沢は正直に試合をしたくて下男となって奉公したことを答えた。胤栄は驚いて、ていねいに客として扱い、試合をした。これを近所の奥蔵院の僧が側で見ていたという話が『本朝武芸小伝』にある。

この穴沢というのは主殿助と書いたものもあるが、新当流の長刀、槍の達人で、慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の役に西軍として討死した穴沢浄見秀俊であろう（穴沢浄見は「唯授一人」の印可を慶長二年〈一五九七〉八月、棒庵入道に相伝、棒庵入道は慶長十四年〈一六〇九〉九月、柳生兵庫助利厳に「唯授一人」の印可を相伝している）。

胤栄と射術の達人菊岡二位宗政との試合がある。菊岡は胤栄の雷名を聞き、試合を申し

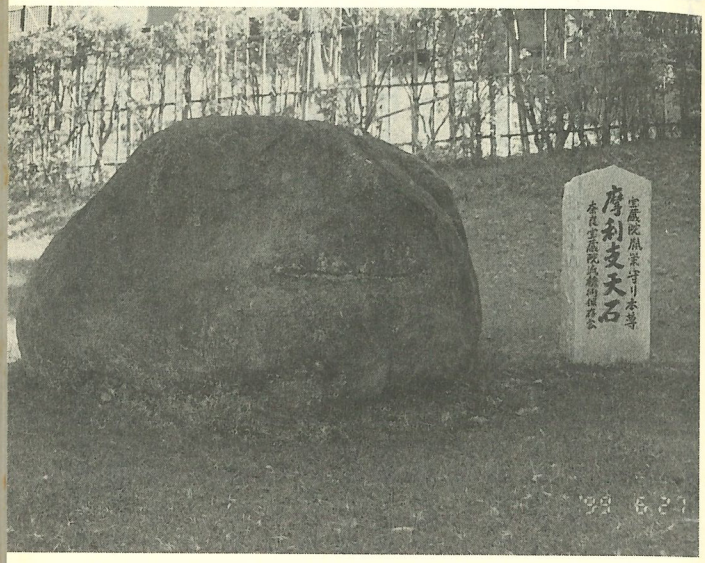
込んできた。興福寺の南大門の前で試合をすることになったが、菊岡は弓、胤栄は使いなれた鎌槍である。菊岡は弓に矢をつがえ放とうとしたが、胤栄に隙がなく、矢を放てば、次の矢を構えるまでに胤栄の鎌槍が襲ってくるような恐怖で、どうしても矢を放つことはできなかった。菊岡はじりじりと退り、南円堂そばの森に入り、弓矢を捨てると、うしろも見ずに逃げ去っていったという。

福島正則の家来可児才蔵は、数々の戦場で手柄をたてた勇士だが、正式に槍の用法を学んだのではなく自分勝手に槍を使っていた。それで、宝蔵院に入門して槍術を学んだが、もともと実戦で鍛えている上に、天分を持っていたので、めきめき上達した。ところが戦場へ出てみると、いままでのような働きができない。槍術が禍いして思うように動けないのである。自分がまるで他人のようでいらだたしかった。

「槍術を学ぶことは、戦場での働きをまどわせるものであろうか」。そう思って宝蔵院を訪ねると「それはそなたが未熟であるからだ。中途半端な武芸は、かえって身を滅ぼすことになる」と胤栄は答えた。才蔵はそれから再び修行し、以後、戦場で迷うことはなくなったという。

宝蔵院流の槍術は天下に隠れのないものとなり、その門を叩く者は日増しに増えた。しかし胤栄は僧侶の立場で武道伝授をすることに疑問を感じるようになっていった。そうしてついに胤栄は武術を捨て、僧侶としての晩年をおくろうと決心した。寺にあった武具や

宝蔵院胤栄（『武芸百首』　東京都立中央図書館加賀文庫蔵）




宝蔵院胤栄の守り本尊「摩利支天石」（写真＝宝蔵院流槍術保存会）

稽古道具などを高弟中村市右衛門にすべて譲り、後嗣の禅栄坊胤舜には、武術の修行をかたく禁じたのである。そして慶長十二年（一六〇七）八月二十六日、八十七歳で遷化した。墓は興福寺の墓地に残っている。

## その後の宝蔵院

胤栄が没したとき、宝蔵院は道場を閉じていた。後嗣の胤舜はこのとき十九歳。先師から武術修行を禁じられていたが、胤舜が宝蔵院に入門したのは、仏道のためではなく、胤栄の槍術を学びたかったためだった。胤栄が没すると、槍術への執心を抑えきれず、先師の遺志に反して、宝蔵院に槍術道場を再興することを決心した。天下に知られた宝蔵院が、このまま忘れられてしまうのが残念でならないこともあった。

しかし胤舜は、胤栄から槍術の手ほどきは受けたものの、その後修行を禁じられたため、宝蔵院流の奥義を会得していなかった。流祖胤栄から一切を譲られている中村市右衛門は南都にはいなかったが、宝蔵院の近くにある日蓮宗の奥蔵院の住持が胤栄から槍を習得していたので、胤舜は彼を招いて日夜修行し、ついに奥義を会得し、再び宝蔵院を天下の槍術道場として名を高めた。

奥蔵院については『二天記』に宮本武蔵と試合して負けたと出ている。武蔵がまだ若いころのことだが、奈良へ来て宝蔵院と試合をせずに、奥蔵院と試合をしたということは、胤栄が没し、胤舜が道場を再興する以前のことだろうか。奥蔵院は当時すでに相当の年齢であったと考えられるから、試合が事実とすれば、その相手は胤栄に槍術を伝えたという奥蔵院の住持ではなく、同院の若い武芸自慢の僧だったのだろう。



胤舜は正保五年（一六四八）二月十二日六十歳で没した。その門下に下石派を開いた下石平右衛門三正があり、下石の門下から森勘右衛門義豊、旅川流を開いた旅川弥右衛門政羽が出た。第三代は覚舜坊胤清が継いだ。胤清は元禄十四年（一七〇一）四月四日没。六十六歳。第四世は覚山坊胤風で享保十一年（一七二六）には上覧試合を行い、享保十六年（一七三一）十二月六日、江戸で没した。年四十六。第五世乗識坊胤憲は二度槍術を上覧に供し、文化五年（一八〇八）七月十七日、六十三歳で没した。つぎの第六世覚乗坊胤懐が、江戸末期、川路聖謨が奈良奉行当時に書いた「寧府記事」出てくる印懐（胤懐の誤り）である。宝蔵院では、槍術の達人のみを住職とした。そのため、無住の時期もあって江戸末期まで六世を数えたのみであった。また宝蔵院は明治二年（一八六九）の廃仏毀釈によってその堂宇が破去された。

流祖胤栄から印可を受けたのは中村市右衛門一人であった。市右衛門はもと福島正則の家臣だったが、浪人となり、奈良へ来て商人となって猿屋六兵衛と称していた。槍術を志し宝蔵院の弟子となって奥義を会得し、中村市右衛門尚政と改めた。市右衛門は達人とし

て名高く、三度上覧試合に出たが、いずれもあまりかんばしくなかった。試合下手だったのだ。将軍家光は市右衛門を旗本に取りたてるつもりだったが、名声に似合わず試合の評判がよくないので見送ったという。しかし、のち市右衛門は越前松平家に仕えた。

市右衛門の門下から、高田派を開いた高田又兵衛吉次が出た。又兵衛は伊賀白樫村の郷士高田小右衛門の五男で、十四歳のときに宝蔵院に入門、市右衛門の指導を受けてめきめき上達し、二十一歳のときには江戸で道場を開いた。のち豊前小倉の小笠原家に招かれて小倉へ移り、隠居してからは宗伯と号した。

あるとき又兵衛が紀州徳川家へ使者として行ったとき、当主頼宣に望まれて槍自慢の家来と試合をしたことがあった。試合はあっけなく又兵衛の勝利に終わったが、負けた方が納得できないらしいので「もう一度」と頼宣が望むと、「小笠原家では死人と槍を合わせることは致しません」と断わった話は有名である。師の中村市右衛門が大試合で十分に実力を発揮できなかったのに比べて、又兵衛は大試合にも強く、宝蔵院流の名を高めた。

又兵衛門下では不破慶賀、森平三清政綱、河辺弥右衛門盛連などが有名である。また由井正雪に一味した丸橋忠弥は、宝蔵院流であったという説もあるが明らかではない。

宝蔵院流の目録は、はじめ「鎌槍目録之事」とあったのを、高田又兵衛が「十文字鎌目録之事」と改めたという。

また宝蔵院流の極意として次の歌が伝えられている。

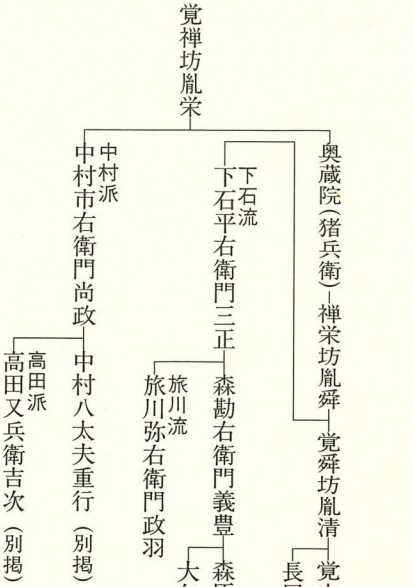
移すとも月も思はずうつるとも水も思はず広沢の池
入る身より独り行く身はなしと知れ色にしたがひ色に付くべし
兵法は心の上手下手なり槍をつかはば下手と知るべし

（『宝蔵院流歴代略記』『武道極意』『本朝武芸小伝』『寧府記事』『正伝新陰流』ほか）

# 小野忠明◎一刀流◎

数多い分流を生んだ一刀流

宝蔵院流略系



## 神子上典膳時代

小野忠明というのは幕臣となってからの名前で、それ以前は神子上典膳吉明と称していた。里見安房守の家臣神子上土佐重の男で、この弟忠也が、のち忠也派を興した伊藤典膳忠也である。典膳吉明もまた父と同じく里見安房守に仕えていた。この安房守とは里見義頼で、その居城は岡本城（千葉県富浦町）であった。忠明の生年は、寛永五年（一六二八）に没したとき六十九歳であったというから、これを逆算すれば永禄三年（一五六〇）ということになる。

彼の出生については諸説がある。まず『一刀流三祖伝』では、ただ上総の住人と伝え、『武術系譜略』『撃剣叢談』では勢州（伊勢）の人といい、『本朝武芸小伝』『武術流祖録』では、その先祖が勢州の人と述べている。『武道極意』『日本剣道史』『一刀流物語』などでは、先祖を勢州の人とし、上総万喜城（千葉県夷隅郡夷隅町）の土岐氏に仕えていたとしている。また、神子上氏は安房の丸城主の丸氏より出たという説もあるが確証はない。『寛政重修諸家譜』では、大和の十市遠忠の末裔となっている。

通説では、典膳は万喜城の土岐氏に仕えていたとなっているが、『寛永諸家系図伝』では父の代から里見安房守に仕えていたとなっており、典膳が居住したのは上総ではなく、



安房岡本だろう。典膳を安房の住人とし、館山にいたという説もある。里見氏だから館山としたのだろうが、館山城ができたのは天正十八年（一五九〇）で、それまでの居城は岡本にあった。

この『寛永諸家系図伝』は、幕府が諸大名旗本に命じて提出させた家譜をもとにして編纂したもので、寛永二十年（一六四三）九月に完成している。収録されている小野家のものは、忠常の時代に提出されたものだが、忠明が没して間もなくのことであり、忠常も父忠明や叔父忠也から家伝を聞いていただろうから、旧主の名前や、徳川家に仕えた年を誤るとは考えにくい。

『一刀流物語』によれば、典膳吉明がはじめて一刀斎に会ったのは天正十年（一五八二）となっている。むろん同書では万喜に一刀斎が訪ねてきたことになっているが、先に述べたように安房岡本に訪ねてきたものだろう。『一刀流三祖伝』はこのときの試合を次のように述べている。

典膳は波平行安二尺八寸（約八四cm）の真剣をもって立ち合い、対する一刀斎は一尺（約三〇cm）ばかりの薪で向った。たちまち典膳は刀を奪われ、さらに三尺の木刀で向ったが、再び敗れたという。段違いの強さに典膳は舌をまいて、弟忠也とともに一刀斎に入門した。その後、一刀斎は典膳を伴って諸国修行の旅へ出たとするが、このとき忠也を伴ったかどうかを記したものはない。

その後、典膳は一刀斎と別れて安房へ戻ってきた。

典膳が兄弟子善鬼と決闘したのは天正十六年（一五八八）という。主人は里見義康の時代である。この決闘で、典膳は善鬼を倒して一刀流の秘伝を譲られた（「伊藤一刀斎」参照）とされる。一刀流の皆伝を受けた典膳は回国修行のため里見家を辞した。

## 幕臣となる

典膳は回国修行ののち江戸へ出た。しばらくして徳川家康に仕えることになるが、その経緯として次のような話が伝えられている。

典膳は駿河台（一説に本郷）に居住していたが、あるとき江戸郊外の膝折村（埼玉県朝霞市）で武芸者が人を殺して民家に立て籠るという事件が起こった。村長がこのことを江戸へ訴え「神子上典膳どのでなければ斬ることはできません」と願い出た。このことが家康の耳に入り、典膳に命が下りた。このとき、検使として小幡勘兵衛が同行した。

典膳がその民家に着き、「わしは神子上典膳だ。外へ出て勝負をするか。それともこちらからなかへ入って行こうか」と声をかけると、武芸者は「典膳の名はよく聞いている。いまここで会えたのは幸いだ。わしの方から出て勝負しよう」と叫び、大太刀を抜いて駆け出してきた。典膳は二尺の刀で、その曲者の両腕を落とし、勘兵衛に向って「首をはねるべきや否や」と問うた。勘兵衛がうなずくと、典膳は曲者の首を落とした。勘兵衛が江戸へ戻ってこのことを報告すると、家康は感心して典膳を召し抱え、三百石を与えたというのである。

この話は『本朝武芸小伝』に出ていてよく知られる。また左は『一刀流口伝』にある話である。

典膳は江戸へ出て柳生但馬守宗矩の名声を聞き、柳生邸へ試合に出かけた。典膳は大小を取り上げられて道場へ通された。しばらくして但馬守が出てきて、肩衣をはね、太刀を抜き、「我が道場の掟として、試合を求める者は手討ちにする」と言った。典膳が道場の隅を見ると、戸が開いていて、庭先に一尺八寸ばかりの薪の燃えさしが落ちているのが見えた。それをすばやく拾いあげ、「これで挨拶仕ります」と言った。但馬守は典膳を斬ろうとしたが、どうしても斬ることができず、かえって顔から衣服にかけて、燃えさしの炭を塗られた。とうとう但馬守は刀を投げだしたそして典膳を座敷で待たせ、炭のついたままの身なりで登城し、大久保彦左衛門と面談した。委細を語り、典膳を召し抱えれば御駕籠脇が安全であろうと推挙した。これより柳生家と小野家（典膳）は並んで将軍家指南となったという。しかし、これでは柳生家に悪いと考えたのか、「但馬守の度量、典膳の妙技まことに一雙の佳話と云ふべし」とつけ加えている。

無論二つとも後年に作られた話である。

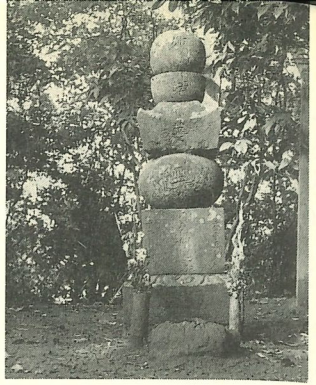
『寛政重修諸家譜』によれば、典膳が徳川家に召し抱えられたのは文禄二年（一五九三）、まだ豊臣秀吉健在のころである。柳生宗矩が、将軍指南として江戸に道場を構えたのは関ヶ原のあとであり、また大久保彦左衛門忠教は、講談のように幕臣の人事を云々できるような身分ではなかったし、典膳が仕えたときは、まだ三十四歳であった。

また典膳は三百石ではなく、秀忠の家臣として二百石であった。のち家康の仰せにより神子上を改めて小野を称したという。『雑談集』によれば、家康が神子上典膳というのは神官の名のようだと言ったので小野と改めたという。小野というのは母方の家名でこれより小野次郎右衛門吉明と称した。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の役で、吉明は秀忠に従って中仙道を上り、途中真田昌幸の籠る上田城を攻めた。九月六日のことである。このとき吉明は刈田の奉行を務めていた。たまたま真田の家臣依田兵部らが城内より出てきたのを見て、斎藤左助が戦いを挑んだのをきっかけに、吉明、辻久吉、中山照守ら七人が駆けつけ、激しい合戦になった。真田勢は依田兵部を討たれ、ようやく城内へ引きとった。刈田奉行が勝手に合戦したことは軍令違反であり、その罪を問われて吉明は真田信幸に預けられ、上野国吾妻に蟄居することになった。

翌六年（一六〇一）九月になって吉明は許され、本領二百石を回復した上、二百石を加増された。のちまた加増されてすべて六百石を領するようになった。その後一刀流の秘事





小野忠明の墓（成田市　永興寺　写真＝崇城文庫）

小野忠明画像（河田忠行蔵　写真＝崇城文庫）

を秀忠に言上し、秀忠から一字をもらい忠明と改めた。

慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣では御使番として従い、目付を兼ねた。翌年の夏の陣では諸道具の奉行として従軍した。しかしこの合戦で徳川軍の旗本が崩れたとき、ともに奉行を務めていた神谷清正、山角正勝ら四名の態度が見苦しかったとして、その実否が問われ、忠明は不謹慎として再び閉門となった。のち許され、寛永五年（一六二八）十一月七日没した。年六十九という。法名清岸院殿妙達大居士。成田市寺台の永興寺に葬られた。

忠明には四子があった。長子忠常が家督を継ぎ、次郎右衛門と称した。小野派がこの系譜である。二男は浅草慶印寺の開基日忠、三男は半助、四男は弥助といったが、この二人は早世したようである。

## 人物と系譜

忠明は、徳川家に仕えてから、二度も蟄居閉門を命ぜられている。二度とも不謹慎や行動が理由とされるが、これは忠明が良い意味でも悪い意味でもあまりに正真であったためである。柳生宗矩とは対照的で、忠明は処世術に長けておらず、さらに剣術は見世物ではないという一徹さがあった。彼の直情ぶりを表している話がいくつか伝えられている。



ある大名が、忠明を招いて「わしの家中の者が、その方の手筋を見たいと願っているが、見せてはもらえまいか」と言うと、忠明は「真面目に立ち合いを望むのであれば、お相手仕ります」と答えた。

腕自慢の藩士が相手として出てくると、忠明は「さてもいらざる酔興なことを望まれたものだ。怪我をされるのが気の毒だ」と言った。相手はむっとして、青眼につけじりじりと寄ってくるのを、忠明は下から払いあげたとみるや、敵の木刀を打ち落とし、次の瞬間相手の両腕を打っていた。「見えたか」と声をかけて忠明が身を引くと、相手は倒れたまま動かなかった。忠明は「腕が折れたであろう」と平然と構えていた。気を失っている相手を小姓たちが介抱して引きとったが、果たして両腕は自由がきかなくなったという。忠明には、剣術の立ち合いを、見世物のように軽く考えることが許せなかったのである。

このような態度は、将軍家へ対しても同様で、あるとき秀忠が剣術のことについて自分の説を述べると、「兵法は刀を抜いてからでないと論はなりませぬ。畳の上の兵法は、畠の水練と同じものです」と答えて、秀忠を不機嫌にさせたという。柳生宗矩であれば、うまくあしらって秀忠を怒らせないだろうが、忠明は心にもない追従は言えなかった。

またあるとき、両国橋のあたりに、剣術無双の看板をかかげ飛入りを許した興行本意の道場ができた。「真剣にての立ち合いも苦しからず、吾と思わん者は相手を望まれたし」として客を集めていた。忠明は門弟を連れて桟敷で見ていたが、武芸者の剣術を見て大笑

いした。それを聞いた武芸者は激怒して「それほどわしの剣術がおかしいのなら、立ち合ってもらいたい」と迫った。忠明は江戸にこのような武芸者を横行させておくのは天下のためにならないと思い、広場へ降りていった。武芸者が真剣をもって立ち向ってくるところを、忠明は鉄扇の一打ちで脳天を打ち割ったという。見世物剣術を許せないところが忠明らしいのだが、しかし両国橋が架けられたのは忠明没後であり、この橋の付近に見世物が出るようになったのはさらにのちのことである。

晩年、閉門を命ぜられているときの話である。板橋で、ある剛強の無頼漢が人を殺し自分の家に立て籠った。忠明にその無頼漢を討ちとれと下命があったが、忠明はそのとき病中で身体の自由がきかなかった。しかし上意にそむけば自分の武術がすたると、門人たちが止めるのをふりきって馬で板橋へ行き、家を確かめて「上意」と声をかけて踏み込んだ。しかし病体のため、あおむけに足をすべらせた。曲者は拝みうちに叩きつけたが、忠明は起き上がりざま下より払った一刀で、曲者の両腕を切り落とした。検使がこの子細を上聞し、閉門を許されたという。

これらの話が史実という確証はないが、忠明の性格を表している。稽古も刃引（刀剣の刃をつぶしたものだが、当たれば怪我はまぬがれなかった）で行っていた。おまけに将軍といえども遠慮をしなかったので、竹刀を用いる柳生流の方が将軍に用いられるようになったのは当然であった。それでも将軍家指南役であり続けたのは、まぎれもなくその実力のためであった。伊藤一刀斎を祖とする一刀流は忠明の存在があって、江戸時代を代表する剣法となったのである。

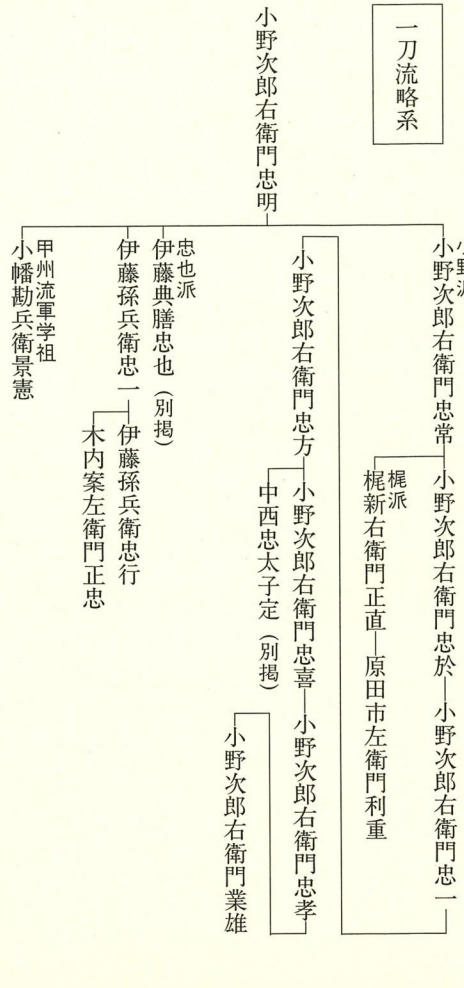
一刀流は伊藤一刀斎から忠明へ伝えられたが、忠明は弟忠也に一刀流の道統を継がせ、伊藤典膳忠也と名乗らせた。「忠也派」というのがこれである。忠也には子がなかったので、亀井忠雄を養子とした。忠雄は伊藤を井藤と改め、以後井藤家に忠也派は受け継がれた（後代に復姓）。この流派から「溝口派一刀流」（溝口正勝）、「甲源一刀流」（逸見義利）、「天心独名流」（根来独心斎）、「涼天覚清流」（堀口亭山）などが生まれた。

これに対し、小野家は忠明の嫡子忠常が継いだ。この流派を「小野派」と呼ぶ。忠常は加増されて八百石となり、以後幕臣として代々剣術を上覧に供した。小野家は一刀流宗家として伝えられていき、幕末には「梶派一刀流」（梶正直）、「中西派一刀流」（中西子定）、「天真一刀流」（寺田五郎衛門）、「北辰一刀流」（千葉周作）、「無刀流」（山岡鉄舟）など幾多の有名な分流と剣士を輩出した。（『寛政重修諸家譜』『一刀流物語』『日本剣道史』『武道極意』『本朝武芸小伝』ほか）

# 柳生宗矩◎柳生流◎

## 剣禅一如の大名剣士

### 一刀流略系



## 柳生売り出す

柳生氏は、古くから大和国柳生（奈良市）の豪族であった。小豪族のたどる興亡の歴史を、この柳生氏もたどってきたのだが、戦国末期、柳生石舟斎宗厳が剣術者として名をあげ、その子但馬守宗矩が将軍家指南役となるに及んで、柳生氏は天下の柳生として知られるようになった。

宗厳は兵法巧者として畿内では知られてはいたが、永禄六年（一五六三）上泉信綱が新陰流を広めるために上洛する途上、奈良の宝蔵院に迎えて試合を挑み、簡単に敗れたことからその門に入り新陰流を学んだ。宗厳は間もなく印可を受け、織田信長に仕えていたが、柳生の隠田（税を納めない隠し田）を松田織部助に密告されて所領を没収され、柳生の庄で剣一筋の浪人として再起の機会を待っていた。

宗厳には十一人の子があった。そのうち男は五人である。長男は新次郎厳勝で戦傷のため浪人、二男久斎と三男徳斎は出家、四男の五郎右衛門宗章は小早川秀秋に仕えていた。五男が又右衛門宗矩（母は興原遠江守助豊の女）である。

京にいた徳川家康から宗厳のもとに招待の使者が送られたのは文禄三年（一五九四）であった。宗厳のもとにいて、兵法者として立てると思われるのは五男宗矩と厳勝の子兵介（のちの兵庫助利厳）の二人だけだった。宗矩は元亀二年（一五七一）生まれの二十四歳、兵介はまだ十七歳であった。宗矩は小田原の役には細川玄蕃允に属して従軍したりして、宗厳のもとを離れて独立の機会をねらっていたが、まだ世に認められるところまではいっていなかった。



宗厳は宗矩を伴って家康を訪ねた。家康は老剣士を鄭重にむかえ、新陰流の奥義について熱心に尋ねたという。宗厳が上泉信綱より伝えられた新陰流にさらに改良を加えて創り出した「無刀取り」を、宗厳父子が演じたとき、その技に感服し、自らも木刀をとって立ち合ったという。そしてこのとき宗厳へ起請文を差し出し入門した。五月三日のことであった。

この入門は家康が武術を学ぼうとしたためではなく、来たるべき日に備えるための深謀遠慮であった。このころ豊臣秀吉は体力の衰えが見えはじめ、家康は「その後」をねらっていたのである。実力がありながら冷遇されていた柳生氏を味方にしておくことは畿内の情報収集に大きな意味があった。宗厳自身も家康の期待するものをよく理解した。ここにのちの徳川家と柳生一族の信頼関係の原点がある。

慶長五年（一六〇〇）七月、宗矩は会津城の上杉討伐に従軍したが、上方での挙兵の知らせを受けると、家康は宗矩を柳生へ帰した。そして関ヶ原の合戦を迎えた。戦後、宗矩は二千石も与えられ、柳生の地を安堵された。翌六年（一六〇一）さらに一千石が加増さ

れ、将軍家指南役となった。これより宗矩は江戸に移り道場を開いた。宗矩に伝えられた新陰流は、将軍家の剣術として天下の御留流となり柳生流と称したが、門弟が柳生流を称することは禁じられた。

石舟斎宗厳は晩年、上泉信綱から受けた一子相伝の印可を兵庫助利厳に譲った。このため新陰流の正統は尾張徳川家に仕えた利厳の方に伝えられ、尾張柳生家は代々新陰流を名乗った。これについて、宗矩より利厳の方が新陰流の正統を継ぐにふさわしい人物であり、また剣技も優れていたという説もあるが、そういう理由だけではあるまい。信綱の新陰流はすでに広く流布しており、御留流とするにはふさわしくなかっただろう。新陰流に改良を加えた柳生流はまだその秘技が知られてはおらず、将軍家の御留流となり得たのである。また、将軍家と尾張家の剣法を別系にすることにより、将来の危機分散を意図したものだったのかもしれない。

宗矩が二代将軍秀忠の指南役になる以前から、小野忠明が指南役を務めていた。忠明が将軍といえども稽古の上での容赦はしなかったのに対して、宗矩はうまく扱った。将軍は一流の剣士になる必要はなく心得として剣を学ぶのである。忠明がその一徹さゆえに剣法そのものを指南しようとしたのに対し宗矩は心得を教えようとした。宗矩はうまく将軍にとり入ったのではなく、将軍の剣術の意義を知った上で指南していたといえよう。



## 大名への道

寛永六年（一六二九）三月、宗矩は従五位下但馬守に叙任された。同九年（一六三二）十月には三千石を加えられ、十二月には大目付となった。同十三年（一六三六）八月にはさらに四千石を加増され一万石となり大名に列した。同十七年（一六四〇）には五百石、のちさらに二千石を加えられ、一万二千五百石を領し、柳生に陣屋を構えた。

宗矩の出世は、そのきっかけは剣術によるものであるが、それがすべてではなかった。当時はすでに穂先の功名で出世できる時代ではなく、といって将軍にとり入っただけで出世できるものでもなかった。宗矩の努力と宗厳から受け継いだ先取の才能が実を結んだといえよう。

宗矩は三代将軍家光の剣術指南役でもあったが、同時に相談役でもあった。宗矩の言行として伝えられているものは多い。

あるとき、殿中で能楽があり、将軍家光は宗矩をふりかえって「観世左近の所作を注意して見ておけ。もし斬りつける隙があれば申せ」と言った。能が終わって、家光が「如何であった？」と尋ねると、宗矩は「さすがは観世左近どの、寸分の隙もございませんでしたが、ただ大臣柱（脇柱、能舞台正面の向って右の柱）の方に隅をとったとき、討てそう

な隙がありました」と答えた。一方、観世左近は楽屋入りしてから「今日上様の側で、わしの所作を見入っていたのはどなたか？」と尋ねた。「あれが柳生但馬守どのでございます」と側の者が答えると、観世左近は嘆息して「道理でこそ。舞の内で、隅をとった所で気を抜くと、かの御仁がにっこり笑った。さすが達人である」と言った。

また春のある日、宗矩は小姓に刀を持たせて庭を散歩し桜花に見とれていた。小姓は心のなかで「たとえ天下の名人でも、いまこの刀で背後から打てば防ぐことはできないだろう」と思った。すると、宗矩は四方を見回し、すぐ部屋に戻って、柱によりかかって考えこんだ。小姓がいぶかしそうに、そのわけを尋ねると「自分は多年の修練のおかげで、敵の考えていることはこの胸に感ずることができるようになった。いま桜を見ているとき殺気を感じたので周りを見たが、誰もいない。不思議だから考えているのだ」と答えた。すると小姓がさっきの妄念を話して許しを乞うた。「そうであったのか」と宗矩はやっと得心して、小姓をとがめなかった。

家光が品川御殿（一説では吹上）で兵法を見たときのこと。厩方の諏訪部紋九郎が試合に出たが、一度も勝たなかった。そのとき紋九郎が「馬上の試合であれば打たれることはないのだが」とつぶやいた。それが家光の耳に入ったので、馬上の試合となったが、紋九郎は馬術の達人であったため、一人も彼に勝つ者はいなかった。そこで家光は「この上は但馬が出よ」と命じた。宗矩は「御意」と応じ、馬上の人となった。両者の間が三間（五

江戸柳生家の墓。右から宗矩、三厳、宗冬、歴代の墓（東京都練馬区　広徳寺別院）

柳生宗矩木像（奈良市　芳徳寺蔵）

m）ばかりになったとき、宗矩は馬を止め、紋九郎が乗り入れてきた馬の面を打った。馬が驚いて向きをかえようとしたところを寄せて、紋九郎を打った。家光はそれを見て「誠に名人である。時に臨んでの処置、玄妙である」と感心したという。

史実かどうかは定かではないが宗矩の人物の一端を表しているものだろう。

宗矩は正保三年（一六四六）三月、病にかかった。危篤になると、将軍家光は柳生邸を訪ねた。一万石の小大名を将軍が訪れるのは異例のことであった。このとき宗矩は「家禄をことごとくお返ししたい。三厳、宗冬二人のことは、お上の心次第に」と言上したという。その後も家光は付近を通ったとき、駕籠を止めて病状を尋ねさせたという。

三月二十六日、宗矩はついに没した。年七十六。法名西江院殿大通宗治居士。下谷の広徳寺（東京都台東区東上野）に葬られた。関東大震災後は練馬区桜台の同寺別院へ墓は移されている。宗矩の所領一万二千五百石は、十兵衛三厳に八千三百石、主膳宗冬に四千石、残りの二百石は柳生の芳徳寺の寺領として住持していた四男義仙に与えられた。

## 宗矩と沢庵

宗矩の一生で忘れてならないのは沢庵和尚との交友である。宗矩はこの沢庵によって、剣禅一如の境地を知った。柳生の剣が剣術から求道へと進化していく。

沢庵は臨済宗大徳寺派の僧侶である。天正元年（一五七三）但馬国出石（兵庫県出石町）に生まれ、希先秀先について得度し、のち大徳寺百五十三世となるが三日で辞した。寛永四年（一六二七）、紫衣事件に連座し奥羽上山へ退けられたが、宗矩らの嘆願で同九年許され、江戸神田の広徳寺へ入った。その後、大徳寺へ戻るが、同十二年、宗矩が家光を動かし江戸へ招いた。同十五年、品川の東海寺を開き、宗矩は柳生の地に沢庵を開基として芳徳寺（前述）を建てている。

沢庵は学徳高く宗矩は私淑した。その影響で家光もその講筵に列したのである。

沢庵が宗矩に与えた『不動智神妙録』という書がある。これは沢庵が、仏教教理をもって剣術の心法を説いたもので『剣術法語』とも呼ばれている。ここでは剣術においても技の練磨を積むとともに心の理を明らかにして、一切の迷いを離れ無心の境地を求める修行を説いている。沢庵の思想の根底には宗密の「原人論」などの影響により「人間とはなにか」という問いがあった。これが宗矩の剣禅一如の根本理念となったのである。宗矩はこの『不動智神妙録』を、家光のための教典にしていた。将軍たるものは、刀術が人より上手になる必要はなく、むしろ剣を通じて人間形成を図るべきであると考えたのである。

## 柳生一族と門弟

新陰流の道統が尾張柳生家に受け継がれたことはすでに述べたが、石舟斎宗厳の四男宗章についても記しておこう。宗章は豪勇の名が高く、小早川秀秋に仕えていたが、慶長七年（一六〇二）小早川家が改易になってから、伯耆国米子の中村忠一の家老横田内膳へ身を寄せていた。ところが家中に内訌（うちわもめ）が起こり横田内膳は主君の中村忠一から討たれた。これを知った内膳の一族は、屋敷に立て籠り討手を待つことにした。このとき内膳の一族の者たちは、客分の宗章を逃がそうとしたが、彼は内膳への義理から籠城に加わり、十八人を斬って華々しく討死した。

宗矩には四人の男子があった。長男が講談で有名な十兵衛三厳である。十兵衛は独眼であった。伝えられているところでは、父宗矩がその技を試すために闇夜につぶてを投げたところ、それが十兵衛の右眼に当たってつぶれたという。また、十兵衛が「燕飛」の稽古中、使太刀の宗矩の木刀の先が十兵衛の右眼に入ってつぶれたともいう。十兵衛は、剣術は相当だったものの性格が狷介で、寛永三年（一六二六）家光の勘気を受け、翌年から十年ばかり修行の旅へ出た。この間のことを講談などで面白く作っているのだが、まったくの創作である。のち寛永十五年（一六三八）には許されて書院番になった。父の没後八千



三百石を継いだものの、しばらくして柳生に閑居し四十四歳で没している。

二男友矩は十兵衛と違って将軍のお気に入りであった。寛永十一年（一六三四）の将軍の上洛に従い、久能山で「他日四万石に封じよう」という墨付を与えられたという。その年の八月には従五位下刑部少輔に叙任され、十一月には二千石を与えられた。しかし『柳生藩旧記』によれば、友矩のこうした出世を宗矩は喜んでいなかったという。友矩も家光の剣術の相手を務めていたが、病のため柳生へ帰り、寛永十六年（一六三九）六月六日没した。二十七歳の若さだった。

三男がのちに飛騨守となった宗冬である。宗冬ははじめ書院番となっていたが、宗矩の死後遺領の四千石を与えられた。しかし兄十兵衛が没し、嗣子がいなかったので、その家督を継いだ。このときそれまでの四千石は収められたが、寛文八年（一六六八）十二月、千七百石を加増され、一万石となり大名となった。

この宗冬は幼名を又十郎といい、講談などでは柳生流の名人として喧伝されている人物である。

宗冬は若いころ、相当の不行跡もあったようだ。『不動智神妙録』にはそのなかで「御賢息御行状の事、親の心正しからずして子の悪しきを責むること逆なり。先づ貴殿の御心を正しく成され、其上に御異見も成され候はゞ、自ら正しく、御舎弟内膳殿（宗冬）も兄の行跡にならひ正しかるべければ、父子ともに善人となり目出度かるべし」とある。沢庵

がそれほど言っているのだから、よほど持てあましものだったのであろう。しかし家督を継いでからの宗冬は普通の人物であったようだ。

宗矩の剣法は三厳、宗冬を経て代々柳生家に伝えられた。柳生流は将軍家の御留流であったため門弟たちがその流名を名乗ることは許されなかったが、庄田心流を開いた床田喜左衛門、木村助九郎、出淵平兵衛、石川蔵人（真流）、荒木又右衛門、鍋島直朝（鹿島家流）、時沢弥平（天心流）など数多くの分流を生み、現在まで伝えられている。（『大猷院御実紀』『柳生藩旧記』『正伝新陰流』『名将言行録』『日本剣道史』ほか）



## 柳生流略系

新陰流
柳生石舟斎宗厳―柳生但馬守宗矩―柳生流

二代
柳生十兵衛三厳―三代
柳生飛騨守宗冬―四代
柳生対馬守宗在

大円鏡知流
森牛之助友庵……克己流
倉田本右衛門宗倫

柳生備前守俊方―柳生飛騨守俊平―柳生備前守俊峯

柳生但馬守俊則―柳生但馬守俊豊―柳生但馬守俊章

柳生飛騨守俊能―柳生但馬守俊順―柳生但馬守俊郎

庄田心流
庄田喜左衛門教高

運籌流
木村助九郎友重―木村助九郎友安―木村兵九郎友則

出淵平兵衛盛次―出淵平兵衛盛許―出淵平兵衛盛房

天心流
時沢弥平―国富忠左衛門―平井勘兵衛

狭川新陰流
狭川新三郎助貞―狭川新之丞助久

鹿島家流
鍋島信濃守直朝―鍋島紀伊守元茂

真流
石川蔵人政春―井上斎宮光教―朝倉久馬泰良

久保流
村山作右衛門宗次……久保作十郎家善

# 富田重政◎中条流（富田流）◎

達人ぞろいの富田一門

## 富田家の達人たち

名人越後と呼ばれた富田越後守重政は、前田利家の家臣山崎弥三兵衛景邦の子として永禄七年（一五六四）に生まれた。通称六左衛門、のち大炊と称した。祖父山崎河内守景隆は、もと越前の朝倉家へ仕えていた関係から、中条流の富田九郎右衛門長家の弟子であった。そんな関係から重政も幼いときから富田治部左衛門景政（長家の孫）について中条流の剣法を学び、奥義に達していた。

天正十一年（一五八三）、豊臣秀吉が賤ヶ岳の戦いで柴田勝家と戦ったとき、景政の嫡子景勝が討死したため、養子となり富田家を継いだ。のちこの重政から富田家系の剣法は「富田流」と呼ばれている。

中条流は、中条兵庫頭長秀が念流を開いた慈恩に兵法を学び一流を興したと伝えられている。兵庫頭から甲斐豊前守に伝えられ、さらに大橋勘解由左衛門に伝えられた。富田九部右衛門長家は、大橋勘解由左衛門から中条流を学んだという。

長家は越前朝倉家の家臣でその子治部左衛門景家が家を継いだ。景家には二人の男子があって、長男が五郎左衛門、次男は治部左衛門といった。五郎左衛門は中条流を大いに高めた人物で、のち勢源と号した。



勢源は家督を弟治部左衛門に譲ったのち、美濃国（岐阜県）で梅津某と試合をしたことで有名である。水禄三年（一五六〇）のこと。勢源は眼病のために家督を弟に譲って入道していたが、美濃へ遊びに出かけた。当時の美濃の国主は斎藤山城守義龍（道三の男）その指南役が鹿島神道流の達人梅津某であった。梅津は、有名な富田勢源が来たということを聞いて、中条流の小太刀を見たいと申し入れた。勢源は、

「それがしは兵法未熟ですから所望には応じかねます。たってのお望みならば越前へ行かれるがよろしいが、中条流には試合というものはないから入門されることだ」

と返答した。梅津はこれを聞いて、

「わしの兵法は関東に隠れもないもので、わしの太刀先に及ばず入門した者三十六人、この国へ来たときにも、吹原大書記、三橋貴伝などが兵法を教えていたが、わしの太刀には及ばなかった。勢源も越前におれば広言もはけようが、この梅津には及ぶまい」と笑った。

義龍はこの話を聞いて、二人を試合させようと思った。梅津の増上慢が目に余るようになっていたため、この機を利用しようと考えたのである。武藤淡路守、吉原伊豆守の二人を勢源の宿舎朝倉成就坊の宅へ使いにやり、梅津との試合をするように伝えたが、勢源はまたも、

「中条流では試合というものはございません。無益の勝負はいたさないことになっております」と断わった。

義龍はなるほど思ったものの、梅津の行状が他国へも聞こえていたため、なんとしてもこれを除こうとして、その意を勢源に伝えさせた。すると、

「この上は辞退することもできますまい。このような勝負は人の怨みを受けるものですからいたさないのですが、国主の頼みですからお引き受けいたしましょう」と勢源は答えた。

そうして七月二十三日辰の刻、武藤淡路守の屋敷で試合をすることになった。梅津は、国主の一族大原家にいたが、その日から斎戒沐浴をはじめた。勢源はそれを聞いて、「心直ければ、祈らずとも利益はある」と言って普段と変わるところがなかった。

試合当日、勢源は淡路守の屋敷へ行くと、薪のなかから一尺二、三寸の割木を見つけて、それを皮で巻いた。

一方の梅津は、八角に削った三尺四、五寸の木刀を錦の袋に入れ、弟子にもたせてやってきた。はじめ、梅津は真剣で試合をやりたいと言ったが、勢源が、

「そちらは真剣でもかまわないが、私の方は木刀でお相手仕る」

と応えたため、梅津も仕方なく木刀で試合をすることになった。

梅津は空色の小袖、木綿袴で、木刀を右脇に構えたが、さすがに一流に達した兵法者だけあって風に向う虎を思わせた。これに対して勢源は柳色の小袖、半袴をきて、割木の木刀をさげ対峙した。その姿は牡丹の花の下の眠り猫のように見えたという。

しかし、試合はあっけなかった。勢源の方から声をかけ、両者は近づいたとみるや、梅



津は小鬢から二の腕までを一尺二、三寸の木刀で打たれて血が流れはじめた。それでも木刀を取りなおして振りあげて打とうとすると、勢源は梅津の右腕を打った。梅津は倒れながら木刀で勢源の足を払ったが、勢源は一足で木刀を踏み折ってしまった。梅津は再び立ち上がり、脇差を抜いて斬りつけたが、一瞬早く勢源の木刀は梅津を打ちすえていた。梅

富田重政の守り本尊「摩利支天」
（写真＝寶泉寺）

津は頭から崩れ、二度と立たなかった。段違いの試合であった。

試合の様子を聞いた義龍は、褒賞として鵜眼万疋、小袖一重を勢源へ贈ったが、

「中条流ではこのような試合は禁止されております。国主のお頼みでございましたからやむなく試合をいたしましたが、贈物を受けることはできません」

と勢源は品物を返し、対面したいという使者も断わり、その翌朝、急いで越前へ帰ってしまったという。梅津の弟子の報復を避けるためだが、褒賞を断わったことといい、勢源の武人としての心構えが伝わってくる逸話である。

この梅津との試合には異説もある。京の黒谷で梅津と試合したが、検使は勢源の勝ちを宣した。梅津は「自分の木刀が先に当たっているはずだ」と言ったが、勢源は「いや当たってはいない。自分の勝ちだ」と言って宿舎へ帰ってしまった。宿舎に検使がやってきて、湯浴みしている勢源の身体を調べたが、どこにも傷がなかったので、勢源の勝ちが確定した。しかし、本当は梅津の木刀が勢源の左の甲を打って黒いあざになっていたのだが、勢源は身体を調べさせたとき、左の甲を右手で隠していたので、検使にはわからなかったのだとしている。

勢源から家督を譲られた弟の景政もまた達人であった。景政は、前田利家が尾張国荒子(名古屋市)の知行をもらったとき、朝倉家を辞して利家の家臣となり荒子へ移ったとして、景政が前田利家に仕えたのは永禄年間と伝えられているが、これには疑問がある。利家が兄利久の後嗣となって荒子を領したのは永禄十二年(一五六九)であるが、景政が前田家に仕えたのは、天正元年(一五七三)朝倉氏が亡んだあとだろう。

利家のもとで景政も着実に出世していった。利家が越前府中(武生市)から能登へ移ったのちには、景政は四千石を領している。景政は晩年、関白豊臣秀次に剣術を上覧にいれたという。

## 名人余録

景政の嗣子景勝が前述のように早逝したため、重政は富田家の養子に迎えられた。

重政は、前田利家に従って数々の武功を挙げた。天正十二年(一五八四)の末森城合戦には斥候となり勝利の基を開くと同時に、敵将小川鯰之助を討った。末森城は能登国羽咋郡にある城で、奥村永福が守っていたのを佐々成政が攻めたため、利家が救援に赴いて起きた合戦であった。

また天正十八年(一五九〇)の小田原征伐に際して、重政は八王子城(東京都)を攻めた。この城は北条氏輝の城で、横地監物、中山家範らが守っていた。前田、上杉らの軍がこの城を攻め死闘のすえようやく落城させることができたが、この合戦での重政の奮戦はめざましく、太閤秀吉から謝辞を受けている。

重政が景政の家督を継いだのは文禄元年（一五九二）二十九歳のときである。大炊重政と名乗ったが、ついで慶長二年（一五九七）大夫となり、従五位下下野守に叙任された（のち越後守と改めた）。後年、重政は一万三千石余を受けているが、これは剣術によるものではなく、利家の家臣として挙げたたびたびの戦功によって受けた禄であった。

重政は、利家、利長、利常の三代にわたって重臣として仕えた。兵法者として高名であったため、前田家も重政を厚遇した。そのあたりの話がいくつか伝えられている。

豊臣秀吉が史上有名な醍醐の花見を行ったのは慶長三年（一五九八）の春であった。秀吉六十三歳、亡くなる少し前のことである。当日は伏見城から北政所をはじめ女人たちも総出で、上洛中の大名はすべて参集するという大がかりなものであった。

この花見のとき、重政は前田利家の刀持ちとして従い、他の大名たちの刀持ちとともに玄関に坐っていた。そこに目付が来て、刀持ちは玄関から下へ降りろと言った。他の大名の刀持ちはみんな言われるとおりにしたが、重政だけは降りようとしなかった。目付はそれを見て、

「降りろと言ったのが聞こえないのか」と怒鳴った。その態度が気にいらないので、重政が聞こえないふりをしていると、

「降りろといっているのがわからないのか。無礼であろう」と言う。

「刀持ちは主人の近くにいるべきものだ。降りる理由はない」と重政はやりかえした。



目付は自分の落度になると思うから、必死で重政を降ろそうとした。

「力ずくでも降ろしてみせる」と目付は顔色をかえた。

「これは面白い。おぬしたちの腕でできるものか。わしはここを動かぬぞ」と重政は静かに笑った。

怒った目付が、駆けつけた同僚たちに力を借りて、力ずくで重政を降ろそうとしたとき、騒ぎを聞きつけて利家が出てきた。秀吉もそのあとから出てきた。利家は騒ぎのなかに重政がいるのを見て叱りつけた。重政も主君の命令であるから仕方なく下へ降りた。利家は、このありさまを見ていた秀吉に、

「一徹者ゆえ、あとで充分に叱りおきます。あれが富田越後守重政でございます」

と言うと、秀吉も、重政が中条流の達人であり、そのたびたびの戦功を知っていたから、

「おう。あれがかの越後か。噂にきく一徹者じゃ。大納言どのはよき家臣をもたれておる。これからは、そなたの刀持ちに限って玄関にいてもよいことにしようぞ」と言ったという。

晩年の話に次のようなものがある。

ある日、三代前田利常が重政を召して雑談していたときのこと。利常が、

「その方の家に、無刀取りという秘術があると聞いたが、これを見事にとってみよ」

と言って、佩刀をすらりと抜いて重政の面前へつき出した。重政は平然として、

「無刀取りは家に伝わる秘術でございますから他聞をはばかります。いま襖の陰からこち

らをのぞいている者がございますから、お叱りを願いとう存じます」と言ったので、利常が襖の方へ目を向けた瞬間、重政は刀をもった利常の腕をにぎって、「無刀取りはこれでございます」と言った。利常は「まいった」と笑ったという。名君利常と重政の信頼関係がうかがえる話である。

また名人越後らしい話に次のようなものがある。ある日重政が家人に髭を剃らせていた家人は、（いま刺したら、いかに名人の主人でも一突きだろう）と思った。

重政は家人の顔色をじっと見ていたが、「その方の顔色はただごとではないが、いま心のなかで考えたことを実行する勇気はあるまい」と言ったので、家人は縮みあがったという。

## 中条流の本意

重政は寛永二年（一六二五）四月没した。年は六十二歳であった。

重政の嫡子下野守重家は、元和四年（一六一八）八月、二十四歳で没していたので、その弟重康が家督を継いだ。重康も越後守と称したが中風を病んだので中風越後と呼ばれ、寛永二十年（一六四三）八月、四十二歳で没した。

加賀には戸田越後守綱義が開いた戸田流というのがあり、富田流とよく混同されるが、まったくの別流である（「佐々木小次郎」参照）。綱義は疋田豊五郎から新陰流の印可を受け、慶長五年（一六〇〇）から前田家に仕え、寛永十五年（一六三八）金沢で没している。



重政には、軍功は伝えられるものの派手な試合の話は伝えられていない。中条流はもともと試合は遺恨となるからとして禁じていて、重政はその教えを忠実に守ったためだろう。名人越後の名前が伝えられながらその名人技が伝えられていないのは、重政が大身であり、剣法を誇る必要がなかったし、なによりも前田家は利常のころから幕府への遠慮のため、武を表に出さないようにしていたためである。

中条流の基本は「柔よく剛を制す」小太刀の技にあった。また、その技は平法と呼ばれ、武の威徳によって災いを未然に防ぐことが本意とされた。この流意は加賀前田家の家風に叶い、そのため、江戸時代を通して加賀のみならず北陸各藩でも栄えた。

名人越後（重政）の登場によって、富田家の剣法は富田流と呼ばれるようになったが、富田家では代々正式には中条流の流名を名乗った。富田流は平法として平時の威徳を説いたが、その奥儀には、太刀、槍、長刀、取手（捕手）など多彩な技が伝えられている。このあたりにも「利口を鼻先に顕さず」とした加賀前田家三代利常の理念の影響が感じ取れる。（『加賀藩史稿』『日本剣道史』『本朝武芸小伝』『石川県史』『武術流祖録』ほか）

富田流略系

念流　中条流
慈恩―中条兵庫助長秀―甲斐豊前守―大橋勘解由左衛門高能

（富田流祖）
富田九郎右衛門長家―富田治部左衛門景家―富田五郎左衛門勢源
富田治部左衛門景政

富田越後守重政
山崎左近将監
長谷川流
長谷川宗喜

富田下野守重家
富田越後守重泰
富田主計宗高

鐘捲流
鐘捲自斎通家―一刀流
伊藤一刀斎景久

一放流
富田一放

無海流
…無一坊海円―平山亦四郎康吉

# 佐々木小次郎◎巌流◎

伝説に生きる達人

## 巌流島の決闘

宮本武蔵と佐々木小次郎が巌流島で決闘したのは慶長十七年（一六一二）四月十三日であった。巌流島というのはこの試合のあとで呼ばれるようになった名で、それまでは船島とか向島とか呼ばれていた。関門海峡に浮ぶ小島（下関市彦島字船島）である。当時の小倉城主は細川忠興で、武蔵はその家老長岡興長を頼ってきたものであった。

細川家では、佐々木小次郎が巌流と称し、剣術を教えていたが、その剣名は西国に広く知れわたっていた。武蔵自ら剣名を高めるためには、佐々木小次郎と試合をすることが早道であると思い、興長に小次郎との試合を願いでた。興長がそれを忠興に伝え、日時を定めて船島で勝負を決することが許された。

その前夜、武蔵の姿が消えた。小次郎に恐れをなして姿を隠したのだろうという噂がたった。佐渡はひそかに武蔵の行方を探させた。下関から船島へ渡るつもりではと調べてみると、確かに武蔵は下関の問屋小林太郎左衛門のところにいた。ここから興長に「自分はここの船で時刻には参ります」と書状を送っているが、武蔵は興長の船で渡れば一切の計略を用いられなくなることを恐れたものだろう。

約束は辰の上刻（午前七時ごろ）である。



当日、小次郎は時刻どおりに船島で武蔵を待った。しかし武蔵は現れない。そのころ、下関では辰の刻になっても武蔵が起きようとしないので、太郎左衛門が心配して約束の刻限であることを知らせた。小倉からは小次郎がすでに船島へ渡ったと知らせてきた。武蔵はそれからゆっくり起きると、食事をすませ、櫓を求めて木刀を削り始めたのである。そのうちやっと腰をあげると、船頭一人を供に小舟に乗り込んだ。

武蔵の舟が船島へ着いたのは巳の刻（十時ごろ）を過ぎていた。舟を洲崎で降りた武蔵は綿入れを脱ぎ、刀を舟のなかへおいて、短刀だけをさし、裾を高くからげ、木刀をさげていた。素足で波打際を数十歩歩き、帯にはさんでいた手拭をとって鉢巻をした。

小次郎は、猩々緋の袖無羽織に、染革の立付を着し、草鞋をはき、備前長光の三尺余の刀を帯びて待っていた。武蔵の姿を見るや、憤然として床几をけり、水際まで歩を進めて、「武蔵、臆したかッ」とあびせた。

武蔵は聞こえないふりをして、黙って汀に立っていた。小次郎はますます怒り、刀をぬいて、鞘を波打際へ投じて歩を進め、武蔵が水中からあがってくるのを待った。武蔵はしかし、依然として汀に足をとめたまま、にっこりと笑い、

「小次郎、敗れたり……」と言った。

「何と……」小次郎は武蔵の言った言葉の意味がわからなかった。

「勝つ者が何で鞘を捨てようぞ」

そう言われて、かっとなった小次郎は刀を真っ向から武蔵の眉間に斬りつけた。武蔵も同時に打ち込んだが、武蔵の木刀が一瞬早く小次郎の脳天を打ちくだいていた。小次郎の太刀先は、武蔵の鉢巻の結び目を切っただけであった。

武蔵は木刀をさげて、倒れている小次郎を見つめていたが、小次郎がまだ生きているのを見て、木刀をふりあげ打ちおろそうとした。小次郎は、身を横たえたまま刀を横に払い、武蔵の袷の膝の上に垂れているところ三寸ばかりを切りさいた。しかし打ちおろした武蔵の木刀に、小次郎は脇腹をしたたか打たれ、口鼻より血を流して絶命した。武蔵は、木刀を捨てて、手を小次郎の口鼻にあて、死活を確かめてから、検使に一礼し、木刀を拾って舟に飛び乗り下関へ戻った。ここから興長へ礼状を送った。

以上のことは、この試合についてもっとも詳しく記してある『二天記』によって書いたものであるが、これは武蔵顕彰の目的で書かれたものであるから、武蔵に有利な記事になっているのは当然である。

## 異説拾片

多くの小説類はこの『二天記』が下敷になっている。

『二天記』は細川家の重臣松井家の兵法指南をやっていた豊田卜川、その子正脩、その子景英三代の手で成ったもので、門人たちに伝えられていた武蔵に関するもの、および武蔵の自記、文書などから編纂したものである。異本も伝えられているが、豊田氏の『二天記』が一番出来がよい。しかし、これとても参考の域を出るものではない（「宮本武蔵」参照）。それ以外の異説を少し拾ってみよう。

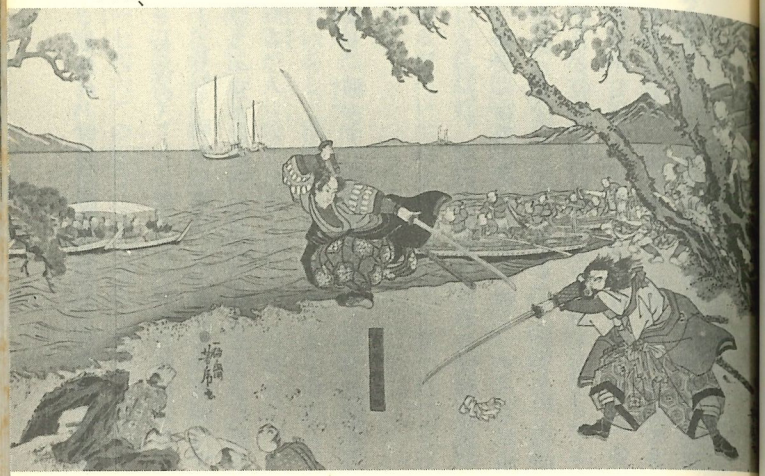
『二天記』では、船島での試合は見物が許されなかったというが、『本朝武芸小伝』にある中村十郎右衛門守和（信州上田城主松平伊賀守忠周の家臣）の談話は異なっている。それによれば、古老の話を聞いたところ、その日は船島へ渡る人が多かった。小次郎も乗船したが、渡守に「今日は船島へ渡る人が多いが、何かあるのか」と尋ねた。すると渡守は「貴方は知らないのか。今日は佐々木巌流という兵法者が、宮本武蔵と船島で試合をすることになっている。これを見ようと夜明け前から人々が渡っているのだ」と答えた。「その巌流というのは自分だ」と小次郎が言うと渡守はびっくりして「貴方が巌流であれば、この舟を他所へつけましょう。早く他国へ去った方がよい。貴方がどんなに強くとも、武蔵は仲間が大勢参っておりますので、生きて帰ることは難しゅうございましょう」と言った。小次郎は「私は今日の試合で生きて戻ろうとは思ってはいない。一旦約束をした以上、たとえ死んでも約束を破ることは勇士の好まないところだ。もし死んだら、自分の魂を祠って水をそそいでもらいたい。好意は感謝する」と言って懐中より鼻紙袋を出して渡守に渡したという。

『沼田家記』によれば、武蔵は豊前へ来て二刀流の指南をしていたが、そのころ佐々木小次郎も巌流の兵法を指南していた。ところが、両方の弟子が兵法の優劣を争ったことから、武蔵と小次郎の試合となった。試合は双方とも弟子は来ないことになっていた。試合は小次郎が敗れて気を失っていたが、武蔵が去ってから小次郎は蘇生した。ところが隠れていた武蔵の弟子たちが、小次郎を打ち殺して立ち去った。このことを小次郎の弟子が聞いたので、武蔵を討とうといきりたった。武蔵は門司に逃れ、門司城代沼田勘解由左衛門にかくまわれ、その後豊後へ逃れたという。

『沼田家記』は、肥後細川藩の史料や文物を所蔵する「永青文庫文書」（熊本大学付属図書館保管）のなかにある文書で、小倉細川藩の門司城代であった沼田家の来歴や決闘当時の当主であった勘解由左衛門延元の記録が綴られており、第一級の史料とされる。ここにある巌流島の決闘に関する記述は次のとおりである。

双方の弟子ども兵法の勝劣を申立　武蔵小次郎兵法之仕相を　仕候に相究　豊前と長門之間ひく島に出合（後に巌流島と云ふ）双方共に弟子一人も不参筈に相定　仕合を仕候処　小次郎被打殺候　小次郎方は如兼約　弟子一人も参らず候　武蔵方は弟子共数人参り隠れ居候　其後に小次郎蘇生致候得共　彼弟子共参合　後にて打殺申候

錦帯橋近くにある佐々木小次郎の銅像（写真＝岩国市）



巌流島の決闘。右の蓬髪、髭面が小次郎（芳虎画　写真＝崇城文庫）

そのあとに、決闘後、武蔵が門司城内にかくまわれ、豊後へ脱出したことなどが述べられているのである。

これが、武蔵の死後九年目（決闘から四十二年後のこと）、養子で小倉小笠原藩の家老となっていた宮本伊織が巌流島を見晴るかす小倉の手向山に建立した「宮本武蔵碑文」（これも武蔵の行跡についての一級史料とされる。「宮本武蔵」参照）では次のように記される。

両雄同時に相会し岩流三尺の白刃を手にし来り、顧みずして術を尽くさしむ。武蔵木刀の一撃を以てこれを殺す。電光も猶遅きが如し。

こちらが『二天記』などの下敷きになっているのだが、『沼田家記』にある決闘直後の武蔵の行状を伝える生々しい記述に比べると、碑文には創作のにおいが強く、どうも武蔵に分が悪い。巌流島以後、武蔵は歴史の表舞台からしばらく遠ざかることになるが、『沼田家記』の記録を信じれば、その理由が推測できるのではないだろうか。

また『武将感状記』では小次郎の方から試合を申し込んだとあり、試合の様子も『二天記』とは違っている。それによれば、武蔵が豊前の小倉へ赴いたとき、佐々木小次郎の方から試合を申し入れた。武蔵は船頭から櫂をもらって、二つに割り、手元を削って、長い



方を二尺五寸、短い方を一尺八寸にして舟からあがって小次郎と戦った。小次郎は三尺余りの刀であった。下関の者たちは大勢囲んで見物したという。武蔵は二刀を組んで向うと、小次郎が拝み打ちに斬るのをはずして、その頭を打った。小次郎が身体をよけたので、木刀は左の肩に当たった。小次郎はひるまず踏みこんで刀を横に払った。武蔵は足をちぢめて飛びあがったので、皮袴の裾三寸ばかりを切って落としただけであった。同時に、武蔵は全力をふりしぼって木刀を打ちおろした。小次郎は脳天を割られ即死したという。

その他、小次郎から宮本無二斎に試合を申し入れたが、無二斎は老年であったから武蔵が代わって試合をしたとか、いろいろの話があるが、いずれも後年になって書かれたもので、内容的にも信憑性は薄い。

平山子龍に『鈐林扈言』という書がある。これによれば、紀伊国雑賀崎（和歌山市）で武蔵が大雷にあい、四国へ渡ってその話をしていると、旅亭の主が、以前にもこのような大雷があったが、そのとき新免無二斎という剣客が人に殺されたと話した。武蔵がびっくりして、討った者の名を尋ねると、佐々木巌流と答えた。それから仇を探して船島で討ったとしている。しかし、平山子龍は歴史を述べるのが目的ではなく、武道の心得を説こうとして当時流布されていた仇討説を採用したものだろう。

小次郎を武蔵の仇役としたのは延享三年（一七四六）の板行になる浅田一鳥の『花筏巌流島』である。筑前名島（福岡市）城主に召し抱えられていた剣客吉岡民右衛門が、姫路

で佐々木巌流と知りあった。山崎十平次という男が吉岡の娘に恋慕していたが、その恋が成就しないのを恨み、巌流に頼んで吉岡を暗殺させた。巌流もまた美人で評判の吉岡の妻に言いよったが断わられたため殺してしまった。武蔵は、吉岡民右衛門の実子であったが、父に勘当されて肥後へやって来て宮本武右衛門の養子となり、加藤家に剣道を教えていた。しかし実の父母が巌流に殺されたのを聞き、熊本を出立して仇を探し、船島でついに巌流を討ち果たすというのである。

享和三年（一八〇三）に出た平賀梅雪の『二島英雄記』も『花筏巌流島』を下敷にしたもので、江戸時代を通して船島での試合は仇討と思っている人が多かった。江戸時代後期に発行された『仇討番付』にも「武蔵の仇討」として、関脇や小結に張り出されていたのである。

小次郎が仇役でなくなったのは吉川英治の『宮本武蔵』による。この作品に中年の悪役というそれまでのイメージがまったくぬぐいさられて、前髪立ちの美少年として登場したのである。それ以後、小次郎のイメージが個定してしまったが、美醜はともかく小次郎が少年もしくは青年であったかどうかの根拠は薄い。



## 小次郎の素姓

小次郎は巌流島で負けて有名になったが、その素姓は不詳である。船島での試合のとき小次郎が十八歳だったとするのは『二天記』だが、傍証はなく、さらに「小次郎は富田勢源の弟子で打太刀を務めていた」と矛盾する記事をのせている。

船島の試合のとき十八歳であれば、小次郎は文禄四年（一五九五）の生まれということになる。『二天記』では、越前国宇坂庄浄教寺村（福井県足羽郡足羽町）の生まれで、同地の中条流の名手、富田勢源の家人であるとしている（「富田重政」参照）。幼いときから稽古を励み、長じて勢源の打太刀を務めた。勢源は一尺五寸の小太刀をもち、小次郎は三尺余の太刀をもって試合したが、のちには勢源の高弟は一人も小次郎に及ぶものはいなくなった。ある日小次郎は勢源の弟富田治部左衛門景政と試合をして勝った。これより勢源の許を去り、自ら一派を立てて巌流と称して諸国を回り、高名の武芸者と試合をしたが一度も敗れたことはなかったという。一説には小次郎を周防国岩国の生まれとし、錦帯橋のほとりで「燕返し」の秘手を発明したとしている。勢源は慶長のはじめごろまで生きていたと考えられるから、その晩年の弟子と考えれば、十八歳は無理としても、二十歳を少し出た年齢であったということも考えられなくはない。しかし、勢源の弟治部左衛門景政

と試合して勝ったのち、独立したということになると年齢はもう少し高くなってくる。直木三十五は、景政との試合を小次郎十六歳という説をとっていながら、船島での試合を十八歳、一説に二十一歳としている。直木説によれば、小次郎は文禄四年（一五九五）あるいは文禄元年（一五九二）生まれとなる。富田景政は文禄元年に七十歳で没しているから、小次郎が十六歳で景政に勝ったとすれば、景政晩年の試合としても、船島の試合のときは小次郎は四十歳くらいになってしまう。

小次郎の年齢を若くするために、勢源の弟子鐘捲自斎（伊藤一刀斎の師）の晩年の弟子とする説があるが、これも根拠のあるものではない。

しかし、小次郎を十八歳とするについてはまったく不可能というわけではない。伝えられるように富田勢源に結びつけるから無理になるので、富田流（中条流系）ではなく戸田流（新陰流系）戸田清玄の弟子であったとすれば十八歳は可能となるのである。戸田清玄は富田勢源が晩年に名を変えたとする説もあるが、別人である。清玄は戸田越後守綱義のことで、やはり金沢の前田家に仕えて五百石をもらっていた。戸田流を称していたのはこの清玄で、疋田豊五郎から文禄元年（一五九二）に新陰流の印可を受けている。同じ前田家に富田越後守重政がいたため、混同されているが、前述のように、両者の剣法はまったく別系統のものである。この戸田清玄は越後戸田の人で、寛永十五年（一六三八）三月十五日に金沢で没している。清玄が前田家に仕えたのは大坂の役後であり、それまで諸国を



修行していたから、その間に佐々木小次郎を弟子にしたということはあり得る。また小次郎が越前生まれというのは、勢源の行跡に結びつけられたもので確証のあるものではない。

小次郎の巌流がどんなものであるかも明らかではないが、伝えられる話からすれば、中条流の小太刀ではなく大太刀を用いていたことになる。『撃剣叢談』によれば「諸国にも往々其名を聞けり」といい、「此流に一心一刀と云ふ事有り。是は大太刀を真向におがみ打ちする様に構て、つかつかと進み、敵の鼻先を目付にして矢庭に平地まで打込む也。打なりにかがみ居て、上より打処をかつき上げて勝つ也」とある。

小次郎の強さがどの程度のものであったかを記したものはないが、宮本武蔵が試合に際して、あれだけの周到さをみせているところからみて一流の剣士であったことは間違いないだろう。船島での試合では、武蔵は三時間も遅れて小次郎をいらだたせ、その上、波打際の水のなかにあって小次郎と対峙した。小次郎は太陽に向ったため武蔵の足もとで光る波が目に入ったに違いない。武蔵はそのことを計算して自分の位置を有利なものにした。その上、武蔵は小次郎の刀より長い木刀を作って立ち合った。小次郎の切先は武蔵の鉢巻を切ったが、武蔵の木刀は小次郎の頭をくだいている。つまりこの試合では、得物の長さが勝敗を分けたのである。これは偶然の結果ではなく、すべて武蔵の計算通りに運んだものであった。

小次郎は武蔵との対決によって歴史に名を留めた。この時代、あまたの武芸者たちが自

らの名をあげるため回国修行をし、その途上で試合を重ねた。そのほとんどが、路傍に斃れ名を遺すことはなかったのである。巌流島の決闘で敗れたとはいえ、島名に名を遺し、またその存在が伝えられる小次郎は兵法者として、決して不運ではなかったはずだ。（『二天記』『本朝武芸小伝』『越前人物志』『武将感状記』『日本剣道史』ほか）

# 宮本武蔵◎二天一流◎

## 剣豪の代名詞

## 吉川「武蔵」の幻影

「宮本武蔵」という名を聞いて多くの人が思い描く人物像は、概ね吉川英治の「武蔵」像だろう。

吉川英治がなぜ宮本武蔵を描いたかについては、吉川英治記念館発行の『吉川英治その人と文学』に次のように記されている。

あるとき、菊池寛と直木三十五が「武蔵名人論」「非名人論」の議論ののち、吉川にどう思うかと質問した。吉川は「ぼくは作家だから小説で書く」と答え、それが『宮本武蔵』執筆の契機になったという。朝日新聞での連載は昭和十年（一九三五）八月から途中七カ月の休載をはさんで昭和十四年（一九三九）七月まで書き続けられた。結果として、吉川は菊池の「名人論」の肩をもったことになるが、彼が描きたかったのは実像としての「名人論」ではなかった。

前述の『吉川英治その人と文学』には「（吉川の）作家的信条として、武蔵のような『求道の青年』を描こうとする意志が働いていたことを見逃してはなるまい」として、彼の歴史小説観が次のように記されている。



今日の民衆に一番欠けているものは〝信ずる〟ということ。つまり自分を信じ、人を信じ、自分の仕事を信じ、自分の今日の生活を信じていくというような信念が非常に弱いと思う。それからもう一つは、ぼくらの遠い過去の中にはあった〝今日をもっと希望と力をもって歩いてゆく〟という生活力が希薄になっていることだ。だから今日の文化に対する反省として、今日忘れられている神経を持っている人間をここにもってくれば、ぼくらの神経が覚める。宮本武蔵なんかは理想的な人間だと考えて選んだ……。

吉川英治の初の新聞連載は『親鸞記』であった。ここで人間の苦悩と求道を描いて成功したことが、のちの『宮本武蔵』執筆に大きな影響を与えている。吉川作品として一般によく知られている『親鸞』は二度目の執筆のもので『宮本武蔵』とほぼ同時期に書かれたものである。このことが吉川の描く武蔵像のテーマに「求道」があることを見逃してはならない。

『親鸞』には親鸞が比叡山を降り法然と出会うことについて、「行者宿報設女犯」という異性への想いが大きな煩悩となっていたとし、親鸞の求道への大きな契機とされているが、武蔵が沢庵と出会い求道的姿勢を見せていくことと見事に符号する（沢庵との出会いは吉川の創作で史実ではない）。

母親の影響を受け仏教（『歎異抄』を愛読していたことはよく知られている）に傾倒し

ていた吉川は「死ぬ前にもう一度親鸞を書きたい」と語っていたというほど、歴史小説に仮託して「求道」を描きたかったようだ。

かつて司馬遼太郎は「文学のはたらきのなかで、もっとも大きな栄光の一つは人間の典型をつくるということである」として「吉川さんは宮本武蔵において、いかにも日本的な求道者的な人間の一典型を作りあげた」と述べているが、まさに至言である。

## 不詳の半生

さて武蔵の実像についてだが、信頼に足る資料としては、武蔵が自ら記した『五輪書』（後年弟子によって付け加えられた箇所があるともされる）、そして養子であった宮本伊織が承応二年（一六五三）、武蔵の死後八年を経て播州（兵庫県）の泊神社（加古川市）に納めた「棟札」および、その翌年、肥前小倉に建立した「宮本武蔵碑文」である。いずれも生前の武蔵を知る人がまだ生きているであろう時期に記録されたもので、極端な創作は難しかったと思われる。

武蔵の資料として一般によく知られている『二天記』は、細川藩士豊田又四郎（卜川）が武蔵の死後数十年を経たころに伝聞をまとめはじめ、子の彦兵衛正脩、孫の右近右衛門景英の三代かけて編まれたもので、成立したのは没後百十年を経た宝暦五年（一七五五）のことであった。



その百年余りの間には、佐々木小次郎との巌流島（船島）の決闘が『花筏巌流島』などの芝居になって評判をとったりしたため、『二天記』には多分に芝居の影響を受けたと思われる箇所もうかがわれる。そのため資料性についてはやや疑わしい部分も多いが、武蔵の息遣いを伝える資料ではある。

さらに明治になって、熊本在住の有志が武蔵顕彰のため、国文学者の池邊義象に委嘱してまとめた宮本武蔵遺蹟顕彰会編『宮本武蔵』（明治四十二年・一九〇九）は、当時できる得るかぎりの資料をあつめてまとめられたもので、近代の資料としては吉川「武蔵」の影響を受けていない貴重な存在である。

武蔵の生年は、自作である『五輪書』に、寛永二十年（一六四三）、筆をとったとき「年つもって六十…」というから、逆算すれば天正十二年（一五八四）ということになる。これについては異論は少ないだろう。

問題は生国である。『五輪書』『二天記』『日本武芸小伝』には播州の生まれとなっているが、『東作誌』『新免家侍覚書』などによれば美作国英田郡宮本村（岡山県英田郡大原町）とされている。

『五輪書』地之巻には「生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年つもって六十…」とあ

る。自著にそう記されていながら、生誕地に異説があるのはその前半生が不詳であったからだが、一般には美作生まれが通説になっている。

武蔵の父は新免無二斎であることは、伊織が建てた「宮本武蔵碑文」にも記されていて、信じてもよいだろう。美作国宮本村に無二斎の墓が残っていて、この地にいまも新免を名乗る人々がその伝承を伝えていることも大きな要因である。

武蔵は幼名を弁之助といった。『五輪書』によれば、最初の試合は十三歳のときで新当流の有馬喜兵衛に勝ったといい、次に十六歳のとき、但馬で秋山某という兵法者に勝ったというが、このふたりについてどの程度の武芸者であったかを伝えるものはない。いつごろ武蔵玄信と名乗ったのかは不明だが、この試合のころには武蔵を名乗っていたのではないだろうか。

『五輪書』によれば、そののち二十一歳で京に上り、天下の兵法者と試合、さらに諸国を回り、二十八、九歳のころまで六十数度の試合をしたが、一度と負けたことがなかったとある。その間の相手については『二天記』に記されているが、そのなかで名のある武芸者は吉岡清十郎くらいである。他の武芸者については試合を確証できるものはない。

吉岡清十郎直綱は吉岡流の吉岡憲法直賢の子である。『五輪書』によれば、清十郎が敗れたあと、弟の伝七郎が再び武蔵に挑んで敗れたとなっているが、『吉岡伝』には兄が戦い相討ちだったと記されているし、絶えたはずの吉岡流は、その後も歴史に登場していて、『五輪書』だけを鵜呑みにすることは難しい。



また、『五輪書』では、江戸にいたころ、柳生流の大瀬戸某、辻風某と戦い勝ったという。しかし柳生流門下にその二名の名を見いだせないし、柳生流は天下の御留流であったため柳生一門が浪人の武蔵と直接試合することは考えられない。さらに柳生門下には庄田喜左衛門や木村助九郎など高名な剣士がいたし、江戸には一刀流の小野忠明や伊藤忠也など天下に名を馳せた武芸者が数多くいたが、残念ながらそういった人物との試合はしていない。このあたりが直木らの「非名人論」の理由となっているのである。

ともあれ武蔵の剣名を一気に高めたのは、慶長十七年（一六一二）四月十三日、巌流島における佐々木小次郎との決闘に勝利してからである（「佐々木小次郎」参照）。しかし、なぜか巌流島の決闘について『五輪書』は沈黙している。

さらに巌流島の決闘のち、しばらく武蔵は歴史の表舞台に登場しない。武蔵が再び歴史に登場し、かつ現代にまでその光を放っているのは晩年の『五輪書』執筆によるものが大きい。話を先に進めよう。

## 武蔵の諦観

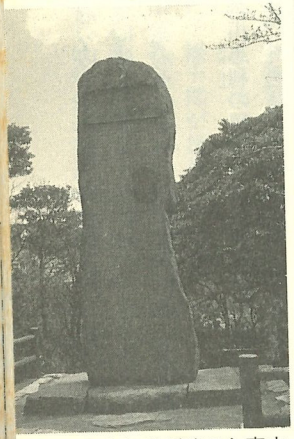
武蔵は、寛永二十年（一六四三）ごろ、肥後熊本の城西にある有明海を見はるかす岩戸山（岩殿山）の霊巌洞にしばしば籠もり座禅を組んだ。そして「彼の兵法の秘書五輪書も、即ち此にて著はししなり」という。

武蔵が長年の朝鍛夕練によって得た武の奥義をまとめたのが、その『五輪書』である。その兵法の真髄を、五巻の最後、空の巻に説く。すなわち「二刀一流の兵法の道、空の巻として書顕はす」として次のようにいう。

武士は兵法の道を慥かに覚へ、其外武芸を能くつとめ……、心意二つの心をみがき、観見二つの眼をとぎ、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空と知るべき也。……空を道とし、道を空と見る所也。……心は空也

武蔵が六十年の武芸者としての人生を振り返り、到達した真髄とは「空」だったというのである。「空」とは、仏教とりわけ禅がその要諦とする教えである。我執を離れ、執着を解く。この「一切空」の世界をなぜ武蔵は兵法の真髄としたのだろうか。

宮本武蔵画像
（島田美術館蔵）



宮本伊織が建てた宮本武蔵の碑（北九州市小倉区　写真＝北九州市観光課）

武蔵は、巌流島の決闘ののち、大坂の陣の際には、大坂城の豊臣秀頼のもとにいたという。しかし秀頼方の記録にはその事実は残されていない。

その後諸国を巡回し、寛永十一年ころに豊前小倉の小笠原藩に養子宮本伊織とともに留まったという。

そして寛永十七年、細川忠利の招きにより肥後細川藩に客分として招かれた。『五輪書』から逆算すれば五十七歳。処遇は十七人扶持、三百俵、大組頭格だった。武蔵にとって飛びつくような条件ではない。そのころの養子の伊織は、島原の乱での功績などにより小笠原藩で厚遇（四千五百石で家老格だった）されており、身の回りの不自由があったわけではなかった。

しかし人心掌握に優れた才のある忠利のいう「堪忍分の合力米」という言葉に、当時としてはすでに老境にあった武蔵は、いたく感激した。これは家臣としてではなく武人としての招きである。しかも武蔵の誇りを傷つけないよう「少ないだろうが堪忍せよ」という言い訳つきである。武蔵は生涯で初めての「仕官」をしたのである。

肥後に着くや否や、忠利の求めに応じ、自らの武芸の極意を『兵法三十五箇条』にまとめた。「兵法二刀の一流数年鍛練仕、今初て筆紙にのせ申事」というように「二天一流」の兵法を初めて文字にしたのである。

奉納は翌寛永十八年二月のことだったが、三月十七日、五十四歳の忠利は没してしまう。



武蔵の落胆が眼にうかぶ。仕官や兵法書の執筆は、自らの兵法を大藩である細川藩の力を借りて世に広めようという思いがあってのことだったのだろう。

さらに武蔵にとって驚くべきは、忠利亡きあとの「殉死」だった。

森鷗外の『阿部一族』は、忠利没後の殉死をテーマにした作品だが、ここに、

「殿様がお隠れになった当日（三月十七日）から一昨日（四月二十八日）までに殉死した家臣が十余人あって、なかにも一昨日は八人一度に切腹し、昨日も一人切腹したので、家中誰一人殉死のことを思わずにいるものはなかった」

とある。

そしてその後、主人公である細川藩小姓阿部弥一右衛門が、殉死を望みながらそれが許されず、しかし周囲の悪意にみちた噂に苦悩し、ついには腹を切る。しかし不許可ゆえの切腹だったため、殉死者の列に加えてもらえない。それどころか相続において罰則的な処分がなされてしまう。

これに弥一右衛門の長子権十郎が反発したため、ついには一族が討たれてしまう。

無論これは鷗外の創作である。熊本の妙解寺跡（現・北岡自然公園）に残る忠利殉死者の墓は十九基あり、弥一右衛門の墓もそのなかに加えられている。

忠利の死に細川藩家中では殉死の気運が充満していた。

兵法とは「死ぬこと」ではなく、いかに戦いのなかで勝ち「生き抜くか」の法である。武芸者にとって「死」は、すべての努力が灰燼に帰すことなのである。

『兵法三十五箇条』の最後に武蔵はいう。

（右の）三十五箇条は、兵法の見立、心持に至るまで大概書記申候

この三十五条に及ぶ兵法書には、当然「殉死」のための割腹は記されていない。

武蔵は「勝つ」ための兵法を広めるために、老境にありながらも、肥後に来て初の兵法書を著した。しかし、武蔵はもはやそれが時勢から外れていることを否応なく知らされたのだった。

さらに客分である自分自身は正規の主従関係ではない。殉死を云々する立場にはない。自らの「武」を知らしめようとしながら、もはやその時代が終焉したことを悟った。

武人であることの意味に疑問を感じた武蔵は、細川家の菩提寺である泰勝寺の春山和尚との交流を深めるのだった。

禅僧である春山は、たとえば南宋の優れた禅僧であった無学祖元がまだ宋にいたころ蒙古軍に刃を向けられ、死を覚悟して作った『臨剣偈』などを語ったであろう（祖元はその五年後、北条時宗に招かれ来日した）。



乾坤無地卓孤笻（乾坤孤笻を卓つるに地無し）
喜得人空法亦空（喜び得たり人空にして法も亦空なり）

広い天地のなかに身の置き場のない自分だが、人も空、また法も空ではないか、嘆く必要はない、むしろ喜ばしいではないかという意味である。

武蔵は、老境の空虚を忘れるべく霊巌洞で座禅に打ち込んだ。

「まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空と知るべき也」

武芸者として生きた自分が残せるものは、やはり兵法書しかない。しかし、『兵法三十五箇条』の末で「猶御不審の処は、口上にて申あぐべき也」と上申した忠利はもういない。

武蔵は、地の巻で「役にたゝぬ事をせざる事」と記しているが、座禅の積み重ねのなかで、『兵法三十五箇条』に欠けている部分に思い至った。これに血を通わせ、自分自身の「自分史」「精神史」として遺し、魂魄をとどめようとしたのである。『五輪書』の地水火風空の五巻はこうしてなった。地の巻の序にいう。

兵法の道二天一流と号し数鍛練の事、初て書物に書き顕はさんと思ふ。時に寛永二十年十月上旬の頃、九州肥後の地巌殿山に上り天を拝し観音を礼し仏前に向ひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年つもりて六十…

忠利の三回忌も過ぎ、熊本の市中は何事もなかったかのような平穏のなかにあった。殉死も「義腹」だけではなく、衆道ゆえのものもあったと噂されるほどの日々が過ぎた。もはや野に在る「武」は廃れたか。その空しさと諦観が『五輪書』の「武」の端々に潜む「一切空」のなかに込められた。

正保二年（一六四五）春ころより、武蔵はしばしば病に倒れた。四月には自分で立つこともできなくなったという。五月十二日、小康のなかで自戒の書として独行道の二十一条（顕彰会本は十九条）を書いた。そこには、

我事において後悔をせず
道にあたつて死を厭はず
神仏を尊み神仏を頼まず
心常に兵法の道を離れず

などと書かれている。そして恋慕、数寄、美食などいくつかを排した。戦国末期を知る最後の武芸者は、「武」の終焉を諦観とともに嘆じるしかなかった。

そして十九日没。かねてからの約束により春山和尚の引導で、遺言のとおり飽田郡五丁手永弓削村（熊本市竜田町）の地に葬られた。

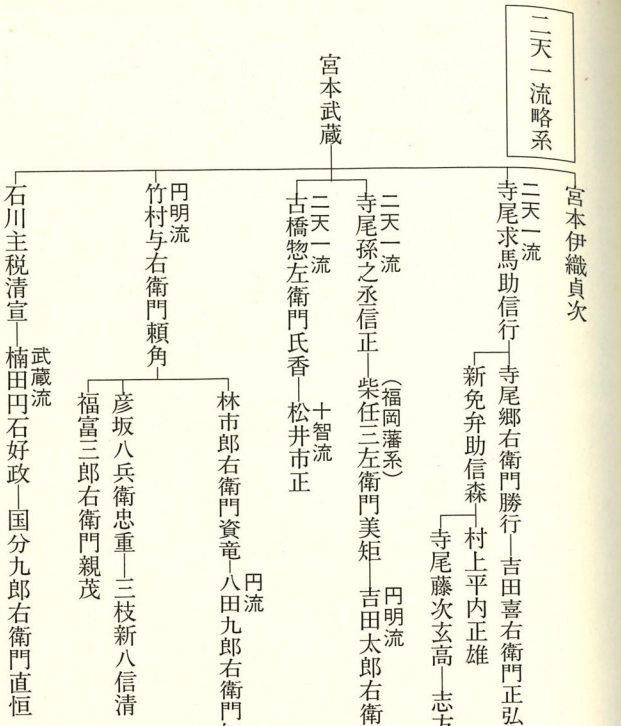
武蔵のいう「武の道」は、彼の死とともに滅んだ。そして「武士道」そのものが、江戸期の安寧のなかで変容していく。七十年を経て、佐賀鍋島藩士山本常朝によって編まれた『葉隠』では、武士道とは主君への滅私奉公のための心構えとされているのである。

武蔵が強かったことは誰も否定しないだろう。武蔵の体軀は六尺（約一八〇cm）もあったというが、男性の平均身長が五尺一、二寸（約一五五cm前後）であったころのことだから、まさに偉丈夫であった。武蔵の二刀流はその体軀ゆえの剣法であって、それがそのまま普遍的な剣法へとつながらなかったことは武蔵のせいではあるまい（現在の二天一流は武蔵の没後、弟子たちによって流儀と教法が整えられたものである）。

武蔵の後半生が剣法の強さだけを追うものではなかったこと、さらに禅への傾倒から到達したものは「空」の思想であろう。時代の流れのなかで己が「無用の人」であることを否応なく知らされた武蔵の嘆息が聞こえてくるような気がする。しかし武蔵が命懸けの修

行を経て、晩年、自己を見つめようとした姿勢が、現代の私たちを魅了してやまないのである。（『宮本武蔵』（顕彰会本）『五輪書』『二天記』『宮本武蔵』（吉川英治）『吉川英治その人と文学』ほか）





# 荒木又右衛門◎新陰流◎

## 武士の面子をかけた敵討ち

## 敵討ちの発端

寛永七年（一六三〇）七月二十一日、備前岡山城下は、盆踊りに池田家の世子勝五郎誕生の祝いが重なりにぎわっていた。その夜のことである。

藩士河合又五郎は、かねてから家中第一の美男渡辺小才治に言い寄っていたが、小才治はしばらく待ってくれと答えていた。又五郎はその日が来るのを楽しみにしていたところ、小才治が元服したと聞いて激怒した。元服すれば若道（男色）の相手にはできない習慣だったのである。又五郎は、小才治の兄数馬の留守をねらって自宅を襲い小才治を斬った。小才治は駆けつけた家人岩佐作兵衛に「仇は河合又五郎」と告げて息をひきとった。

凶事を知った兄の数馬はただちに又五郎の家へ押しかけたが、又五郎の父半左衛門はすでに又五郎を江戸へ逃がしていた。

この半左衛門は、もとは旗本安藤右京進の家臣だったのだが、同僚の伊能五郎右衛門を斬って逃げ、途上で出会った岡山藩主池田忠雄の行列に助けを求めてきたものだった。忠雄はこのとき武士のなさけで半左衛門を助けた。安藤家から引き渡しの依頼が来たが、頼って来た者を差し出しては面目が立たないとして岡山へ移し扶持を与えていたのである。

そんな事情があったから、半左衛門が又五郎を逃がしたと聞いて藩主忠雄は激怒した。



その翌年、忠雄は又五郎が旗本安藤四郎右衛門に匿われていることを知った。四郎右衛門は安藤右京進の弟である。それだけに直接掛け合っては話がこじれると思い、旗本の久世三四郎、阿部四郎五郎に頼んで、又五郎の引き渡しを交渉した。すると親の半左衛門と引き換えならば渡すという。そこで半左衛門を渡したところ、半左衛門はもともと右京進の家来を斬って逐電した者であるから右京進へ渡すが、又五郎を渡すことはできないと拒否した。池田家の使者はこのために切腹した。

忠雄の怒りは頂点に達した。幕府も御三家および閣老が仲に立って、半左衛門を忠雄の弟池田備中守へお預けにしたが、忠雄の目的は又五郎であり、これを引き取るまでは一歩も引かないとした。旗本もあくまで意地を通そうとしたため、大名対旗本の問題にまで発展したのだった。

寛永九年（一六三二）四月二日、忠雄は痘瘡にかかり三十一歳で急死した（毒殺説もある）。そのとき家老荒尾志摩に「備前一国を召し上げられようとも、又五郎の件はあくまで解決せよ」と言い残した。

池田家がその後も又五郎の処分の上裁を厳しく迫るので、幕府では忠雄の岳父蜂須賀蓬庵（阿波徳島藩祖・家政）にこの事件の扱いを命じた。蓬庵は河合半左衛門を預けることにしたが、船で阿波へ送る途中殺してしまった。また、幕府は、阿部四郎五郎、安藤四郎右衛門、久世三四郎らに百日の寺入りを命じるとともに、又五郎に江戸住居を禁じ、かつ何

人たりとも又五郎を匿ってはいけないと命じた。さらに忠雄のあとを継いだ三歳の池田光仲と因幡鳥取藩の池田光政に国替を命じたのである。時に六月十八日であった。

これを機に、渡辺数馬は暇をもらった。弟の仇又五郎を討つためである。しかし単なる仇討ちではなく、池田家の面目にかけて又五郎を討たなければならなくなっていたのである。数馬は、家臣の岩佐作兵衛一人を連れて旅へ出たが、作兵衛は間もなく病死した。数馬が大和郡山の荒木又右衛門を訪ねたのはそれから間もなくである。又右衛門は数馬の姉婿だったが、同じ家中に又五郎の叔父河合甚左衛門がいたため、自分の消息を知られるのをおそれて訪ねるのを見合わせていた。しかし甚左衛門が暇をとったと知り、ようやく又右衛門を訪ねたのだった。又右衛門は数馬の助太刀をすることにした。寛永十年（一六三三）三月二十四日退身し、岩本孫右衛門父子、河合武右衛門を連れて、五人で又五郎の行方を追うため旅立った。

江戸時代の定めによれば、仇討ちは通称で、正式には「敵討ち」であった。仇討ちとは報復（不当な行為に対して不当な行為で復讐すること）であるが、敵討ちは正式な手続を踏めば認められる武力行為であった。ただし、父母や兄姉など目上の敵討ちが原則とされた。



俗説によれば、又右衛門は幼名を丑之助といい、奈良宝蔵院にいたとしている。柳生十兵衛が宝蔵院の慢心をこらしたとき、見所があるといってもらいうけ、剣術を教えたというが、まったくの作り話で、又右衛門は十兵衛より八歳年上である。

荒木又右衛門保和は、慶長三年（一五九八）伊賀国に生まれた。服部平左衛門の二男で、幼名を巳之助といった。平左衛門はもと藤堂高虎の家臣で、百五十石をもらっていたが、このとき渡辺数馬の父も同僚であった。のち池田忠雄が淡路の洲本城主のとき仕え、忠雄が岡山へ移ったときに従い三百石となった。渡辺氏も忠雄に仕えていた関係から、その娘を又右衛門と妻わせたのだった。又右衛門も忠雄の小姓にあがっていたが、慶長十五年（一六一〇）十三歳のとき、本多甲斐守政朝の家臣服部平兵衛の子養となった。政朝は姫路城主本多美濃守忠政の嗣子である。

しかし又右衛門は、養家を去り、伊賀へ引きこもり苗字を菊山と改めた。のちに居所の地名をとって荒木と改め、大和郡山城主松平忠明に仕え二百五十石を与えられていた。

又右衛門に「幽霊筋の伝説」がある。南郡山の矢田では、郡山藩の武士が新刀の試し切りをするので、斬られた百姓町人の幽霊が出るようになった。若侍たちが幽霊退治へ出かけたが、みんな刀を奪われ、おまけに頭をまる坊主にされて逃げ戻ってきた。これを聞いた郡山城主本多侯が、荒木又右衛門に命じて幽霊退治へ行かせると、幽霊は又右衛門に恐れをなして成仏した。翌日、又右衛門の進言でその供養が行われたという話である。しか

し又右衛門が本多政勝に仕えていたのは姫路時代で、郡山時代の主人は政明ではなく松平忠明であった（本多政勝が郡山藩に移封されるのは寛永十六年のこと）。

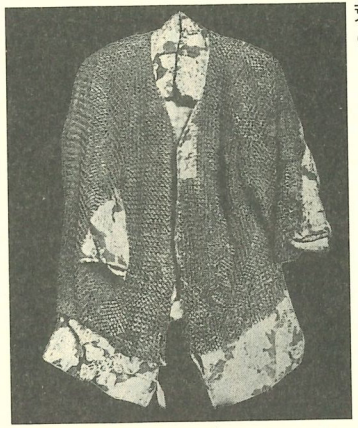
### 伊賀の敵討ち

寛永十一年（一六三四）十一月、再び奈良へやってきた又右衛門たちは、河合甚左衛門の浪宅を調べた。五日の夜になって、又五郎が甚左衛門の家にいることを岩本孫右衛門がつきとめ、さらに彼らが明朝江戸へ下るということを聞きこんできた。又右衛門たちはこの機を逃すまいとして、藤堂藩領の伊賀越で討つことを決めた。これは奈良が天領であったため、ここで事を起こすと、旗本たちが又五郎に味方をする恐れがあると考えてのことだった。

翌六日、又五郎らは総勢二十人近くで奈良を出立した。先頭は甚左衛門、最後に又五郎の妹婿桜井半兵衛、又五郎を中心にはさんで、槍三本、鉄砲一挺、半弓一張のものものしい行列である。又右衛門らは少し遅れてあとをつけた。又五郎の一行は、その日は島ヶ原（阿山郡）の松屋に泊った。又右衛門らはそれを見届けてから、川を渡って馬借勘兵衛の家に泊り、翌朝は又五郎一行に知られないよう夜明け前に宿を出た。

又右衛門らは襲撃の場所を物色し、上野城の西小田村へ進んで馬口労町にはさまれた





荒木又右衛門使の鎖帷子
（写真＝崇城文庫）

決闘『鍵屋の辻』。鎖帷子を身につけ奮闘する又右衛門。（国明画　写真＝崇城文庫）

「鍵屋の辻」をその場所と決めた。往来のつき当たりは崖で、右は本町に通じる塔世坂、左は北谷道である。その三辻の南側に万屋万右衛門、北側に鍵屋三右衛門の茶店があった。

その朝はいつもより寒かった。四人は万屋に入り、そこで別れの酒を汲みかわした。それから鎖帷巾、鎖頭巾の身仕度をして待っていると、入口で見張っていた孫右衛門が小唄を唄いだした。又五郎の一行が長田の仮橋に現れたときの合図であった。又右衛門は勘定をすませて店を出た。

孫右衛門、武右衛門の二人には、桜井半兵衛にかかるように命じ、決して槍をとらせないようにとくれぐれも言いふくめた。半兵衛は美濃大垣の藩士で、家中では「霞の半兵衛」と呼ばれ十文字槍の名手として高名だったが、旗本たちが又五郎を匿っているのに、妹婿の自分がじっとしていては義理が立たないと脱藩してきたのであった。

又五郎の一行は、先頭は大坂の虎屋九左衛門、次が半兵衛、小姓湊江清左衛門、槍持三助、半弓をもった勘七、市蔵、その次に又五郎が続き、槍持の喜蔵、最後に馬に乗った甚左衛門、槍持与作、熊蔵の十一人であった。辰の刻（午前八時ごろ）先頭の虎屋九左衛門が塔世坂を上りはじめた。

又右衛門は一行をやりすごして後方に回り、うしろから、

「甚左衛門」と声をかけ、その右足に斬りつけた。甚左衛門が片足で馬から降りるところを拝みうちに斬りつけ、返す力で胴を裂いた。甚左衛門は綿入れをまとっていたので自由



がきかず、刀の柄に手をかけただけで絶命した。

同時に、孫右衛門、武右衛門の二人は、桜井半兵衛に向っていった。半兵衛は太刀音を聞いて馬から飛び降り「槍、槍」と叫んだが、両人は槍をとらせないように必死になって斬りつけた。槍持の三助が槍をふりまわしたので武右衛門は横腹を突かれたが、二人は三助を斬り伏せ、小姓の清左衛門に傷を負わせたので、半兵衛の家来三人は逃げ出した。

半兵衛は早く槍をとりたかったが、甚左衛門を片づけた又右衛門が向ってきたので、仕方なく不得手の刀で戦うことになった。そこへ二人が加わったため、さすがの半兵衛もついに又右衛門に斬り伏せられた。このとき、半兵衛の家来市蔵が、又右衛門のうしろから力一ぱい腰のあたりを打った。木刀であったから助かったものの、刀であれば重傷を負っていたところである。又右衛門が体を横に払うと、市蔵は木刀でかかってきた。それを受けた又右衛門の刀はぽきりと折れてしまったのだった。

鍵屋の前では、数馬と又五郎が戦っていたが、勝負はつきそうになかった。武右衛門はもう身動きはできず、孫右衛門も刀を杖にして立っているのがやっとである。数馬と又五郎も、刀を杖にしてあえいでいるばかりで、いまにも倒れそうであった。そこへ半兵衛を片づけた又右衛門が「数馬、早く斬れッ。助太刀はせぬぞ」と声をかけた。その声に勇をふるいおこした数馬は、力を振りしぼって又五郎に向っていき、ついにその悲願を果たし

たのだった。この戦いで、又右衛門の方は武右衛門が死んだ。相手方は又五郎をはじめ、甚左衛門、半兵衛（重傷のち死亡）の三人が死んだ。鉢巻に手裏剣をさした又右衛門が、二刀をふるって三十六人を斬ったという講談や映画で描かれるような派手な戦いではなかった。

## その後の又右衛門

知らせを受けた藤堂家（二代高次）では、彦坂加兵衛に又右衛門や数馬らを預け、江戸の意向を確かめるために遠藤甚左衛門を江戸へ向わせた。また報を聞いた鳥取の池田家は直ちに数馬らの助命を申し入れた。藤堂家では、二人を一族の藤堂式部家信へ預けたが、家信が寛永十三年（一六三六）二月に死んでからは藤堂出雲守高清（上野城初代城代家老）に預け替え、ここで二十人扶持が給せられることになった。

寛永十五年（一六三八）二月二十日、幕府は二人を藤堂家の家臣とした。これを聞いた鳥取の池田光仲は数馬を、郡山の松平忠明は又右衛門を、ともに旧臣であるから引き取りたいと幕府に申し入れた。しかし、藤堂家がこれを譲らなかったため、池田家では松本伊豆守を動かし、数馬の従弟にあたる旗本彦坂平六が藤堂家から数馬をもらいうけ、それをさらに池田家がもらいうけることで話が決まった。このとき又右衛門も鳥取へ連れて行こうとした。松平家は承知しなかったが、池田家家老荒尾志摩が「まだ事件は落着していないし、助太刀は討手の先途を見届けるのが本意である。又右衛門は数馬を鳥取まで届ける責任がある。又右衛門の帰参を申し出るのは、そのあとではないか」と申し入れたので、忠明は譲歩した。



又右衛門らが鳥取へ着いたのは八月十一日であった。ところが、それから十八日ののち、なんと又右衛門が頓死したと公表されたのである（四十一歳ということになる）。

又右衛門の死が発表された直後、郡山から秘かに妻子が呼びよせられ、老母とともに十五人扶持が与えられ、十二月には合力米五十俵が与えられた。翌寛永十六年（一六三九）には鍵屋の辻で忠死した河合武右衛門の子庄助が、長女まんの婿となり、荒木平之丞と称して廩米（俸禄として米を現物支給すること）百俵にとり立てられ、慶安元年（一六四八）五月には二百石となった。

渡辺数馬は、寛永十九年（一六四二）十二月二日、三十五歳で死んだ。岩本孫右衛門は五十俵五人扶持の士分に取り立てられたが、寛文八年（一六六八）六月二十四日、七十三歳で没した。

又右衛門の死は、松平家に引き取られないための偽装だったと考えられる。又右衛門がそうしてまで鳥取に留まったことについて、三田村鳶魚は「光栄ある一身を日陰者にして、

老母孝養のために鳥取を去らなかった」と言うが、実際のところは、そういう美談仕立ての話ではあるまい。この敵討ちは渡辺数馬の私怨をはるかに超え、池田家の面子となっていたが、終わってみれば、決して代々語り継ぐような話ではない。

「備前一国を召し上げられても解決を」とまで遺言した池田忠雄の資質は冷静に考えれば狂気とさえいえる。もとをただせば安藤家で問題を起こした河井半左衛門を抱えたことがこの事件を複雑にしているのである。

池田家にとってその一切を収束させる必要があったのではないか。そのためには、又右衛門が他家にいては都合が悪かったことだろう。数馬はもともとの家臣だから口を閉ざさせることはたやすいだろうが、助太刀で名を挙げた又右衛門が松平家に復すれば英雄になりかねないし、そうなれば必ず忠雄の言行もおひれがついて語られることだろう。

松平家でも一応は又右衛門を引き取ろうとしたものの、死んだという報告を受けたあと、真偽を確かめようとした形跡もないし、又右衛門の妻子が鳥取へ行ったことも黙認である。このあたりに池田家との密約があったと思えるのだ。

この事件を、曽我兄弟、赤穂浪士の仇討ちとともに日本三代仇討ちとするのは芝居や講談の世界の話である。しかし、先に述べたように、この事件は仇討ちではなく敵討ちである。とはいえ、これがそれほどの話題になったのは、大坂夏の陣から二十年を経て世が平安になった証だったのかもしれない（寛永十四年には島原の乱が起きるのだが）。



又右衛門の実力については疑問が多い。通説では柳生流の免許を柳生宗矩から受けていたということになっているが、彼が宗矩から剣を習ったとは考えられない。又右衛門は幼時期は岡山にいたし、十三歳からは姫路の本多家に仕え、そののちは伊賀に住み、郡山の松平家に仕えている。その間宗矩はずっと江戸にいたのであるから、その門人であるはずはない。敵討ちのあとで新陰流の戸波又兵衛に入門しているとされており、新陰流はこの又兵衛から学んだのであって、それ以前は何流であったかはわからない。

戸波又兵衛は、又右衛門が敵討ちの際、木刀で打たれたり刀を折られたりしたことを兵法未熟ゆえのことと告げたという。又右衛門はそれを受けて又兵衛に入門したものだろう。

又右衛門を剣豪とすることにはためらいがあるが、しかし、人々がそこに英雄伝説を求め、その後三百年以上も語り継がれたことはまぎれもない事実である。（『備前国仇撃記』『恋態仇討史』『敵仇助太刀始末書』『伊賀の水月』『殺転法輪記』ほか）

# 平山行蔵◎実用流◎

頑固一徹、奇人剣客

## その生い立ち

平山行蔵は、宝暦九年（一七五九）十二月八日、江戸四谷伊賀町（東京都新宿区）に生まれた。父は平山甚五左衛門勝寿（伊賀衆三十俵二人扶持）、母は幕臣中山忠兵衛の女である。名は潜。字を子龍。練武堂、兵原、兵遷、運籌真人、退勇真人、韜略書院などと号した。

行蔵は幼いときから父にきびしく剣術を仕込まれた。また母も厳格な人で、行蔵の少年時代に次のような話が残っている。

ある日、友人がやってきて、

「これから武士の意地で、四人と果たし合いをやることになった。自信はあるが、相手は四人であるからどうなるかわからぬ。相手を倒しても自分が生きていることはあるまい。どちらにしてもない命なので暇乞いに来た」と言った。友人は助太刀に来てくれるのを願っていたのだが、

「助太刀したいのだが、男子一人の家なので、わしの一存ではできない」

と行蔵は答えた。友人はあきらめて戻っていったが、そのことを母が聞いて、

「恥ずかしいとは思いませぬか。武門の意地で果たし合いをなされる友人を見捨てては、



そなたの武士が立ちますまい。家のことなど考えるには及びませぬ。これからすぐ行って、存分の働きをしておいでなさい」

と叱った。行蔵は家を飛び出し、果たし合いの場へ駆けつけたが、友人はすでに四人を斬り、自分も重傷を負って切腹しようとしているところだった。友人は行蔵を見て、

「来てくれたか。有難う。おぬしの手で介錯してくれ」

と喜び、行蔵の介錯に満足して死んでいったという。

父から手ほどきを受けた行蔵は、さらに軍学を長沼流の斎藤三太夫に、剣術を真貫流また運籌流の山田茂兵衛に学び、のちに運籌流四代目を継いでいる。さらに槍術を大島流の松下清九郎に、柔術居合を渋川伴五郎に、砲術を武衛流の井上貫流左衛門に学び、その奥義を極めた。行蔵の武術は武芸全般に及びしかも技を競うだけではなく、実戦に備えようとしたものだったため稽古も厳しかった。また行蔵は武術だけでなく、礼楽や行政から農桑水利に至るまで研究を怠らなかった。

彼の日課は七ツ（午前四時）にはじまる。冷水で身を清めたのち、七尺五寸（二・二m余）の白樫の棒を四百回振る。それから居合を三百本、弓、鉄砲の動作、槍の素振りを行い、それから読書になる。板の上に坐っての読書で、読みながら、指先や拳で板を叩いて鍛えるのである。彼の掌は厚くなって、毬が付の栗を平気で握りつぶしたという。

食事も質素なもので、飯は玄米、菜は生味噌と香の物だけで、食事に冷水を飲むが湯茶

は決して口にしなかった。これは戦場に臨んだときのためにと日ごろから粗食を常としていたものだった。衣服もまた木綿だけで足袋などははいたことがなく、夜具も掛布団だけで板の間にゴロ寝をしていた。そして日中は道場から道場を回って武芸の修行をかかさなかった。

寛政五年（一七九三）三十五歳のとき、聖堂出役から御普請見習となり、勘定所に詰めることになった。しかし算盤をはじいている同僚たちの姿が商人の真似をしているように見えた。武士の学問は戦場の役に立てるためという考えをもっていた彼には、勘定所勤務が耐えられなかった。二、三日は我慢して出仕したが、我慢ができなくなり病気と称して出仕しなかったため、しばらくして小普請入りとなった。

小普請は実務がなく職務は金納で済むため、行蔵は伊賀町の家で弟子を養成することにした。

## 兵原草廬

行蔵は、兵学と儒学を講義する兵聖閣と、武術を専門に稽古をする演武場を設けた。演武場には、行蔵の師が書いた「兵原草廬」の額が掲げられていた。そして入口には「他流試合勝手次第。飛道具其外矢玉にても不苦」という礼をかけていたという。



行蔵は武術を教法の上から次のように十八種に分けた。「弓」、「李満弓」（半弓で、五間ぐらいの敵に用いる）、「弩」（所謂大弓のことで、普通の弓より遠くを射る）、「馬」（馬術だけでなく、馬上での射術、組討ちなども含む）、「刀」（一般にいう剣術）、「青竜刀」（大長刀のこと）、「眉尖刀」（小長刀のこと）、「抽刀」「居合術」、「槍」（普通の槍術）、「戟」（十文字鎌槍のこと）、「鉋」（佐分利槍のこと）、「鏢鎗」（投げ槍のこと）、「棍」（棒術）、「鉄鞭」（鉄扇術のことで、十手術と同様に相手を生捕りにするためのもの）、「飛鎚」（鎖に分銅のついたもので、鎖鎌と同種のもの）、「拳」（柔術）、「銃」（鉄砲、大砲などすべての砲術を含む）。これらのほかに、兵学、儒学に至るまで指南していたという。

行蔵は、防具をつけて竹刀で打ち合う剣術が形ばかりで実戦の用に立たないものに思えた。だから、剣術の稽古に兵学を取り入れ、寒中に夜営をしたり、屋外で戦闘訓練をしたりした。稽古は激しかったが、行蔵は自分自身にも激しかったため、弟子たちの人気は高く門下に多くの逸材が生まれた。

行蔵は、はじめ自分の剣術を「忠孝真貫流」と名づけた。その門弟帳の最初に「一、十四五歳カナラズ初陣（初めて戦場へ出ること）、銘々主人御馬先ニ於テ、必ス潔キ討死ヲ遂ゲ、忠孝ヲタツベキ事」とある。免状だけを出すような他の剣術道場とは、その修行目的が根本的に違っていたのである。

行蔵は文政四年（一八二一）九月に『剣説』を一巻著しているが、その巻頭に「夫剣術

は敵を殺伐する事也、其殺伐の念慮を纔直端的に敵心へ透徹するをもって最要とすることぞ」と述べている。剣禅一如を説き、剣を求道のためとする剣術家の多いなかにあって、それを否定した行蔵の武術は異色のものだった。

行蔵は幾通りもの刀法の型を作らず、弟子たちには最初一尺三寸（約四〇cm）の竹刀をもたせて、敵の胸板を突く稽古ばかりをさせている。相手の竹刀が頭上へ来る前に、敵の懐へ飛びこんで一突きにするのである。短い竹刀をもたせるのは、短刀で敵の背中まで突き通す所存で向わなければ、敵には刀は届かないとし、この修行を励めば竹刀をとってにらみ合っただけで、敵は勢いにのまれるようになるというのである。

そしてまた、自分の流儀の本質は戦場で潔く討死する精神を養うことであって、打ったり打たれたりして少しばかりの当たりはずれを云々する剣術とは大きな相違がある（忠孝真貫流規則）ともいっている。

行蔵は外出するときはいつも三尺五寸の刀をさし、四貫匁（一五kg）の鉄棒をついていた。これは戦場を忘れたかのような武士へ対する抵抗だったようだ。

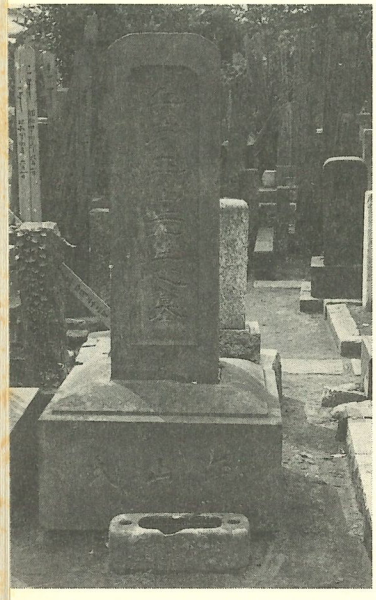
行蔵に弟子は多かったが、他の師範のように謝礼を受け取らなかった。自分が武術を指南するのは国家の有事に備えて有為の武士を育成しようとするものだから、弟子から謝礼をもらっては、文武が売物になってしまうと考えていたのである。

行蔵がいつもあまりに粗末な着物を着ているので、ある人が絹の袷を贈った。しばらく



平山行蔵の書
（写真＝崇城文庫）

平山行蔵の墓
（東京都杉並区　永昌寺）



して訪ねてみると、行蔵は相変わらず着古した木綿をまとっている。

「先日差し上げたのは普段着ですから、そのつもりで召して下さい。古くなればまた進呈致しましょう」と言うと、行蔵は、

「いや、助かりました。おかげで立派な太刀袋ができました」と言って、裏のついた太刀袋をもってきた。その人は、行蔵の武器を大切にする心掛けに恐れ入ったという。

なりふりかまわない行蔵だったが、書物、武器などの購入には惜し気もなく金を投じた。

## 晩年の行蔵

当時、ロシア船が北辺に出没していた。泰平の夢をさまされた幕府は、東北の諸藩に蝦夷地（北海道）出兵を命じたが、ほとんどなすすべがなかった。

文化四年（一八〇七）、ロシア船がエトロフ島来寇事件を起こすと、行蔵はロシア討伐の意見書を幕府に上申したが、採り上げられるところにはならなかった。

行蔵の意見は主戦論だった。しかし彼我の戦力を見極めたものではなく、多分に感情的な怒りであった。自分は日ごろから実戦に備えているから、牢にいる千人ほどの無頼漢を貸してくれれば、それらを率いて蝦夷地へ渡り、ロシアの軍隊と一戦交えて追い払うというのである。いま考えれば荒唐無稽だが、当時その意気に賛同するものも少なからずいたことは事実だった。



儒者の山崎美成が行蔵を訪ねたとき、行蔵はロシア討伐の命が下ったらもっていくと言って、白地に朱で「皇和忠義平山子龍」と書いた指物を見せ、また金箔を貼った甲冑を見せたという。

行蔵は書物をよく読んでいたが、それは漢書の類であり、その兵学も、古代中国や戦国時代の知識にすぎず、もはや甲冑をつけた合戦の時代ではなくなっていることがわからなかった。しかし行蔵の名誉のために付け加えると、当時、江戸市中の道具屋、質屋にあった武具甲冑が飛ぶように捌けたというから、世情の知識はそのようなものだったのである。ともかく行蔵の上申が、幕府の採り上げるところとならなかったのは、本人のためにも結果的によかった。

しかし、彼が文化十三年（一八一六）に書いた『海防問答』になると、外国の事情に詳しくなっている。当時さかんに発行されるようになった蘭書の和訳などによって、新しい知識を得たのだろうが、すでに戦争が個人個人の技倆によるものではないということまでは考えが及ばず、時代に取り残された「兵原草廬」は、火の消えたようになった。

彼が『海防問答』を書く前の文化七年（一八一〇）、徳丸ヶ原（東京都板橋区）で大砲の試射をやろうとした。しかし、幕府の許可はおりず、行蔵は不満を広言した。文化十年（一八一三）、門人の夏目信平から、幕府が行蔵の行動に疑惑を抱いているのでしばらく身

を慎しんだ方がよいと知らせてきた。すると行蔵は翌日道場を閉じてしまった。

師を失った実用流では、門人四傑のひとり下斗米秀之進（相馬大作）が弟子の指導にあたることになった。南部藩出身の秀之進は、文政四年（一八二一）、出羽国（秋田県）で参勤交代で帰る津軽藩主寧親の暗殺を企て失敗し、江戸へ逃げ相馬大作と名を変え潜むが、翌年捕えられ、千住小塚原（東京都荒川区）で獄門となった。この事件は南部藩の家臣筋にあたる津軽藩の専横を糾す目的だったというが、江戸市民は主家への忠心として感動したという。この行動の背景には行蔵の影響があった（最近では、秀之進の目的が、南部藩と津軽藩の和を計り北辺の国防に備えようと考えたものとされているが、これも行蔵の影響だろう）。

この事件のあと、さすがの行蔵も昔日の元気はなく、四貫匁の鉄棒をやめ一貫六百匁（約五kg）のものをついて歩いた。鍛えた身体も年には勝てず、時々病の床に伏すようになり、文政九年（一八二六）中風にかかった。行蔵は独身だったため内弟子の並河鋭次郎隆富を養子にして道場をまかせた。それでも兵学と儒学だけは自ら講義した。

白河（福島県）にいた弟子の青木一郎太夫が江戸へ来て行蔵が病にかかっていると知り、早速主君の松平定信に言上した。定信は行蔵が依然として板の上に寝ていると聞いて、絹布の夜具を届けさせた。行蔵は一夜使っただけでやめ、「絹布は武士の用いるものではない」と言った。これを聞いた定信はすぐ木綿の夜具を贈ったという。行蔵はそれからは板の間に寝ることをやめ、定信から拝領した夜具で寝るようになった。



文政十一年（一八二八）十一月ごろから行蔵は衰えはじめ、病床についてからは再び起きあがる様子はなく、十二月二十四日に眠るように往生をとげた。年は七十歳であった。四谷の永昌寺に葬られた（同寺が東京都杉並区に移転したとき墓も移された）。

行蔵は、『剣説』『剣徴』『槍法実用』などの兵術文稿や『海防問答』『孫子衍義（折衷）』など五百巻もの書を残している。武術家で彼ほど多くの書物を残している者はいない。また蔵書家でもあって、収集図書は『擁膝草廬蔵書目録』として残されている。

行蔵のあとは、養子鋭次郎隆富が継いだ。隆富は幕府に仕えて大筒方与力であったが、晩年は蝦夷に渡り、行蔵の意志を継いで北辺の警固に一生を捧げた。

行蔵の弟子は二千をこえたというが、そのなかで名の知られている者をあげておこう。まず、前述の相馬大作として有名な下斗米秀之進がいる。四傑の残り三人は吉里吞敵斎、小田武右衛門、松村伊三郎、大釜紋三郎、そのほかに松代の山寺源太夫がいた。また幕末に名高い男谷信友や、斎藤弥九郎も行蔵から兵学を学んでいる。

行蔵は武術家として武芸十八般を学びいずれも奥義に達したという。また兵法、軍学を研究し、一家言をもったが、その知識は時勢を踏まえたものではなかったことは行蔵の不幸だった。しかし、これは行蔵だけの問題ではない。関ヶ原の合戦、大坂の陣以後の長い太平のなかで、兵法、軍学は机上のものとなっていた。激動の時代を机上論だけで乗り切

ることができないのは世の常である。行蔵は幕末の奇人と呼ばれるが、その行跡を笑うことはできない。古い知識だけで新たな問題に立ち向かおうとするときに往々にして登場する人物像である。それが行蔵のように純粋である場合、不満がつのる。しかし、それが暴発しなかったことは行蔵の見識であったのかもしれない。

（『事実文編』『下斗米大作実伝』『日本剣道史』「武芸十八般略説」『武術叢書』ほか）



心貫流
実用流略系

タイ捨流
丸目蔵人佐長恵―奥山左衛門大夫忠信（心貫流）―長尾美作守鎮宗―益永軍兵衛盛吉―益永軍兵衛盛次―永山大学氏次―岩田甚五郎内敬―三宅善三信元

吉田益右衛門尉光乗（大石神影流）―大石進種次

山田甚太夫弘篤―山田茂兵衛松―平山行蔵潜（実用流）
- 平山行蔵隆富
- 下斗米秀之進（相馬大作）
- 吉里呑敵斎信武
- 小田武右衛門
- 松村伊三郎
- 大釜紋三郎

# 男谷信友◎直心影流◎

幕末第一の名人

## その生い立ち

徳川の政権がゆらぎはじめると、それに触発されて武芸は盛んになり幾多の英才を輩出したが、そのなかで男谷信友は群を抜いていた。彼は市井の剣客のように派手な武芸修行を喧伝しなかったため講談や小説の主人公となっていないが、その実力は幕末第一であった。多くの兵法者が剣技の習練を目的としていたなかで、斎藤弥九郎とともに時勢を捉えた進歩的思考をもっていた。

男谷家というのは徳川譜代の武士ではない。田沼意次の全盛時代に、越後小千谷村から江戸へ出てきた盲目の青年がいた。理財の才があり、のちに金貸しで巨万の富を築き、検校（盲人の最上級の官名だが、金銭で受けることができた）となった。この検校が男谷家の祖となるが、水戸家への貸付だけでも七十万両もあったという。

この男谷検校が御家人の株を買って末子を武士とした。これが男谷平蔵忠恕である（江戸も後期になると、武士の身分も金で売買されていた）。安永五年（一七七六）御持筒の与力となり、天明六年（一七八六）六月には御勘定となって、廩米百俵を与えられた。

平蔵の嫡子は彦四郎思孝といった。思孝は寛政九年（一七九七）から御勘定に出仕し、のちには表右筆となった。燕斎と号し、虞世南（初唐の人）の書を奉じて、諸侯の家中に



門人が多かったという。その弟が勝家に養子にいった小吉で、その子が安芳（海舟）である。

思孝には男子がなかったので、一族の男谷新次郎信連の子精一郎を養子にして、次女をその妻とした。この精一郎がのちの下総守信友である。幼名新太郎、寛政十年（一七九八）の生まれで、養子になったのは文化十四年（一八一七）二十歳のときであった。

信友は幼時より武芸を好み、射術は吉田流、槍を宝蔵院流、剣術を直心影流、兵学は平山子龍に学んだ。子龍の紹介で直心影流の団野真帆斎に入門した。ここで精一郎はたちまち師以上といわれるようになり、文政四年（一八二一）に板行された「御府内兵法名人番付」には「上々吉」と肩書され、関脇にすえられている。

直心影流は上泉信綱を流祖とする。信綱から印可を受けた奥山休賀斎は神影流と称した。その後小笠原源心斎、神谷伝心斎、高橋直翁斎と代々流名を改めながら伝えられてきた。第六世山田一風斎に至って直心影流と改められ、以後は改名されることなく第十一世団野真帆斎に伝えられた。真帆斎は赤石郡司兵衛の弟で、寛政七年（一七九五）本所亀沢町（東京都墨田区）に道場を開き子弟を教育していた。

信友は印可を受けたあと麻布狸穴（東京都港区）の自邸に道場を開いていたが、のち真帆斎から亀沢町の道場を譲られた。真帆斎以来の門人は二万を数えたというから、門弟の数でも群を抜く江戸を代表する道場だった。信友は道場主であるとともに御旗奉行、講武

所奉行などを務め、その高傑な人格は数ある剣客のなかで別格に位置されていた。それまで直心影流では、怨恨を残すとして他流試合を禁じていたが、信友はこの禁止を解いた。他の道場が他流試合に対してはまず門弟を出して様子を見たが、信友は自分で立ち合ったという。

信友の名が番付に出るようになったころ、妻木弁之進と真剣試合をやった話が伝えられている。弁之進は平山子龍の高弟で、かつて精一郎に手ほどきをした人物であった。あるとき、真帆斎の道場を訪ねた弁之進は精一郎に真剣試合を申し込んだ。このとき弁之進は二尺一寸の愛刀をもって対し、信友は一尺七寸余の小刀で立ち合った。これは試合が長びいたとき非力の自分は疲れるからという理由であった。

この試合は、血を見ることなく真帆斎によって引き分けられた。試合のあとで妻木は「男谷がこれほどになっているとは思わなかった。いま調べてみると、左胴が襦袢まで四寸ばかり切れていた。男谷が小刀を使ってくれたので助かった」と礼を言うと、信友は「私こそ命拾いをいたしました。この通り鉄鐔が一寸ほど斬られております」と応えた。

先輩の弁之進が若い信友に真剣試合を望むことは考えにくいが、常に一歩退って相手をたてる信友の性格が出ている話である。



## 底知れない強さ

信友は強かった。しかし多くの剣客が遺しているような名人伝説は伝えられていない。また信友自身、自分の力を誇示することもなかった。

門弟と試合をするときも、はじめの一本は取り、次の一本は相手に取らせ三本目を自分が取る。だれもがもう少しで二本取れると励むのだが、どんなに精進しても、この方法は変わらなかった。

千葉周作と試合したときも同じだった。まず信友が取り、次に周作が一本、最後に信友が取った。このとき信友は「あれだけ遣うには随分修行したのであろう」と感心し、水戸の執政であった山辺主水正に周作の才能を推挙した。のちに水戸斉昭が周作を招聘したのはこのためである。

島田虎之助との話も面白い。虎之助は豊前中津（大分県）の藩士で、一刀流を学んで九州を荒し回り、天保九年（一八三八）江戸へ出てきた。虎之助はいくつかの江戸の道場で試合を挑んだのち男谷道場を訪れた。信友が立ち合ったが、例によってはじめは軽く一本を取り、次は虎之助に打ち込まれ、三本目は軽く打った。虎之助は二本を取られたが、いずれも軽いので負けたような気がせず、内心では「男谷も大したことはない」と思った。

それから下谷車坂（東京都台東区）の井上伝兵衛の道場を訪れた。ところが伝兵衛と試合するといとも簡単に負けた。そんなに軽くあしらわれたのははじめてだったので、虎之助は慢心の夢がさめ「恐れいりました。何とぞ門弟の端にお加え下さい」と言うと、伝兵衛は、

「わしくらいの剣術使いは江戸にいくらでもいる。おぬしには見どころがあるから修行次第によっては天下に名をなすであろう。おぬしにふさわしい先生がいる。亀沢町の男谷先生に紹介状を書いてやるから、男谷先生の門人になるがよい」と応えた。

「男谷先生とは試合をして参りました」と虎之助は不服そうに顔をあげた。

「男谷先生は名人であろう」

「失礼ながら、大したことはないと思いました」と虎之助が言うと、伝兵衛は笑いだした。

「はじめの一本は軽く先生が取り、次の一本はおぬしが取り、三本目は先生がまた軽く取られたであろう」

「なぜご存知ですか？」と虎之助はびっくりした。

「聞かないでもわかっている。男谷先生は誰と試合しても同じなのだ。どんな相手でも同じようにあしらわれる。相手が参ったというまで追いつめられないので、先生の強さがわからないだけだ。おぬしもまだ修行が足りぬな」

虎之助はそう言われてもまだわからなかった。しかし、伝兵衛の紹介状をもって再び信友のもとを訪れ試合してみると、今度は手も足もでなかった。そこで虎之助は信友に入門した。のち虎之助は道場を構えて独立したが、信友は従弟の勝麟太郎（海舟）を虎之助に預けて剣術の修行をさせている。

そのころの話である。筑後柳川（福岡県）の大石進が五尺三寸（約一六〇㎝）の竹刀をもって江戸の道場を荒し回ったことがある。千葉周作の道場も、桃井春蔵の道場も敗れた。ただ中西道場で高柳又四郎は、直径二尺の鐔をつけた竹刀で勝ったが、まともな竹刀で大石進を破った者はいなかった。その大石進が男谷道場にもやってきた。信友は三尺八寸（もっとも一般的な寸法）の竹刀をもって立ち合ったが、大石は軽くあしらわれて信友の神技に敬服し、以後同藩士に剣術を稽古するなら男谷先生の所へ行けと推挙したという。



## 講武所

男谷信友の人物を最初に見出したのは老中水野越前守忠邦である。忠邦は天保の改革を断行し、武を奨励したが、あるとき役宅に都下の剣士を招いて試合をさせた。そのとき信友の抜群の剣技を見た忠邦は、「男谷は天下の剣客である」と称揚し、家中の指南を託した。それから幕府に登用されるようになり、御徒歩頭、講武所頭取となり、文久二年（一八六二）十一月十六日下総守になった。

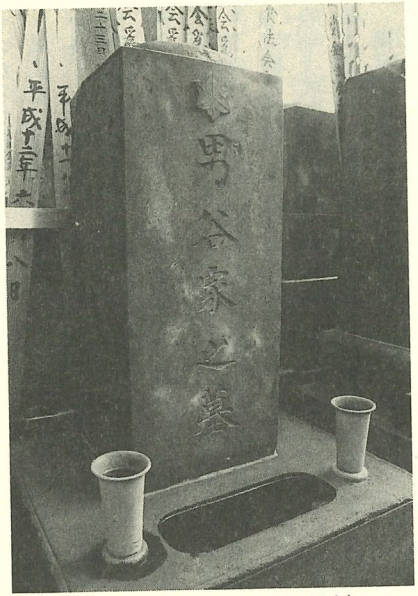
彼は、国防論や武術励行の建白書を幕府にたびたび提出した。信友は、剣術のみの修行では今日の役に立たないと考え、国の防備には、各派にわかれている武道を統合し、西洋式の訓練をとりいれた修練場を設置するよう上申した。このあたりは、師の子龍の影響だろうが、信友の場合、時勢に叶っていたし内容も現実的だった。

彼の建議が採り上げられたのは安政元年（一八五四）であった。老中阿部正弘は総合演武場の計画立案を目付へ命じた。十二月になって「講武場」と名称が決まり、翌二年（一八五五）正月、築地（東京都中央区）の堀田正篤邸内に設置することが下命され、将軍徳川家定が出御して開所式が挙行された。

総裁には跡部良弼、土岐頼旨らが、頭取には鵜殿十郎左衛門、男谷信友（剣道教授も兼ねた）らが任命された。その趣旨は「御旗本之面々諸役人、御番衆、小役人、御目見以下之面々且部屋住、次男、三男、厄介等に至るまで武術の修行をさせる」として四芸（弓、鉄砲、槍、剣）砲術、兵学、水練、柔術などを習わせた。のち「講武所」と改められた。

講武所は安政三年（一八五六）三月落成しこのときの剣道教授方は、戸田八郎左衛門、本目縫次郎、今堀千五百蔵、松下誠一郎、三橋虎蔵、近藤弥之助、榊原鍵吉、伊庭軍兵衛、井上八郎、藤田泰一郎、松平主税之助で、のち桃井春蔵や斎藤弥九郎らも加えられた。翌四年（一八五七）には軍艦教授所が設けられ、のちの海軍の基礎となる。同六年（一八五九）には、講武所は神田小川町へ移され、築地は軍艦教授所専用地となった。





男谷家の墓（東京都江東区　増林寺）

信友はのちに講武所奉行になった。この講武所で旗本御家人に西洋式の訓練をし幕府の兵力を強固にする方針だったが、残念ながら彼の計画は達せられなかった。人は集まったものの直面している時勢の認識ができず、いたずらに武芸者気どりの若者を生んだにとどまった。信友がどんなに高傑で非凡な武人であろうとも、旗本の二男、三男は、どうすることもできないところまできていた。言いかえれば、幕府はすでに崩壊への道を歩き出していた。

ていたのである。

講武所に通う若者は遠くからでも一目でそれとわかる身なりだった。月代はせまく、髷を長くし、冬は鼠色木綿、夏は生平の割羽織に真岡木綿の袴、白足袋に黒緒の下駄、白柄朱鞘の大小という「講武所風」と呼ばれた風袋で、竹の子笠を片手に、剣術道具を肩にして歩いた。やたらに喧嘩を売り刀を抜いたので、江戸市中の人々からは嫌われた。

信友の従弟勝麟太郎は信友の門下の島田虎之助の道場へ預けられていたが、信友に「国家に役立つ武士となろうとするのならば、剣術だけでは駄目だ。蘭学を修め、航海の術を会得して、西洋の事情に明るくならなければ、役に立たない時代になる」と言われ、それから麟太郎は蘭学を志し、日本海軍の先駆者となった。

講武所はのちに「陸軍所」と改称されたが、その少し前、元治元年（一八六四）七月十六日、信友は六十七歳をもって没した。辞世は信友らしい清廉なものである。

笑ニ堪エタリ六十七年ノ夢
戯楽一場嘆空シ
安命何ンゾ憂ヘン生亦死
喬松明月清風有リ



うけゐたる心のかゝみ影きよくけふ大空にかへるうれしさ

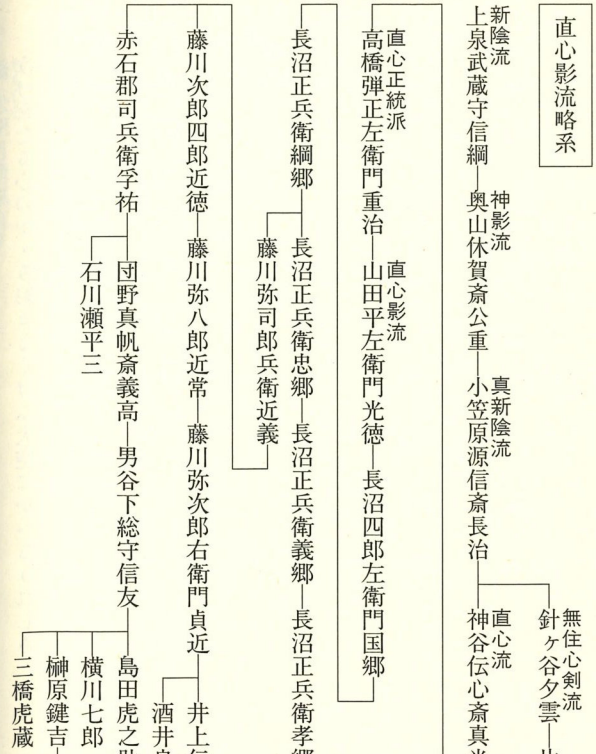
信友はやや小肥りの温厚柔和な人物であったため、知らない人は、これが剣聖といわれた男谷下総守だと気づく者はいなかったという。酒は好んだが酩酊したことはなかった。また妻を叱ったことがなく、門弟に対しても声を荒だてたことはなかったという。

朝起きると座敷を自ら掃除し、必ず弓を弾き、雨のときには読書した。弘化二年（一八四五）四十八歳のとき妻を失ってからは後妻をむかえず、古くから召し使っている家人の清助に家事をまかせていた。

彼はまた書も一家の風をなしていた。静斎、蘭斎と号していたが、これは書家として著名であった養父彦四郎から手ほどきを受けたものである。

男谷門下として有名な人物は、前出の島田虎之助直親のほかに、横川七郎、三橋虎蔵、榊原鍵吉らがいる。（『日本剣道史』『講武所』『維新史』『剣豪秘聞』『剣法夜話』ほか）

直心影流略系




# 千葉周作◎北辰一刀流◎

## 幕末に花開いた玄武館

## 北辰一刀流誕生

千葉周作は寛政六年（一七七四）正月元日、陸奥国気仙郡気仙村（岩手県陸前高田市）に生まれた。幼名於菟松、名は覩、のち周作成政と称した。

祖父の吉之丞は奥州中村の相馬家の家臣だったが、あるとき君前での試合に負け、それから発心して一流を開き「北辰夢想流」と称したが、理由あって陸奥荒谷村（宮城県栗原郡）で百姓となっていた。そこに久保田（秋田県）の佐竹氏に仕えていた一族の千葉幸右衛門が退身して吉之丞の家に身をよせ剣法を学んでいた。吉之丞は幸右衛門の人物を見込んで養子とし娘をめとらせた。幸右衛門は三人の男子をもうけた。二男が周作、三男がのちに「桶町千葉」として剣名を高めた定吉である。

この父について周作は剣法を学んだ。少年時代の話に次のようなものが伝えられている。荒谷斗瑩山の麓に川が流れているが、夏になると子供たちがその川へ泳ぎに行く。ある年、蜂の大群がその川の傍に一斗樽ほどの巣を作った。その羽音は遠雷のようにとどろき、人がその下を通ると蜂は群がって刺す。そのために子供たちは水泳にも行けなくなった。これを聞いた周作は「それでは自分が退治してやろう」と言って、一尺余りの木切れをもって巣の下へ出向いた。蜂が暴れだしたが、周作はかまわず木に登っていった。何千という蜂が周作に襲いかかってきた。周作は手にしていた木切れで、それらの蜂を電光石火の早技で打ち落とした。棒に当たって落ちてゆく蜂がまるで風に散る花びらのようであったという。



たちまち数千匹を打ち落として、巣を見ると、もはや蜂は一匹もいなかった。そこで周作は一斗樽ほどもある巣をもぎ取って、ゆうゆうとおりてきたが、その身体には刺傷一つついてはいなかったという。

父幸右衛門は、かねがね千葉家再興を念願していた。田舎にいたのでは立身の望みがないと思い、文化六年（一八〇九）周作十六歳のとき、一家で江戸の近くの松戸（千葉県松戸市）に出た。若いころ修めた医術を業として、名を浦山寿貞と改め、三人の子にはそれぞれ文武の修行をさせた（寿貞は松戸に二十年住んで、天保二年〈一八三一〉正月十七日没した）。

周作は江戸へ出て旗本喜多村正秀に仕え、若狭の酒井侯の剣術指南役となった小野派一刀流の浅利又七郎義信の門に入ったが、数年にして、師の又七郎も驚くほど上達した。

そこで又七郎は自分の師である中西派の中西忠兵衛の道場で修行させることにした。中西道場の名は、当時の江戸に鳴りひびいていて、寺田五郎右衛門、白井亨、高柳又四郎ら名だたる剣客が集まっていた。ここで周作はさらに修行を続けた。あるとき周作が稽古をしていると、踏み込んだ瞬間、床板を踏み破った。師の忠兵衛はそれを見て「これは千葉

の気合いによって踏み破った板である。みんなもこのように稽古に励むように」と言って、修理したのちも、その板を道場に飾っていたという。

中西道場で周作が目ざましい上達をとげると、浅利又七郎は自分の姪をめとらせ、彼を後嗣にしようとした。周作も喜多村家を辞し、剣術一筋に生きることにして又七郎の代稽古を務めた。周作の評判を聞いて門弟が集まり、浅利道場は以前にも増して盛んになった。しかし、あくまで師より伝授されたものを守ろうとする又七郎と、改良を加えようとする周作の間に意見の対立が生じるようになった。

周作は悩んだ末、又七郎と親子の縁を切り、浅利道場を出て一派を立てた。祖父吉之丞の北辰夢想流と一刀流を折衷して組型を制定し「北辰一刀流」と名づけたのだった。『北辰一刀流名号略解』によれば「……一刀とは剣法の太極なり。一刀より始元して千変万化して而して復一刀に帰す。混沌たる一円形にして、始も終も無く、起と止と無く、其間運用見難く測難く、神妙不可思議の理なり。……北辰の文字を冠したるは……北辰は北極星にして、天地の正中に位し、南極に対し、天地を運転するの枢なり。……君の位に居て不動、無為にして、能衆生を臣として使ふ。即ち太極なり。……此剣法当家に伝りたるを一刀流と合法して、北辰一刀流とは号たるなり」という。



## 武者修行

文政三年（一八二〇）二十七歳のとき周作は武術修行の旅へ出た。このときの日記を抄録した『剣術物語』には、周作の人物を知る上に面白い話が出ている。

三河の竹内という人の家に数日滞留したときのこと。そのあたりは海辺で、家人たちが夜になると魚を採ってくる。周作がどうやって採るのか尋ねると、潮が引いたとき、潮だまりに残っている魚を拾ってくるのだと答えた。

ある夜、誘われて周作も松明を照しながら磯に行き、干潟を南へ歩くと、あっちこっちの潮だまりに魚やタコがいた。面白くなって沖へ三丁ほど出たが、夜もふけ寒さも身にしみるので、北へ引き返そうとした。しかし行けば行くほど潮が深くなっていく。それで方向をかえてみたが、やはり同じであった。潮が満ちてくれば一大事である。案内の土地の者が迷ってしまったのであるから、周作にはどうすることもできなかった。

星を見て方角を知ろうと思っても、空は曇っていて星は見えない。用意している松明を一度に点じたが、付近だけは明るくなったものの、どっちへ行っても潮は深くなるばかりだった。「これは海狐のしわざでしょう」と不安そうに家人たちは顔を見合わせた。周作はじっと考えていたが、ふと遠くに千鳥の声を聞いた。そこで昔、太田道灌が夜陰に乗じ

て一騎で物見に出たときの故事を思い出した。道灌は暗い夜に海へ出て潮の満干がわからなくなったが、しばらく馬をとめて汀に立っているうちに、ふと千鳥の声を聞いて「遠くなり近くなるみの浜千鳥啼く音に汐の満干をぞ知る」の古歌を思い出して、潮の干潟を知ったというものだった。

それで不安そうな家人たちをはげまして、いままで方角違いと思っていた方へ行ってみると、果たして干潟に出ることができた。家に帰ってからこのことを話すと、海に慣れている老人が家人たちを叱りつけ「海辺に長年住みながら何ということだ。何故松明を消さなかったのだ。松明があれば、近くは見えても遠くは見えなくなる。どんな闇夜でも、火を消せば沖と里とはわかるものだ」と言った。周作はそれを聞いて「なるほど、眼前のみ明るくすると遠方は見えなくなるものだ」と目がさめた思いがし、これも修行の一つだと悟ったという。

また周作は剣術ばかりではなく、相撲も強かったという。三河でのことである。ある日吉田（愛知県豊橋市）あたりの相撲渡世をしているという者が五人ばかり連れだって訪ねてきた。

周作が会ってみると、年寄りの力士が「私は年をとってなかなか弟子たちの稽古もままなりません。無礼だとは存じますが、弟子たちへ相撲の稽古をつけてやってはいただけますまいか」という。周作は「それは面白い。わしは今まで剣術の指南を頼まれたことはあったが相撲ははじめてだ。なぐさめのために手合わせいたそう」と引き受けた。実のところ、彼らは周作の雷名を聞いてきたのではなく、その日の祭礼の相撲見物中、取口について批評していたのを聞きつけ、周作に恥をかかせようと挑んできたのだった。

しかし、周作はすでにそれを読み取っていた。「いまから剣術の稽古をやるので、おぬしらがそれを見ている間に土俵をこしらえさせよう」と言って、剣術の稽古をはじめた。その厳しさに力士たちはびっくりしたが「剣術はともかく、相撲は素人だ」とあなどっていた。

剣術の稽古が終わると、周作は褌をしめて土俵へ上った。最初の相手は、先日の相撲で大関を破ったという力士だった。立ち合ってみると、力は強いが技術は下手で、内掛けを掛けるとすぐ倒れてしまった。何度立ち合っても通じないので、今度は頭で胸に突っかかってきた。そのうち疲れて代わったが、次の相手も問題にはならず、またその次はさらに弱かった。彼らの相撲があまりに下手なので、周作は差手のことや、褌を切ること、その他のことを教えて帰したという。

## 玄武館

回国修行を終えた周作は、江戸へ戻って日本橋品川町に北辰一刀流の道場を開き「玄武

館」と名づけた。その後道場を神田お玉ヶ池に移した。のちに池は埋められてしまったが、現在の東京都千代田区神田岩本町である。隣に東条一堂の儒学塾があったが、一堂の没後、その塾も合わせて道場としたので広さが一丁（約六五m）四方にもなった。千葉道場では稽古の要領がよかったので、他の道場で五年かかるところが三年ですむといわれ、押すな押すなの盛況であった。桃井春蔵、斎藤弥九郎の道場とともに、江戸三大道場と呼ばれるようになり、お玉ヶ池といえばこの玄武館をさすほどの名声となった。

周作はいつも相手の技倆を見極めて教えを説いた。周作の名声のかげには、多分にその優れた対機教授のうまさがあった。

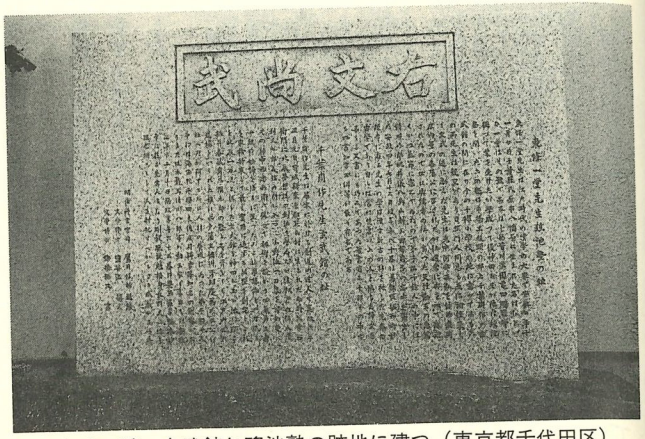
周作の弟定吉も兄に劣らない実力があり、のち京橋桶町（東京都中央区）に道場を開いたので、「桶町千葉」と呼ばれた。ここから幕末の風雲児坂本龍馬が出ている。

天保六年（一八三五）周作は高弟臼井新三郎を連れて水戸へ行った。弘道館で藩士を相手に武技を披露したのが斉昭に認められ、月俸十人扶持で水戸家に仕えることになった（「男谷信友」参照）。ついで天保十二年（一八四一）には百石を与えられ馬廻りとなった。

万延元年（一八六〇）三月の桜田門外の変で水戸浪士が動いた。周作が水戸家に仕えていたことから、彼らの背後に周作の力があったという説もあるが、それは考えられない。周作は確かに剣術は強く門弟を集める方法を心得ていたが、思想的な背景はなかった。

すでに刀を振り回す時代ではないことを周作は知っていた。しかし自分に何ができよう。

千葉周作の墓（東京都豊島区　本妙寺）




右文尚武の碑。玄武館と瑤池塾の跡地に建つ（東京都千代田区）

そう考えたとき、世を見るに敏な彼が選んだ剣法は刺殺のための剣術ではなく、機敏な判断力を養うためのものだった。

北辰一刀流は、伝法の次第を初目録、中目録免許、大目録皆伝の三段とし、皆伝までの年月を大幅に短縮させた。そのために稽古をしやすくする工夫をした。面や籠手などの防具などを改良し、竹刀も軽く扱いやすいものにしたのである。また構えも自由にするなど、修行の間口を広くして学びやすいようにした。

このあたりを迎合的という人もいるが、もはや古来の剣法をそのまま伝えてどうなる時代でもないし、修行の期間が長いからといって必ず技倆が上がるものでもない。幕末、有為の若者たちは多忙であった。剣を学び学問を学び、人と会い議論し、そして行動しようとした。剣法だけに縛りつけておくことができようか。周作がそこまで考えていたかどうかはわからないが、稽古の要領がよかった玄武館から多彩な人材が輩出したことはまぎれもない事実である。

また思想的な言動が伝わっていないことも、ある意味で見識ではないだろうか。全国の諸藩はそれぞれに思想身上が違っていたし、門弟たちもそれぞれに思想的背景があった。そこに剣術の修行しか積み重ねてこなかった周作が思想を語ったとしてもそれは生兵法である。玄武館は剣を学ぶ場であって、それ以上を周作は望んでいなかっただろう。この時代にあって思想的言動が伝えられていないのは、周作が分をわきまえていたといえるのではないだろうか。



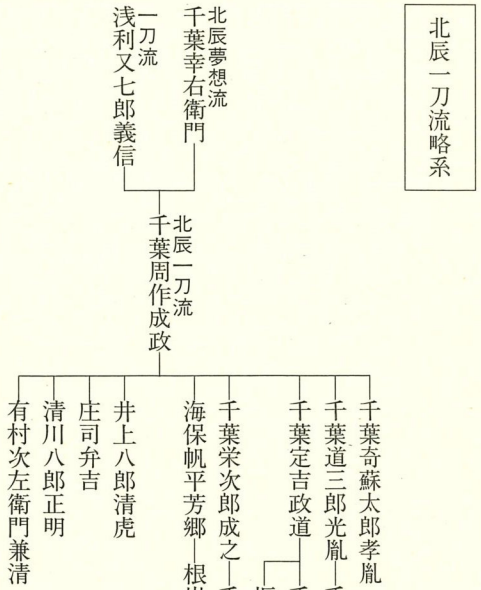
安政二年（一八五五）十二月十日、周作は没した。六十二歳であった。法号は高明院勇誉智底敬寅居士。浅草誓願寺の仁寿院の墓地に葬られた。関東大震災後、仁寿院が練馬に移ったとき、墓も改葬されたが、現在は東京都豊島区西巣鴨の本妙寺に移されている。

周作には、四男一女があった。長子奇蘇太郎孝胤は二十一歳で没し、次男栄次郎成之は別に家を立て、三男道三郎光胤が家を継ぎ、末子の多聞四郎政胤も別に家を立てた。

栄次郎は水戸家に仕えて「千葉の小天狗」と呼ばれ、父周作以上の達人といわれた。この人だけが長命で、大正二年（一九一三）十月三日八十五歳で没した。家督を継いだ道三郎も、明治五年（一八七二）八月十七日、三十八歳で没し、末の多聞四郎は水戸家に仕えていたが、文久元年（一八六一）十二月二十九日、二十四歳の若さで没している。

千葉門下としては、桜田門外の変で伊井直弼を襲った有村次左衛門、海保帆平、井上八郎、庄司弁吉、浪士隊を組織した清川八郎らが知られている。（『千葉周作遺稿』『日本剣道史』『近世剣客伝』『教育史資料』『神田区史』ほか）

北辰一刀流略系




# 物外不遷◎不遷流◎

## 二百五十人力の怪力和尚

## 拳骨和尚

江戸後期に「拳骨和尚」の名で怪力をうたわれた物外不遷は、寛政六年（一七九四）伊予松山で生まれた。生年について諸説があるが、尾道済法寺の住職になるとき広島の役所に出した書類に「今年三十七歳ニ罷成候」とあり、逆算すれば寛政六年となる。しかし慶応三年（一八六七）十一月二十五日に没したとき、七十三歳と当時の書類に記されており、ここから逆算すれば寛政七年（一七九五）となる。

父は伊予松山の松平隠岐守の家臣三木兵太夫信茂、母は同家中の森田太兵衛の女で、幼名を吉次郎といった。一説に母は御殿へ上り、浴室の役であったが、そこで殿様のお手がついて、寅年（寛政六年）の寅の刻に生まれたので虎雄と名づけたというが確証はない。

物外がいつ出家したかは明らかではない。弟子の木鈴が書いた『一大鏡』には七歳で出家とあり、また六歳で出家の説もある。彼が十一歳で広島の伝福寺観光の弟子になる前は、松山の龍泰寺の祖燈の弟子だったようである。不遷というのは諱、物外は号である。

伝福寺に移ってからの物外は、毎夜のように寺を抜け出して市中の道場へ通った。生まれつきの大力もあって、武芸はみるみるうちに上達したが、十五歳になった年の三月、茶臼山で、町人の子と武士の子が決闘を行うことになった。物外は町人方の参謀役として、



地雷火などを仕掛けていたのが発見されて国外追放となり、伝福寺の観光からは勘当を申し渡された。

それから文政九年（一八二六）広島へ戻るまで、諸国を遍歴して修行したが、その間に拳骨和尚の名は諸国に鳴りひびくようになった。

物外の怪力を伝える話がいくつか残っている。江戸の浅草に滞留していたときのこと。物外は若いときから碁が好きであったが、ある日蔵前（東京都台東区）を歩いていて、ある古道具屋で気に入った碁盤を見つけた。その値段を聞くと、亭主は物外の破れ衣を見て、ろくろく挨拶をしようともしない。再三聞くと、亭主は面倒くさそうに、「一両二歩でございますよ」と答えた。

物外は欲しくてたまらなかったが、持ち合わせがなかったので、「数日中には必ず買いに来るから売らずにおいてもらいたい」と頼んだ。しかし、「私の方も商売ですから、買い手がつけば売らないわけにはまいりません。お求めになるのでしたら、いくらかでも手付金をおいていただきとう存じます」という。しかし和尚はその手付金のもち合わせもなかったので、「それでは、こうしておこう」と、碁盤を裏返しにして、拳骨を押しつけると、みるみるその形がついた。道具屋はびっくりして承知し、宿所を聞いておいて翌日には碁盤を届けたという。

越前永平寺にいたときの話も面白い。ある夜、物外が鐘楼から梵鐘を降して山門の外に

おいていた。翌日発見され、一山の僧侶が総がかりで鐘楼に吊りあげようとして大騒ぎをしていると、物外がやってきて、「茶飯を食べさせてくれるなら、もとのように吊ってやろう」と言う。みんなは和尚の大力は知ってはいたが、梵鐘を引きあげるほどとは思ってはいなかった。ためしにやらせてみようと承知すると、和尚は軽々と梵鐘をもとのように吊りさげた。物外はその後も茶飯が食べたくなると梵鐘を降したという。

物外の怪力は二百五十人力といい、伝える話はいずれも誇張されたものだが、けたはずれの力持ちであったことは事実だろう。

## 道場を開く

物外が広島へ戻ったのは文政九年（一八二六）二月であった。師の観光は喜んで勘当を解き、当時無住となっていた尾道の済法寺の住職とした。この手続きには天保六年（一八三五）ごろまでかかっているが、文政十一年（一八二八）ごろには済法寺に居住していたようである。

物外は寺中に武芸の道場を開いた。物外の武芸の師は誰であるか伝えられていないが、剣術、槍術、鎖鎌など武芸十八般に通じていたので、その門人は三千人にも及んだという。『門人人名録』『諸風流遠鶴控』（面会者の姓名住所を記したもの）『柔術門人記名録』などの一部が残っているが、門人は西国一帯に及んでいた。

物外が済法寺の住職となった天保年間に大旱魃があった。農民たちは「今度済法寺の住持になられた物外和尚は、世に名高いから、雨請いの祈禱をしてもらおうではないか」ということになった。

物外は心よく承諾し、「このたびの旱魃は尋常一様の祈禱では霊験もおぼつかないと思われる。ついては当寺の梵鐘を竜神へ献じて、八大竜王の加護を仰がなければ成就は難しい。しかしこの梵鐘にも施主があることであり、無断で献ずるわけにはいかない。みなと同道して施主の承諾を得よう」と言って、その家に行くと、施主も村のためになるのならとこころよく承諾してくれた。

早速、村人たちに百貫目以上もある梵鐘を降させ、吉和村の海辺に運ばせて、船と船との間につないで海にうかべ、十七日間昼夜をわかたず祈願することになった。竜神が雨を降らせてくれたら、そのお礼として梵鐘を海中へ沈めますと物外は身体を浄め、香を焚いて船中で坐禅を組んだ。一週間が過ぎようとしたころ、天の一方から黒雲がおきて、見る間に大雨となり、三日三晩降り続き草木はよみがえった。

そこで梵鐘を海中へ沈めようとすると、施主が半鐘をもってきて「この半鐘に代えてもらいたい」と言う。物外が「こころよく承諾されたのに成就したあと約束をたがえるのは竜神をあざむくことになる」と言うと、施主は「神仏への奉納は大抵雛形のものです。こ

の梵鐘は、わが祖先の供養のために奉納したものだから」と言い返した。

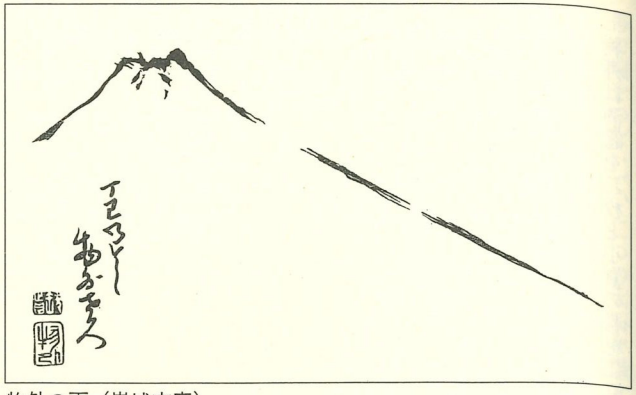
すると物外は怒って「それほど申されるのなら、わしにも決心がある」と言って、船の間に吊りさげてある梵鐘の竜頭をつかむと、頭上に差し上げて、海中へ投げこんでしまった。施主は和尚の怪力におどろき、自分の違約を詫びた。

この話には後日談がある。それからしばらくして、百貫以上もある梵鐘が漁夫の網にかかった。漁師たちは、この鐘は済法寺のもので、物外和尚が雨請いのとき竜神へ献上されたものだろう。この重い鐘が、軽々と網にかかったのは、竜神が物外和尚へお返しになったのであろうと、二百人余りで海岸へ引きあげた。海中では軽々と動いた鐘が、海岸ではそれだけの力でなければ動かなかったという。

漁師の知らせを受けて、物外が海岸へ来てみると、梵鐘の上部にある瘤が八個だけ欠けていた。物外はこれは八大竜王が一個ずつ受納されたもので、あとは済法寺へ返すとの神意に相違ないと喜んだ。物外は竜頭をつかみ、軽々と肩にのせて寺の門前へ行き、石段を登ってもとの鐘楼へ吊りさげた。あまりの怪力に見ている人たちは声も出なかったという。

こんな話もある。物外が小林南越と同道して播州路（兵庫県）を歩いているとき、出野の宿の茶屋で休んでいると、外で騒ぎが起こった。茶屋の亭主にたずねると、ちょっと見て参りましょうと亭主は出ていったが、すぐ戻ってきて「愚痴の多吉のいやがらせがはじまったのでございますよ」と言った。





物外の画（崇城文庫）

物外不遷画像
（尾道市　済法寺蔵）

亭主の話によれば、この先に北条（加西市）というところがあって、そこに多吉という馬子が住んでいるが、酒を飲むとくせが悪くなり、自分のひいている馬に荷物がついていないと、往来の人の荷物を無理やりにせがむ。客が聞き入れないと泣き出してからんでくるので、愚痴の多吉という名前がついたという。

若い女が手風呂敷の荷物をもって通りかかり多吉にからまれたという。女は駄賃をあげるから勘弁してくれといったが、多吉が聞きいれず女は途方にくれていた。それを弥次馬が面白そうに見物するので、騒ぎが大きくなったのだという。

それを聞いた物外は周囲を見渡すと、裏の方へおいてある石を指さし

「あそこにある角石は何にするのだ」と聞いた。

「あれは氏神様の鳥居の根石にしようと取り寄せたのでございますが、少し形が悪いのであのままにしております」と亭主が答えると

「目方はどのくらいだ」

「一つが四十貫（一五〇kg）と申しておりました」

「あの石をちょっと貸してくれるか」

「よろしゅうございますが、どうなされるのでございますか」

と亭主はけげんそうに物外の顔を見つめた。

物外は酒筵を二枚と小倉の帯を二筋借りて、角石を筵で包み十文字に帯をかけ、両方の



帯の端をつないで、二つの大石を振りわけ荷物のように肩にかけ、あっけにとられている亭主を尻目に北条の方へ歩いていった。

物外は人だかりをかきわけて前へ出ると、多吉へ近づき、「これこれ、いやがる女中の荷物を無理につけてゆくよりも、わしの荷物を運んでくれ。駄賃はお前の望むだけ与えてやろう」と言うと、多吉はすっかり上機嫌になった。「へい、どこまで運びますんで」と言うので「加古川まで運んでもらおうか」と応じ、筵包みを降して渡すと、多吉は帯に手をかけ、馬の背に載せようとした。しかし荷はびくともしない。「それなら、わしが馬に載せてやろう」と物外が石の包みを馬の背中へ載せると、馬はその重さで前足を折って倒れてしまった。

「これ、へたばってしまうとはあきれた馬じゃ。お前の馬は犬より弱いじゃないか。駄賃はかまわんから、荷物を運んでくれ」と責めたてると、多吉は顔色を土色にしてあやまった。二度と無法なことはしないと言うので、物外は許し、女を連れて茶屋まで石を戻しに行ったという。

物外と近藤勇との試合も面白い。

ある日、物外が京の町を歩いていたとき、新選組の屯所の前を通った。竹刀の音がするので、武者窓からのぞいていると、数人の壮士が出てきて、「武士の家をのぞくとは不届だ」と責めた。

「私は近ごろ京へ出てきた雲水ですがあまり盛んに竹刀の音がするので、ついのぞいてしまいました。ひらにお許し下さい」と物外はあやまったが、壮士たちは、「稽古をのぞく以上武術の心得があるのであろう。とにかくなかへ入って、一太刀見せてもらおう」と言う。仕方なく和尚はなかへ入り、乞われるままに鉄如意をもって立ち合ったが、またたくまに数人を打ち伏せてしまった。

すると上座にいた武士が「なかなか若い者の及ぶところではない。私は隊長の近藤勇です。一手お相手いたしましょう」と言った。和尚はびっくりしたふりをして、「貴方が有名な近藤先生ですか。私のような雲水の及ぶところではございません」と応えたが、勇は許さなかった。仕方なく物外は頭陀袋から木椀二個を取り出し、「では、これでお相手致します」と言った。

勇は激怒して、真槍で一突きにしようとしたが、和尚はその穂先をかわし、蛭巻きを二個の木椀ではさんだ。勇ははずそうとしたが、どうすることもできない。力をふりしぼってみたが、引くことも突くこともできなかった。物外が一喝し手を離すと、勇は尻餅をつき、槍はその手から離れて三間ばかり飛び去っていた。

勇はそこで礼を正し名前を聞いた。物外と知って、今までの無礼を詫び厚くもてなしたという。

物外の流名は「不遷流」と呼ばれたが、その内容について詳しいことは伝えられていない。その門下三千人というが、武芸を継いだ門人はいない。物外は武芸のみならず、書画や俳句にも長じていたため、修行は、その提唱を聞き、参禅するという精神的な鍛錬に主眼がおかれ、他流のように形を学ぶものではなかった。



## その晩年

物外は晩年国事にも奔走した。慶応元年（一八四五）の第二次長州征討のころ、安芸広島藩主浅野長訓、讃岐丸亀藩主京極朗徹、同高松藩主松平頼聡らが某所（京都か？）で会談し、長州との調停を物外に依頼することにした。物外は快諾して朝廷へ勅許を三度も願い出たが、朝廷からは何の沙汰もなかった。それで門弟田辺虎次郎を連れて上洛し、粟田御殿内の諸役人に相談したが、「貴僧は老体であるから、このような事件は見合わせた方がよいのではないか」と言われた。それでもあきらめず、虎次郎に願書をもたせて禁中へ直訴に及んだ。虎次郎は狼籍者として捕えられたが、「私は物外の使者でございます。再三願書を奉呈致しましたが、何のご沙汰もないので、師の物外がこの願書をもって上洛しております。私の身は微塵になりましょうとも、願書だけは御前へ伝奏していただきたい」と言った。このことが孝明天皇の耳に届き、やっと願書は伝奏されることとなった。

その翌々日、ついに孝明天皇は物外を召し願意を聞き届けたのだった。その後、物外は

幕府と長州との調停を図ろうとしたというが、情勢は物外ひとりが云々できるものではなかった。

東奔西走のなかで慶応三年（一八六七）八月、物外は大坂にいて、体調を崩したため福島屋長兵衛の宿に逗留（とうりゅう）することになった。そのため広島から野村某を呼び種々の相談をしたという。体調が回復した十一月、一旦尾道へ戻ったのち長州へ下ることを決め、同二十五日、船へ荷物を積み込み、翌朝の出帆に備えた。備中から門弟の田辺重次郎（ママ）がつきそいのため到着した。物外は宿屋の者たちに礼を述べたりしていたが、しばらくして「すこし気分が悪いから背中を叩いてくれ」と言った。重次郎がそうしているうちに、物外は眠るように往生（おうじょう）をとげた。時に七十四歳であった。（『物外和尚逸伝』『一大鏡』『済法寺文書』『尾道市史』『安芸備後両国偉人伝』ほか）

# 斎藤弥九郎◎神道無念流◎

## 新時代へ目を向けた剣客

## 江戸の三道場

幕末に江戸の三道場と呼ばれたのは、北辰一刀流千葉周作の玄武館、鏡新明智流桃井春蔵の士学館神道無念流斎藤弥九郎の練兵館であった。しかし弥九郎は「これからは剣術よりも砲術を学ぶべき」とも言い、幕末の開明的思想家で兵法家でもあった江川太郎左衛門（英竜）の片腕として活躍した。弥九郎は論客でもあって進歩的な思想の持主だったため練兵館には幕末の志士が多く集まった。

弥九郎は越中国氷見郡仏生寺村（富山県氷見市）の農家新助の長男で、母はすぐ近くの飯久保村の農家の娘いそである。寛政十年（一七九八）正月十三日に生まれた。弥九郎は幼いときから利発な子で、近所の僧に経書（四書五経など儒学の書物）の素読を習ったという。

文化七年（一八一〇）十三歳のとき高岡へ出て油屋や薬種屋に奉公していたが、剣で身を立てたいという望みを捨てることができず、文化九年（一八一二）十五歳のとき、わずか銀一分をもって故郷を出た。飛騨路を高山から信州へ出て江戸へ向った。地理不案内の上に路銀に乏しく、何度も野宿を重ねながら十数日かかってようやく江戸に着いた。

ただちに御三卿清水家の家臣になっていた土屋某という郷里出身の武士を訪ねた。土屋は弥九郎の志に感じ、知人の旗本能勢祐之丞を紹介してくれ、弥九郎はその家人となった。祐之丞は弥九郎が表裏なく働き、夜ひそかに読書をしているのを見て、神道無念流の岡田十松の門に入れてくれた。この岡田道場で江川太郎衛門と親しくなり、後世をともにするようになる。

太郎左衛門は弥九郎より三歳年下であった。伊豆韮山の代官の子で岡田道場で学んだのは十八歳から二十歳までの三年間だったが、その相手をしていたのが代稽古となっていた弥九郎であった。太郎左衛門は早くから新しい知識を学んでおり、弥九郎がのちに高島秋帆に砲術を学ぶようになったのも、太郎左衛門に勧められたものだった。弥九郎は太郎左衛門によって時代への目を開かれ、単なる剣術家から脱皮していったのである。

弥九郎は、岡田道場で剣術を学ぶとともに、文を古賀精里に、兵学を平山子龍に、馬術を品川吾作に学んだ。知識を得るには執拗で、のちに江川太郎左衛門の片腕として活躍できたのも、そうした勉学があったためである。

文政三年（一八二〇）八月十五日、岡田十松は五十六歳で没した。道場は嗣子熊五郎（のち十松利章）が継いだが、弥九郎は門人におされて後見となり、しばらくはここで道場の管理にあたっていた。弥九郎が独立したのは文政九年（一八二六）二十九歳のときである。その少し前、能勢家の用人堀和兵衛の養女岩を妻にむかえた。最初の道場は飯田町（東京都千代田区）のまないた橋の近くにあり、「練兵館」と名づけた。後援者は江川太郎

左衛門で、その費用もすべて太郎左衛門が出していた。太郎左衛門は弥九郎を高く評価しており、いずれは片腕として登用するつもりだった。

この道場は天保九年（一八三八）三月の火事で焼けたので九段の三番町へ道場を移した。これがのちに桂小五郎（木戸孝允）や渡辺昇などが塾頭を務めた九段の練兵館である。

天保六年（一八三五）五月、江川太郎左衛門は家督を継ぎ伊豆代官となると、直ちに弥九郎を召し抱えた。わずか四人扶持ではあったが、弥九郎は太郎左衛門と行動をともにする途を選んだのである。

## 東奔西走

太郎左衛門は、天保八年（一八三七）三月、弥九郎とともに刀剣商に扮して甲州の支配地の民情視察を行った。甲州は難治な土地として有名な所だったが、この視察によって悪政は改められた。領民は太郎左衛門の徳政を慕い、氏神に「世直し大明神」の幟を立てた。

天保十年（一八三九）の目付鳥居耀蔵の巡視にも弥九郎は太郎左衛門とともに従った。太郎左衛門の意を受た弥九郎が、沿海測量について渡辺崋山に諮ったのもこのころである。嘉永六年（一八五三）江川太郎左衛門の建議によって品川台場築造が行われた。太郎左衛門が設計し、弥九郎は現場監督として太郎左衛門を助けた。



天保十二年（一八四一）高島秋帆が、徳丸ヶ原（東京都板橋区）で実弾射撃の大調練をやったときには、弥九郎も銃隊の一列に加わり、弟三九郎とともに洋式大砲の打ち方を練習した（これにより、同地は「高島平」と呼ばれるようになった）。

同年七月、水戸に弘道館が開かれたとき、表演に招かれた弥九郎は弟三九郎らとともに神道無念流を披露した。徳川斉昭は弥九郎を召し抱えようとしたが、弥九郎は辞退し門人金子武四郎を推選した。しかし水戸家からは顧問料として扶持米が出ていた。

幕府が長崎の蘭学者幡崎鼎を逮捕したことがある。江川太郎左衛門がかねてから知っている人物だった。江戸の牢で苦労をさせないため鼎に金子をもたせようとしたが、護送の途中で警固の目をかすめて唐丸籠のなかへ金子を投げこむことは難しい。もし発見されればそれを命じた者は処罰をまぬがれないし、立場上、太郎左衛門が手配するわけにもいかない。そこで太郎左衛門はこれを弥九郎に頼んだのである。

弥九郎は乞食に身をやつし行列をつけながら近づく機会をねらった。たまたま雷雨になり、雨を避けようと茶店に唐丸籠をかつぎ入れようとしたとき、弥九郎は足をすべらせたような恰好で籠に近づいてすばやく金子を投げ入れた。そして「つい足がすべりまして」と頭を下げ雨のなかを走り去っていった。そのため鼎は牢中でさほどの不自由がなかったという（当時の牢内では牢名主に金子を渡すと手心を加えてくれた）。

太郎左衛門はあとで「手紙を以て申入候。然らば幡崎の一条格別に骨折、十二分に行届

き大悦致候。其許に之れ無くば斯く行届き申間敷と存候」と弥九郎に礼を述べている。

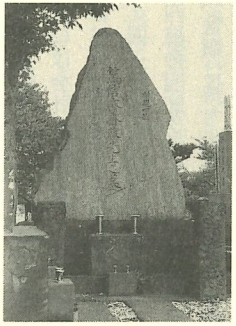
江川太郎左衛門は老中阿部正弘の政策立案者であり、また徳川斉昭からの相談も受けていた。多忙な太郎左衛門の施策や行政のすべてに弥九郎は手足となって働いていた。弥九郎にとって、太郎左衛門は庇護者であるとともに、新しい時代への目を開いてくれた師でもあった。また太郎左衛門のもとで多くの経世家たちと親交を結んだのだった。

しかし太郎左衛門は安政二年（一八五五）正月十六日、五十五歳で没した。弥九郎五十八歳のときである。落胆した弥九郎は、長男新太郎に家督を譲り、致仕（引退）して篤信斎と号した。

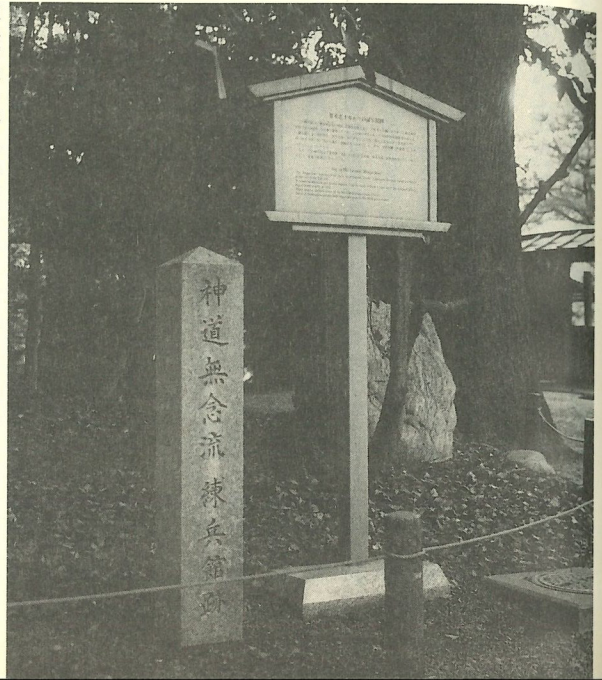
練兵館を長男新太郎に任せたあとも、弥九郎は時勢に叶う人材育成が道場の稽古だけでは充分ではないとして、洋式調練を加味した野試合をたびたび三番町の原で試みたりした。安政三年（一八五六）四月には、小石川の水戸邸で剣隊と銃隊と槍騎隊の三兵の対抗戦を行ってもいる。同五年（一八五八）には代々木に隠居所をかまえ、その地を開墾して演習場を設ける計画だった。この工事には門人をつかった。これは有事の際には武士も台場の築造などに従事しなければならぬという考えからだったが、袴に刀をさした者が手に鍬をもち、車を曳いている姿が、付近の人の目には不思議なものに映ったという。

弥九郎は歳をとっても自分を厳しく律した。六十を過ぎても、代々木から毎日御茶の水の砲術練習所へ通った。弥九郎の体を心配した門人たちが「九段にも家があるのですから、





斎藤弥九郎の墓
（東京都渋谷区　福泉寺）




練兵館跡の碑（東京都千代田区　靖国神社内）

そこからお通いになってはいかがですか」と言うと「人並みのことをやっていたのでは人並みのことしかできぬ。何事も人並以上に励まなければ人の上には立てぬ」と応えたという。

やがて大政奉還になり、将軍慶喜は謹慎した。倒幕軍に反抗して上野に籠っていた彰義隊から弥九郎を参謀として招きたいと言ってきたが、弥九郎は「いたずらに兵をおこし乱臣賊子の名を残すのは本意ではない」と断わった。

明治元年（一八六八）七月、弥九郎は新政府に出仕した。すでに七十一歳だったが、九月には会計官権判事となり大阪へ赴任した。翌二年（一八六九）七月には造幣局権判事に転じた（造幣頭は井上聞多だった）。

同三年（一八七〇）のこと。造幣局に火事がおこった。弥九郎は大阪へ連れてきていた四男の四郎之助とともに駆けつけたが、そのときすでに建物は火に包まれていた。回りに「書類は持ち出したのか！」と問うたが誰も答えなかった。火のまわりが早くて書類を持ち出す余裕はなかったのである。弥九郎は、一命を捨ててでも書類を持ち出そうとする者が一人もいないのが情けなかった。次の瞬間、弥九郎は火の中へ飛びこんでいた。止める間もなく四郎之助も父に続いた。「二人を死なせては……」とみんなは水をかけたが、火は衰える気配もなく、二人は出てこない。（死んだのではあるまいか……）そんな思いが人々の脳裡をかすめたとき、二人の姿が現われた。弥九郎はしっかり書類をかかえていたが、頭髪は焼けただれ着物はくすぶって煙をあげていた。弥九郎は持ち出した書類を手渡すと、そのまま崩れるように倒れ気を失った。

造幣頭の井上聞多が「弥九郎を殺してはならぬ」と手当を尽したので、どうやら一命を取りとめたが、老齢を理由に東京在勤となり、その年の五月東京へ戻った。そして翌四年（一八七一）十月二十四日、牛込見付（東京都千代田区富士見）の屋敷で、ついに息をひきとった。七十四歳であった。

遺言によって代々木の邸内に葬られたが、のち小石川の昌林院を経て渋谷区代々木の福泉寺に移された。

弥九郎は剣客というよりも政治家というべきであるかも知れない。江川太郎左衛門の右腕として、内政手腕も立派に発揮したし、兵法家としても一見識をもっていた。弥九郎ほどの見識と実力があれば、幕末明治にはもっと大きく浮かびあがれたはずだが、それをしなかったのは弥九郎の誠実さであった。

### 練兵館の人々

弥九郎の子のうち剣名をはせたのは、二代目弥九郎を継いだ長男新太郎と、「鬼歓」と呼ばれた三男歓之助である。

新太郎は弘化三年（一八四六）十九歳のとき武芸修行の旅へ出た。長州を訪れ、明倫館で試合をやったが、相手になる者はいなかったという。旅籠へ戻ると、亭主が「いかがでございましたか」と問うたので、「道場は立派であったが、あれでは黄金の鳥籠に雀を飼っているようなものだ」と新太郎は答えた。亭主がこのことを家中の侍たちへ知らせたため、怒った連中が新太郎を襲撃しようとして老臣たちに止められるという一幕もあった。このことが長州藩江戸屋敷の者の耳に入り「それならば練兵館を叩きつぶそう」と来島又兵衛ら八人が九段の練兵館に押しかけ試合を申し入れた。

弥九郎は伊豆韮山の代官所へ行って留守だったし、新太郎はまだ回国の旅から戻ってはいなかった。それで十七歳の歓之助が相手をし、ことごとく突き倒してしまった。これを機縁として長州の家中は練兵館の門人となる者が多くなった。のち桂小五郎が江戸に遊学したとき練兵館に入門したのはこの縁による。小五郎はのち練兵館塾頭となるが、弥九郎から多くの影響を受けている。

小五郎が安政五年（一八五八）藩命で帰国したのちは、大村藩士渡辺昇（のち子爵）が塾頭となった。

このころの話である。牛込市ヶ谷（東京都新宿区）にのちの新選組局長近藤勇の道場試衛館（「近藤勇」参照）があった。このころ江戸では他流試合（道場荒し）がはやっていたが、近藤の道場にもたびたびやってきた。しかし試衛館は門人も少なく道場主の勇も大



した腕ではなかったため、他流試合がやってくると、いつも練兵館の渡辺昇のところへ助けを求めてきた。もろん弥九郎が許すはずはなかったが、昇は内々で塾生を助太刀にやった。選抜係は太田市之進が務めていた。

試合がすむと、勇は助太刀に来た塾生に酒を馳走した。肴は沢庵だったが、修行中の塾生にはそれでもご馳走で、勇の道場へ行くのを楽しみにしていたという。また帰りには、勇は土産として昇に酒一升を届けさせた。昇の次には太田市之進が塾頭になっている。

練兵館に学んだ門人には、前出の桂小五郎、渡辺昇、太田市之進（長州）をはじめ、長州の高杉晋作、品川弥次郎、山尾庸三、土佐の谷干城太郎（干城）らがいる。弥九郎は徳川斉昭の知遇を得て、藤田東湖、武田耕雲斎らとも親しかったので、水戸家や長州の志士たちに近づくために入門する者もいたようである。練兵館は新時代の人物を多く生んだ。渡辺昇も、のちに「武術以外に教えられるところが多かった」と言っているが、つねに新時代に目を向けていた弥九郎の開明的な思想が、門人たちに大きな影響を与えたのである。

二代弥九郎を継いだ新太郎は、講武所（「男谷信友」参照）の剣道教授も務めたが、明治になってからは剣を捨て製茶業を営み、明治二十一年（一八八八）八月、六十歳で没した。墓所は父と同所にある。新太郎は書画にも長け博雅の人であった。

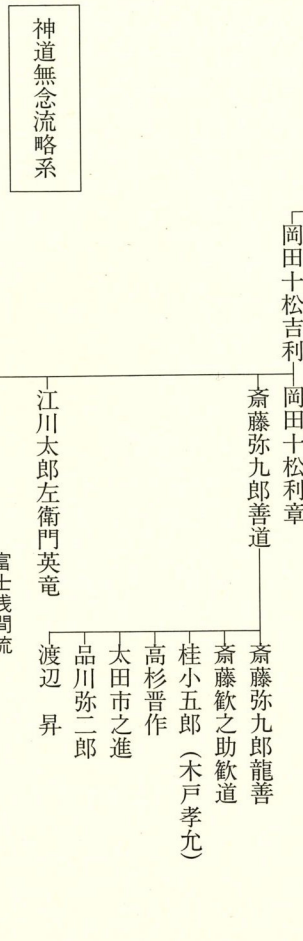
鬼歓と呼ばれた歓之助は、安政六年（一八五九）肥前大村藩（長崎県）で剣術を教えていたが、藩士に大兵の剣士がいて、あるとき歓之助と御前試合をした。試合は歓之助の一

方的勝利に終わったが、その後歓之助は消息を断った。しばらくして九州から門人の吉村豊次が歓之助の死の知らせをもってきた。それによると、みじめな敗北をした剣士が仲間とともに闇討(やみうち)にしようとした。歓之助はその剣士は斬ったものの鉄砲で殺されたというのである。

しかし、実は歓之助はこのとき死んだのではなく、江戸へ戻ってきている。日暮里(にっぽり)の本行寺に歓之助の墓と、斎藤歓之助先生碑が建っているが、それによれば明治三十一年（一八九八）一月十三日没、法名は英徳院殿歓道日雄大居士とある。（『斎藤弥九郎伝』『江川坦庵全集』『日本剣道』『維新史』『皇国武術英名録』ほか）



神道無念流略系



# 近藤　勇◎天然理心流◎

幕末に咲いたあだ花

## 板橋の露

慶応三年（一八六七）十月十四日、十五代将軍徳川慶喜は大政奉還を請い、翌日朝廷がそれを許可すると京都市中は混乱に陥った。浪士たちから恐れられた新選組も本陣を伏見奉行所に移した。十二月九日、朝廷は王政復古を宣言するが、混乱は収らず、十二月十八日、二条城の永井玄蕃頭は、新選組局長の近藤勇を軍議のために呼んだ。会議が終わり、勇が二条城を辞したのは八ツ（午後二時ごろ）を少し過ぎていた。

伏見街道の藤森で旧御陵衛士の阿部十郎が勇一行を見つけ、薩摩屋敷に知らせて同志の者と待ち伏せした。阿部十郎と富山弥兵衛の二人が途上の空家で待ち伏せていると、勇の姿が見えた。富山は近づくのを待ちかねて一発打ってしまった。弾丸は勇の左の肩に当たった。勇は馬をとばして伏見へ帰り、間もなく大坂城へ移って治療することになった。翌四年正月の鳥羽伏見の戦いには、副長の土方歳三が新選組を指揮して出陣したが、さんざんの敗北で、勇らは船で江戸へ逃げ戻った。

新選組が甲陽鎮撫隊となり、甲府城乗っ取りのために江戸を発したのはその年の三月一日である。勇は若年寄格、土方は寄合席格という身分になり、勇は大久保大和剛、土方は内藤隼人と称していた。勇は大名並みに長棒引戸の駕籠に乗り、土方は洋服を着て馬に乗っていた。新選組で江戸へ着いたのは四十四名だったが、脱走した者が多く、甲州行きには二十名足らずが従ったにすぎなかった。あとは寄せ集めの二百名ばかりである。第一日は新宿の遊廓で遊び、途中、甲州街道沿いの勇や土方の故郷を通り、いたる所で歓迎された。勇がその一生でもっとも得意を感じたのはこのときだったろう。考えてもいなかった大名並の身分となって故郷の地を踏んだのである。四日目に勝沼に着いたが、土佐の乾退助（板垣）の一隊が、前日すでに甲府城を占領していた。こうなると烏合の衆はもろく、たちまち半数が脱走した。



それでも一応は土佐兵と戦ったが鎮撫隊はあっけなく敗れ、ばらばらになって、やっとのことで江戸へ逃げ戻った。

勇が再挙を期し、下総流山（千葉県）で浮浪の士百二十名を集めたときには、昔からの同志は土方歳三ぐらいのものであった。四月三日、薩摩の有馬藤太は突然流山を包囲した。鉄砲の打ち合いが少しあっただけで勇は降伏した。薩軍の参謀伊知地正治が板橋にいるので、勇はそこへおくられた。取り調べで、勇はあくまで大久保大和で押し通したが、顔見知りの加納道之助がいたため、近藤勇であることがわかり、四月二十五日板橋の刑場で首を刎ねられた。時に三十五歳。閏四月八日、その首は京へおくられて、三条河原にさらされたのである。

## その出生

近藤勇は天保五年（一八三四）宮川久次郎（久次とも）の三男として武蔵国多摩郡石原村（東京都調布市）に生まれた。幼名を勝太といった。農家だった久次郎は自宅に道場を作って月に三回出張稽古にくる近藤周助から教えを受けていたが、周助は嘉永二年（一八四九）勝太を養子とし、江戸へ連れていった。

天然理心流と称した周助の道場は試衛館といった。道場ははじめ市ヶ谷柳町（東京都新宿区）にあったが、のち牛込二十騎町（同）へ移された。天然理心流は文政のころ近藤内蔵助長裕の創成といわれ、その門弟近藤三助方昌が八王子に住して門弟を教えていた。多摩地方に同流が盛んなのはこのためだった。方昌のあとを養子の近藤周助邦武が継ぎ、道場を江戸へ移したが、多摩地方を出張稽古で回っていた。

嘉永四年、試衛館に同郷の土方歳三が入門してきた。のち新選組で活躍した山南敬助、沖田総司、井上源三郎、長倉新八、藤堂平助らも続いた。幕末、多くの道場が林立したなかで、試衛館はさほど有名ではなかった。次のような話が残っている。

勇は他流試合がにが手で、道場荒しが来ると近くにあった斎藤弥九郎の練兵館の塾頭渡辺昇に助っ人を頼んだ。竹刀技は得意でなくても勇は一目で相手の技倆を見ぬき、それに



相応する程度の者を貸してくれと言ってきたという。

練兵館の塾生は、ふるまい酒が出るので、それを楽しみに出かけていたという（「斎藤弥九郎」参照）。

文久二年（一八六二）十二月、幕府は清川八郎（千葉周作の門弟）の建策をいれて、浪士組を募集することになった。浪士組は開幕二百年を名目に上洛する将軍家茂を警備する目的のものだった。この募集に近藤勇以下試練館の門弟たちは応募した。この機会にうまくすれば御召抱えになるかもしれないという望みがあった。

翌文久三年（一八六三）二月四日に小石川伝通院で浪士組の初会合が行われた。このとき鵜殿甚左衛門長鋭（鳩翁）が取扱となり、山岡鉄舟、松岡万の二人が取締となった。浪士組が江戸を出立したのは二月八日、勇はまだ平隊士にすぎなかった。清川八郎は一応表面の役から身を引いていたが、これに同行した。

ところが京へ着くと清川八郎は浪士組を攘夷に利用しようとして江戸へ立ち戻る勅諚を得た。これは生麦事件で英国との関係が不穏になったためだったが、勇らは「我らは幕府のお召しに応じて集まった者であるから、将軍の沙汰がない限り京より離れることはできない」と言って、浪士組から脱退し京に残ることにしたのだった。残留したのは芹沢鴨、新見錦、野口健司、平山五郎、平間重助、近藤勇、土方歳三、藤堂平助、井上源三郎、山南敬助、沖田総司、永倉新八、原田左之助の十三名だった。このとき京都守護職会津侯預

りとなり、宿舎の八木家に「新選組」の看板を掲げた。隊員を募集するとたちまち百余名が集まり第一次編成が行われた。

局長は芹沢鴨、近藤勇、新見錦の三名、副長は山南敬助、土方歳三の二人、助勤は沖田総司、永倉新八ら十四名という編成であった。そして大坂の鴻池善右衛門から二百両を借り、京の大丸呉服店で、麻の羽織、紋付の単衣、小倉の袴、羽織は浅黄地の袖へダンダラ染を染めぬいた制服を作った。

新選組は会津侯預りだったため、町奉行が手を出せないところから随分乱暴が行われた。それを利用して勇は局長の新見錦に詰腹を切らせ、もう一人の局長芹沢鴨を暗殺し、完全に新選組の主導権をにぎった。

## 池田屋事件

新選組が京で行ったことは、勤皇浪士の暗殺、それに脱退者および反対派の暗殺であった。そのなかでも元治元年（一八六四）の池田屋の暗殺は有名である。

四条小橋の升屋喜右衛門という古道具屋を勤皇党の密偵とみて壬生の屯所へ連行し拷問にかけた。このとき土方歳三は升屋を逆さに吊るして足の甲から裏へ五寸釘をつきさし、それへ百目蠟燭を立てて火をつけ蠟を肌へ流すようにしたという。これには升屋もたまりかねて自分が古高俊太郎であることを白状した。そしてその自白から、六月二十日前後を期して禁裏の風上に火を放ち、参内する会津侯を要撃し、天皇を長州へ動かす計画がわかった。そこで長州藩士らの動きを調べ、三条小橋の池田屋と縄手の四国屋に浪士が集まっていることをつきとめた。

六月五日の夕方、勇は隊士に出動を命じた。守護職の手兵が来ることになっていたが、なかなか姿を見せないので、四ツ（午後十時ごろ）勇は隊を二つに分け、一隊は土方歳三が率いて四国屋へ向い、一隊は勇と共に池田屋へ斬りこんだ。新選組は捕えに向ったのではなく、斬りに行ったのである。土方の一隊は、四国屋に誰もいなかったため、すぐに池田屋に向った。

このとき約三十名が池田屋に参集していたが、新選組三十名が突入し、肥後の宮部鼎蔵、土州の北添佶麿、長州の吉田稔麿、同じく杉山松助、肥後の松田重助、播州の大高又次郎、土佐の石川潤次郎の七名が殺され二十三名が逮捕された。池田屋の外はようやくかけつけた守護職と京都所司代兵三千人（七百人とも）が取り囲んだという。

この事件を序曲として、七月十九日には蛤御門の変（禁門の変）が起きた。新選組は見廻組とともに出陣し、赤字に「誠」の字を白く抜いた幟をひるがえして九条河原に待機していたが、さして戦いらしい戦いはやっていない。

その後、勇は一旦江戸へ戻り、深川佐賀町（東京都江東区）に道場を構えていた伊東甲

子太郎を同志に誘い京へ戻った。甲子太郎が八名を伴って京へ着いたのは十二月一日だった。翌慶応元年（一八六五）、新たに新選組の再編成を行った。総長に近藤勇、副長に土方歳三、参謀に伊東甲子太郎とし、沖田総司ら腹心の者たちが隊長となった。その少し前勇の片腕として活躍していた山南敬助は、暗殺第一主義の新選組の方針に疑問をもち脱走したが、捕えられて詰腹を切らされている。

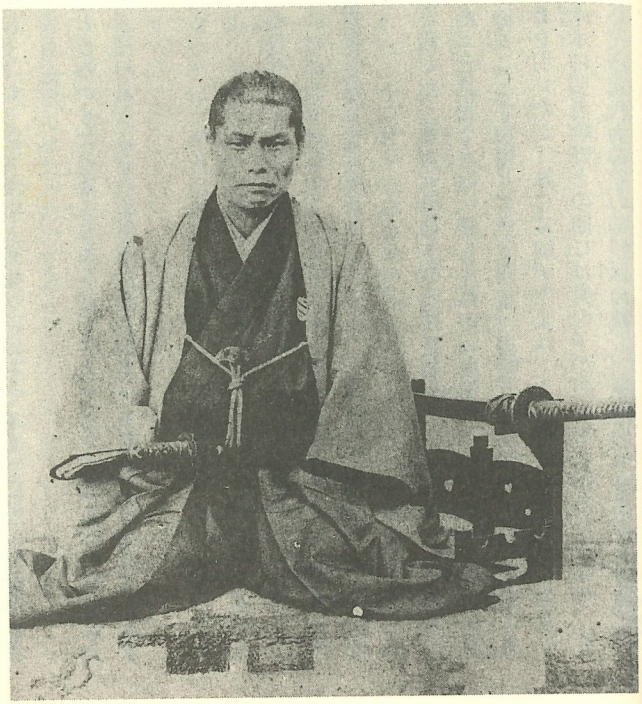
四月下旬、新選組は住みなれた壬生の屯所をひきはらって西本願寺へ移った。伊東甲子太郎はもともと尊皇攘夷であったため勇一派とうまくいくはずはなく、隊は自然に勇派と伊東派に分れた。長州征討が終わって京へ戻ると、伊東、篠原泰之進らは勇と激論し脱退を決意した。

しかし新選組は脱退を許さない隊規だったため、伊東らは別動を企て、慶応三年（一八六七）三月十日泉涌寺塔中戒光寺の長老湛然の肝煎で、孝明天皇御陵衛士を拝命した。事実上の脱退で十五名が参加したが、大義名分があったため勇も許さざるを得なかった。この衛士のなかに斎藤一がいたが、これは間諜として伊東派に加わった者であった。伊東の方でも新選組のなかに一味の者を残していたが、のちに脱退をはかって殺された。

六月十日、幕府は新選組の総員を正式に直参とした。勇は見廻組頭取、土方は見廻組肝煎、沖田総司らは見廻組格となり、勇は元高三百俵に役料三百俵、土方には役料五人扶持が与えられた。

近藤勇の墓
（三鷹市　竜源寺）

近藤勇画像



その後、伊東は九州遊説に下るなど薩摩藩士と密接な行動をとっていたが、十一月十八日新選組の手によって暗殺された。

新選組がその名を京洛にとどろかせたのはこのころまでだった。十二月には大政奉還となり、新選組は激流に浮かぶ筏のようにもろくも押し流されていったのである。

## 勇の人物

勇の妻は、八王子千人同心松井八十五郎の娘でつねといい、勇より三歳年下だった。二人の間には一人娘のたまがいたが男子がなかったので、勇の長兄宮川音五郎の次男勇五郎を養子としたが、その子勇吉は日露戦争で戦死し、たまも二十五歳で死んだので勇の正統は絶えている。

京での勇はかなりの浮名を流した。勇が七条通り醒ヶ井に囲っていたのは、もと島原の木津屋にいた深雪太夫だった。一旦女を大坂に移しそれから身受けした。ところが女が病気になり伏見の医者の家に泊りこんで治療している間に、当時十八歳であった女の妹に勇は手をつけた。それで女は身を引いたが、妹には娘が生まれ、その娘はのち祇園で芸者になったという。また京の三本木の芸者駒野との間には男の子があったと伝えられるが、その子については明らかでない。所司代大部屋の部屋頭の娘で、植野という名で芸者に出ていた女も身受けして、その父のもとにおいていた。その他島原木津屋の金太夫とも馴染を重ねていたという。



勇の小姓をしていた稗田利八（もと池田七三郎）の思い出話によれば、勇が二条城へ出かける時の恰好は、仙台平のまち高袴をつけ、丸に三ツ引の黒紋付、髪は総髪で、呂色鞘の刀、柄のこしらえは真黒、白い緒の草履をはいて、白い馬に跨がって登城した。若党二人に両掛一荷、槍一筋、それに二十人ばかりのお供がついたというが、これは相当に暗殺をやっていたため、いつ勤皇浪士から襲われるかもしれず、それに備えたものだった。

近藤勇という名が高くなったのは、京へ上り新選組を率いるようになってからである。もし勇が五十年早く生まれていたとしたら、間違いなく純朴な一道場主で終わっただろう。それも練兵館に助太刀を頼み、お礼に酒一升を届けるような平凡な町道場のままであったろう。三十年あとに生まれていれば、平凡に育ち、日清戦争、日露戦争には一兵卒として招集されていたかもしれない。

しかしその平凡であったゆえに勇は多分に仲間に慕われたことと思える。新選組の事実上の統率者は土方歳三であったが、土方は決して勇を超えようとはしていない。非情な時代にあってこのふたりの友情は途絶えなかったのである。

勇が率いた新選組とはいったい何だったのだろうか。歴史上、革命には血のにおいがつ

きまとう。幕末明治の回天はまぎれもなく革命であったから、多くの血が流れたことは仕方のないことだったかもしれない。平時なら平凡に生涯を送ったであろう勇が新選組という暗殺集団を組織したのは、革命の高揚した麻薬のような狂気を吸ったからであろう。しかしこればかりは勇を責めるわけにはいかない。戦争とは革命とは、常に狂気をはらんだ集団催眠の空気がつきまとうからである。

明治になってもいくたびかの抗争で多くの犠牲者が出たが、そのなかでも新選組の存在は特異であった。ひたすらに反幕派を斬った。相手を斬るだけではなく、味方もずいぶん斬った。新選組の局中法度には「一、士道ニ背ク間敷事、局ヲ脱スルヲ不許」そして「一、私ノ闘争ヲ不許」などと定められ、「右条々相背候者切腹申付」とあるように、背いた者には容赦なかった。

試衛館時代からの知己でもあった山南敬助は、勇の人物をよく知っていたし、決して嫌悪はしていなかっただろう。しかし、新選組の狂気についていけず脱走した。勇は動揺して土方に対応を委ねたが、新選組の規律を守るためには「泣いて馬謖を斬る」しかなかった。新選組の行く末には死しか見えず、それは勇自身の運命を暗示している。

新選組は幕末に咲いたあだ花だった。しかしその線香花火のようなはかなさゆえにいまも新選組の人気が続いているのかもしれない。（『新選組始末記』『新選組物語』『維新史』『京都守護職始末』『復古記』ほか）



天然理心流略系

飯篠長威斎家直……（不詳）……天然理心流 近藤内蔵之助長裕―近藤三助方昌―
- 近藤周助邦武―近藤勇昌宜―近藤勇五郎
- 土方歳三義豊
- 沖田総司房良

# 伊庭八郎◎心形刀流◎

## 幕臣の意地を通した剣客

## 回天の時代

伊庭八郎（八郎次）は天保十四年（一八四三）江戸に生まれた。諱は秀穎。伊庭軍兵衛秀業の長男である。秀業は天保の改革で水野越前守忠邦に見出され御書院番に採用されたが、忠邦の失脚によって免職となり、下谷（東京都台東区）に道場を開いて弟子に教えていたものの、安政五年（一八五八）コロリ（コレラ）で世を去った。八郎はまだ幼かったので養子の軍兵衛秀俊が家を継いだ。講武所の教授方に出ていた伊庭軍兵衛はこの秀俊である。八郎は秀俊の養子として成長した。実父秀業から剣の手ほどきを受け、養父秀俊に教えを受けた八郎は上達も目ざましく、早くから「伊庭の麒麟児」として将来を嘱望されていた。

心形刀流を興した伊庭是水軒秀明が江戸城下に道場を開いて活躍したのは元禄ごろである。是水軒は天和元年（一六八一）本心流の志賀如見斎から印可を受けた。その後諸国修行に出て、大和の山中で隠士妻片謙寿斎貞明に会い、その教えを受けたのち、一派を開いて「心形刀流」と名づけた。天和二年（一六八二）是水軒三十四歳のときである。如見斎（常理子）より伝えられた目録に「三陰三陽本末之間数量形刀雖有之、当流之極意者、本心形刀而已」とあるところから、心形刀流と名づけたものである。



是水軒はまた常吟子と称した。伊庭氏は代々軍兵衛と称し同時に剣号を「常…子」と号している。これは伊庭氏だけではなく心形刀流の印可を受けた者はみな同じような剣号をつけた。肥前平戸の城主で心形刀流の印可を受け、剣術に関する著書も残している松浦静山（壱岐守清）は常静子と号していたし、その師の岩間利生は常稽子と号していた。八郎の実父秀業は常同子と号していた。

松浦静山の『剣攷』には、心形刀流の刀名が挙げてある。それによれば「丸橋刀、陽重剣、中道志破記、波切刀、切甲刀、乱車刀、獅子乱刀、虎尾剣、向満字、横満字、刀合切、相捲、清眼破、柳雪刀、鷹之羽、三心刀、中眼力、右旋刀、左転刀、剣忍誠、胎内刀、水月刀、中道下藤、破先刀、鎲捨刀、中眠刀、無拍子」などがあった。

十四代将軍徳川家茂が小姓組を廃して、剣槍に優れた者を奥詰にしたとき、八郎も抜擢されて一員に加えられた。元治元年（一八六四）家茂の上洛に、八郎は養父秀俊とともに従った。京で五月七日参内したあと家茂は大坂から軍艦で江戸へ戻ったが、奥詰や講武所の剣槍方は陸路をとることになった。八郎は六日に大坂を出立したが、石部の宿で急に京へ呼びもどされた。京の治安が不穏であるというのである。新選組が池田屋へ斬りこみ勤皇浪士を暗殺したので、いままで京の近くにひそんでいた勤皇党が一勢に立ち上がるという噂が流れていた。しかし何事もなく、六月十四日には江戸へ戻るよう命令を受けた。

慶応元年（一八六五）五月、家茂が長州再征のために上洛したとき、八郎も再び供に加

わったが、この再征は幕軍の大敗に終わり、その上家茂が大坂城で没してしまった。

そのため徳川慶喜が十五代将軍となり、傾いた幕府の立て直しをやろうとしたのだが、長州における敗戦はすでに幕府の権威は回復不可能なところまで追いこんでいた。慶喜は奥詰をやめて遊撃隊を組織、伊庭秀俊を隊長とし、八郎もその隊員に加えられた。

傾きかけた幕府はもろかった。反幕勢力は余勢をかって倒幕へと走った。慶応三年（一八六七）十月、ついに慶喜は大政奉還し、征夷大将軍を辞職して政局収拾を図った。そして二条城を引き払い大坂城へ移ったが、反幕勢力はあくまで倒幕を実行しようと江戸の薩摩屋敷を拠点に、商家に押しいり軍用金をかすめとるなどの事件が続いたために、市中取締に当たっていた庄内藩（山形県）の手兵が三田の薩摩屋敷を焼討ちした。

平穏に事を収めようとしていた慶喜だったが、事態打開を朝廷に訴えようと上洛することになった。慶応四年（一八六八）正月のことである。しかし鳥羽口を守っていた薩摩兵と兵火を交え幕府軍はあえなく敗れたのである（鳥羽伏見の戦い）。このとき遊撃隊は先鋒として伏見に向ったが、剣槍をとっては達人ぞろいの遊撃隊も、雑兵の鉄砲の前にもろくも敗れ去ったのだった。

幕府軍の八郎は弾丸を避けながら進んでいった。敵に近づかなければ心形刀流の真価を発揮することもできない。何としても敵に近づきたかった。

敵の一団はすぐ近くに見えた。八郎はそれを見るや駆け出した。その瞬間、弾丸が胸に



当たって八郎は倒れた。それからしばらく気を失っていた。弾丸は具足で止まって体を貫かず一命を取りとめたが、弾丸の当たった衝撃で血を吐いた。もはや戦うことはできず大坂から幕府の軍艦で江戸へ戻った。

## 挙兵

江戸へ戻った八郎は傷の手当を続けたが、その間に世情はめまぐるしく動いていった。二月、慶喜は上野寛永寺へ移り恭順の意をみせようとしたが、倒幕軍はあくまで慶喜を討とうとした。しかし勝海舟、山岡鉄舟、大久保一翁らの活躍によって四月には江戸城は無血で明け渡され、江戸市民はほっと胸をなでおろした。

八郎は、幕臣がなすすべもなく薩長の軍門に下ったことがたまらなかった。一矢むくいようと旧遊撃隊の同志と柳橋で会合した八郎は、榎本武揚の軍艦で木更津（千葉県）へ渡り、請西陣屋の林忠崇に挙兵の相談をした。請西藩（貝淵藩）はわずか一万石の小大名ではあったが、挙兵の名目に大名の名が欲しかった。

林家はもとからの大名ではなく、側衆から若年寄に上った林忠英が文政八年（一八二五）興したばかりの小藩であった。林忠崇（忠英の孫）も八郎らとともに挙兵することを決め、閏四月三日には木更津を出発、船で相模国真鶴（神奈川県）に上陸し熱海を越えて

御殿場に陣を置いて、あくまで倒幕軍と決戦しようとした。江戸では彰義隊が上野に挙兵していたので、呼応する手筈だったのである。

しかし、山岡鉄太郎が来て兵を収めるように諭したため一旦甲斐の黒駒（山梨県）へ陣を移した。その後沼津へ移り、挙兵のきっかけをうかがっているうちに梅雨になり、士気は衰えてしまった。

人見勝太郎が配下の隊員をつれて箱根へ進撃したのはそうしたときだった。いつまでもじっとしていることができなくなっていたのである。しかし、これは無謀な行動で、たちまち敗れた。この知らせを受けた林忠崇は、たとえ人見勝太郎が軍令を破ったものだったとしても、そのままでは人見隊は全滅になるし、士気も衰える。そう考えて全軍に進撃を命じたのだった。

伊庭八郎は第二軍を率いて箱根の関所へ向った。

関所を守っていたのはわずかな兵で、それも小田原藩の者たちだったので抵抗もなく手中におさめた。ここに本営を置くことにしたところ、上野に籠った彰義隊がほとんど全滅に近い状態で敗北したという知らせがきて、脱走者が続出した。

小田原藩は林らと戦うことを避けていたが、この時勢をみて討伐の兵をおこした。小田原へ向った八郎の部隊と小田原藩の兵たちが衝突したのは湯本だった。八郎の一隊は薩長軍とともに押しよせた小田原兵に追いたてられた。八郎は弾丸を受け肩先を斬られて、部下に助けられながら箱根へ戻ったが、もはや戦えるような状態ではなかった。忠崇らも上野が敗れた以上ここで戦うことは無意味であるとして残兵を連れ榎本武揚の軍艦に乗り込んだ。



奥州では列藩同盟をつくって新政府に反抗していたので、林らはそれらに合流しようとした。そして忠崇は奥州戦線に加わったが、八郎はそのまま船に残り、箱館まで行くことにした。

## その死

その少し前の五月二十四日、榎本武揚は、徳川家の駿府移封によって禄を離れた旧幕臣の蝦夷地（北海道）移住を、徳川亀之助（家達）、松平斉民（津山藩主）の名をもって東征軍の江戸鎮台に陳情した。榎本には、開拓に名をかりて兵を集め幕権の回復を図ろうという意図があったが、その手は読まれていて、当然ながら陳情は許可にならなかった。

そのうち会津藩士雑賀孫六郎が松平容保の書状をもって榎本を訪ね、仙台から東征軍の背後をつくことを懇願してきた。榎本は承諾し、ひそかに江戸から脱走する準備に着手した。

八月十九日の夜、開陽丸、回天、蟠竜、千代田形、長鯨、神速、美賀保、咸臨丸の八隻

がひそかに品川沖を出航した。榎本武揚、松平太郎、永井尚志をはじめとして仏国士官ブリュネ・カズヌーブらも加わっていた。しかしこの脱走は天候が一変したために、ばらばらとなり、咸臨丸、蟠竜の二隻は下田付近に漂着、咸臨丸は拿捕されてしまった。

しかも仙台藩が東征軍へ帰順してしまったので、榎本らは蝦夷地での再挙を図ろうとした。旧幕臣を諸艦に分乗させ、九月二十日には蝦夷地鷲ノ木に着いた。伊庭八郎もこの脱走兵の一人として加わっていたが、まだ傷は癒えておらず身動きは自由にできなかった。

榎本らは十月二十五日、箱館および五稜郭を攻略、孤立した松前徳広は城を捨てて館村に移った。その前に土方歳三の一隊は松前城を占領していた。続いて松岡四郎次郎の一隊が館村を攻めたため松前徳広は津軽へ走り、蝦夷はことごとく幕軍の手におちたのである。

十二月十五日、榎本らは蝦夷平定を機として組織を固めた。榎本武揚を総裁に、松平太郎を副総裁に、海軍奉行には荒井郁之助、陸軍奉行には大鳥圭介、松前奉行に人見勝太郎、開拓奉行に沢太郎左衛門、箱館奉行に永井尚志と決まった。新選組で京を席巻した土方歳三は陸軍奉行並となり、伊庭八郎は歩兵頭並として一隊を指揮することになった。半年の療養で八郎はようやく再起することができたが、箱根で受けた傷で左手は完全に自由を失っていた。

この間、九月八日には明治と改元され、新政府が動き出していた。

明治二年（一八六九）三月、新政府は蝦夷地討伐軍を出発させた。八隻の軍艦が宮古



（岩手県）に入港したのは三月二十一日であった。

その前日の夜、海軍奉行荒井郁之助を司令官として、回天、蟠竜、高雄の三隻は宮古へ向った。しかし途中嵐にあって二十五日の夜明けに回天だけが宮古港沖へ達した。ほかの二隻は姿を見せなかったが、郁之助は襲撃の機が失われるので、回天単独で攻撃をはじめた。しかし新政府の軍艦にその砲撃は通じず、逆に米国製ガトリング砲の攻撃を受けて、回天艦長甲賀源吾は戦死を遂げた。郁之助は戦意を失い、宮古港を離れた。

新政府の艦隊は、その日宮古を出て、翌日には青森に着いた。四月六日、新政府軍は青森を発し、九日には江差の北三里余の乙部に上陸、一隊は松前に向い、一隊は二股の山道を箱館へと進撃した。

伊庭八郎は松前城にいたが、兵五百人を率いて江差へ向った。根部田村で政府軍と会戦となり、これを破った。八郎は右手で刀をふるい目ざましい活躍をしたが、江差を奪還するには至らず、松前城へ戻った。

一方、二股口の攻防戦は激しかった。土方歳三が一隊を率いて救援に赴き、新政府軍を破った。この勝利を聞いて、伊庭八郎は江差の奪還を図ったが、猛攻を受けて再び松前へ退却せざるを得なかった。

新政府軍は黒田清隆率いる援軍が江差へ到着し、軍艦も松前に集結した。旧幕軍はよく応戦したが、弾薬が底をついたのでやむなく松前城を捨てた。八郎も松前を出て木古内の

大鳥圭介の隊へ合流した。

松前城を落とした新政府軍は余勢をかって木古内を攻めた。不意をうたれた旧幕軍は崩れた。札刈の海岸で八郎は部下を励まして奮戦したが、銃弾を肩に受けてよろめいた。「隊長」とかけよってくる部下に、「わしにかまうな。最後の一兵になってもここを守るのだ」と叫びつづけた。

しかし八郎がどんなに叫ぼうとも、崩れだした味方を立ちなおらせることはできず、ついに旧幕軍は札刈をすてた。八郎は部下に助けられて五稜郭の本営へ運ばれたが二度と立てるかどうかあやぶまれた。

五月十一日、新政府軍は箱館の総攻撃に出た。旧幕軍は軍艦をことごとく失い、海上からの援護の道は途絶えた。土方歳三も、この日討死を遂げた。

翌十二日、新政府軍の軍艦は五稜郭の砲撃をはじめた。八郎は身を横たえたまま、砲撃の音を聞いて唇をかみしめていた。次から次にもたらされる敗戦の知らせに、何度か立ち上がろうとしたが体はもはやかなわず、空しいあがきにすぎなかった。

伊庭の麒麟児といわれた自分が、何度も戦場に出ていながら、存分に刀をふるうことができなかったのが無念であった。剣術は鉄砲の前には役に立たないものになったのであろうか。この戦いに勝ち目などなかったが、幕臣として剣客として最後の意地をみせようとした戦いであった。八郎はその意地に殉じた。



八郎は目を閉じて、じっと砲声を聞いていた。めまぐるしかった過ぎ去った日のことが次から次へと浮んでは消えた。砲撃の音がとだえて、しばらくの静けさがあたりを包んだとき、八郎の若い命は終わりを告げたのである。二十七歳であった。八郎の辞世は、「まてよ君迷途も友と思ひしにしばしをくる身こそつけられ」であった。法号秀穎院清誉是一居士、墓は生母と合葬されて東京都中野区沼袋（ぬまぶくろ）の貞源寺にある。

のち明治三十四年（一九〇一）、立憲政友会の大立者星亨が東京市庁において暗殺されたが、討ったのは東京農学校（現・東京農業大学）校長や日本貯蓄銀行頭取を歴任した伊庭想太郎であった。

想太郎は八郎の末弟であり、自身も心形刀流の剣客であった。星の言動を「江戸の士風を汚す」とし、短刀で刺殺したのである。八郎、想太郎ともに江戸の士風を守ろうとした一徹の剣客だった（想太郎は、逮捕されたものの「道義腐敗を憂えたもの」として情状酌量され無期徒刑となったが、二年後服役中のまま病死した）。（『伊庭氏剣法家伝略記』『伊庭八郎征西日記』『剣法夜話』『維新史』『復古記』ほか）

心形刀流略系

流祖
伊庭是水軒秀明
伊庭軍兵衛秀康
伊庭軍兵衛直保
伊庭軍兵衛秀直
伊庭軍兵衛秀矩
柳剛流
岡田総右衛門希良
岡田作馬之助信忠
伊庭八郎（次）秀長
伊庭軍兵衛秀淵
伊庭軍兵衛秀業
伊庭軍兵衛秀俊
伊庭八郎（次）秀穎
伊庭想太郎
水谷権太夫吉辰
岩間大助利生
松浦静山（清）

# 山岡鉄舟◎無刀流◎

## 最後の剣客

## 鬼鉄誕生

山岡鉄舟は天保七年（一八三六）六月十日、旗本小野朝右衛門高福（六百石）の五男として江戸本所（東京都墨田区）に生まれた。母は常陸鹿島神宮の神官塚原氏の女である。名は高歩。通称を鉄太郎といった。のち鉄舟、一楽斎と号した。

小野家祖麻右衛門高寛は小野派一刀流の高弟で、その長女は小野次郎右衛門忠於の妻になっている。高福も小野派一刀流の門人であり、鉄太郎は幼いときから父について剣法を学び、また久須見閑適斎から新陰流を学んだともいう。

父が飛騨郡代となり高山（岐阜県）へ赴任したとき鉄太郎も同行し、父が招いた井上清虎に一刀流を学んだ。十七歳のとき父が亡くなったため、江戸へ戻り、北辰一刀流の千葉道場へ入門し、井上八郎、千葉栄次郎の指導を受けるかたわら、海内無双の評判が高かった山岡紀一郎に刃心流槍術を学んだ。

山岡紀一郎は号を静山といい、槍の天才と呼ばれて将来を嘱望されたが、安政二年（一八五五）六月晦日二十七歳で若死してしまった。紀一郎は死に臨んで「わしの後継者は小野鉄太郎以外にはない」と遺言した。紀一郎には男子がなく、弟謙三郎正視がいたが、高橋家に養子にいっていた。槍の名人といわれた高橋泥舟である。残っているのは十五歳になる妹の英だけであった。鉄太郎は師恩を感じて養子となり、英を妻とした。鉄太郎の二十歳のときである。



鉄太郎は「鬼鉄」と呼ばれていた。剣術も強かったが、それよりも元気者であったから、そう呼ばれた。このころに千葉道場で清川（清河）八郎と知り合っている。

文久三年（一八六三）のこと。二十八歳になった鉄太郎は小野派一刀流の浅利又七郎義明に試合を申し込んだ。この又七郎は二代目で、四代中西忠兵衛の二男だったが、先代又七郎義信に子がなかったので、その養子となり、先代以上といわれた達人であった。千葉道場で鉄太郎の相手になる者は少なかったため、同じ流派の達人がどの程度か試してみようという気持があった。

ところが、又七郎と立ち合ってみるとまったく歯がたたなかった。こんなはずはないと自分を叱ってみても、身うごきもできなかった。さすがの鬼鉄も甲をぬぎ又七郎の道場へ入門した。

この年、浪士組が結成され鉄太郎はその取扱を命じられる（後述）。以後、幕末の激動のなかで鉄太郎は多忙を極めるが、そのなかでも剣法の修行は怠らなかった。師の又七郎に負けない技量を目指したのである。そうして鉄太郎がようやく又七郎に負けない自信ができて立ち合いを願い出たのは、なんと十七年後のことであった。このとき又七郎は請われてすぐ立ち合ったが、鉄太郎の構えを見て「それまで」と竹刀をひき「よくもそこまで

工夫をなされた。これでわしも安心して死ねる」と言ったという。ときすでに明治十三年（一八八〇）三月三十日、明治新政府に出仕していた鉄太郎は四十五歳になっていた。これより無刀流を名乗り、道場を「春風館」と称した。無刀流は小野派一刀流の刀法を継承したものだが、すでに明治が剣の時代ではないと悟った鉄太郎が、心の修練を目指すものとして名づけたものだろう。

明治十七年（一八八四）、鉄太郎は小野派一刀流宗家より正統秘奥と瓶割刀（「伊藤一刀斎」参照）を授けられ、一刀流十世となった（瓶割刀は鉄太郎の死後、日光東照宮へ献納されている）。

## 浪と風

鉄太郎の生きた時代は、幕末明治の激動期であった。

文久三年（一八六三）清川八郎の献策によって浪士組が組織され鵜殿長鋭（鳩翁）が奉行、取扱には鉄太郎と松岡万が任ぜられた。二月六日には編成が終わり、八日には京へ向って出発した。一行は二百三十四名、上洛の目的は京都の守護であった。この浪士組には博徒も交っている寄せ集めで、このなかに、のちに新選組を組織する近藤勇や土方歳三も一隊士として加わっていたのである。清川は名前を出していなかったが、浪士組とともに



上洛した。

京へ着くと、清川は突然浪士組を尊王攘夷の先鋒にすると上申した。生麦事件のため英国と戦争がはじまるという噂がたっていたので、それに備えて東下することにしたものだった。しかし、こうした清川のやり方に不満をもっていた近藤勇、芹沢鴨ら十三名が脱退して京に留まることになった。これがのちの新選組になる。

江戸へ戻ってきてからの清川の攘夷運動はますます積極的になり、ついに幕命を受けた佐々木只三郎ら六名が赤羽橋で暗殺した。四月十三日、清川は三十四歳だった。このことを聞いた親友の石坂周造はすぐ現場にかけつけ、清川の首をとって鉄太郎に届けた。鉄太郎はその首を地中に埋め隠し、のち伝通院の処静院に頼んで寺中に埋葬した。この一件から鉄太郎と浪士組の取扱になっていた高橋泥舟は謹慎を命ぜられた。

そののち時代は大きく回天した。十四代将軍徳川家茂急逝後、十五代を継いだ慶喜は幕府体制の強化を図ったが、もはや列藩の協力は得られなかった。事態収拾のため慶喜は慶応三年（一八六七）十月十四日、前土佐藩主山内容堂が献策した大政奉還と将軍職の辞職を朝廷に申し出たのだった。武力で幕府を倒そうとする薩摩藩・長州藩の裏をかき、慶喜は新たに天皇を頂点にした新体制を成立させて自分がその実権をにぎろうとした。

しかし薩摩の大久保利通、西郷隆盛らはさらにその虚を突き、薩長を母体とする新政府を画策し十二月、ついに王政復古の大号令を受けたのだった。さらにどうしても慶喜を討

ちたいと考えた薩摩藩は江戸市中を混乱させようとしたのだった。これに挑発されて薩摩藩邸焼き討ち事件が起きてしまう。

こうしたことから大坂城に待機していた旧幕府軍は京都にいる薩摩を排しようとして大坂城をあとにしたのだった。慶喜は薩摩との交戦を望んではいなかったのだが、もはや事態の収拾はつかなかった。そして年が明けた慶応四年の一月三日、旧幕府軍は二手に別れ鳥羽街道を京都に向ったが、伏見の小枝橋でその主力軍と薩摩藩兵が激突、鳥羽伏見の戦いとなったのだった。

旧幕府軍一万五千人、薩摩を中心とした新政府軍は五千人、だれもが新政府軍の不利を予想したが、実力主義の新政府軍に対して旧来の命令系統による旧幕府軍はたちうちできず、大坂城に退去せざるをえなかった。このとき新政府軍が「錦の御旗」を用いたため、慶喜は朝敵の立場となってしまったのである。おまけに六日夜、旧幕府軍を置いたまま大坂城から慶喜はひそかに江戸へと退去してしまった。

江戸へ戻った慶喜は再起も考えたものの、もはやその望みが不可能と悟り、上野の寛永寺で謹慎し恭順の意を示そうとした。このとき、鉄太郎は高橋泥舟らとともに慶喜の警護にあたったのだった。

一方、錦の御旗のもと諸藩の協力を得た新政府軍は熾仁親王を総督にして江戸へと向った。軍が駿府まで来たころには江戸市中は蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。このままま新政府軍が江戸に入れば市中は合戦場になってしまう。恭順の意味を失うと考えた慶喜は泥舟を寛永寺大慈院内の自室に呼んだ。そして、

「ただちに駿府へ向い、予の恭順の実を朝廷に奏せよ」といった。

泥舟が出立しようとすると、慶喜は気が変わり、

「その方がいなければ、麾下の士を鎮圧する者がいなくなる。その方の代わりに、この大任を果たせる者はいないか」と問うた。

「私の義弟に山岡鉄太郎という者がおります。私の代わりとなるのはこの者以外にはございません」泥舟は答えた。

「その方がそういうのならば間違いあるまい。直ちに命を伝えよ」と慶喜が言うと「この大任は、御前に召して直々にお命じなされるべきだと存じます」と泥舟が上申したため、慶喜はすぐ鉄太郎を呼んで命を伝えた。

鉄太郎はただちに寛永寺を辞し、その足で勝海舟を訪ねた。西郷隆盛と親しい勝に添書をもらうためであった。勝は面会するのをためらったが、鉄太郎の強引さについに会った。しかし話を聞いてもすぐには賛意をみせず、

「官軍の陣営に行く手段はどうなされる？　駿府まで無事に行けますかな」と勝は問うた。

「官軍の陣へ入れば、私の首を切るか、捕えるかの二つでしょう。そのときは私は刀を差し出して先方の処置に任せます。しかしながら、取り調べもせずに斬るということはあり

ますまい。私は総督府に言上の節があって参ったが、その意が不正と思われるのならば、斬ってもらいたいというつもりです。それ以外には考えはありません」

鉄太郎の顔をじっと見ていた勝は表情をゆるめ、

「よかろう。そこまでの決心なら、よもや仕損じることはあるまい。わしのところに益満休之助がいる。これをつけましょう」

と勝は言って、西郷隆盛に添書を書いたのである。

益満は薩摩藩士で、薩摩屋敷焼討ちのときに捕えられ、勝に預けられていた人物であった。鉄太郎も何度か会って知っていた。

ふたりが江戸を出立したのは三月六日である。

それから有名な「朝敵徳川慶喜家来、山岡鉄太郎総督府へ罷り通る」と言って、官軍の陣営を次々と通っていった話になるが、維新史料編纂事務局発行の『維新史』では、「益満休之助を先に立てて、薩州藩士なりと号し、逐次官軍の陣営を通過し、九日駿府に入った」と記されている。

鉄太郎は西郷隆盛の宿所を訪ね、勝海舟の書状を手交し、慶喜の恭順の意を述べた。ついで「官軍進撃の趣旨は、理非曲直を論ぜず、ひたすらに戦争を望まれるのか」と尋ねた。隆盛は「徳川家上下の恭順の実があがれば、官軍はもとより兵端を開くことを好むものではない」と答えた。そこで鉄太郎は「官軍のいわれる恭順の実とはどんなことですか」と



問い返したため、隆盛は大総督宮と相談して七ヶ条を示した。

うち六ヶ条は鉄太郎にも承知できたが、その第一条「慶喜儀謹慎恭順之廉ヲ以、備前藩へ御預ケ可被仰付事」については強硬に反対した。一方の隆盛も朝廷の命であると言って譲らない。二人は激論したが「もし、貴方と私が立場を代えていたとして、貴方は主人を他藩に差し出すことを承知できますか」と迫られた隆盛は「慶喜どののことは、私の一身にかけて引き受けましょう」と約束した。

そして三月十五日の江戸攻撃の以前に江戸に入り、勝海舟らと改めて相談すると返答し、官軍陣営通行の符を鉄太郎に与えた。鉄太郎はただちに江戸へ戻り報告した。のち西郷と勝の会見で、江戸城は無血開城となり江戸は戦禍から救われた。

慶喜の家督を継いだ亀之助が、駿河、遠江、三河三国七十万石の大名となったのは五月二十四日であった。江戸城開城後、水戸で謹慎していた慶喜は七月になって駿府へ移った。鉄太郎も駿府へと移った。

明治二年（一八六九）六月版籍奉還となり、駿府は静岡藩と改称、徳川家達（亀之助）は藩知事となり、大参事に平岡丹波、鉄太郎は権大参事となった。

## その後の鉄舟

慶応四年（一八六八）、榎本武揚が幕府の軍艦八艘を率いて箱館の五稜郭に籠ろうとしたとき、嵐のために流され、そのうち咸臨丸が駿河湾へ漂着した。これを官軍の軍艦が撃沈したため乗組員の死体が湾内に流れこんだが、朝敵だからという理由でだれも手をつけようとはしなかった。それを見た清水の次郎長が子分たちに命じて死体を片づけた。

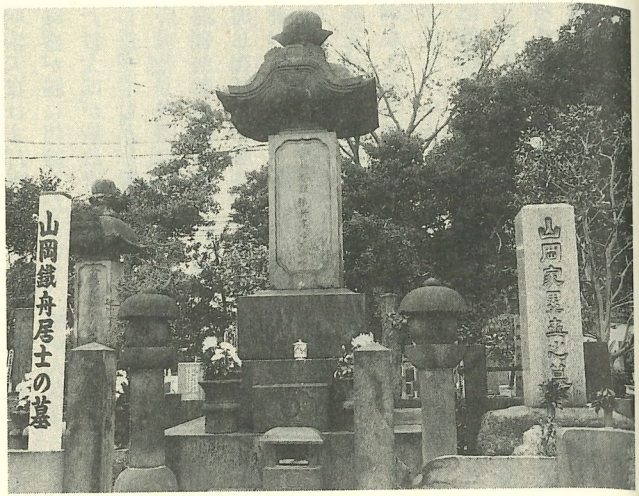
鉄太郎は次郎長の任侠に感心し、その墓碑に「壮士之墓」と書いた。以後二人は交友するようになった。次郎長の晩年が他の博徒と違ったのは、鉄太郎に感化されたものであった。

明治四年（一八七一）七月廃藩置県となると、鉄太郎は権大参事の任を解かれ、伊万里（佐賀県）の県令を命ぜられた。伊万里は旧藩の頑固な士族が多く普通の者では治まらないだろうというので、勝海舟の進言によって鉄太郎を赴任させたという。

着任すると、鉄太郎は編笠をかぶって市中や百姓家を巡視した。また人を修めるにはまず自分の身を修めるべきであるとしてそれを実戦したため、人々は「剛明果断」の山岡県令としてその徳を慕うようになった。

のち鉄太郎が宮内省に侍従として出仕するようになったのは、西郷隆盛の推挙によるも






山岡鉄舟の墓（東京都台東区　全生庵）

のである。明治天皇はまだ年が若いため、鉄太郎のような人物を側においておいた方がよいと考え、隆盛が勝に相談したという。勝が大久保一翁とともに鉄太郎を口説いた。

幕臣だった鉄太郎が新政府に出仕するのをよく言わない者がいたが、鉄太郎は、

「晴れてよし曇りてもよし富士の山もとの姿は変らざりけり」と歌を詠んで応えた。

のち、皇后宮亮、宮内少輔となった。そのころの話である。

維新に活躍した者の事績調査のために、自己の勲功録を差し出すよう通知があったが、鉄太郎が提出しなかったため宮内省から呼び出された。調査局員が功績について質問すると「私は元来忘れっぽく、過ぎたことは殆ど忘れてしまった」と言い、「なるべく、うそはこしらえないようになさい」と言い捨てて帰ったという。

明治十五年（一八八二）鉄太郎は宮内少輔を辞して、自適の生活をおくるようになった。同十九年（一八八六）には子爵を授けられ、勲二等となった。

明治二十一年（一八八八）七月十九日のことである。正午前に勝が訪ねると、鉄太郎は真白の着物に袈裟をかけて自若として坐っていた。勝が「どうですか」と声をかけると、鉄太郎は少し目を開いて「いま涅槃に入るところです」といった。勝は「よろしく成仏なされ」といって帰っていったが、そのすぐあと鉄太郎は往生を遂げた。五十三歳であった。鉄太郎が創建した谷中（東京都台東区）の全生庵に葬られた。

西郷隆盛が鉄太郎について次のように言ったことがある。



「あの人（鉄太郎）が駿府の陣営に突然飛び込んできたから、あの敵軍の中をどうやって来たのかと尋ねると、歩いて来たという。それは無論だろうが、敵は見あたらなかったかと問うと、往々大勢の兵隊行列などと会い、中々立派に見えましたと平気なもので、練兵でも見た気でいたようだ。あんな命も金もいらぬ人間は始末に困る。しかしこの始末に困る人でなければ、ともに天下の大事を語るわけにもまいりません」

勝海舟は言う。

「山岡の風体は、身の骨格がたくましくて丈は六尺以上もあった。平素大きな木刀を帯びて、その上高下駄に踏み乗って濶歩するから、すべてのことが荒々しく随分乱暴なように見えて世人は遠ざけていたそうだが、実体の山岡はそんなものではない。性質が義情に困って作られているから、ちょっとも他人に迷惑をかけるような振舞いはしたことのない男である。外見とは天地の違いであった。ここらが山岡の人物に注意を要するところだ」

幕末明治の激動の時代にあって、鉄太郎は世事におわれながらも剣と禅の道を求めた。義情に生き、武士道を貫いた最後の剣客であった。（『高士山岡鉄舟』『維新史』『武士道』『山岡鉄舟の一生』『幕末三舟伝』ほか）

# 武芸者小伝

（流系については最少限の紹介にとどめた。省略は任意のものである。同音異字や別名・別称の紹介も最少限にとどめた。）

## 愛洲移香（斎）（陰流）

名は久忠。太郎左衛門尉と称し、のち日向守と改める。享徳元年（一四五二）志摩（三重県）生まれ。愛洲氏は北畠氏の支流で、伊勢国に住んでいたが、刀法の修行のために諸国をめぐり、長享二年（一四八八）三十七歳のとき、日向国鵜戸の石龕に籠って奥義を悟り、陰流と称した。天文七年（一五三八）没。年八十七。嫡子小七郎宗通は、常陸の佐竹氏に仕え、常陸国那珂郡平沢村を賜ったので、以後苗字を平沢と改めた。移香の門人上泉信綱は、さらに工夫を加え新陰流の一派を開いた。（『平沢家伝記』、『九州剣豪伝』、『日本剣道史』ほか）

## 秋山四郎左衛門（楊心流）

生没年未詳、貞享ごろの人という。諱は義時。肥前国長崎に住む小児科医であったが、医術修行のために清国（中国）へ渡り、博転という人物から柔術三手を、また武官（名か官名か不明）から捕手三手法二十八活を学んだ。帰朝したのち、その三手と活法二十八手を教えたが、手数が少ないために弟子になる者が少なかった。そこで太宰府天満宮（福岡県）に百日参籠し三百手を得たという。境内に楊柳があり、大雪にも雪が積らず折れないのを見て柔術の極意を悟り、楊心流と名づけたという。柔術のほかに長刀、小太刀、居合、縄術などがあった。（『武術流祖録』、『日本武道全集』、『伝書』ほか）

楊心流略系

流祖
秋山四郎左衛門義時―大江仙兵衛広富―三浦定右衛門
土肥新蔵―堀田甚助―堀田孫右衛門―皇野角右衛門
隈部雪水
羽野新九郎―伯嶺宗辺…山東彦右衛門清秀



## 秋山要介（扶桑無念流）

名は正武（要助とも）。安永元年（一七七二）武蔵国箱田村（埼玉県熊谷市）生まれ。家業は紺屋。神道無念流戸賀崎（戸ヶ崎）熊太郎暉芳の門に入り、十九歳で目録を受け、江戸へ出て岡田十松、鈴木大学に学び、秋山の魔剣と呼ばれた。文化八年（一八一一）四十歳のとき箱田村へ戻り道場を開いて門弟の指導にあたっていたが、のち福王寺（熊谷市）の愚禅和尚に師事し、木崎（群馬県邑楽郡千代田町）の竜徳寺で剃髪、秋山入道雲領と号した。その後飯能（埼玉県飯能市）に道場扶桑館を開き、扶桑無念流と称した。天保四年（一八三三）佐野（栃木県佐野市）で没した。年六十二歳。墓は佐野の興福寺にある。（『幕末関東剣術英名録の研究』『熊谷市史』『秋山要介』ほか）

## 浅山一伝斎（浅山一伝流）

名は内蔵介重晨。生没年未詳。（一説には貞享四年〈一六八七〉、七十八歳で没という）、天正ごろの人。一伝流は丸目主水正が開いた抜刀術という。主水正から国家弥右衛門を経て一伝斎

浅山一伝流略系

一伝流
丸目主水正
国家弥右衛門
浅山一伝流
浅山一伝斎重晨
海野一郎右衛門尚久―金田源兵衛正利
日夏弥介能忠
小島仁左衛門光友―仲村九兵衛光利
中井茂右衛門重頼―小野里新兵衛勝行
中田七左衛門政経―浅山一伝斎重行
森戸三太夫朝恒―森戸三休偶太
森戸三太夫経忠…津田一左衛門正之

に伝えられ、抜刀術に小太刀、鎖鎌、長刀、忍術などを加え、浅山一伝流として広まった。江戸時代を通じて数多くの分流を生んだ。（『武術流祖録』『本朝武芸小伝』『武術系譜略』ほか）

### 浅利又七郎（小野派一刀流）

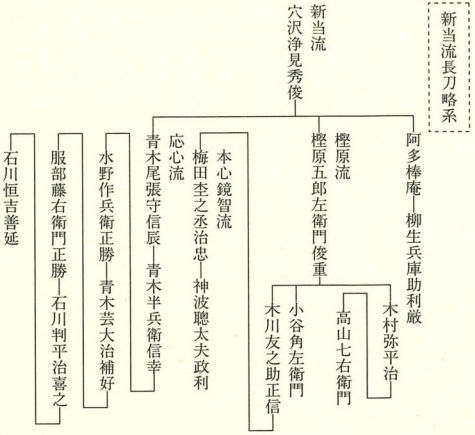
諱は義信。安永七年（一七七八）下総国松戸（千葉県）生まれ。毎日あさりを売りにきては中西忠兵衛の道場をのぞいていたが、その熱心さを認められ内弟子となった。めきめき上達し、忠兵衛の推挙によって小浜の酒井家の剣術指南役となり、浅草に道場を開いた。又七郎は高弟の千葉周作を養子としたが、剣法上の意見の対立から離縁、その後忠兵衛の二男を養子にした。これが幕末に名人と呼ばれ、山岡鉄舟の師として知られる浅利又七郎義明である。義信はのち家督を義明に譲って隠居、嘉永六年（一八五三）七十六歳で没した。墓は東京都新宿区原町の常楽寺にある。（『近世剣客伝』『千葉周作遺稿』『日本剣道史』ほか）

### 穴沢主殿助（新当流）

生没年未詳、名は秀俊、または盛秀。入道して浄見（浄賢）と号した。神当流飯篠守綱の門人で、槍、長刀の達人として知られた。穴沢の名が天下に知られるに及んで穴沢流とも呼んでいる。主殿助は宝蔵院胤栄と試合を望んだが応じてくれそうにもないので宝蔵院に奉公した。胤栄は、主殿助を常人ではないと見て問うと、主殿助は正直に答えた。胤栄は驚いて、すぐその望みを叶えてやったという。のち慶長二年（一五九七）八月「唯授一人」の印可相伝を棒庵入道に与えた。棒庵は慶長十四年（一六〇九）九月柳生兵庫助利厳にこれを相伝した。浄見の門人としてはのちに樫原流を開いた樫原五郎左衛門俊重が有名である。浄見は慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の役で西軍に味方して討死したとも、豊臣秀頼に仕えて大坂の陣で討死したともいう（『本朝武芸小伝』『正伝新陰流』『武術流祖録』ほか）



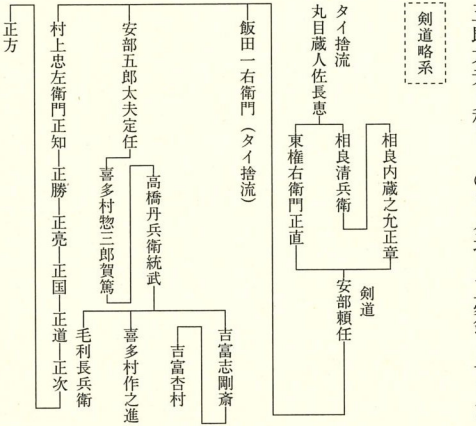
新当流長刀略系




### 安部頼任（剣道）

寛永元年（一六二四）生まれ。父は筑前国秋月藩（福岡県）黒田家の家臣安部宗左衛門一任。五郎太夫と称し、のち入道して夢翁と号した。

剣道略系

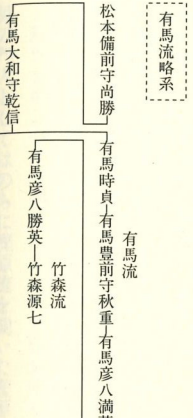


タイ捨流の東権右衛門正直に学んで印可を受け、さらに肥後国八吉（熊本県）の相良内蔵之允正章について印可を受けて帰国し黒田光之に仕えた。頼任は考えることがあってタイ捨流を門人飯田一右衛門に譲り、円頓流を開いたが、のち円流と改めた。寛文七年（一六六七）の冬、四十四歳のとき夢の中で大悟し、剣術は即ち人倫日用の道であるとして剣道と称した。元禄六年（一六九三）七十歳で没。その流は二つにわかれ、一つは安部五郎太夫定任に継がれ、一つは村上忠左衛門正知に受け継がれた。（『九州剣豪伝』『日本剣道史』『安部立剣道大秘伝之巻』ほか）

**有馬時貞**（ありまときさだ）（新当流）

生没年未詳、有馬大和守乾信の子（養子とも）、満盛ともいう。大和守は松本備前守尚勝（政信）について剣術を学び、印可を得てその術を時貞に伝えた。時貞は諸国をめぐって修行した。徳川家康は三河国岡崎に在城のころ、時貞が新当流の剣術の達人であると聞いて呼びよせ、印可を受けた。このとき青江下坂の刀を与えられ、家臣になったが、時貞の没後嗣子がなかったので、庶孫の彦九郎が家を継いだ。これが有馬豊前守秋重で、のち紀州徳川頼宣に仕えた。一般には大和守から有馬流を称したという説があるが、有馬流というのは豊前守が紀州へ仕えてから称したもので、これが代々有馬家に

有馬流略系



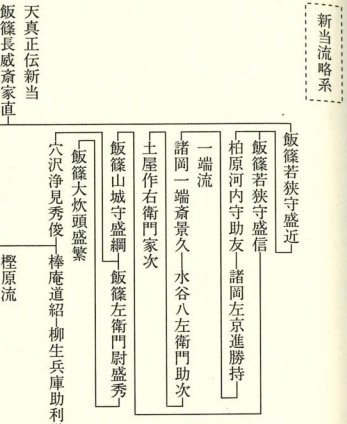



受け継がれた。（『日本剣道史』『本朝武芸小伝』『武術流祖伝』ほか）

**飯篠長威斎**（いいざちょういさい）（天真正伝新当流）

生年不詳、名は家直、伊賀守、また山城守と称した。下総国香取郡飯篠村（千葉県佐原市）に生まれた。幼時より刀槍を好み、鹿伏兎（かぶと）刑部少輔に学んだ。一時京都へ出て将軍足利義政に仕えていたが、いくほどもなく戻り、丁子村山崎（佐原市丁子）に居をかまえた。伝えるところによれば、香取神宮に祈願して修練すること千日、天真正から兵法の奥儀を授けられ「天真正伝新当流」と称した（天真正とは神が変じた童子のことである）。新当流は太刀、長刀、槍、棒、抜刀術など総合的な武術で、のちそれぞれが分科して後世の兵法、武術に大きな影響を与えた。多くの武術流派が長威斎を祖とするのはそのためである。長享二年（一四八八）四月十

新当流略系



五日没。法名泰巌院殿来翁道本大居士。（『本朝武芸小伝』『撃剣叢談』『武術流祖録』ほか）

## 石野伝一（離相流）

寛永二年（一六二五）生まれ。諱は氏利。はじめ一歳と称しのち弥次兵衛と改める。紀州徳川頼宣の家臣。父は石野弥次兵衛正直。幼いときから槍術を好み、衣笠七兵衛、樫原五郎左衛門の門に入り、のち頼宣の命によって、虎尾流の水島見誉言之に槍術を学び奥義をきわめた。のち工夫を加えて一派を開き、頼宣の命名によって離相流と称した。慶安四年（一六五一）江戸に召され、三月二十一日江戸城で将軍家光に槍術を上覧し名前をあげ、紀州へ戻って門弟を育てた。元禄十年（一六九七）七十三歳で没した（元禄七年説もある）。その門人では戸山五太夫、青岡弥左衛門利之が傑出している。（『南紀徳川史』『本朝武芸小伝』『武術流祖録』ほか）

## 伊東紀伊守佐忠（建孝流）

室町末期、奥州の人と伝えるが詳しいことはわからない。槍術を学んだが、戦場で探傷を負い左手が不自由になったので、それまでの槍術に工夫を加え、管槍の用法を創出して建孝流と称した。その門人落合長門守康政がこの道統を継ぎ、今川義元に仕えたが、桶狭間の合戦に討死した。康政の門人高木刑部左衛門昌秀から印可を受けた小笠原内記左衛門は傑出して、管槍中興と称せられた。建孝流から虎尾流、伊東流、貫流、近藤流、田辺流、津田流、飛電流などの諸派が生まれた。（『日本武術名家伝』『武術流祖録』『武術系譜略』ほか）

## 伊藤忠也（一刀流忠也派）

里見安房守の家臣神子上土佐重の二男。兄神子上典膳（のちの小野忠明）とともに伊藤一刀斎に剣術を学ぶ。一刀流は兄忠明が継いだが、忠明はのち一刀流の道統を忠也に継がせ瓶割刀を授けた。これより忠也は伊藤典膳と称し、小



建孝流略系

- 建孝流
  - 伊東紀伊守佐忠
    - 落合長門守康政―高木刑部左衛門昌秀
      - 小笠原内記左衛門貞春
        - 葦谷治兵衛真言―牧久兵衛―松本理左衛門
        - 虎尾流
        - 虎尾孫兵衛三安
      - 近藤流
      - 深美新兵衛由長…近藤半之丞就元
      - 田辺流
      - 田辺八左衛門長常―田辺四郎右衛門常元
      - 水島見誉言之―離相流
      - 石野弥次兵衛氏利
      - 伊東流
      - 佐分利円右衛門忠村―佐分利源太左右衛門忠綱
        - 貫流
        - 津田権之丞信之
        - 津田流
        - 津田権之丞親信―津田権之丞信章
        - 津田権之丞信富
        - 飛電流
        - 青木武太夫保知―伊藤三郎左衛門景之
        - 伊藤伴左衛門為辰
        - 福沢弥五兵衛良勝―福沢官兵衛良成
        - 福沢新左衛門良行

忠也派一刀流略系

- 伊藤典膳忠也
  - 井藤平右衛門忠雄―井藤平四郎忠貫
  - 溝口派
    - 甲源一刀流
    - 溝口新五左衛門正勝…逸見太四郎義利
  - 間宮九郎兵衛久也―間宮五平久一
    - 天心独名流
    - 涼天覚清流
    - 根来独心斎重明―堀口亭山貞勝
    - 古谷次郎左衛門信知…酒井要人信文
      - 酒井要人文奉―勝見老喜忠篤
        - 神武一刀流
      - 大久保九兵衛忠宣―月岡一郎義宣

野家の一刀流と区別して一刀流忠也派と称した。忠也には子がなかったので門人の亀井兵助（紀伊藩の亀井右京吉重の男）を養子として家を継がせた。兵助はのち伊藤を井藤と改め一刀流四代井藤平右衛門忠雄と称した。延宝八年（一六八〇）、七十八歳で没したという。妙国寺（東京都品川区）にある三世伊藤一刀斎というのはこの忠也の墓である。（『寛政重修諸家譜』『武道極意』『一刀流物語』ほか）

### 伊藤道随（三和流）

諱は清長。通称伝三郎、のち十郎左衛門と改める。寛永五年（一六二八）生まれ。水戸家に仕え、長刀、刀術、柔術の三術を和して三和流（三和無敵流）と称した。のち致仕して道随と号し、元禄十年（一六九七）九月九日、七十歳で没した。同流は金沢学忍軒品充を流祖とするものもあり、道随の後名説と別人説がある。して道島調心と称した。剣術のことは口にせず、影法師とも号した。天明二年（一七八二）九月、七十二歳で没した。（『雲弘氏伝』『九州剣豪伝』『日本剣道史』ほか）

雲弘流略系

- 弘流
  - 樋口不堪
    - 針ヶ谷夕雲
      - 無住心剣流
        - 片桐空鈍
          - 井鳥巨雲為信
            - 井鳥景雲調心
            - 中村正尊
            - 鈴木勝右衛門
            - 鈴木弥次郎定長
            - 鈴木要介
            - 比留川雲海保教
            - 比留川唯心至盛
            - 比留川一関淳昌
              - 比留川彦九郎寛衆
              - 比留川彦九郎祐之
                - 比留川彦九郎

（『武術流祖録』『日本剣道史』『撃剣叢談』ほか）

### 井鳥景雲（雲弘流）

元禄十四年（一七〇一）江戸に生まれた。父は井鳥巨雲。はじめ八十郎、のち助之進、五郎右衛門、直右衛門と改める。父巨雲は、もと氏家八十郎と称し伊達家の家臣であった。弘流の樋口七郎右衛門不堪に学び、のち無住心剣の片桐空鈍から印可を受け、仙台を辞して、本姓の井鳥に復して雲弘流を開いた。嫡子の景雲が多病だったため道統は門弟の鈴木定長に譲られた。景雲は道統を継げなかったことを恥じ、定長についてその奥義を極めた。享保九年（一七二四）細川家に仕えて中小姓となり、宝暦五年（一七五五）より十二年（一七六二）まで時習館の剣術師範を務めたが、その後は病と称して職を辞し、同十四年（一七六四）西岸寺で剃髪



### 井上伝兵衛（直心影流）

直心影流藤川弥八郎近常の門人。実際には後見の赤石郡兵衛から指導を受けた。幕府の御徒士だったが、養子誠太郎に家督を譲り、下谷車坂に道場を構えて玄斎と称した（「男谷信友」参照）。藤川門の三羽烏の一人である。伝兵衛は町奉行鳥居甲斐守の剣術の師であったが、天保九年（一八三八）十二月二十三日、鳥居の腹臣本庄茂平次に暗殺された。しかし茂平次は弘化三年（一八四六）三月五日、伝兵衛の弟熊倉伝十郎、弟子の小松典膳に討たれた。有名な「護持院原の敵討」である。（『匏庵遺稿』『ありやなしや』『剣法夜話』ほか）

### 伊庭是水軒（心形刀流）

諱は秀明、通称惣左衛門、剣号は常吟子。慶安二年（一六四九）信濃に生まれた。天和元年

（一六八一）本心流の志賀如見斎から印可を得たが、諸国修行の途中、大和の山中で隠士妻片謙寿斎貞明に出会い、その教えを受けて一派を開き、心形刀流と名づけた。天和二年（一六八二）三十四歳のときという。如見斎より伝えられた目録に「本心形刀而已」とあることから、心形刀流と名づけられた（「伊庭八郎」参照）。人名辞書には、もと甲府宰相に仕え、のち江戸へ出て中山安兵衛に教えたが、元禄十五年（一七〇二）の討入りのときには吉良の付人となっていて、安兵衛に討たれたとあるが、信用すべき記録には吉良家に伊庭の名前はない。講談の如水軒話をそのまま収録したためである。正徳三年（一七一三）閏五月十一日、六十五歳で没した。浅草貞源寺に葬られたが、のち墓は東京都中野区沼袋に移された。（『伊庭氏剣法家伝略記』『武術流祖録』『撃剣叢談』ほか）

## 大石進（おおいしすすむ）（大石神影流）

寛政九年（一七九七）筑後国三池（福岡県）に生まれた。父は柳川藩士大石太郎兵衛種行。諱は種次。通称進、のち七太夫と改め、致仕後武楽と号した。幼いときから父について神影流を学び、諸国を修行して大石神影流を開いた。身長七尺（約二m）、五尺余の竹刀をもって江戸中の道場を破り、雷名を馳せた（「男谷信友」参照）。文久三年（一八六三）没。年六十七歳。

大石神影流略系

新陰流 ― タイ捨流 ― 心貫流
上泉武蔵守信綱―丸目蔵人佐長恵―奥山左衛門大夫忠信
…吉田益右衛門尉光乗
石原伝右衛門尉正盛―村上一刀尉長寛―大石遊剣入道種房
大石神影流
大石太郎兵衛種行―大石進種次―大石進種昌…後藤象二郎



法名大量院殿武観妙楽居士。福岡県大牟田市に墓がある。進の道統は二男種昌が継いだ。（墓銘、『九州剣豪伝』『剣法夜話』ほか）

## 大嶋吉綱（おおしまよしつな）（大嶋流）

天正十六年（一五八八）美濃国（岐阜県）に生まれた。横江弥五衛門の二男。大嶋雲八光義の養子となる。はじめ新八、のち雲平と称し、隠居後伴六と改め、安心と号した。もと加藤清正に仕えていたが、大坂の役のときには前田侯に従って軍功をあげた。のち柳生宗矩の推挙により紀州徳川頼宣に仕え、七百五十石を与えられた。槍術をよくし、諸流を学んで大嶋流を開いた。明暦三年（一六五七）没。年七十。その子雲平常久は、父の道統を継ぎ、大いに大嶋流の名を高めた。常久の道統は高弟土尾立右衛門が継ぎ、名を大嶋典朗と改めた。以後紀州家の槍術師範として代々受け継がれた。（『南紀徳川史』『本朝武芸小伝』『武術系譜略』ほか）

大嶋流略系

流祖
大嶋伴六吉綱
大嶋雲平常久 ― 大嶋伴六守正
大嶋立右衛門典朗 ― 大嶋五郎典通
大嶋理右衛門英優
大嶋雲五郎
沼田甚左衛門久治
沼田甚左衛門記雄

種田流
月潮伊左衛門清信―種田平馬正幸―種田市左衛門幸勝
種田市左衛門幸忠
山岡流
山岡流丈左衛門正臣
戸田彦左衛門直重―脇屋八兵衛嶺忠―大月市左衛門高明
川上半右衛門之陣

平田流
平田定右衛門弥吉―平田重兵衛重方
平田重兵衛弥清

## 小笠原源信斎（おがさわらげんしんさい）（真新陰流（しんしんかげ））

遠江国高天神城主小笠原与八郎氏助の甥また

は弟というが、系図に長治はなく、一族小笠原修理大夫宗長の子に長治という名がある。天正二年（一五七四）高天神落城後は武田家、ついで北条家に仕え、天正十八年（一五九〇）の小田原の役には山中城に籠り、落城後明国へ渡った。奥山休賀斎について新影流を学んでいたが、明で、漢の張良の末孫から戈の術を習い、八寸の延矩を創出し、組太刀に工夫を加えて真新陰流と称した。その弟子は三千人に及び、海内無双と称された。神谷伝心斎が道統を継いだが、ほかに門人は無住心剣の針ヶ谷夕雲がいる。（『寛政重修諸家譜』『日本剣道史』『武術流祖録』ほか）

### 岡田十松（神道無念流）

名は吉利。明和二年（一七六五）武蔵国埼玉砂山村（埼玉県羽生市）の農家に生まれた。十五歳のとき、戸賀崎の門人村松源六に入門した



場を開いて門弟を育てた。文政九年（一八二六）九月、六十二歳で没し、牛込幸国寺（東京都新宿区）に葬られた。道統は門弟の一条信忠が継ぎ、月田作馬之介と称した。（『武術流祖録』『日本武道全集』『日本剣道士』ほか）

### 奥山休賀斎（神影流）

大永六年（一五二六）三河に生まれた。奥平美作守貞能の家臣奥平出羽守貞久の七男。幼名孫次郎、諱は定国、のち公向と改める。休賀斎（急賀斎）と号し、剃髪して音寿斎と号した。上泉信綱が上州にいたときからの門人で、印可を受けたのち諸国修行し、三河の奥山明神に参籠して夢想の太刀を感得、新陰流を改めて神影流（奥山流ともいう）と称した。これによって奥山休賀斎と一般に呼ばれた。天正二年（一五七四）十月二十八日、家康は休賀斎を岡崎へ招いて刀術を学ぶとともに御台所御守役を命じ、

が、二、三年で師ももてあますようになったので、戸賀崎熊太郎に入門、二十三歳で皆伝を受けた。神田猿楽町に道場を構え撃剣館と称し、集まる者は前後三千人に及んだという。文政三年（一八二〇）八月十五日没した。年五十六。男子は三人いたが、いずれも虚弱だったため、高弟の斎藤弥九郎が道統を継いだ。高名な門人はほかに、鈴木派を開いた鈴木大学、江川太郎左衛門らがいる。（『斎藤弥九郎伝』『日本剣道史』『東湖遺稿』ほか）

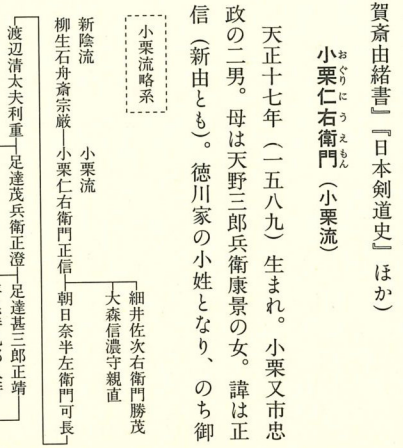
### 岡田総右衛門（柳剛流）

明和二年（一七六五）武蔵国葛飾郡惣新田（埼玉県幸手市）に生まれた。諱は希良（寄良とも）。はじめ心形刀流を伊庭軍兵衛直保に学び、のち各地を遊歴して諸流を学び、「跳び斬り」を考案し長刀術の一派を開いて柳剛流と称した。一橋家の師範となり、神田お玉ヶ池に道

神影流の印可を受けた。のち病により致仕し、奥平貞能に引きとられていたが、慶長七年（一六〇二）七十七歳で没した。（『徳川実紀』『急賀斎由緒書』『日本剣道史』ほか）

### 小栗仁右衛門（小栗流）

天正十七年（一五八九）生まれ。小栗又市忠政の二男。母は天野三郎兵衛康景の女。諱は正信（新由とも）。徳川家の小姓となり、のち御



膳番を務めた。元和二年（一六一六）父より五百五十石を分知され、秀忠に仕えた。寛永十年（一六三三）二百石が加増され七百五十石となる。柳生石舟斎について剣術の極意を得、また柔術を学んで和術を創出し小栗流と称した。小栗流は刀術を表、和術を裏としていた。大名旗本などの入門者が多く、門人は三千六百人にも達し、しばしば将軍の御前で披露した。その刀術は土佐の朝比奈半左衛門に受け継がれ長く伝わった。寛文元年（一六六一）六月六日没。年七十三（八十とも）。法名透宝宗閑居士。武州足立郡大成村（埼玉県さいたま市）の普門院に葬った。（『寛政重修諸家譜』『日本剣道史』『家譜』ほか）

## 小田孝朝（小田流）

建武四年（一三三七）常陸国小田（茨城県つくば市）に生まれた。父は小田城主小田常陸介治久。はじめ民部少輔、のち讃岐守と改めた。剃髪して恵尊と号した。芦男山日神に祈り、夢想神伝を得て刀術の奥旨を極め、小田流と称したというが、その刀法の詳しいことは不明だが名は長く伝えられた。元中四年（一三八七）小山若犬丸を助けて足利氏満にそむき小田城を攻められた。孝朝は城を捨てて男体山に籠ったが、同六年（一三八九）氏満に降った。応永二十一年（一四一四）六月没、年七十八。（『鎌倉大草紙』『武術流祖録』『新編常陸国誌』ほか）

小田流略系

流祖
小田讃岐守孝朝―小田讃岐守治朝―小田讃岐守持家
小田讃岐守朝久―小田讃岐守成治―小田治部大輔治孝
小田讃岐守政治―小田讃岐守氏治



## 小野忠常（一刀流小野派）

小野次郎右衛門忠明の長男。はじめ助九郎と称し、のち次郎右衛門と改めた。父より一刀流を学ぶ。一刀流の道統は叔父伊藤忠也が継いだ（忠也派）が、忠常の一刀流は一刀流小野派（小野派一刀流とも）として将軍家指南役を務めた。寛永五年（一六二八）父忠明の家督六百石を継ぎ、御書院番を務め、寛永十年（一六三三）二月には二百石を加増され八百石を領した。のち番を辞して小普請となったが、寛文五年（一六六五）十二月六日没した。法名は清海院殿日岸大居士。父忠明と同じく千葉県成田市の永興寺に葬られた。忠常の道統は忠於（次郎右衛門）が継いだが、門弟梶新右衛門正直は、あらたに梶派一刀流を興した。（『寛政重修諸家譜』『武道極意』『撃剣叢談』ほか）

## 梶新右衛門（梶派一刀流）

諱は正直。父は本多美作守の家臣渡辺善兵衛勝綱。梶次郎兵衛正道の養子となり、のち別に家を興した。寛永九年（一六三二）八月、将軍家光に拝謁、百俵を与えられた。慶安四年（一六五一）綱吉に仕え、神田館において目付役、のち持筒頭となり留守居を兼ね六百俵となった。新右衛門は小野忠常に一刀流を学んで印可を受け、新意を加えて梶派を興した。天和元年（一六八一）十二月十八日江戸で没した。年不詳。妻は久野弥七郎宗次の女。門人原田市左衛門利重が道統を継いだ。同流は津軽藩に伝承された。（『寛政重修諸家譜』『本朝武芸小伝』『武術系譜略』ほか）

### 片桐空鈍（無住心剣流）

寛永六年（一六二九）会津生まれ。榊原民部大輔（式部）の家臣長谷川玄養の弟で、長谷川如庵（恕庵）といった。諱は石英。半井驢庵塾の塾頭として儒学に通じていた。のち小田切一雲と改め、さらに片桐空鈍と改めた。二十八歳のとき無住心剣の針ヶ谷夕雲に入門、三十歳のとき印可を受けた。夕雲の無住心剣をさらに一歩進め、勝利における慢心を排除し、相抜け（相うち）を説いた。相抜けとは刀術を極めれば互いに相手を斬り得ないという考えだった。寛文七年（一六六七）三十九歳のとき、深川の裏長屋に隠棲していたが、それを聞きつけて、次第に人が集まってきた。のち僧体となり宝永三年（一七〇六）四月二十六日、七十七歳で没した。「空鈍流」というのは、空鈍から指導を受けた者たちが後年につけた流名である。（『天真独露添書』『夕雲派剣術書前集』『兵法未知志留辺』ほか）

### 片山伯耆守（伯耆流）

諱は久安。周防大内家の家臣で、林崎甚助に抜刀術を学び、のち阿太古社に祈願して妙術を得た。一貫流ともいったが、一般には伯耆流（片山伯耆流）と呼ばれた。はじめ関白秀次に仕え、のち秀頼にも仕えた。慶長十五年（一六一〇）には参内して抜刀術を天覧に入れ、従五位下伯耆守に叙任された。その後周防岩国で指南したが、辞して安芸へ移った。のち再び周防へ戻って没したという。その子伯耆守久勝が道統を継ぎ吉川家に仕えた。のち江戸へ出て伯耆流の名は大いに高くなったが同流は周防で伝承された。安芸の門人では大桑清右衛門が知られている。（『本朝武芸小伝』『武術流祖録』『日本剣道史』ほか）



### 鐘捲自斎（鐘捲流）

遠江国秋葉生まれとも、伊豆の人とも、越前の人ともいい明らかではないが、越前に住んだ。富田勢源（一説には富田景政）について富田流を極めた。山崎左近将監、長谷川宗喜とともに「富田三家」と呼ぶ。「秋田藩伝」によれば、自斎は自ら鐘捲流とはいわず、外他流と称し、外他通家（通宗とも）と名乗っていたともいう。富田流は小太刀であるが、鐘捲流ではもっぱら中太刀を用いた。その門下に伊藤一刀斎が出ているが、そのほかは不祥である。当時の兵法者の誰もがそうであったように、自斎も自分の兵法流布のために諸国遊歴に出て、そのまま消息を断った。佐々木小次郎に印可を与えたともいうが確証はない。また中条流の印牧一族という説もある。（『撃剣叢談』『日本武術名家伝』『本朝武芸小伝』ほか）

### 神谷伝心斎（直心流）

天正十年（一五八二）生まれ。幼名幸之助、通称丈右衛門。諱を直光といった。もと松平周防守の小姓であったが、のち水野隼人正（出羽守）に仕えた。幼いときから兵法に熱心で、十五流にわたって修行、小笠原源信斎に真新陰流を学び印可を得た。のち伝心斎頼春と称した。六十七歳のとき、「今までの勝負は外道乱心の技である、兵法の根源は四徳（仁義礼智。信を加え五常ともいう）に基くべきで、己を捨てて真心を以て進むべきである」と悟り、流名を直心流とした。稽古は防具を頼りにすべきではなく、一身を防ぐのは直心にあると教えている。寛文三年（一六六三）二月、八十二歳のときに伝書を残しているが、没年は不明である。道統は高橋弾正左衛門重治が継いだ。（『武術流祖録』『大日本剣道史』『非切書』ほか）

## 川崎次郎太夫（東軍流）

東軍流は川崎鑰之助（賀義助）によって開かれた流派で、天台宗の東軍僧正から妙旨を得て東軍流と名づけたというが、これは後世名づけられたものである。対馬の幾度六左衛門の『剣学心要』によれば、鑰之助は五郎へ、五郎から太夫へ、さらに太夫から次郎太夫宗勝へ伝えられたが、次郎太夫には男子がなかったので、二十四人の弟子へ伝えたという。次郎太夫は奥州の生まれで、東軍流はこの人によって大いに世間にきこえるようになった。次郎太夫が諸国を修行しているとき、武蔵国熊谷で剣術者と試合し相手を殺した。その門人たち数十人がそのあとを追い、忍（埼玉県行田市）で対決したが、ことごとく斬られたという。次郎太夫も三ヶ所の傷を受け江戸へ送られたが、無罪として釈放され阿部正秋に仕えた。のちに致仕し本郷に道場を開いて多くの門人を育てた。（『剣学心要』『本朝武芸小伝』『武術系譜略』ほか）

東軍流略系

- 川崎五郎―川崎太夫―川崎次郎太夫
  - 高木甚左衛門正則
    - 東軍無敵流
      - 小宅源太夫―坂口八郎右衛門勝清
        - 坂口万右衛門
          - 無敵流
            - 坂口勘左衛門忠興―坂口横左衛門忠高
              - 坂口善左衛門―山口六郎左衛門……
                - ……岸本弥三郎一成
                - 藤井庄太夫―松下十左衛門―柴崎勘兵衛
  - 東軍新当流
    - 矢野佐五右衛門清親―矢野佐五右衛門
      - 高橋要人
        - 丹石流
          - 衣斐丹石入道宗誉―飯沼夢牛斎―飯沼多左衛門



## 木村助九郎（新陰流）

諱は友重。天正十三年（一五八五）大和に生まれた。父は木村伊助。柳生宗矩に学び、将軍家光が宗矩に兵法を学ぶときは、いつも御相手として伺候したという。はじめ駿河大納言忠長に仕えたが、忠長の改易により、寛永十一年（一六三四）紀州徳川頼宣に仕え六百石を与えられた。承応三年（一六五四）四月八日没。年七十。嫡子助九郎友安が継ぎ、代々紀州家の剣術指南を務めた。（『木村家譜』『南陽語叢』『日本剣道史』ほか）

## 櫛淵弥兵衛（神道一心流）

延享四年（一七四七）江戸に生まれた。父は櫛淵弥兵衛宜久。諱は宣根。虚冲軒と号した。父弥兵衛より天真神道流を学び、のち工夫を加えて神道一心流を開いた。身丈五尺八寸、膂力は三人力といわれ神田で道場を開いた。寛政十二年（一八〇〇）門人徳力貫蔵が浅草蔵前で仇討ちをして評判になった。文政二年（一八一九）七十三歳で没した。墓は祥雲寺にある。嗣子多左衛門が道場を継いだが、昔日の姿に戻ることはなかった。門人本門丈右衛門（のち吹雪算得）が津山候に三百石で召し抱えられたとき、弥兵衛の弟子だった平山子龍は「算得の男振りは三百石では安い」と言ったという。（『ありやなしや』『武術流祖録』『日本剣道史』ほか）

## 斎藤歓之助（神道無念流）

天保四年（一八三三）江戸に生まれた。斎藤弥九郎善道の三男。諱は歓道。父弥九郎から剣術の手ほどきを受け、門弟中並ぶ者なく、突きを得意として「鬼歓」と呼ばれた。嘉永四年（一八五一）十九歳のとき、肥前大村藩（長崎県大村市）の剣術指南役兼物頭として百五十石

を与えられたが、体を悪くし（一説には試合の遺恨で闇討にあったともいう）、江戸へ戻り、世上から隠れて四十余年、明治三十一年（一八九八）一月三日麹町の寓居で没した。年六十六。法名英徳院殿歓道日雄大居士。瑞輪寺に葬られたが、現在墓は東京都荒川区の本行寺にある。（『碑文』『斎藤弥九郎伝』『日本剣道史』ほか）

**酒井良佑**（直心影流）

諱は成大。寛政四年（一七九二）江戸下谷の高田藩邸に生まれる。父は榊原家の家臣酒井総右衛門憲福。幼名捨吉。直心影流の藤川近義に学び、井上伝兵衛、藤川鵬八郎とともに直心影藤川門の三羽烏と呼ばれた。神道無念流の秋山要介と試合して勝ち、名を挙げる。文政三年（一八二〇）分家して家を興し、小石川竜慶橋（東京都文京区）に道場を構えて大いに栄えた。天保八年（一八三七）九月二十二日没。年四十六。法号観機院勇俊智策居士。本郷の喜福寺に葬られた。その孫も良佑と称し、直心影流の達人として知られた。維新のとき彰義隊に加わり、のち箱館に転戦、戦後藩に幽閉され明治十四年（一八八一）五月十七日に没した。（『北越名流遺芳』『ありやなしや』『高田市史』ほか）

**榊原鍵吉**（直心影流）

天保元年（一八三〇）一月江戸麻布に生まれた。父は幕臣榊原益太郎友直。十三歳のとき男谷精一郎の門に入って剣術を学んだ。安政二年（一八五五）講武所が設置され、のち神田小川町へ道場が移ってから教授方となり、ついで二の丸御留守居格として三百俵を与えられた。慶応二年（一八六六）講武所が陸軍所と改められると、下谷車坂に道場を構え門人の指導に当った。徳川家の駿河移封に従い大番頭を務めたが、廃藩により江戸へ戻った。のち新政府に招かれたが辞退し死ぬまで道場を守った。明治二十年（一八八七）十一月一日の天覧の兜割りでは、ただ一人鍵吉のみが明珍の兜を割り面目をほどこした。明治二十七年（一八九四）九月十一日、六十五歳で没した。東京都新宿区須賀町西応寺に葬られる。法名義光院殿釈杖倭翁居士。（『日本剣道史』『講武所』『近世剣客伝』ほか）



**狭川新三郎**（狭川派新陰流）

大和国狭川（奈良市）の豪族狭川新三郎（あるいは新左衛門）助信の次子。諱は助直。柳生宗矩に学び、柳生門四傑の一人といわれた。延宝五年（一六七七）伊達綱村に招かれて仙台へ行き、三百石を与えられた。綱村が新三郎を師としたので御流儀兵法として一藩すべてが新影流を学び明治まで伝承された。元禄八年（一六九五）八月十六日没、五十六歳。仙台の万寿寺に葬られた。新三郎の兄助永も宗矩に学んだが、故あって母方の家号を称し、小夫浅右衛門と名乗った。その子からは再び狭川に戻っている。浅右衛門も元禄三年（一六九〇）二月紀州徳川家に仕え、四百石を与えられて剣術指南となったが、紀州の狭川家は古陰流と称した。（『仙台人名大辞書』『藩学雑纂』『南紀徳川史』ほか）

狭川派新陰流略系

- 古陰流
  - 小夫浅右衛門助永
    - 狭川新五右衛門助友
      - 西脇流
      - 西脇勘左衛門猛正
        - 西脇勘左衛門宣方
  - 狭川新左衛門助信
    - 狭川幡左衛門直綱
      - 狭川幡左衛門直次
    - 新陰流
    - 狭川新三郎助直
      - 狭川新之丞助久
    - 狭川新三郎右将
      - 狭川喜多之助助克
      - 狭川新三郎将義
      - 狭川新之丞将長

## 佐分利重隆（佐分利流）

通称猪之助。富田牛生について富田流（中条流）槍術を学び、のち工夫を加えて佐分利流を開いた。慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦いのとき、伊勢国津の城主富田信濃守信高は関東に味方して籠城、西軍の猛攻を受けたが、このとき松坂城主吉田治部少輔も津城へ籠城した。重隆は兄佐分利九之丞とともに治部少輔に従い、槍をふるって寄手を悩ませた。のち池田輝政に仕え多くの門弟を育てた。高弟の岡田源五佐衛門と佐々木佐内に佐分利姓を与え、同流は大いに栄えた。（『武術系譜略』『本朝武芸小伝』『武術流祖録』ほか）

佐分利流略系

- 富田流
  - 富田牛生
    - 中根流
      - 中根一雲
        - 打身流
        - 打身佐内
        - 佐分利流
        - 佐分利猪之助重隆
          - 佐分利源五左衛門重堅
            - 佐分利平蔵重種
              - 大庭勘介景包
            - 佐分利庄内重勝
              - 佐分利文五左衛門重之
            - 佐分利内次重真
            - 佐分利佐内重可
              - 佐分利猪之助正晴
          - 佐分利治部兵衛好国
            - 佐分利源蔵好保
              - 鈴木茂兵衛重知
                - 島末無天景明
                - 島末源太正景
                - 岡田鴻次郎充敷

## 慈恩（念流）

慈音ともいう。相馬左衛門尉忠重の四男として、正平六年（一三五一）奥州に生まれた。本名相馬四郎義元。正平十五年（一三六〇）鞍馬寺において異人より剣法の妙法を習い、十六歳のとき鎌倉寿福寺で神僧栄祐より秘伝を受け、十八歳のとき筑紫の安楽寺で奥義を感得したという。一説には、諸国をめぐって武を磨き、日向の鵜戸石龕に籠って悟りを開き、念流を興したという。のち鎌倉寿福寺に入って慈恩と称した。応永十五年（一四〇八）五月、五十八歳のとき、信濃浪合（長野県下伊那郡）長福寺の開山となり、念大和尚と称した。没年不詳。門下では中条兵庫助長秀、樋口太郎兼重、堤山城守宝山などが有名である。（『日本武道流祖伝』『九州剣豪伝』『日本剣道史』ほか）

念流略系

- 樋口太郎兼重
- 宝山流
- 念流祖
- 慈　恩
  - 堤山城守宝山（別掲）
  - 中条流
    - 中条兵庫助長秀…富田九郎右衛門長家（別掲）
    - 馬庭念流
      - 赤松三首座禅師慈三…樋口又七郎定次

## 渋川伴五郎（渋川流）

承応元年（一六五二）生まれ。紀州有田郡の人とも、大和の人ともいう。諱は義方。父は設楽善兵衛、母は谷口惣左衛門の娘。関口流二代目関口八郎左衛門氏業に柔術を学び、延宝八年（一六八〇）五月印可を受けた。しかし氏業の機嫌を損じることがあって破門となった。そのため関口流を称することが禁じられたので渋川流と名乗って和歌山城下に道場を開いたという。天和年間のはじめ江戸に出て道場を開き同流は名を高めた。宝永元年（一七〇四）五月七日没。年五十三。高輪（東京都港区）の泉岳寺に葬られた。道統は門人の弓場友右衛門が継ぎ渋川を名乗った。その孫四代目伴五郎時英は武芸者と

渋川流略系

- 渋川伴五郎義方
  - 渋川友右衛門胤親
    - 渋川伴五郎資矩
  - 弓場弾右衛門
    - 渋川伴五郎時英
      - 渋川伴五郎輔元
        - 渋川伴五郎英中
          - 渋川伴五郎英実
            - 伊東柔純義真
              - 宮城兵三郎朝興
                - 武藤財兵衛朝房
      - 平野匠八郎尚賢
        - 佐脇伝十郎安行

して声望高く中興の祖とされる。（『先祖書』『南紀徳川史』『本朝武芸小伝』ほか）

### 島田虎之助（直心影流）

文化十一年（一八一四）豊前国中津（大分県）の島田村に生まれた。奥平家家老逸見志慶の家臣島田市郎右衛門親房の末子。諱は直親。見山と号した。はじめ藩の師範戸田一刀流の堀部太夫について学び、九州を遍歴して修行した。天保九年（一八三八）江戸へ出て、男谷信友の神技に感じて入門し印可を得た。さらに三年の回国修行を経て江戸へ戻り、深川霊岸島（東京都江東区）に道場を設け、男谷信友、大石進とともに幕末の三名人と呼ばれた。師の男谷信友は甥の勝麟太郎（のちの海舟）を島田道場へ預けた。嘉永五年（一八五二）九月十六日、三十九歳の若さで没し、浅草松葉町（同台東区）の正定寺に葬られた。（『九州剣豪伝』『日本剣道史』『近世剣客伝』ほか）

### 白井亨（天真一刀流）

天明三年（一七八三）江戸に生まれた。諱は義謙。八歳のとき機迅流の依田新八郎秀復の門に入った。七年にして門弟中並ぶものがなくなったが年少を理由に印可が与えられなかったので師のもとを去った。寛政九年（一七九七）一刀流の中西忠太子啓の門に入り、のち天真一刀流を開いた寺田五郎右衛門に学んだ。文化二年（一八〇五）中国筋を遊歴し岡山で道場主となったが、文化八年（一八一一）母の病気を聞き江戸へ戻った。改めて寺田の門に入って修行、文化十二年（一八一五）八月十五日天真一刀流の印可を受けた。『開道論』『神妙録』『天真録』『兵法未知志留辺』などの著がある。その道統は津田明馨が継いだ。（『日本剣道史』『上毛剣客史』『兵法未知志留辺』ほか）



### 神後伊豆守（新陰流）

諱は元治（宗治とも）。上野国の人とも武蔵国八王子の人ともいう。古くからの上泉信綱の門人の一人で箕輪城落城のころ（「上泉信綱」参照）から従い、疋田豊五郎とともに信綱の双腕と称せられていた。信綱に従って諸国を歴遊し、将軍義輝および関白秀次の御前で技を演じて賞辞を受けた。しかし信綱より譲られた化羅（相伝の袈裟）を高弟和田兵斎に与え、奥州へ赴き、その終るところを知らずという。高弟の一人服部藤次兵衛は三代将軍家光の御前で神妙剣を台覧にいれたと伝えられる。（『日本剣道史』『上毛剣客史』『本朝武芸小伝』ほか）

新陰流伊豆略系

- 新陰流祖
- 上泉武蔵守信綱
  - 和田兵斎隆正
  - 福崎務斎時忠
  - 斎藤半左衛門家次
  - 神後伊豆守元治
    - 柳沢丞左衛門良屋
      - 鈴木太左衛門重与
      - 大塩与左衛門茂貞
      - 大塩与左衛門芳充
      - 渡辺三之右衛門貞継
      - 丸山加左衛門勝重
      - 平井紋左衛門政直
    - 服部藤次兵衛宗正

### 鈴木大学（神道無念流鈴木派）

名は重明。はじめ斧八郎と称し、のち大学と改める。天明四年（一七八四）江戸生まれ。尾州藩士で、一刀流を学んでいたが、岡田十松の道場で試合して敗れ入門した。のち無念流の五加、非打に改良を加え、一派を立てて鈴木派と称した。大学は剣技だけでなく理論家でもあったので道場は繁昌し、門人は一万人に及んだという。天保二年（一八三一）六月二日、四十八歳で没した。市ヶ谷（東京都新宿区）の宗泰院に葬られる。後嗣に恵まれなかったがその門か

らは不二心流を開き幕末の名人と呼ばれた中村一心斉、魔剣と噂された剣客秋山要介、一ノ宮沢馬らが出た。（『日本剣道史』『武術流祖録』『幕末関東剣術英名録の研究』ほか）

### 関口柔心（関口流）

慶長三年（一五九八）駿河（一説に三河）で生まれた。父は今川氏の将関口外記氏幸（関口刑部少輔親永の男）。弥六左衛門氏心と称した。今川氏が亡んで、氏幸の浪々中の子である。氏心は幼いときから武術に励み、抜力術を林崎甚助に、柔術を三浦与次右衛門に学んだが、のち長崎で外国人（中国人か）から拳法を学び、居合と柔術を組み合わせて関口流を興した。紀州へ移り晩年柔心と称したが、寛文十年（一六七〇）三月七日、七十三歳で没した。全性院柔心日了。和歌山の本久寺に葬られた。その子は三人あり、長男八郎左衛門氏業、二男万衛門氏英、三男弥太郎氏暁ともに紀州家に仕えた。（『武林隠見録』『関口家譜』『紀士雑談』ほか）

関口流略系

- 関口八郎左衛門氏業―関口八郎左衛門氏連
  - 渋川流
    - 渋川伴五郎義方
- 関口弥六左衛門氏心―関口万右衛門氏英―関口万右衛門氏一
  - 関口外記氏元―関口万平氏記
  - 関口万右衛門氏敬―関口万之丞万賛
- 関口弥太郎氏暁―関口弥太郎喬房

### 瀬戸口備前守（自源流）

『本朝武芸小伝』によれば、備前守は薩摩の島津氏の家臣で、壮年より刀術を好んで修行していたが、あるとき同国の伊王滝に籠居すること三日三夜、そのとき自源坊という天狗が飛んできて妙旨を授けた。これにより備前守は自源流を開き、諸国に流布したという。小野忠明との



試合が伝えられるが、素姓は不詳である。薩摩に伝わる示現流と同系とする説もあるが、こちらは東郷藤兵衛重位が開いたもので、その道統に瀬戸口備前守の名前はない（「東郷藤兵衛」参照）。（『本朝武芸小伝』『武術流祖録』『撃剣叢談』ほか）

### 禅栄坊胤舜（宝蔵院流）

天正十七年（一五八九）に生まれた。宝蔵院流槍術の創始者覚禅坊胤栄の後嗣。胤栄は晩年槍術をやめ、胤舜にも武術を修行することを禁じたが、その没後、胤舜は先師の槍術を再興しようと決心し、胤栄の弟子奥蔵院（猪兵衛？）に学び大成、宝蔵院流第二世となった。正保五年（一六四八）二月十二日没。年六十。覚舜坊胤清が第三世を継いだ。弟子に下石流を開いた下石平右衛門三正がいる。（『宝蔵院流歴代略記』『本朝武芸小伝』『武術流祖録』ほか）

### 高木伊勢守（玉影流）

宝暦十二年（一七六二）江戸に生まれた。幕臣高木近江守節の長男。幼名豊松。諱は守富。通称善左衛門。明和五年（一七六八）十一月家を継ぎ五千石を領した。天明六年（一七八六）十二月従五位下伊勢守に叙任され、のち近江守さらに伊勢守に改める。若いときより刀術を好み、一心流、一宮流、信心流、直心影流など五流の印可を受け、さらに工夫を加えて、玉影流を開いた。天保五年（一八三四）没。年七十三。麹町（東京都千代田区）の栖岸院に葬られた。妻は林肥後守忠篤の女。（『寛政重修諸家譜』『武術流祖録』『日本剣道史』ほか）

## 高田又兵衛（宝蔵院流高田派）

名は吉次。天正十八年（一五九〇）生まれ。伊賀国白樫村（三重県上野市）の郷士高田喜右衛門吉春の長男。十四歳のとき宝蔵院に入門、中村市右衛門直政に学び印可を受けた。高田派と称して二十一歳のとき江戸で道場を開いたが、明石の小笠原氏に仕えた。のち小笠原氏の豊前移封により、又兵衛も小倉へ移住し島原の乱で活躍した。慶安四年（一六五一）三月、将軍御前で長男吉深とともに槍術を披露。のち四男政右衛門を嫡子として隠居し宗伯と号した。寛文十一年（一六七一）三月、八十二歳で没した（碑文には七十九とある）。門下では森平三清政綱、河辺弥右衛門盛連、不破慶賀などが有名である。高田家は代々又兵衛を称し、小倉藩士として家伝の槍術を伝えた。（『武道極意』『九州剣豪伝』『本朝武芸小伝』ほか）

宝蔵院流高田派略系

- 高田吉深
  - 高田又兵衛吉通
    - 高田又兵衛吉寿―高田又兵衛通亮
    - 高田又兵衛吉隆―高田又兵衛吉虎
  - 高田又兵衛吉次
    - 高田又兵衛吉近―高田孫市吉岳
    - 河辺弥右衛門盛連
      - 不破慶賀
      - 森平三清政綱―竹内六郎左衛門勝重
      - 勝野武兵衛政盛―川野伝兵衛

## 高橋泥舟（刃心流）

天保六年（一八三五）二月十七日生まれ。父は山岡市郎右衛門。謙三郎、名は政晃。刃心流槍術の高橋家の養子となる。槍術は海内無双といわれ、講武所槍術師範となる。文久三年（一八六三）従五位下伊勢守に叙任されたが、清川八郎の一件（「山岡鉄舟」参照）で一時蟄居を命ぜられた。間もなく許され、再び槍術師範となる。鳥羽伏見の戦いののち江戸に戻った徳川



慶喜が寛永寺の大慈院に謹慎したとき側近にあって警護にあたり、慶喜が水戸へ移されたときも供をした。のち慶喜が駿府へ移ったとき従い、のち地方奉行となった。明治四年（一八七一）七月廃藩により江戸へ戻り、泥舟と改めた。新政府へ招かれたが仕えようとせず、隠棲のまま明治三十六年（一九〇三）二月十二日六十九歳で没した。法名執中庵殿精一貫道大居士。谷中（東京都台東区）の大雄寺に葬られた。（『泥舟遺稿』『幕末三舟伝』『講武所』ほか）

## 竹内久盛（竹内流）

美作国津山波賀（岡山県）の人。文亀三年（一五〇三）生まれ。父は竹内近江守幸治。通称中務大輔、はじめ久幸と称し、のち久盛と改名。幼いときから武芸を好み、天文元年（一五三二）六月二十四日、修験者が忽然と現れ、捕縛術を教えて去っていったという。竹内流腰廻りと呼ばれているのがこれである。久盛はつねづね阿太古神を信奉していたので、その験と感じますます信仰を深めたという。主家尼子氏滅亡後は、一族の美作の原田弥右衛門に身を寄せていたが、文禄四年（一五九五）六月二十九日没した。年九十三。法名宝朱院殿栄照道義。そ

流祖

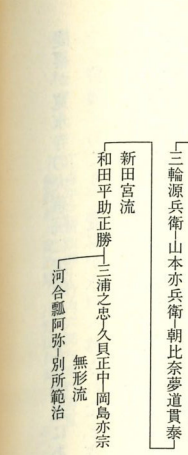
竹内流略系

- 竹内中務大輔久盛―竹内常陸介久勝―竹内加賀助久吉
  - 竹内藤一郎久次
    - 竹内藤一郎久重
    - 竹内藤一郎久孝
    - 竹内藤一郎久愛
    - 竹内雅門太久居
    - 竹内藤九郎久蔵
    - 竹内藤発斎久陳
    - 竹内藤八郎久直
    - 吉里呑敵斎信武
  - 竹内藤一郎久政
    - 竹内藤太夫久俸―竹内兵太夫氏
    - 竹内源太夫久孝―竹内藤太夫久義
    - 佐治弥右衛門重晟―佐治弥左衛門美英
      - 佐治一平重道

の孫久吉が講談で有名な加賀助である。（『竹内系書古語伝』『武術流祖録』『本朝武芸小伝』ほか）

## 田宮長勝（田宮流）

田宮流抜刀術の祖田宮平兵衛重政（重正）の子。加賀国（石川県）の生まれ。父重政ははじめ夢想流を東下野守元治より学び、のち林崎甚助から抜刀術を学び、さらに工夫を加えて田宮流と称した。重政は池田信輝に仕えていて、長勝も父について池田家に仕えた。大坂の陣後、その武功を認められた。徳川家康は浜松城にいた頼宣の家臣として八百石を与えた。元和五年（一六一九）頼宣の紀州入りに従う。晩年剃髪して常円と号した。その子平兵衛長家は寛永四年（一六二七）江戸に召されて家光に抜刀術を台覧にいれている。紀州家の師範となったが直系は四代次郎右衛門成道までで、あとは門弟の津田善右衛門常重が道統を継いだ。（『武術流祖録』『本朝武芸小伝』『紀士雑談』ほか）




## 中条兵庫助（中条流）

諱は長秀。中条出羽守景長の長子。父の職を継いで評定衆を務めた。慈恩について念流を学び、その後一派を開いて中条流と称した。越前の甲斐豊前守が道統を継ぎ、さらに大橋勘解由左衛門高能に伝えられたが、大橋門下から富田九郎左衛門長家が出て、中条流は大いに流名を高め、のち景政の代から富田流と称された。中条流はもっぱら小太刀として伝えられたが、兵庫助時代の中条流は、小太刀に限定していたものではなかったようである。中条氏は戦国時代三州拳母（豊田市）の金谷城主であり、長秀は継職したがここに居城していたかどうかは不明。（『剣道の発達』『三河志』『武術流祖録』ほか）



## 陳元贇（柔術）

字は義都。天正十五年（一五八七）明国の虎林に生まれた。元和七年（一六二一）三十五歳のとき乱を避けて日本へ来航。江戸へ来て、寛永三年（一六二六）から翌四年（一六二七）芝西久保の国正寺にいたとき、浪人福野七郎右衛門、磯貝次郎左衛門、三浦与次右衛門の三人に明国の武術（柔法）を教えた。三人はのち工夫を加えてそれぞれ一派を開いたので、元贇は我が国の柔術（記録には「柔法」とあるが、実際は拳法だった）の祖と呼ばれている。一度明へ帰国したが寛永十五年（一六三八）再び来日。詩文、陶芸にも優れていたので、尾州家の客分となり帰化した。寛文十一年（一六七一）六月九日名古屋で没した。八十五歳。（『名古屋市史』『陳元贇の研究』『大人名事典』ほか）

## 辻月丹（無外流）

慶安二年（一六四九）近江国馬杉村（滋賀県甲賀郡甲賀町）に生まれた。通称平内、諱は資茂、月丹と号した。十三歳のとき京都へ出て山口流の山口卜真斎の門に入り、延宝三年（一六七五）印可を得た。江戸へ出て、麹町に山口流の道場を開いた。また石潭和尚について禅を修し、「一法実無外乾坤得一貞…」の偈を得て無

無外流略系

流祖
辻月丹―辻喜摩多資英―辻文左衛門資賢―辻辰五郎資幸
　└辻文左衛門資信

外流と称した。剣禅一如を説き、大名の弟子が五十人もいたという。門人の杉田庄左衛門が半蔵門で親の敵討ちをやって無外流の名は大いに高まった。享保十二年（一七二七）六月二十三日、七十九歳で没した。高輪の如来寺（のち品川区へ移る）に葬られた。門人があとを継ぎ辻喜摩多と称した。（『武術流祖録』『日本剣道史』『撃剣叢談』ほか）

## 堤宝山（宝山流）

山城守と称した。下野国（栃木県）芳賀郡の神官と伝えるが、詳しいことは明らかではない。慈恩に槍、刀、鎧組などを学んだが、鎧組がもっとも得意であったという。堤宝山流とも呼ばれているが、元禄年中には美作津山の武藤徹山が宝山流の柔術で高名であったと『武術流祖録』にある。のち剣術、柔術、鎖鎌などにわかれて伝えられ、鎖鎌は丹一心から一心流と改称

宝山流略系

慈恩
堤山城守宝山
　├吉岡無二斎―山口心流軒―田井正雪
　├一心流 丹一心―高木仁郎―芹田権平
　├箱根別当―土肥相模守―六角堂長尾豪祐
　├宇野勝蔵院勝肤―宇野弁超―柏木清三郎
　└浅田九郎兵衛正綱―和田貞之進―田中源内



された。（『武術流祖録』『日本剣道史』『撃剣叢談』ほか）

## 出淵平兵衛（柳生流）

名は盛次。柳生宗矩の門人。寛永九年（一六三二）越前の松平忠昌より五百石を与えられ剣術指南となった。宗矩が病にかかると、平兵衛は江戸へかけつけ、日夜病床で看護した。将軍家光は久世大和守を使いとして、柳生流の印可苦しからずと告げた。よって正保二年（一六四五）四月二十七日、宗矩は平兵衛に柳生流を伝えた（出淵派という）。忠昌死去により職を辞したが許されず、さらに二百石を加増された。二代出淵平兵衛盛許、三代出淵平兵衛盛房、四代出淵平兵衛盛賦、五代出淵平兵衛盛方、六代出淵金兵衛盛元、七代出淵平兵衛盛庸と伝えられ代々越前で剣術指南を務めた。（『本朝武芸小伝』『柳生藩旧記』『越前人物志』ほか）

## 寺田五郎右衛門（天真一刀流）

延享二年（一七四五）生まれ。高崎藩士寺田定次の子。幼名三五郎。のち五郎右衛門宗有と称した。はじめ中西忠太子定の門に入ったが、のち平常無敵流の池田八左衛門成春について十二年間修行し印可を受けた。しかし、藩主高崎侯から一刀流を修行するように命ぜられ、再び中西道場に入門した。時は三代目忠太子啓の時代になっていた。

寛政十二年（一八〇〇）免許を得る一方、白隠の高弟東嶺について大悟し「道業天真に貫通せり」との印可を受け、天真翁と号し、剣術を天真伝と称した。文政八年（一八二五）八月一日江戸で没した。年八十一。駒込（東京都文京区）の光源寺に葬られた。道統は白井亨が継いだ。（『日本剣道史』『上毛剣客史』『幕末関東剣術英名録の研究』ほか）

**東郷藤兵衛**（示現流）

名は重位。永禄四年（一五六一）薩摩に生まれた。東郷藤兵衛尉重為の二男。はじめタイ捨流を学んでいたが、天正十六年（一五八八）主君島津義久に従って上洛したとき、天寧寺の僧善吉和尚よる自顕流を学び、のち工夫を加えて示現流を開いた。慶長九年（一六〇四）タイ捨流の東新之丞を破ってから示現流は島津家に用いられるようになった。示現流はもとは自顕流より出た。常陸の十瀬与三左衛門長宗は、飯篠長威斎に学び、香取明神に参籠して自顕流を開いた。その弟子金子新九郎盛貞からさらに赤坂弥九郎政雅に伝えられた。弥九郎はのち出家し、善吉と号して天寧寺にいたとき、東郷藤兵衛に技を伝えたものである。寛永二十年（一六四三）六月二十七日没。年八十三。（『日本武道流祖伝』『九州剣豪伝』『武道極意』ほか）

示現流略系

自顕流
飯篠長威斎家直―十瀬与三左衛門長宗―金子新九郎盛貞―善吉和尚
東郷藤兵衛重方―東郷藤兵衛重利
東郷藤兵衛実満―東郷藤後左衛門位照
東郷藤右衛門実昉―東郷藤兵衛実乙

示現流
東郷藤兵衛重位
薬丸流
薬丸大炊兵衛兼陳
川上因幡守久国
大山三次綱宗
長谷場純昌

**戸賀崎熊太郎**（神道無念流）

武州埼玉郡清久村（埼玉県久喜市）の郷士。延享元年（一七四四）生まれ。名は暉芳。のち知道軒と号した（戸ヶ崎とも書く）。十六歳のとき江戸へ出て、神道無念流の福井兵右衛門に入門、二十一歳のとき印可を受け、故郷へ戻って道場を開いていたが、安永七年（一七七八）江戸へ出て麹町二番町に道場を構えた。神道無念流が知られるようになったのは熊太郎からである。熊太郎は高山彦九郎の親友であった。寛政七年（一七九五）父の看病のため道場を門人岡田十松に譲り、故郷へ戻った。文化六年（一八〇九）五月十一日六十六歳で没した。長子胤芳が二代目熊太郎を継ぎ郷里で道場を開いたが、その子芳栄は三代目熊太郎を襲名し江戸に出た。（『日本剣道史』『皇国武術英名録』『武術流祖録』ほか）



**戸田越後守**（戸田流）

名は綱義。越後国頸城郡戸田村の人とも、安芸の人戸田弥左衛門星眠の子ともいう。通称新八郎。正田豊五郎に新陰流を学び、文禄元年（一五九二）印可を得たが、その後さらに工夫を加えて戸田流を開いた。諸国を修行、のち前田家に仕え五百石を賜った。寛永十五年（一六三八）三月十五日金沢城内で没す。年七十五。その道統は新藤雲斎が継いだ。加賀には富田越後守重政がいてよく混同されるが別人で、また戸田流祖戸田清玄（清元）はこの綱義と思われる。富田勢源が後年に名を改めたという説もあるが、別人とみた方が適当であろう。一説に戸田清玄は鐘捲自斎の弟であるともいう。（『皇国武術英名録』『武術流祖録』『撃剣叢談』ほか）

**富田勢源**（中条流）

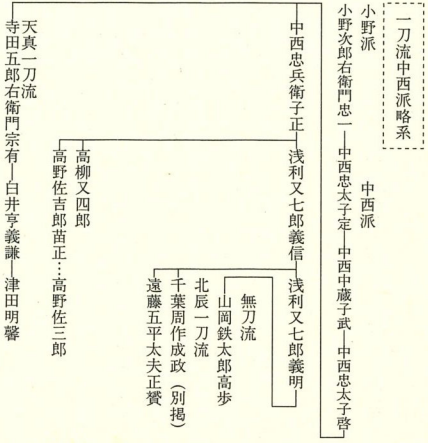
越前浄教寺村（福井県足羽郡足羽町）の人。富田治部左衛門景家の長男。初名与五郎、五郎左衛門と称し、のち勢源と号した。父について中条流を学び、達人として名が高かった。眼を病んで家督を弟治部左衛門景政に譲り、剣術のみに生涯をかけた。永禄三年（一五六〇）美濃

へ行ったとき国主斎藤義龍の依頼によって、鹿島流の梅津某と試合して勝ったとする。しかしこの試合は異説が多い。晩年は越前へ戻っていたようだが、没年は不明である。一説には晩年戸田清玄と字を改めたという説もあるが、前項のように戸田清玄と富田勢源は別人であろう。

（『越前人物志』『本朝武芸小伝』『武術流祖録』ほか）

### 中西忠太（一刀流中西流）

諱は子啓。宝暦五年（一七五五）江戸に生まれた。初名猪太郎。父は中西中蔵子武。父について一刀流を学ぶ。中西派三代である。中西派は小野次郎右衛門忠一の高弟中西忠太子定より興り、この中西道場によって小野派一刀流は大いに栄えた。当時の剣術は防具をつけて竹刀打ちをする稽古が流行し、小野派の組太刀を学ぶ者は少なくなっていたが、二代子武のとき打合い稽古を採用して入門者が増え、三代忠太のとき寺田五郎右衛門らがさらに名を高めた。門下に寺田をはじめ白井亨などが出て、将来を期待されたが、享和元年（一八〇一）二月十七日、四十七歳の若さで没した。嗣子がなかったので





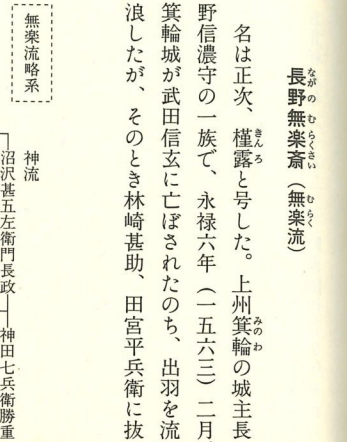

甥の是助が四代目を継ぎ忠兵衛子正と名乗った。この代に江戸第一の道場といわれた。（『兵法未知志留辺』『日本剣道史』『武道極意』ほか）

### 長沼四郎左衛門（真心影流）

直心影流山田平左衛門光徳の三男。名は国郷。八歳より父について学び、芝西久保に道場を構え、その一生で育てた門人は一万人を超えたという。直心影流の名が高くなったのは四郎左衛門の功によるところが大きい。四郎左衛門で忘れてならないことは防具の発明で、面、籠手などを考案した。他流からはかなり悪口をいわれたが、しかしのち中西子武をはじめ各流が同じような防具を使用するようになった。このために剣術の隆昌をみるに至った。晩年は永井家に仕えたが、明和四年（一七六七）四月二十四日、八十四歳で没した。（『日本剣道史』『剣法夜話』『剣道の発達』ほか）

### 長野無楽斎（無楽流）

名は正次、槿露と号した。上州箕輪の城主長野信濃守の一族で、永禄六年（一五六三）二月、箕輪城が武田信玄に亡ぼされたのち、出羽を流浪したが、そのとき林崎甚助、田宮平兵衛に抜



刀術を学び、さらに工夫を加えて無楽流を開いた。高弟沼沢甚五左衛門によって出羽に広く流布された。無楽斎はいつも牛に乗り女子に口綱をひかせて歩き、上下の区別なく交わったという。のち彦根の井伊家に仕えて五百石を与えられ、九十余歳で没したと伝えられている。(『日本武術名家伝』『武術系譜略』『本朝武芸小伝』ほか)

### 中村市右衛門(宝蔵院流中村派)

もとは福島正則の家臣だったが、浪人して奈良で商家となり、猿屋六兵衛と名乗った。宝蔵院の印可を受けて中村市右衛門尚政(政武とも)と改めたといい、またはじめは中村金次郎と称し、十四歳で宝蔵院胤栄に入門したともいう。天正五年(一五七七)生まれ。慶長十年(一六〇五)胤栄より印可を受けたのち、明国へ渡り武術を修行。同十二年(一六〇七)帰朝し、胤栄とともに禁裡に召されて槍術を天覧に供した。寛永八年(一六三一)越前の松平忠昌に召されて三百石を与えられ、槍術を指南、承応元年(一六五二)没した。年七十五。法号直正院古剣玄霜居士。代々同藩の槍術指南を務めた。門下から高田派を開いた高田又兵衛が出た。(『雪のかきよせ』『越前人物志』『十文字鎌目録之事』ほか)

宝蔵院流中村派略系

- 中村市右衛門尚政
  - 高田又兵衛吉次(別掲)
  - 中村八太夫重行
    - 中村市右衛門尚行
      - 中村政右衛門行僖
        - 中村権太夫行忠
          - 中村市右衛門行章
            - 峰屋五郎兵衛
            - 市川六郎右衛門清安
              - 今堀吉之助能寛
        - 中村市右衛門行勝
          - 中村市右衛門尚堯
            - 中村政右衛門尚武

### 鍋島直朝(鹿島家流)

元和八年(一六二二)肥前国佐賀に生まれた。藩主鍋島信濃守勝茂の九男。母は家康の養女(実は岡部主膳正長盛女)。幼名仁王。はじめ茂継。寛永十七年(一六四〇)従五位下和泉守に叙任。同十九年(一六四二)二万石を分知され、肥前鹿島を居所とした。柳生宗矩について学んで秘奥に達し、一派を開いて鹿島家流と称し、自ら家臣に教授した。このため鹿島では他流を学ぶ者はいなくなったという。寛文十二年(一六七二)十二月十二日致仕、紹龍と号したが、宝永六年(一七〇九)十一月十九日鹿島において卒した。年八十八。同地の普明寺に葬られる。室は宗家の家臣鍋隼人高顕の女。嗣子直条は文武を好み、流儀を継いだ。(『寛政重修諸家譜』『日本剣道史』『柳生藩旧記』ほか)



### 根来独心斎(天心独名流)

慶長十年(一六〇五)紀伊国に生まれる。父は亀井右京吉重。伊藤典膳忠也の養子となって道統を継いだ井藤平右衛門忠雄の実弟である。はじめ根来九八郎重明と称し、兄とともに伊藤忠也の門に入って一刀流を学んだ。忠也より印可を受けて二本松の丹羽家に仕えていたが、のち工夫を加えて天心独名流を創始、江戸へ出て道場を開き大いに流行した。晩年独心斎と号したが、天和二年(一六八二)八月十八日没した。年七十八。その門からは涼天覚清流を興した堀口亭山貞勝が出た。(『武術流祖録』『日本剣道史』『武道極意』ほか)

### 林崎甚助(神夢想林崎流)

名は重信。抜刀術の始祖。楯岡林崎神社(山形県村山市)に祈願して抜刀術の精妙を悟ったと伝えられる。抜刀術の伝書によれば、鎌倉将軍の執権北条泰時の二男で、文永のころ(一二七〇ころ)の創意であるというが、泰時の二男は武蔵三郎時実で、安貞元年(一二二七)十六

抜刀術略系

神夢想林崎流
林崎甚助重信
- 田宮流
  - 田宮平兵衛重政（別掲）
- 伯耆流
  - 片山伯耆守久安―片山伯耆守久勝
    - 成田又左衛門重成（成政）
    - 大桑清右衛門
- 無楽流
  - 長野無楽斎槿露
- 一宮流
  - 高松勘兵衛信勝―高松平八郎信重
    - 高松信之―奥幸四郎基軌
    - 関口弥六右衛門氏心（柔心・別掲）

翌三年（一六一七）七月二十日、七十三歳で再び奥州へ旅立ち以後消息を断った。のち一宮流の奥幸四郎が施主となって、享保元年（一七一六）七月二十日、川越の蓮馨寺に墓碑を建てた。法号良仙院一誉昌道寂心大信士。甚助の門人に、田宮流を開いた田宮平兵衛重政、伯耆流を開いた片山伯耆守久安、無楽流を開いた長野無楽斎槿露、関口流柔術を大成した関口柔心、一宮流の高松勘兵衛信勝（甚助の甥で、一宮照信の一宮流とは別派）がある。（『武術太白成伝』『神夢想林崎流解説』『武術流祖録』ほか）

### 針ケ谷夕雲（はりがやせきうん）（無住心剣流）

上野国針ヶ谷の人というが同国に地名は見当たらず、宇都宮か武蔵国大里のいずれかと考えられる。通称五郎右衛門。真新陰流小笠原源信斎の高弟である。夕雲は諸流を極めたが、江戸駒込龍光寺の虎伯和尚（原福寺二百四十世）に歳で没している。『武術太白成伝』によれば、甚助は名を氏賢といい、天文十四年（一五四五）相模国生まれという。七年ばかり武州一の宮（大宮市）に居住していたが、慶長三年（一五九八）九月諸国歴遊の旅へ出た。元和二年（一六一六）川越の甥高松勘兵衛を訪れたが、



参禅して大悟し、流祖上泉信綱をはじめ、すべての剣術がことごとく虚構であるとし、引分けを極意とした。虎伯和尚は夕雲の剣術を『金剛経』の「応無所住而其心」から「無住心剣術である」と言ったので、これを流名とした。夕雲は文盲であったと弟子の一雲が書き残しているが、書を読まずして、この境地に到達した達人であった。江戸八丁堀で余生を過ごしていたが、紀州家から内々に扶持が出ていたという。高弟小田切一雲に印可を与え、寛文二年（一六六二）七十歳で没した。『兵法未知志留辺』『剣法夕雲先生相伝』『日本剣道史』ほか）

### 樋口定次（ひぐちさだつぐ）（馬庭念流）

通称又七郎。上野国馬庭村（群馬県多野郡吉井町）の人。父は樋口左衛門尉重定。樋口氏は木曽義仲四天王のひとり樋口次郎の後裔だが、

馬庭念流略系

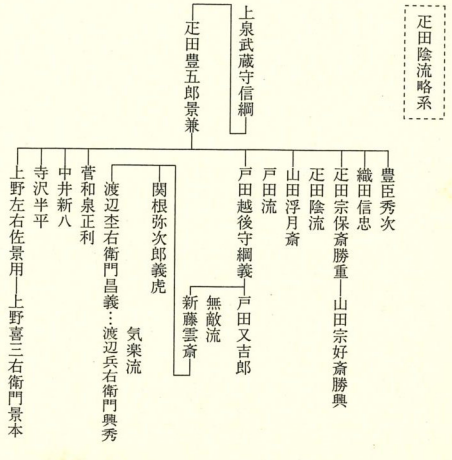
- 念流祖
  - 慈思
    - 樋口太郎兼重―樋口次郎兼定―樋口新左衛門高重
      - 新当流
    - 樋口左伝次兼次―新三郎定兼―次郎左衛門尉重定
      - 赤松三首座禅師慈三―小笠原東泉坊甲明
        - 小笠原新次郎氏綱―小笠原備前守氏景
          - 小笠原左衛門氏重―友松清三氏宗
- 馬庭念流祖
  - 樋口又七郎定次―樋口主膳頼次―樋口十左衛門定久
    - 樋口十郎兵衛定勝―樋口十左衛門定貫―樋口十郎兵衛将定
      - 樋口十郎右衛門定嵩―樋口十郎右衛門定広―樋口十郎兵衛定雄
        - 堀部安兵衛
- 樋口十郎右衛門定輝―樋口十郎右衛門定尹―樋口十郎右衛門定高
  - 樋口十郎右衛門定広

新左衛門高重のとき、同吾妻郡小宿（長野原町）へ移り、明応九年（一五〇〇）さらに馬庭

に移った。高重は柏原盛重から新当流の印可を受けた。その四代の孫が定次である。定次は、遠祖太郎兼重が慈恩から念流の印可を受けた伝統が絶えているのを残念に思い、たまたま上州へ来ていた友松氏宗について念流を学び、天正十九年（一五九一）二月印可を受け、馬庭念流と称した。慶長五年（一六〇〇）村上天流と試合をするとき、隣村の住吉神社（山名八幡）に三日三夜祈願、満願の暁、枇杷の木剣で岩を両断、いまも鳥居の外にあって「太刀割の石」と呼ばれている。この試合に勝ち同流の名は高まった。同流は現在も同地に伝えられ、その道場は文化財となっている。（『当家先祖覚書』『念流の伝統と兵法逸話』『日本武道流祖伝』ほか）

### 疋田豊五郎（新陰流）

天文六年（一五三七）加賀国石川に生まれた（姓は「ひきた」とも読む）。疋田主膳景範の二男。母は上泉信綱の姉。名は景兼、のち入道して栖雲斎と号した。叔父信綱に預けられて新陰流を学び、永禄六年（一五六三）信綱上洛の供をした。信綱が柳生に足をとめたとき、師とわかれ回国修行の旅へ出た。元亀三年（一五七






二）には織田信忠が入門、天正十七年（一五八九）には豊臣秀次が入門した。その後再び修行の旅へ出て、ほとんど全国を回り、慶長六年（一六〇一）豊前へ出て、細川家で三百五十石（はじめ百五十石）を与えられたが、のち致仕して九州の各地を回り、慶長十年（一六〇五）九月三十日大坂城内で没した。年六十九。道統は嗣子宗保斎勝重が継ぎ、山田宗好斎に受け継がれた。門人では山田浮月斎、寺沢半平、菅和泉、戸田越後守らが傑出している。なお豊五郎は新陰流を称したが、山田浮月斎から疋田陰流と称したという。（『正伝新陰流』『上毛剣客史』『九州剣豪伝』ほか）

### 比留間与八（甲源一刀流）

諱は利恭。明和五年（一七六八）武蔵国高麗郡梅原村（埼玉県入間郡日高町）に生まれた。甲源一刀流の逸見太四郎義年に学び、印可を受けて各所を遊歴し、大いに流名を高めた。天保十一年（一八四〇）七月十四日没した。その子半造利充は父の道統を継いで、将軍御前で剣技を上覧にいれた。甲源一刀流の名が江戸に知られるようになったのは比留間父子によるもので門弟数千人という。（『甲源一刀流のしおり』『皇国武術英名録』『埼玉県誌』ほか）

### 深屋角馬（井蛙流）

寛永八年（一六三一）生まれ。父は池田忠雄の家臣河田理右衛門。幼名喜六。のち深尾角馬重義と改めた。父について丹石流を学び、那須家次に化顕流居合を学ぶ。のち一派を開き井蛙流と称した（正しくは「雖井蛙流」と書くが「雖」の字を読まないため略される）。角馬は鳥取城主池田日向守の馬廻りで、二百石を領し国詰だったため、井蛙流はもっぱら因幡で流布した。角馬はまた牡丹作りの上手として知られて

いたという。天和二年（一六八二）十月二十七日、娘のことから人を殺し、切腹を命じられた。年五十二。法号守義院清勇信士。免許の門人十三名が分派して流名を伝えた。（『日本剣道史』『武術流祖録』『日本武術神妙記』ほか）

### 福井兵右衛門（神道無念流）

名は嘉平。元禄十三年（一七〇〇）下野国都賀郡藤葉村（栃木県壬生町）に生まれた。はじめ川上善太夫といい、同国の田中権内に一円流の剣法を学び、諸国を修行した。あるとき信州の飯綱権現に参籠して夢想に活眼を開き、神道無念流と称した。享保年間江戸四谷で道場を開き門弟を育てたが、晩年は高弟戸賀崎熊太郎の好意で、武蔵国埼玉郡清久村（埼玉県久喜市）に隠遁、天明二年（一七八二）八十三歳で没した。神道無念流は、二代を継いだ戸賀崎熊太郎によって大いに流布され、さらに岡田十松、鈴木大学、秋山要介、斎藤弥九郎、江川太郎左衛門らを輩出し、幕末の剣道界に大きな足跡を残した。（『武術流祖録』『日本剣道史』『斎藤弥九郎伝』ほか）

### 福野七郎右衛門（良移心当流）

諱は正勝。摂津国浪花（大阪市）の人と伝えられる。はじめ柳生宗厳から新陰流を学び寛永三年（一六二六）から翌四年にかけて陳元贇が江戸の国昌寺にいたとき、三浦与次右衛門、磯貝次郎左衛門らとともに明国に伝わる柔法を習う。これが我が国の柔術のはじめで、のち工夫を加えて良移心当流（福野流とも）を開き門弟を取りたてた。没年不詳。その門弟寺田平左衛門より学んだ寺田勘右衛門から起倒流と改められた。勘右衛門ははじめ京極丹後守高国の家臣であったが、のちには出雲松江の松平家に仕え、延宝二年（一六七四）八月十七日、五十七歳で



福野流起倒流略系

福野流祖
福野七郎右衛門正勝―寺田平左衛門安定―寺田勘右衛門正重　起倒流
　茨木専斎
　寺田平左衛門定次―井上九郎右衛門正永―井上治部太夫正順
　吉村兵助扶寿―堀田佐五右衛門頼庸―滝野専右衛門貞高
　滝野小主水貞固―山内三吾利直―青山大和守幸哉
　鈴木清兵衛邦教
　神明和光流
　富永大学泰欽―富永縫殿助参孝
　灌心流
　神戸有隣斎

没している。（『武術流祖録』『本朝武芸小伝』『日本武道全集』ほか）

### 逸見義利（甲源一刀流）

延享四年（一七四七）武蔵国小沢口（埼玉県秩父郡両神村）に生まれた。通称太四郎、義年ともいう。逸見氏は新羅三郎義光の流れをくむ甲斐源氏であるが、若狭守朝高のとき武田信虎と不和となり、小沢口に移住した。その九世の孫が逸見義利である。忠也派一刀流の桜井五亮長政に学び、印可を受けて甲源一刀流と名づけ、故郷へ戻って道場を開いた。幕末の北武蔵一帯に大いに流行した。文政十一年（一八二八）九月九日没した。年八十二。法名霊通院黙超禅照居士。門下に比留間与八が出た。（『甲源一刀流のしおり』『埼玉県秩父郡誌』『武術流祖録』ほか）

甲源一刀流略系

逸見太四郎義利―逸見彦九郎義苗―逸見兵馬義豊―逸見右輔義隆
　逸見太四郎長英―逸見愛作英敦
　強矢武甲斎　逸見武市義純―逸見太四郎
　比留間与八利恭

### 幕屋大休（松田新陰流）

慶長十四年（一六〇九）生まれ。父は幕屋宗八郎清房。通称弥次右衛門、諱は清信。早くか

ら父に松田新陰流を学び、のち馬場新左衛門に学んだ。同流中興の人（「松田織部助」参照）。江戸へ出て幕屋新陰流として江戸の三名物の一つに数えられたのは弟の与右衛門である。清信は晩年は大休と号し隠居したが、そのあとを継いだ貞清が法をおかして越前をおわれたので、大休も大和に退き、元禄二年（一六八九）十一月二十六日没した。年八十一。門人横山藤八郎記章が、師に代わって福井松平家の師範となった。（『日本剣道史』『越前人物志』『剣法夜話』ほか）

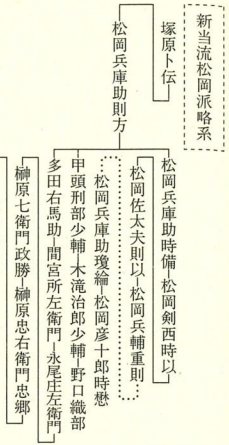
**松岡万**（まつおかよろず）（実用流）

天保九年（一八三八）江戸に生まれた。諱は古道。家は幕府の鷹匠であったが、若いときから武芸を好み、諸流を学んだが特定の人に師事せず、自ら平山子龍の死後の門人と称し、すべて子龍の行動を真似し、文武にわたってその教えを忠実に守った。文久三年（一八六三）幕府が将軍上洛に備えて京都の守護のために浪士組（新選組の前身）を募集したとき、山岡鉄太郎とともに取締となった。徳川家が静岡へ移封になったときともに移り、水利官として製塩、開墾などにつくし、のち警視庁の大警部となった。山岡鉄太郎と長く親交を結んでいて、鉄太郎が没して間もなく明治二十四年（一八九一）一月七日、五十四歳で没した。（『大人名事典』『新選組始末記』『維新史』ほか）

**松岡則方**（まつおかのりかた）（新当流）

通称兵庫助。鹿島神宮の大祝（おおはふり）（神官）で、卜伝から一の太刀の秘伝を伝えられた。卜伝は松岡家で没したともいい、その結びつきの深さがうかがえる。天正十八年（一五九〇）徳川家康が関東に移封されて間もなく召されて、新当流の術を家康に伝えたという。没年不詳。松岡のち江戸へ出て、神道無念流の斎藤新太郎、北辰一刀流の千葉栄次郎の薫陶を受けた。嘉永四年（一八五一）鬼歓こと斎藤歓之助が、十九歳で大村藩の剣術指南として招かれたとき、同年の浪四郎の雷名を聞いて久留米を訪れ試合を求めた。鬼歓が体当りで浪四郎の体を崩し竹刀を打ちおろそうとした一瞬、浪四郎は鬼歓の胴を見事に打ち、九州一の剣客と呼ばれた。明治三年（一八七〇）新政府より剣道指南を命じられ武道教育に務めたが、明治二十九年京都で没した。年六十四。京都妙心寺隣華院に葬られた。（『九州剣豪伝』『斎藤弥九郎伝』『久留米市誌』ほか）






道統は嗣子兵庫助時備と、甲頭刑部少輔、多田右馬助の三系に別れて伝えられたが、特に多田系の中川左平太重興は弓術家としても評判の高い人物である。（『新当流松岡派兵法仮名書』『武術系譜略』『日本剣道史』ほか）

**松崎浪四郎**（まつざきなみしろう）（新陰流）

諱は直之。天保四年（一八三三）二月、筑後国久留米荘島町に生まれた。有馬氏の家臣である。剣術を新陰流の加藤田平八郎重秀に学び、

**松田織部助**（まつだおりべのすけ）（松田新陰流）

諱は清栄。大和国戒重（奈良県桜井市）の城主戒重肥後守の家臣。上泉信綱の大和滞在中に新陰流を学び印可を受けた。戒重氏は三好党で

あったから、織田方の筒井順慶に滅ぼされた。このとき肥後守の弟幕屋玄蕃頭の子（のちの五郎右衛門清次）は、家来の馬場宗左衛門に助けられて逃れたが、のち奈良で道場を開いている織部助に預けられて修行に励んだ。しかし織部助は、筒井氏の手引きを同門の柳生宗厳がやったことを恨んでいたので、隠田があることを密告、そのために柳生氏は所領を没収されることになった。しかし慶長五年（一六〇〇）柳生氏が柳生庄の旧領を回復すると織部助は身の危険を感じ、上泉信綱から譲られた伝書を菩提寺に托し、幕屋の子が後日取りに来たら渡すように

松田新陰流略系

新陰流
上泉武蔵守信綱　松田流　松田織部助清栄―幕屋五郎右衛門清次―
幕屋宗八郎清房―幕屋大休清信―横山藤八郎記章
幕屋与右衛門―柔気流　団野万右衛門定勝

と頼んだ。しばらくして柳生から宗厳の高弟庄田喜左衛門が討手としてやってきたが、織部助は喜左衛門に討たれてやったという。織部助の兵法は幕屋五郎右衛門からその子清房に伝えられ、清房は越前の松平忠昌に仕えた。その子に二人があり、一人を弥次右衛門（大休）、弟を与右衛門といった。与右衛門は江戸へ出て「幕屋新陰流」と称し、江戸の名物の一つに数えられた。（『藩翰譜』『大和人物志』『日本剣道史』ほか）

### 松林蝙也斎（願流）

文禄二年（一五九三）生まれ。常陸の人とも信州の人ともいう。通称左馬助、諱は永吉のち無雲と号し、蝙也斎と称した。十四歳のときから回国修行し、一派を立てて願流（「願立」とも）と称した。旗本伊奈半十郎忠治の庇護を受けていたが、松林の評判を聞いて寛永二十年



（一六四三）伊達忠宗が三百石で召し抱えた。慶応四年（一六五一）三月将軍家光の御前で剣技を台覧にいれた。松林は早業に優れ、小刀で飛んでいる蠅の首を切り、また川辺の柳の枝を切り落とし、それが水面に落ちるまでに十三片に切ったという。寛文七年（一六六七）没。年七十五。仙台の荘願寺に葬られた。（『東藩史稿』『本朝武芸小伝』『武術流祖録』ほか）

### 松本尚勝（鹿島神流）

杉本政信ともある。備前守と称した。応仁二年（一四六八）生まれる。常陸の鹿島氏の四家老の一人で、鹿島神宮の祝部（神官）である。一説には飯篠長威斎について槍を学んだともいう。鹿島に伝えられている「鹿島の太刀」をよくし、人格者であったから、彼に剣術を学んだ者も多かった。塚原卜伝の「一の太刀」は彼の発明になるものという。大永四年（一五二四）内訌によって鹿島を追われた旧主鹿島義幹を助けて、旧領回復の夜討ちをかけたが、利なく、高間ヶ原（鹿島神宮の東約四km）で主君義幹とともに奮戦して討死した。年五十七。彼の兵法を「鹿島神流」と呼ぶのは、他が称えたものである。門下には、塚原土佐守、塚原卜伝、上泉信綱、有馬乾信らがいる。（『鹿島志』『武術流祖録』『日本剣道史』ほか）

### 松山主水（二階堂流）

源頼朝の政所執事に二階堂山城守行政があり、その二男隠岐守行村、その子出羽守行義、その子備中守行有、その子出羽守行藤と代々評定衆であった。行政は中条家と往来し、鎌倉寿福寺の慈恩から学んで一派を開いたというが、詳しいことはわかっていない。永禄のころ、松山主水がこの流れをくんで二階堂流を大成させたという。主水は美濃の出身で、竹中半兵衛の従弟

という。のち鎌倉に居住した。二階堂行政は稲葉山城（岐阜城）を築いたと伝えられている人物で、美濃とは無縁ではないが、主水が美濃にいたとき二階堂流を学んだのか、鎌倉で学んだのかは明らかでない。主水はその孫大吉に伝えた。大吉は成長して松山主水と称し、細川忠利に仕えた。九州第一の達人といわれた主水はこの大吉である。のち忠利の勘気を受けて蟄居を命じられ光円寺に謹慎していたが、寛永十二年（一六三五）十月、細川三斎の小姓荘林十兵衛に暗殺された。（『美濃国諸旧記』『九州剣豪伝』『武家雑談集』ほか）

### 松浦静山（心形刀流）

宝暦七年（一七五七）生まれ。松浦壱岐守政の長子。母は側室母袋氏。幼名英三郎。諱は清。明和八年（一七七一）父早世により嫡孫承祖となり、安永三年（一七七四）十二月従五位下壱岐守に叙任され、翌四年（一七七五）祖父肥前守誠信を継ぎ、六万千七百石を領して平戸城主となる。心形刀流を岩間利生（常稽子）に学び、文化二年（一八〇五）印可を受け、剣号を常静子と称した。翌三年（一八〇六）致仕、静山と号して本所に閑居、文武を愛し『剣談』『剣攷』などを著わした。これらは剣術研究上不可欠の書であり、また上下の雑事を記した『甲子夜話』二百余巻は、当時の世相を知る貴重なものである。天保十二年（一八四一）六月二十九日江戸で没した。年八十五。室は松平伊豆守信礼の女。（『寛政重修諸家譜』『静山公伝』『甲子夜話』ほか）

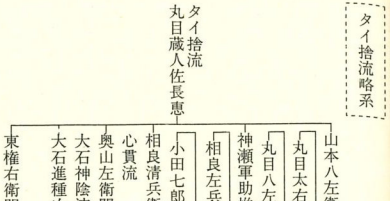
### 丸目蔵人佐（タイ捨流）

天文九年（一五四〇）肥後人吉に生まれた。相良氏の支流丸目三右衛門尉の長子。名は長恵。はじめ蔵人佐、入道して石見入道徹斎と号した。新陰流に工夫を加え、はじめは新陰タイ捨流と称していたが、新陰の字を捨ててタイ捨流に改めた。一時明石侯に仕えたが、相良氏の招きによって再び人吉に戻り、百余石を賜って師範となる。寛永六年（一六二九）五月七日没した。年九十。法号雲山春龍居士。その門人では相良清兵衛、丸目寿斎、心貫流を開いた奥山左衛門大夫らが傑出している。（『九州剣豪伝』『正伝新陰流』『徹斎翁直伝免許之衆』ほか）

### 三浦源右衛門（無眼流）

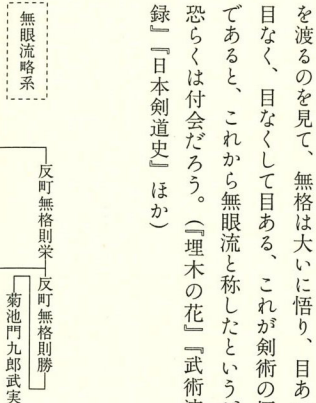
名は政為。正保二年（一六四五）江戸に生まれた。十二歳より三十七歳まで十八流を学び、ことごとく免許を受けた。天和三年（一六八三）十月、夢の中で悟り、流名を無眼流と称した。それまで何流を称していたかは明らかではない。その流は体術、剣術、気術の三つから成






少年時代より武芸に励み、十七歳のとき家を出て一時天草本渡の天草伊豆守に寄食した。永禄七年（一五六四）上洛して上泉信綱に入門、信綱の将軍上覧には打太刀を務め「天下の重宝也」という感状を受けた。永禄十年（一五六七）二月新陰流の印可を受ける。のち九州へ帰り、相良家を助けて島津氏と戦い戦功をあげる。

り、組太刀はなく、もっぱら刺撃に心がけたようである。宝永六年（一七〇九）九月二十四日六十五歳で没した。小石川の祥雲寺に葬られた。道統は門人の反町無格則栄が継いだ。千葉周作『剣法秘訣』には反町無格が武者修行のとき、山中で一人の盲人が杖をたよりに谷川の丸木橋を渡るのを見て、無格は大いに悟り、目あって目なく、目なくして目ある、これが剣術の極意であると、これから無眼流と称したというが、恐らくは付会だろう。（『埋木の花』『武術流祖録』『日本剣道史』ほか）




## 三浦与次右衛門（三浦流）

東武蔵の人という。諱は義辰。経歴その他まったくわかっていない。明国から亡命してきた陳元贇が、寛永三年（一六二六）五月から翌四年（一六二七）九月まで江戸の国昌寺にいたとき、与次右衛門、福野七郎右衛門正勝、磯貝次郎左衛門に明国に伝わる柔法を伝えた。その後数年修練工夫を加え、その妙旨を悟って三浦流と称し門弟を取りたてた。没年不詳。甥の三浦丹治入道義邦がその道統を継いだが、しばらくとだえ、江戸後期に高橋玄門斎が再興した。（『武術流祖録』『本朝武芸小伝』『陳元贇の研究』ほか）

## 桃井春蔵（鏡新明智流）

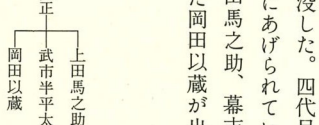
鏡新明智流を開いたのは桃井八郎左衛門直由である。直由は大和郡山の柳沢家に仕えていた。直正は明治十八年（一八八五）に没した。（『近世剣客伝』『日本剣道史』『武術流祖録』ほか）

## 師岡一羽（一羽流）

塚原卜伝門下の一人で諸岡とも書く。江戸崎（茨城県江戸崎町）の郷士である。『本朝武芸小伝』『武術系譜略』『武術流祖録』などには、飯篠長威斎の弟子とあるが時代があわず、『鹿島志』にある卜伝の弟子というのが妥当だろう。新当流に工夫を加えて一羽流と称し、江戸崎で道場を開いていたが、病となり道場はすたれた。岩間小熊、土子泥之助、根岸兎角の三人が看病をしていたが、兎角は前途を憂いて逐電、一羽は文禄二年（一五九三）二人の弟子にみとられながら不遇の一生を閉じた。のち岩間小熊が根岸兎角と試合して勝ち師恨をはらし、土子泥之助が江戸崎に道場を開いて一羽流を伝えた。



が、宝暦七年（一七五七）父直籌没後浪人して諸国を修行、無辺流の槍術に戸田流、一刀流、柳生流、堀内流等の諸流を極め、安永二年（一七七三）同流を立てて江戸茅場町に道場士学館を開いた。その養子春蔵直一は、道場を蜊河岸（中央区新富町）へ移した。幕末に蜊河岸の道場として有名であったのはこれである。直一は文政三年（一八二〇）没し、そのあとを継いだ春蔵直雄は「位の桃井」と称された達人であったが、嘉永五年（一八五二）没した。四代目が春蔵直正で、講武所の教授方にあげられている。その門から武市半平太、上田馬之助、幕末に「人斬り以蔵」の名で呼ばれた岡田以蔵が出て



（『鹿島志』『慶長見聞記』『早雲記』ほか）

## 柳生兵庫助（新陰流）

父は柳生厳勝（石舟斎の長子）。天正六年（一五七八）生まれ。幼名兵介、長じて伊予守長厳と称し、のち兵庫助利厳を改めた。幼いときから祖父石舟斎に剣術を学び、のち石舟斎より新陰流の一子相伝を受ける。一時加藤清正に仕えていたが、いくばくもなく退身、武術修行を続け、棒庵入道よる新当流の長刀、槍の「唯授一人」の相伝を受けた。元和元年（一六一五）尾張義利（のち義直）に仕え、代々尾張家の剣術師範として伝えた。慶安元年（一六四八）二男利方に家督を譲って隠居し、如雲斎と号した。同三年（一六五〇）正月十六日没す。七十三歳。法号春光院殿閑叟如雲居士。妻は加藤浄与の養女（実は島左近の末女）。（『正伝新陰流』『名古屋市史』『日本剣道史』ほか）

## 柳生三厳（柳生流）

慶長十一年（一六〇六）生まれ。柳生但馬守宗矩の長男。母は松下石見守之綱の女。講談などで有名な片目の柳生十兵衛はこの人である。幼名七郎。長じて十兵衛と称した。元和二年（一六一六）秀忠に仕えたが、寛永三年（一六二六）家光の勘気を受け、家を出て修行の旅へ出た。寛永十五年（一六三八）許され、のち書院番となる。正保三年（一六四六）父宗矩の遺領のうち八千三百石を賜ったが、家光とは気が合わなかったとみえて、柳生に退隠し、慶安三年（一六五〇）三月二十一日、柳生にほど近い山城大河原弓ヶ淵の上畠（京都府相楽郡南山城村）で鷹狩中に没した。年四十四。妻は秋篠和泉守某の女。男子がなかったので、その遺領は弟宗冬が継いだ。（『柳生藩旧記』『徳川実紀』『寛政重修諸家譜』ほか）



## 柳生宗冬（柳生流）

慶長十八年（一六一三）大和国柳生（奈良市）に生まれた。柳生但馬守宗矩の三男。母は松下石見守之綱の女。幼名又十郎。正保三年（一六四六）父宗矩の遺領のうち四千石を与えられた。慶安三年（一六五四）兄十兵衛三厳が没し、嗣子がなかったので、その遺領を継ぎ八千三百石を領した。将軍家の剣術指南役。明暦三年（一六五七）従五位下飛騨守に叙任され、寛文八年（一六六八）加増されて一万石を領し、諸侯の列に入る。延宝三年（一六七五）九月二十九日没。年六十三。常林院殿法厳勝公大居士と号した。江戸下谷の広徳寺に葬られる（のち墓は練馬区桜台の広徳寺別院に移された）。室は京極主膳正高通の女。（『柳生藩旧記』『徳川実紀』『寛政重修諸家譜』ほか）

## 柳生宗厳（新陰流）

享禄二年（一五二九）生まれ。父は柳生美作守家厳の男。はじめ新介、のち新左衛門、但馬守と称し、晩年石舟斎と号した。はじめ三好長慶に仕え、永禄六年（一五六三）上泉信綱が上洛の途につくと、大和にこれを迎えてその門に入り、新陰流の印可を受けた。のち織田信長に仕えたが、隠田を発見されて柳生に閑居した。文禄三年（一五九四）徳川家康に剣術を上覧、家康は宗厳に入門した。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦には、老年のためとして出陣せず、宗矩が代わって従軍、戦後本領を安堵された。宗矩は秀忠の兵法師範として召し出され、江戸柳生家の繁栄の基礎を作る。宗矩の剣術を柳生流と称したが、新陰流の道統は兵庫助利厳に譲られ、尾張柳生家に伝えられた。慶長十一年（一六〇六）四月十九日柳生で没した。年七

十八。柳生の芳徳寺に葬る。法号芳徳院殿荘雲宗厳居士。（『柳生藩旧記』『正伝神陰流』『寛政重修諸家譜』ほか）

## 柳生連也（新陰流）

寛永二年（一六二五）柳生兵庫助利厳の三男として名古屋に生まれる。母は加藤浄与の養女（実は島左近の末女）。幼名新六、のち七郎兵衛、兵助、兵庫と称した。はじめ厳知、のち厳包と改める。慶安二年（一六四九）父利厳より新陰流の一子相伝を受ける。足利方の家督を継いで尾張侯に仕えたが、貞享二年（一六八五）隠居、兄の子厳延に家督を譲り、剃髪して連也（浦連也とも）と号した。一生妻をめとらず、元禄七年（一六九四）十月十一日名古屋で没した。年七十。法号寒松院貞操連也居士。遺骸は火葬して海へ投じたという。連也は尾張柳生家中不世出の天才とうたわれ、慶安四年（一六五一）四月には、江戸の柳生宗冬と将軍家で御前試合を行い、破ったと伝えられている。（『正伝新陰流』『尾張名家志補遺』『兵法と道統』ほか）

## 山本勘助（京流）

三河国牛窪（愛知県豊川市）の生まれという。天文九年（一五四〇）武田信玄に仕え、その軍師となって活躍、また京流の達人であったという。若いときから諸国を修行して諸流を学び自得した剣術で、誰にも伝えなかったともいう。永禄四年（一五六一）九月十日の川中島の合戦で討死、年六十九、というのが一般に伝えられている勘助であるが、この勘助は『甲陽軍鑑』によって知られるようになった人物で、他の信用できる史料には一切出てこない。実在していたとしても重臣ではなかったことは間違いなく、軍師山本勘助というのは架空の人物とみた方が妥当のようである。川中島に勘助の墓があるが、その名が有名になってから建てられたもので、また現在のものは再建されたものである。（『甲陽軍鑑』『三河志』『日本武将列伝』ほか）



## 山本久茂（山本無辺流）

山本佐久内の子。通称加兵衛。無辺流は奥羽の人大内無辺より興った槍術である。無辺の道統は大内上右衛門に受け継がれたが、一方無辺の甥山本無辺斎宗久にも伝えられた。大内の無辺流に対して山本無辺流と呼ぶ。この山本無辺斎の槍術は「神の如し」とまでいわれた達人であった。その子佐久内から加兵衛久茂に伝えられた。久茂もまた達人として知られ、慶安四年（一六五一）二月二十六日には江戸城内黒書院の庭において、将軍家光の御前で無辺流の槍術を上覧にいれ、さらに三月二日にも上覧にいれた。ついで寛文七年（一六六七）八月二日には、子の加兵衛久明らとともに、将軍家綱の御前で槍術を披露、同十一年（一六七一）九月十八日没した。（『本朝武芸小伝』『徳川実紀』『武術系譜略』ほか）

無辺流略系

無辺流
- 大内無辺
  - 大内上右衛門
    - 大内清右衛門
      - 椎名靱負助
        - 小泉七左衛門吉久
      - 山本無辺流
      - 山本無辺斎宗久
        - 山本佐久内
          - 山本加兵衛久茂
            - 山本加兵衛久明

## 吉岡憲法（京流）

京流というのは鬼一法眼が鞍馬の僧八人に伝えた兵法（鞍馬八流）の一つだという。吉岡直元が足利義持に仕え、剣術指南として兵法所と称していた。その子直光、その予直賢と伝えられ、いずれも達人として知られていた。『吉岡伝』によれば、吉岡家は古を好み、義を守り、正直を法律としていたので、人々が憲法の家と

呼んだのだという。憲法とは家号で、一人の号ではなかった。直方の子に兄弟二人があり、兄を源左衛門直綱、弟を又市郎直重といった。直重は慶長九年（一六〇四）八月、天流の浅山三徳を打ち殺し、新当流の鹿島林斎も破っている。宮本武蔵と試合したのは兄の直綱で、所司代板倉伊賀守の面前で戦い、相討ちであったと『吉岡伝』は述べ、『二天記』にある吉岡清十郎という名は見えない。慶長十九年（一六一四）禁裏で猿楽の催しがあったとき、吉岡清次郎重賢（直綱らの従兄弟）が見物に出かけたが、只見弥五左衛門の無礼にたまりかねて、弥五左衛門を斬った。このためにその本家の吉岡兄弟は三宿越前守長則に預けられたが、元和になって京へ戻り、明人李三官より伝えられた黒染色を工夫して紺屋を開業した。世に憲法染めと呼ばれる。吉川英治の『宮本武蔵』に出てくるような吉岡兄弟ではなかった。（『吉岡伝』『武術流祖録』『日本剣道史』ほか）

**依田新八郎**（よだしんぱちろう）（機迅（きじん）流）

諱は秀復。元文五年（一七四〇）生まれ。はじめ上杉家に仕えていた。神保忠昭に楠流の軍学を学び、浦上浅右衛門に宝蔵院流の槍術を学んだ。のち自ら刀術を工夫して機迅流と称したが、その稽古は刺撃をもっぱらとした激しいものであったため、体力のないものは耐えられなかったという。上杉家を辞して丹波篠山の青山家に仕え、享和二年（一八〇二）五月二十一日六十三歳のとき大坂の旅宿で没し、逢坂山の一心寺に葬られた。門流には天真一刀流の白井享らがいる。（『武術流祖録』『浪花名家墓所記』『撃剣叢談』ほか）



## 関係年表

| 年次 | 西暦 | 事項 | 一般事項 |
|---|---|---|---|
| 長亨　二年 | 一四八八 | 四月十五日飯篠長威斎没 | 加賀一向一揆 |
| | | この年愛洲移香斎陰流を開く | |
| 大永　二年 | 一五二二 | 塚原卜伝、鹿島神宮に参籠し神意を受ける | |
| 大永　四年 | 一五二四 | 松本備前守、常陸国高間ヶ原において討死、年五十七 | |
| 天文　元年 | 一五三二 | 六月二十四日竹内久盛竹内流を開く | |
| 天文　七年 | 一五三八 | 愛洲移香斎没、年八十七 | |
| 永禄　三年 | 一五六〇 | 七月二十三日富田勢源、美濃で梅津某と試合して勝つ | 桶狭間の戦 |
| 永禄　八年 | 一五六五 | 四月上泉秀綱、柳生宗厳に新陰流の印可を与える | 将軍足利義輝殺される |
| | | 八月上泉秀綱、覚禅坊胤栄に新陰流の印可を与える | |
| 永禄　十年 | 一五六七 | 二月上泉秀綱、丸目蔵人佐に新陰流の印可を与える | （永禄十一年）信長京に入る |
| 元亀　二年 | 一五七一 | 三月塚原卜伝没、年八十三 | 信長、比叡山を焼討 |
| 天正　五年 | 一五七七 | 上泉信綱没 | 信長、安土を楽市とする |
| 天正　九年 | 一五八一 | 十一月二十一日斎藤伝鬼坊、天道を開く | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 天正十五年 | 一五八七 | 斎藤伝鬼坊、真壁暗夜軒に殺される、年三十八 | |
| 天正十六年 | 一五八八 | 神子上典膳（小野忠明）、善鬼三介と試合して勝つ | （天正十四年）秀吉太政大臣となる |
| 文禄　二年 | 一五九三 | 神子上典膳、徳川家に仕える | |
| 文禄　三年 | 一五九四 | 五月三日徳川家康、柳生宗厳へ入門 | |
| 文禄　四年 | 一五九五 | 六月二十九日竹内流祖竹内久盛没、年九十三 | |
| 慶長　五年 | 一六〇〇 | 松田織部助、柳生家の使者庄田喜左衛門に討たれる | 関ヶ原の戦い |
| 慶長　六年 | 一六〇一 | 馬庭念流祖樋口又七郎定次、村上天道と試合して勝つ | |
| 慶長　七年 | 一六〇二 | 柳生宗矩、徳川家剣術指南となる | |
| 慶長　十年 | 一六〇五 | 奥山休賀斎没、年七十七 | |
| 慶長十一年 | 一六〇六 | 九月三十日疋田豊五郎没、年六十九 | |
| 慶長十二年 | 一六〇七 | 中村尚政、宝蔵院流槍術の印可を受ける | |
| 慶長十四年 | 一六〇九 | 四月十九日柳生石舟斎宗厳没、年七十八 | |
| 慶長十七年 | 一六一二 | 八月二十六日宝蔵院流祖覚禅坊胤栄没、年八十七 | |
| | | 九月棒庵入道、新当流長刀の印可を柳生利厳へ与える | |
| | | 四月十三日宮本武蔵、豊前船島にて佐々木小次郎を破る | （慶長十六年）大坂冬の陣 |
| 元和　六年 | 一六二〇 | 九月十日竹内流竹内久勝没 | （元和元年）大坂夏の陣 |
| 寛永　六年 | 一六二五 | 四月富田越後重政没、年六十二 | |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 寛永　二年 | 一六二八 | 十一月七日小野忠明没、年六十九 | |
| 寛永　六年 | 一六二九 | 五月七日丸目蔵人佐没、年九十 | |
| 寛永十一年 | 一六三四 | 十一月七日荒木又右衛門ら伊賀上野で河合又五郎らを討つ | |
| 寛永十二年 | 一六三五 | 十月二階堂流松山主水暗殺される | 鎖国令 |
| 寛永十三年 | 一六三六 | 八月柳生宗矩大名となる | |
| 寛永十五年 | 一六三八 | 三月十五日戸田流祖戸田綱義没、年七十五 | |
| 寛永十七年 | 一六四〇 | 八月六日宮本武蔵、細川家の客分として十七人扶持合力米十八石を与えられる | （寛永十四年）島原の乱 |
| 寛永二十年 | 一六四三 | 六月二十七日示現流祖東郷重位没、年八十三 | |
| 正保　二年 | 一六四五 | 五月十九日宮本武蔵没、年六十二 | |
| 正保　三年 | 一六四六 | 三月二十六日柳生宗矩没、年七十六 | |
| 正保　五年 | 一六四八 | 二月十二日禅栄坊胤舜没、年六十 | |
| 慶安　二年 | 一六四九 | 神谷伝心斎、直心流を興す | |
| 慶安　三年 | 一六五〇 | 正月十六日柳生兵庫助利厳没、年七十三 | |
| | | 三月二十一日柳生十兵衛三厳没、年四十四 | 由井正雪の乱 |
| 慶安　四年 | 一六五一 | 二月二十六日将軍家光、旗本の武芸を見る | |
| 明暦　三年 | 一六五七 | 十一月六日大島流祖大島吉綱没、年七十 | 明暦の大火 |
| 寛文　元年 | 一六六一 | 六月六日小栗流祖小栗信由没、年七十二 | |

| | | |
|---|---|---|
| 寛文　五年 | 一六六五 | 十二月六日小野忠常没 |
| 寛文　七年 | 一六六七 | 二月一日願流祖松林蝙也斎没、年七十五 |
| | | 安部頼任、夢の中で大悟し剣道と称す |
| 寛文　十年 | 一六七〇 | 三月七日関口流祖関口柔心没、年七十三 |
| 寛文十一年 | 一六七一 | 三月高田又兵衛吉次没、年八十二 |
| | | 九月十八日山本無辺流山本加兵衛久茂没 |
| 延宝　三年 | 一六七五 | 九月二十九日柳生飛驒守宗冬没、年六十三 |
| 天和　元年 | 一六八一 | 十二月十八日梶新右衛門正直没 |
| 天和　二年 | 一六八二 | 八月十八日天心独名流祖根来独心斎没、年七十八 |
| | | 十月二十七日井蛙流深尾角馬自刃す、年五十二 |
| | | この年伊庭是水軒、心形刀流を興す |
| 元禄　二年 | 一六八九 | 十一月二十六日幕屋大休清信没、年八十一 |
| 元禄　四年 | 一六九一 | 五月二十二日井藤平右衛門忠雄没、年九十一 |
| 元禄　七年 | 一六九四 | 十月十一日柳生連也厳包没、年七十 |
| 元禄　十年 | 一六九七 | 九月九日三和流祖伊藤清長没、年七十 |
| 宝永　元年 | 一七〇四 | 五月七日渋川義方没、年五十三 |
| 宝永　三年 | 一七〇六 | 四月二十六日片桐空鈍没、年七十七 |
| 宝永　六年 | 一七〇九 | 九月二十四日無眼流祖三浦政為没、年六十五 |

| | | |
|---|---|---|
| | | （元禄十五年）赤浪浪士討入 |
| | | 正徳の治 |



| | | |
|---|---|---|
| 正徳　三年 | 一七一三 | 十一月十九日鹿島家流祖鍋島直朝没、年八十八 |
| | | 閏五月十一日心形刀流祖伊庭是水軒没、年六十五 |
| 享保十二年 | 一七二七 | 六月二十三日無外流祖辻月丹没、年七十九 |
| 寛保　二年 | 一七四二 | 九月十一日無眼流二世反町無格没 |
| 明和　四年 | 一七六七 | 四月二十四日長沼四郎左衛門国郷没、年八十四 |
| 安永　二年 | 一七七三 | 桃井直由、江戸茅場町に鏡新明知流の道場を開く |
| 安永　七年 | 一七七八 | 戸賀崎熊太郎暉芳、江戸麹町に神道無念流の道場を開く |
| 天明　二年 | 一七八二 | 九月四日井鳥景雲没、年八十二 |
| 寛政　七年 | 一七九五 | 十二月戸賀崎熊太郎、麹町の道場を岡田十松に譲る |
| | | 団野真帆斎、本所亀沢町に直心影流の道場を開く |
| 享和　元年 | 一八〇一 | 二月十七日中西忠太子啓没、年四十七 |
| 享和　二年 | 一八〇二 | 五月二十一日機迅流祖依田秀復没、年六十三 |
| 文化　六年 | 一八〇九 | 五月十一日戸ヶ崎熊太郎没、年六十六 |
| 文化十二年 | 一八一五 | 八月十五日白井亨、寺田五郎右衛門より天真一刀流の印可を受ける |
| 文政　元年 | 一八一八 | 白井亨明道論、『神妙録』を著す |
| 文政　二年 | 一八一九 | 九月神道一心流櫛淵宣根没、年七十三 |
| 文政　三年 | 一八二〇 | 八月十五日岡田十松没、年五十六 |

| | | |
|---|---|---|
| | | （享保元年）吉宗将軍となる |
| | | 田沼意次側用人となる |
| | | 天明の大飢饉 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 文政　八年 | 一八二五 | 八月一日寺田宗有没、年八十一 | |
| 文政　九年 | 一八二六 | 九月柳剛流祖岡田総右衛門没 | |
| | | この年斎藤弥九郎「練兵館」を開く | |
| 文政十一年 | 一八二八 | 十二月二十四日平山行蔵潜没、年七十 | |
| 天保　二年 | 一八三一 | 九月九日甲源一刀流祖逸見義利没、年八十二 | |
| 天保　四年 | 一八三三 | 六月二日鈴木大学没、年四十八 | |
| | | 八月二十五日秋山要介、佐野にて没す、年六十二 | |
| 天保　五年 | 一八三四 | この年白井亨『兵法未知志留辺』二巻を著す | |
| 天保　九年 | 一八三八 | 玉影流祖高木守富没、年七十三 | |
| 天保十二年 | 一八四一 | 十二月二十三日井上伝兵衛暗殺される | |
| 嘉永　五年 | 一八五二 | 六月二十九日松浦静山没 | |
| 嘉永　六年 | 一八五三 | 九月十六日島田虎之助没、年三十九 | |
| 安政　元年 | 一八五四 | 二月二十日浅利又七郎義信没、年七十六 | |
| 安政　二年 | 一八五五 | 七月団野真帆斎没、年八十九 | |
| | | 正月十六日江川太郎左衛門没、年五十五 | |
| | | 正月講武所設置 | |
| 文久　三年 | 一八六三 | 六月三十日刃心流槍術山岡静山没、年二十七 | |
| | | 十二月十日千葉周作没、六十二 | |
| | | 十一月十九日大石神影流大石進没、年六十七 | |

| |
|---|
| 異国船打払令 |
| シーボルト事件 |
| 天保大飢饉 |
| 天保の改革 |
| ペリー浦賀に来港 |



| | | | |
|---|---|---|---|
| 元治　元年 | 一八六四 | 七月十六日男谷信友没、年六十七 | |
| 慶応　三年 | 一八六七 | 十一月二十五日不遷流物外没、年七十四 | |
| 明治　元年 | 一八六八 | 四月二十五日近藤勇刑死、年三十五 | |
| 明治　二年 | 一八六九 | 五月十二日伊庭八郎箱館で陣没、年二十七 | |
| 明治　四年 | 一八七一 | 十月二十四日斎藤弥九郎没、年七十四 | |
| 明治十三年 | 一八八〇 | 三月山岡鉄舟無刀流を開く | |
| 明治二一年 | 一八八八 | 七月十九日山岡鉄舟没、年五十三 | |
| 明治二七年 | 一八九四 | 四月十六日浅利又七郎没、年七十三 | |
| | | 九月十一日榊原鍵吉没、年六十五 | |
| 明治三一年 | 一八九八 | 一月十三日斎藤歓之助没、年六十六 | |
| 明治三六年 | 一九〇三 | 二月十二日高橋泥舟没、年六十九 | |

| |
|---|
| 長州征伐 |
| 大政奉還 |
| 江戸城開城 |
| 藩籍奉還 |
| 廃藩置県 |
| 日清戦争 |
| （明治三七年）日露戦争 |

# あとがき

剣法は剣をもって相手と戦い、勝つための武術である。かつて政権が武力で獲得されていた時代にあって、野望の大小はあってもそれを達成しようと思えば、武術は必要不可欠な技能であった。また剣は殺傷力をもった武器であるから、戦いは常に自らの命をかけたものであった。

現代は武力の時代ではない。したがって剣法は現代人の野望を達成するための技能や方法論ではあり得ない。しかし、剣道や古武道を学ぼうとする人はいまでも少なくない。また宮本武蔵や柳生宗矩らを描く書籍の出版も途切れることはない。

いまなぜ「剣豪」か——。

その問いに応えるヒントがたとえば宮本武蔵の晩年にあるような気がする。関ヶ原の戦いや大坂の陣に参戦した武蔵が、五十七歳にして肥後細川家の客分となったとき、時代はすでに武力の時代ではなくなっていた。そこで武蔵がさとりえたものは、剣が相手と対峙するときの武具ではなく、自らの内面を見つめる法具となっていたのではないだろうか。



かつて剣の強さを求めて回国修行をし、剣にいのちを託して戦ったおのれの価値観が時代の流れのなかで崩れたことは想像に難くない。

江戸時代、優れた剣客たちは剣法の習得を通して自己の内面を見つめようとした。その到達点のひとつが武蔵の『五輪書』であり、柳生宗矩の「剣禅一如」の境地であった。剣に自らのいのちを託し、そして一撃のもとに相手のいのちを奪った多くの剣豪たちは、その対決のなかで「いのち」そのものの意味を考えたことだろう。

剣豪たちの言行を読むと、強さを求める先に自己を探求しようとする意図があったことを感じる。このあたりに二十一世紀という大きな変革の時代を生きる現代人を魅了するなにかがあるのではないだろうか。

剣豪たちの生涯は概して不詳であることが多いし、その伝書はのちに神格化されて描かれているものも多い。彼らの行跡について史実か否かを探ることも大切なことではあろうが、小著の意図するところは剣豪たちの息遣いを探ろうとするものであることをご理解いただきたい。

本書は現代教養文庫より出版された『日本剣豪列伝』（初版一九七〇年一月十五日）に大幅な加筆訂正を加えたものである。また「宮本武蔵」はこのたび新たに執筆した。私事になるが、義父江崎俊平との剣豪談義で人物観の違いがしばしば議論になった。このたびの加筆にあたってはその議論をふまえ、内容が教養文庫版と大きく異なっている。

各流派の系譜（流系）は後世になって整備されたものであるため、伝承によって人名や重代に差異がある。さらに流名や分派についても資料によってさまざまな違いがあるが、右に述べたように、本書の趣旨が剣豪たちの人物像を描こうとしたものであることから、略系の紹介にとどめ、また流名・人名についても部分的に省略したことをご了解いただきたい。

出版にあたり、学習研究社小池徹郎氏、解説をご執筆いただいた渡辺誠氏をはじめ、多くの方々にご尽力をいただいた。紙面を借りて御礼申し上げたい。

二〇〇一年十二月

志茂田誠諦



# 解　説

渡辺　誠

江崎俊平氏の息の長い仕事のなかに、『風林（ふうりん）』という個人雑誌の発行があって、最終号となった五十三号まで私も恵贈を受けて、その史筆に学び教えられることが多くあった。

執筆、写真、図版から編集にいたるまで、すべて氏一人の手になる、文字どおりの「個人雑誌」である。第一号が発行されたのは四十四歳（数え年）の元日、昭和四十四年一月一日で、「日常片々」と題した身辺雑記（時事寸評を含む）に、こう書かれている。

――十七年ぶりに、個人雑誌『風林』を復刊することにした。以前ガリ版刷りで近況報告のつもりで二号を出したことがあるから、正確には三号になるわけであるが、当時とはすべてが異なっているので、第一号として再出発することとした。なるべく季刊を守ってゆくようにしたい。内容は記録研究として残すものを加えてゆきたいと思っている。

これは同誌・臨終号の「日常片々」抄からの抜粋による。氏より私が寄贈していただくことになったのは、私事にわたるが、二十一号からであって、はじめて面識を得たのはこの号が発行される前年（昭和五十三年）の夏であった。

そのころ（今も続いているが）〝剣豪〟の探訪記事を剣道の月刊誌に連載させてもらっていた私は、「上泉信綱の剣と人」といったテーマをあたえられて、この取材のために、上州を訪ねることになっていたが、その前にお会いして種々の教示を乞いたかった人がいた。味読していた『日本剣豪列伝』の著者である、江崎俊平氏だった。

数ある剣豪評伝のなかにあって、この作品は剣豪一人一人の生涯、その剣と人物が、それぞれ短文ながら太い筆致で書かれていて、裨益するところ大だったのである。考証はゆきとどいていて、それが端正で明快な構成のもとに展開されている。この本についての管見は後にふれるとして、ともかくも私は保谷（現・東京都西東京市）のお宅を訪ねたのだ。

唐突なことをいうようだが、氏は〝万年青年〟を自称されていたそうである。それと知ったのはやはり『風林』によってであった。

いつまでも変わることなく「青年」でありたいとは、たれの胸にもあわい願望としてあることではないかと想像するが、寄る年波の風雪にたえながら万年青年主義を実践するのは容易ならざることではあるまいか。氏に独自の〝不良論〟があって、このことにかかわるものと思われるので引いておこう。

――不良というのは、生きていることにいい加減な人物をいうのであって、煙草をのんだからといって、酒をのんだからといって、不良というのは間違っている。問題はその行動に対して、いかなる姿勢でのぞんでいるかで決まるのだと思っていた。しかし、私がどんなに不良ではないといっても、それだけでは通用しない。不良と呼ばれることをやって、不良ではないという証明は、三年や五年ではできない。五十歳になったとき、どう生きてきたかで証明される。五十歳になったとき、私が世間並に人の顔色を見て生きているような人物になっていたら、やはり世間でいうように、中学生で煙草や酒をのむ生徒は、不良ということになる〔氏は旧制中学二年で煙草、三年で酒をのみだした、と述懐している＝註記〕。しかし私は長いものに巻かれないで、自分を守って生きていた。五十歳になったとき、「俺は不良ではなかったのだ」と胸をはることができた。しかしこういうつらい人生は、人にはすすめたくない。（『風林』四十八号所収「不良学生の言い訳」）

万年青年江崎さんの活力は、この言にみられる筋金入りの硬骨に発していたのではないかと、今は感じられてならない。

さて、はじめてお会いした氏は（満五十一歳だったが）まさしく青年のようにきらきらとしていて、同時に、ある種の涼やかさを感じさせる眸を此方に真っ直ぐに向けて、準備不足の質問に応じられた。

すこぶる、ていねいな対応だった。のみならず氏は、まことにきまえがよかった。

本書の「上泉信綱」に書かれているように、この人物の生涯にかかわっている戦国の城のなかに箕輪城という城があって、上州探訪の際に私どもの足をはこぶべき史跡の一つに組み込まれていた。

話がそのことにおよんだときだった。氏は浩瀚な書物のひしめいている書棚から、たちまちにして、一冊の本を取り出して来られたのである。

「これを、持っていきなさい」

『箕輪城考』という本であった。群馬県の城郭研究家として知られる福島武雄氏の論考の複写を、江崎氏が手ずから製本した貴重な資料であるが、それを差し出した氏は、いついつ返却してくれとも言われない。

氏は九州の男、博多の人間であることに、終生、自ら恃むところがあったかに見える。熊本育ちだが博多の学校に籍をおいたことのある私は、どうも玄海灘の風にはぐくまれたような、太っ腹の先生だな、と感じ入ったのである。

上州での仕事を終えて返却のためにまたおじゃましたとき、現地で入手した同じく福島武雄氏の論考である『大胡城考』（複写）を感謝の意をこめて呈した。喜ばれて、保谷の酒場でたいへん御馳走になったけれども、あれはもしかしたら氏の渉猟されていた資料のうちにすでに含まれていたのかも知れない、という気が今している。それを口にされなかったのは氏の思いやりではなかったか、と。

江崎俊平氏の仕事のなかに城郭研究のあることを、不勉強な身は当時知らなかった。『風林』臨終号によれば、氏には『日本城郭絵図集成』『城――その伝説と秘話（正・続）』『日本の城』『名城伝説』などの城郭関係の著作があり、中にも『城――その伝説と



秘話』（日貿出版社・刊）は、「二百冊ほどの著書のなかで最も愛着あるもののひとつ」と語っていたという。全国学校図書館評議会選定図書に加えられ、また、日書連（日本書店商業組合連合会）昭和四十八年度良書二百選推薦図書に選ばれたということである。

知らなかった、といえば、読書が偏向する気味のあった私が、氏の著作に巨大な長編時代小説群のあることも知らなかったことは笑われてよい。

「春陽文庫」（春陽堂書店）のその時代小説作品を五十音順に整理した目録を今見ている（臨終号）。七十余冊におよぶ作品の題名、たとえば『江戸っ子大名』『黒風組秘文』『孤剣士峠』といった文字にふれると、黄金期の東映時代劇をみるのを少年時代のほとんど唯一無二の娯楽としていた私などは、昭和三十年代という、どこか不思議な感じのする時代へと帰っていくような心地がしてならない。

そういう多彩な仕事が氏にあることを知らない自分を、氏のもとに導いてくれたのが本書、『日本剣豪列伝』という書であった。

○

『日本剣豪列伝』は一言でいうと、しんせつな本である。おそらく、剣豪に関心をもつ人で、そのしんせつさの余慶にあずかった人たちは多いことと思う。

剣豪にかぎらず、およそ一人の歴史上の人物のことを知りたいと思ったとき、まず現に書店にならんでいる本から関連のあるものをさがしもとめるのが順序であろう。しかし、

その人物に対する好奇心、探究心が増幅されていくにしたがって、しだいに古書店、図書館や資料館でしか今は閲することのできぬ資料をあさってみたくなる。さらに、その人物のことを自分なりに筆にしようとすると、さかのぼって、その人の生きた時代、あるいはその時代に近い時期の資料――史料をもとめたくなるものではなかろうか。その史料には虚偽の事実が混入しにくいと一般にされている一級史料、その人物の日記や手紙などの史料があるが、もしもそこまで立ち入って勉強するに至ったならば、その人はその歴史上の人物についての「専門家」ということになろう。

それはともかく、人物探究のこのような一般的な手順を思うとき、最初に手にした本の役割は大きいはずである。

その本に参考資料ないし史料が明示されているか否かで、そのあとの労がずいぶん違ってくるからだ。情報の入手、図書の検索が、ネズミの形状をした機械装置を動かすだけで可能になった今日でも、それに変わりはないと考える。

ところが、著者によって理由は様々あろうが、歴史上の人物のことを知るうえの道先案内となる資料を明記している本はむしろ少ない。そんな印象を受けているのだが、いかがなものか。

そこで、本書をひもといてみると、この道先案内がいかに小まめになされているか、読者は認められるに相違ない。



たとえば上泉信綱の記述には、正伝新陰流・神陰流兵法家伝書・言継卿記・関八州古戦録・日本剣道史といった参考資料（および史料）が示されている。取り上げられた剣豪十九人の列伝のみならず、付録形式で巻末に加えられている「武芸者小伝」の百人、そのすべてにそれが付されているのである。さらに、流派の略系図が丹念に挿入されていることに至っては、同じく文筆にたずさわる身として、真に敬意を表せざるを得ない。

これは著者の親切気のあらわれにほかならないと私個人は受け取っているのだが、決して労を惜しまないという覚悟がそこになければ出来ることではなかろう。そのことで氏に関して見聞きしたことを思いつくままに記すと――。

国立国会図書館は東京の千代田区にあって、ここには他の図書館にはない書籍、雑誌などが豊富に所蔵されている。大変それはありがたいことであるが、蔵書が豊かに過ぎるため不便なこともいろいろある。利用された方はよほど気の長い人ではないかぎり何とかしてもらえまいかと感じているのではないかと思うが、閲覧を申し込んでから本が搬出されてくるまでの時間がおそろしく長いことが一つだ。しかも、受け付けてもらえる請求カードは二枚（午前十時三十分までの申し込みにかぎり三枚）である。請求記号が同じであれば一枚で上・中・下巻というふうに申し込むことができるようになっているが、そのばあいでも五冊が上限である。まずたいていは、わずか二冊の本を閲覧するために（雑誌だけを閲覧する新館ができてからはいくらか改善されたものの）じりじりとさせられるように

なっている。

もとより、ここでは国会図書館の機構を云々しているのではない。そういう文化施設であってみれば、効率よく利用する方法をそれぞれが工夫しないと、あたら時をついやさねばならないはめとなる、ということを前置きしておきたかったのだ。

氏が平成十二年（二〇〇一）十二月二十日に享年七十四歳をもって亡くなられて数日後、弔問にうかがったとき、ご遺族の好意により故人の書斎を見せていただいた。遺品のなかに木箱に納められた図書カードがあったが、それは国会図書館のカードから、おりおりの研究テーマにかかわるものを筆写して、整理されていたものだった。

「あそこ（国会図書館）に足を運ぶたびに請求票をいちいち記入していては、時間がもったいないからね」

いつだったか、それを拝見して思わずうなった私に、氏は言われたものである。しかしこれは口で言うほど簡単なことではない。調査、研究のためには骨惜しみをしない人。強くそう印象づけられたことをおぼえている。

故江崎氏の雅号にちなんで「崇城文庫」と命名されたその書斎には、三十余年にわたって氏が収集し整理された人物ないし古城に関する史料、また資料が遺されている。その中には、散逸しないようにと氏が自ら製本したものも少なからず蔵されている。

また古文書の解読も専門の勉強会に加わって学ばれたように、氏は物毎に基本を大事に



し、これを勉強するのに慧敏（けいびん）だったように思われる。

勉強とは勉め強いることだ、と言った学者がいるが、氏はそういう意味での「勉強家」だった。とかくアカデミズムを睥睨する風も感じられたが、それだけに象牙の塔の研究者に負けまいとする意気旺盛で、そのために正攻法で勉め強いることを実践されたのである。『日本剣豪列伝』は、かさねていうが、しんせつな著作である。そのしんせつさが著者の上述のような勤勉さにささえられていることを一言しておきたい。

ところで、〝剣豪〟と呼ばれる人びとを江崎俊平氏はどのような視座から見ようとしたのであろう。この著の翌年（昭和四十六年）に氏は『物語柳生宗矩』を出版している（現代教養文庫・社会思想社）。その「あとがき」を抄出する。

――柳生宗矩については、古くから興味をもっていた。剣禅一致をはじめてとなえた人物としては勿論だが、兵法家としての宗矩はそれ程私を引きつけるものはない。

――一芸に秀でた者は、とかく個人プレイに走りたがる傾向がある。道の探究という美名にかくれて、自分が家来であるという立場を忘れているものを見かけるが、宗矩はいつの場合にも自分が家光の家来であるという立場を忘れることはなかった。

――宗矩は剣術を道に高めた人物ではあるが、禅僧のように女色をさけて、すべての欲望を求道のために絶って生きぬいた悟道の人物ではない。そのことは、彼が死ぬ間際まで猿楽を好んだことや、六十六歳で子供をつくっていることなどで明らかである。それは宗

矩の兵法者としての業績を否定するものではなく、宗矩の人間臭さに、かえって身近かなものを感じさせるのである。

右の文章にうかがうことができるように、兵法のプロフェッショナルとしての宗矩ではなく、「人間柳生宗矩」にひかれて著者はこの本を書いたのだった。そして、それは『日本剣豪列伝』に取り上げられた人物たちに対する著者の目差にも通底するものであったのではないか。

いわゆる剣豪ものの史伝、評伝は、良質の史料の不足がことのほか嘆かれる部門とされている。柳生宗矩などは例外として、その量は歴史学にいう実証主義の方法論を用いるには乏し過ぎるし、日記のたぐいに至っては、わずかに散見されるだけである。あとは自筆の伝書、墓石や碑の銘文、直弟子が記した行状記、ほぼ時と同じく生存していた人の記した記録あたりまでが、まず「史料」とされるが、なかなかそれらは世に現れてくれない。そのため、その剣豪が没して長い時を経て書かれた伝記、随筆などをたよりとしなければならないことが多いが、対象が強弱勝敗をあらそう世界に生きた人物であるだけに、それらは私情に左右されて書かれているものが少なくないからよほど気をつけねばならない。

剣豪とは自らを語らず伝えず、人をして語らせたがる傾向の強い人種なのだろうか。ともあれ、その人物の足跡を実地にたどりながらの精査、煩瑣にわたるのを厭わない考証、その生きた時代背景に対する考究、といった作業を、おそらく戦国武将や幕末の志士などよりも豊富に、探究者に要求しないではおかないのが剣豪という存在ではあるまいか。

しかし、もとより剣豪も一個の人間にほかならない。われわれと同じく著衣喫飯、屙尿送尿の生活者である。

この『日本剣豪列伝』に、凝縮された小伝ながら、各剣豪の人物像に迫ろうとする著者の息づかいのようなものを読者は感じとられるであろう。

○

ところで、剣豪という存在に、いったいなぜ日本人はひかれるのだろうか。

それは文化史家、宗教史家などの研究者によって種々の説がとなえられているが、一つには、日本の民族性の深層に「好剣」の性が流れきて、今なお横たわっているからに違いない。ここにいう「剣」とは真剣、すなわち刀剣のことだ。

ふだん私たちが使っている言葉には、刀剣にちなむものが少なくない。反りが合わない（気ごころがあわない）・鍔を削る（激しく争う）・付け焼刀（一時の間に合わせ）・伝家の宝刀（とっておきの手段）・懐刀（配下のブレーン）・鞘当て（意地立て）などなどである。気づきにくいところでは、文化人類学者ルース・ベネディクトが日本人論を展開するうえで引いた「身から出た錆（自業自得の意）」なども、刀にちなむ言葉にふくめてよいだろう。

はじめに刀ありき。刀を好む心性がそもそも日本人にあったことが、剣豪ものへの好奇

心、探究心をつちかってきた一つの土壌であると思う。

話が、かたくなった。ここで、本書の剣豪列伝を読まれるのに参考になるかもしれないと（勝手に）判断して、剣の道の小史を刀のそれとやや関連づけながら、大急ぎでたどらせていただくことにする——。

さて、刀というものがあれば、いかに稚拙であってもそれを有効に使う方法が生まれるのは自然の数であって、その操法の発生に、広義の剣道の歴史がはじまる、とされている。すでにこの道は『日本書紀』に「撃刀」の名称で現われ、奈良時代にいたって「撃剣」とも称されることとなり、平安時代になると、もっぱら「太刀打」の名で呼ばれ、この呼称が室町時代の中期まで用いられている。さらに室町末期におよぶと、それは槍や薙刀などの「打ち物」の操法とともに、「兵法」の一つにかぞえられることになる。しかし、安土桃山時代から江戸時代へと移るにしたがって、しだいに兵法といえば操刀の法をいうようになった。だが、ここに用兵の法を教える軍学、兵学と混同される向きも生じたことから、三代将軍家光の治世頃より、剣法、剣術、または撃剣とも呼ばれ、明治維新を経て、やがて「剣道」の呼称が一般に用いられることになった。

ところで、剣道という道を開き、ひいては剣豪を輩出した始源としての刀も、こうした時の流れのなかで発達ないし変遷をとげている。

そこで第一に特記しておかねばならないのは、直刀から湾刀、すなわち反りのある刀に



移行したことだ。第二には、その造り込みが切れ味とともに丈夫さ（折れず曲らずの要素）をもとめて、平造り（切断面▮）から切刃造り（▮）を経て、鎬造り（⬮）へと発達をとげたことである。日本刀中の日本刀といえば、この鎬造りの湾刀のことであって、その基本型がいちおう完成したのは、刀剣学者によれば、平安時代の中期以降のことのようである。

鎬造りの湾刀の出現は大いに日本刀を踏進させる。それは鎌倉時代にいたって高度の発達をとげる。すなわち、時代の需めに応じて、身幅（棟から刃までの幅）、重ね（棟の厚さ）、長さ、反りぐあいなどが様々に変化したのである。その変化のなかで特筆されるのは、長い大身の太刀がだんだんと使用されるようになったということだ。

太刀の長大化は、鎌倉時代の末からその兆が見られた。それが南北朝時代になると、ひとしおその傾向が強まり、そして戦国時代をむかえて流行をみたのである。具足で身をかためた敵と戦うのには、長さと重量をそなえた得物が、より実戦に有効だったからであろう。膂力まさる武将が馬上から長大な太刀をふりまわして打ちたたく戦闘を主としたこの時代には、当然のことながら、後世に見るごとき精妙な刀の操法はほとんど発達していない。しかも、当時の主要な武器は槍であって、刀はそれほど重んじられなかった。その価値が実戦のうえで認められるには、鉄砲という新兵器の伝来、その長足の普及をまたねばならなかったのである。

騎馬戦を旨として長大な武器をふりまわす豪傑たちは、ここに至って雑兵の鉄砲の前にばたばたと斃れるという結果がめずらしくなくなった。されば自然のなりゆきで、武器をひっさげて肉迫して戦う、いわゆる白兵戦が重要な意味をもつようになるであろう。これにともなって、それまで実用のうえでは主として護身に用いられていた観のある刀が、実戦のうえで見直されていることとなったのだ。

剣の技法が、そして考究されることになる。かくして〝剣豪〟が、ようやく出現しはじめる。その技法を創出して、諸将の招きに応じてこれを伝授するプロフェッショナルたちである。しかし、かれらが創始したのは具足（甲冑）をつけた相手に対する剣法、すなわち「介者剣法」だった。飯篠伊賀守家直（天真正伝神道流）、愛洲移香斎久忠（陰流）、そして本書にも取り上げられている塚原卜伝などがそうである。

長い戦乱の世もようやく終熄し、泰平の世をむかえると、素肌の敵に対して身を守る剣法、「素肌剣法」が創造されていく。おりしも武士の間では、刃を下に向けて佩きさげる太刀にかわって、刃を上に向けて腰に帯びる打刀が以前にもまして流行し、脇差と合わせて、いわゆる大小二本差しの刀剣風俗が定着していく。打刀な太刀と違って、「抜く」と「切る」とが一調子で可能なこともあって、剣法はすこぶる精妙なものになった。その過程で、上泉信綱という先見の明のあった兵法者の遺業を継いで、柳生石舟斎（宗厳）、その子の柳生宗矩らが新陰流兵法を、同様に伊藤一刀斎の跡を承けて小野忠明らが一刀流を



体系化する。宮本武蔵も、その独創的な兵法をこの時代に世に問うたのである。

ここで注意されなければならないのは、鉄砲という新しい武器が普及したにもかかわらず、なお日本人は刀剣を棄てずに重んじつづけたことだ。このような時代逆行現象は外国の歴史には類をみないこととされ、世界史上はじめて〝軍縮〟を実現した唯一の国は日本との評価がある。もちろん、これは鎖国統治下の政治統制にもよるものだろうが、詳細はノエル・ペリンの『鉄砲をすてた日本人』（川勝平太訳・紀伊國屋書店）などに論考されている。

ともあれ日本人は刀を棄てなかった。それゆえに剣の道は途絶えなかった。よく指摘されるように、泰平の世にあって剣法はいたずらに形式にながれ華美をかざり、内容的には衰退したといえようが、それでも太い命脈を保っていたことには大きな意味がある。なぜならば、江戸中期にいたってこうした剣道の惰眠を打破せんとして、長沼四郎左衛門国郷（直心影流）、ついで中西忠蔵子武（一刀流）が防具をつけてその竹刀打ち合い稽古による実戦剣法をほぼ完成したのも、述べたような剣脈がまがりなりにも保たれていたからだ。そして、この実戦剣法は幕末の乱世におよんで大いに盛行し、歴史の転換に深く関わることになる。本書に書かれている男谷信友、千葉周作、斎藤弥九郎らは、この時代の人である。

しかし、すでに天保年間より注目されはじめていた西洋式砲術は、しだいに剣法を駆逐

していった。それは日本の「南北戦争」というべき戊辰戦争でいかんなくその効力を発揮して、剣法を過去のものへと追いおとした。近藤勇、伊庭八郎らは、身をもってそれを体験させられた剣豪といえよう。

やがて明治九年に廃刀令が新政府より公布される。狭義の〝剣豪〟の世は、このときに終焉をむかえたのである。

中世から近世にかけての剣道の歴史をおおまかに眺めてみたが、剣豪たちの考え方、生き方は、同時代の剣豪でも、もちろんそれぞれに異なっている。

それが「剣豪もの」の魅力の一つであろうし、本書は個々にその「剣と人」を丹念に探究しているのである。

○

いま、『風林』の「日常片々」欄を読みかえしている。江崎俊平氏の身辺雑記、時事寸評とされていたそれは、四十号より「崇城居便」と改題されているが、恵贈を受けるたびに真っ先に私が読むのはこの欄であった。文筆で身を立てようとしている一人として、大先達の暮し、物の見かた考えかたに、自然と関心をおぼえたからだろうか。

はじめて贈られた二十一号（昭和五十四年一月三十日）に次の記事がある。

――自業自得とはいいながら、十月から二ヶ月間高血圧と糖尿病が悪化して入院した。悪いのは昔からだが、医者嫌いで、飲んでいたので、そのために無理がきかなくなり、体



重も四十二キロにやせて、歩くのもつらくなってしまった。

後に知ったことだが、氏は「この入院以後、糖尿病による白内障と下肢麻痺が進み、資料収集や取材旅行に支障を来すようになって執筆活動が停滞し始めた」（臨終号の註記）という。入院は私がはじめてお会いしたときから二、三ヵ月後のことになる。

けれども、四年半後（昭和五十八年七月一日）の二十八号に、こう書かれている。

――『徳川家康』『織田信長』『豊臣秀吉』の三冊を相ついで書いた。この三人については、部分的には小説その他でいくつも書いてきたので、自分ではかなりの知識をもっていると思っていた。ところが三人の伝記を書くために、数十冊の史料、参考書を読んで、今までの自分の知識が、こんなにあやしげなものであったかと思い知らされた。その点でもいい勉強になった。

――しかし、左眼が見えなくなっているので、史料を読むのに一と苦労をした。原稿を書いていると、升目が見えなくなって、筆をおかざるを得なくなったこともたびたびあった。しかし小説を書いているときは味わえなかった充実感があり、仕事をしたいという思いがして、三十年間文筆生活をしてきてよかったとしみじみ感じた。

氏のように視力に障りが生じたとき、はたして私にこのような強靱な精神力がのこされているだろうか。心うたれることである。

――フットワークなくしてクリエーションなし。

と言ったのは誰だったか思い出せないけれども、氏は自分の言われる「ノンフィクション」の分野の仕事のうえで、現地取材をことのほか大切にされていたように思われる。この『日本剣豪列伝』にも、そのフットワークによる成果が注がれているはずだ。

このたびこの本は、ゆくりなくも江崎氏を介して知ることのできた高校の後輩、志茂田誠諦氏という犀利な書き手を共著者に得て、さらに整然、かつ充実した内容になっている。真剣勝負という、冷厳な「即興劇」の演じ手として生きた、強烈な個性をもった剣の使徒たちの骨太の生を伝える本書をおすすめするものである。

（作家）

平成13年　2001年12月15日　初版発行

●

編集人——忍足恵一
発行人——小池徹郎
発行所——株式会社学習研究社
東京都大田区上池台4-40-5 〒145-8502
印刷・製本—中央精版印刷株式会社
© 2001 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
編集内容に関することは——編集部直通　03-5434-1456
• 在庫・不良品（乱丁・落丁等）に関することは——
出版営業部　03-3726-8188
• それ以外のこの本に関することは——
学研お客様相談センター　学研M文庫係へ
文書は、〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15
電話は、03-3726-8124
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

R-え-4-1　ISBN4-05-901094-4

この作品は一九七〇年『日本剣豪列伝』（現代教養文庫）のタイトルで株式会社社会思想社から出版された作品を加筆して文庫化したものです。